

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第195集

# 綱掛山古墳群・片瀬遺跡

第二東名No.115・116地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-4

2009

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第195集

# 綱掛山古墳群・片瀬遺跡

第二東名No.115・116地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-4

2009

中日本高速道路株式会社東京支社  
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所



片瀬遺跡 △

▲ 網掛山古墳群

南西から網掛山古墳群・片瀬遺跡を望む

## 巻頭図版 2



1. 片瀬遺跡上空から南の平野を望む



2. 片瀬遺跡全景（北東から）



1. 片瀬遺跡南部の住居跡と周溝墓（北から）



2. 片瀬遺跡の磨製石器と未製品

卷頭図版 4



片瀬遺跡の土器棺

## 序

静岡県の森町には、集落と山林が共存する風景が今でも残る。太田川や一宮川が流れる平野には水田が広がり、微高地や山裾に家々が並ぶ。その背後の丘陵には山林が広がり、緑豊かな風景をつくっている。

本書で報告する網掛山古墳群と片瀬遺跡は、その丘陵上に立地する。

片瀬遺跡は、細長く南にのびるやせ尾根に立地しており、東西の斜面は崖を伴う急傾斜になっている。以前の調査によって中世山城（片瀬城）の存在が明らかになっており、今回の調査においても、同様の調査成果が予測された。しかし、発掘をすすめていくと、山城についての成果もあったが、むしろ、弥生時代中期後葉～後期前半における集落の存在を鮮明にみることとなった。

中世の山城に関しては、今回の調査区が片瀬城の南端部分に位置する可能性などが考慮される。一方、弥生時代の集落跡については、やせ尾根に立地するという地形的特徴のほかに、濠にも似た区画溝を伴うこと、石籬未製品の束を所有していたことといった特徴的な要素を確認することができた。遠江においては、低地においていくつかの大規模集落が展開していることがわかっている。そうした中にあって、この高所に位置する片瀬遺跡の調査成果は、東海地域における弥生時代の集落論に対して、新たな重要資料になると考える。

また、網掛山古墳群の調査においても、中期古墳（1号墳）と後期古墳（2号墳）の発見のほか、縄文・弥生時代の住居跡群が検出されており、丘陵上集落の重要な一資料となる。いずれにおいても、ここに報告する調査成果が、様々な場面で大きな役割を果たすこと期待するものである。

現地調査および整理作業、本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）・静岡県教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関各位にご援助、ご理解を得ている。この場をかりて深く感謝申しあげる次第である。また調査にご理解をいただいた地元の皆様、現地での発掘作業、地道な整理作業にあたられた方々に、この機会に厚くお礼申しあげたい。

平成21年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 清水 哲

## 例　言

1. 本書は、静岡県森町一宮に所在する下記の遺跡の発掘調査報告書である。  
　綱掛山古墳群（第二東名No.115地点）：森町一宮3169-1他  
　片瀬遺跡（第二東名No.116地点）：森町一宮1421他
2. 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。森地区では本書が4冊目であり、よって「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 森町－4」とした。
3. 調査は第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社東京支社（平成17年度途中までは日本道路公団静岡建設局）の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、森町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
4. 現地調査・整理作業の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第2章に別記した。

綱掛山古墳群	確認調査：平成10年2月～3月	佐藤清隆、竹原一人、長尾一男
	平成10年4月～5月	平野徹、梶葉良久、西田光男、富樫孝志
片瀬遺跡	本調査：平成10年10月～平成11年3月	篠原修二、富樫孝志
	平成11年6月～7月	竹原一人、深田雅一
	確認調査：平成10年10月～12月	平野徹
	本調査：平成11年2月～11月	篠原修二、長尾一男、田村隆太郎
整理作業・報告書作成：	平成13年4月～平成15年3月、平成16年4月～平成17年3月	
	平成18年6月～平成20年3月、平成21年2月～3月（各期間内断続）	
	富樫孝志、田村隆太郎	
5. 本書の執筆は、下記のとおりである。編集担当は田村である。  
　第6章：パリノ・サーヴェイ株式会社  
　その他：田村隆太郎
6. 出土石器の石材鑑定は、伊藤通玄氏（静岡大学名誉教授）に依頼して実施した。
7. 調査における助言・協力者は第7章末に、委託事項および委託先は第3章文中に記した。
8. 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真の撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は、当研究所写真室が実施した。
9. 金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
10. 各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
11. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
12. 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 座標は、平面直角座標VH系を用いた国土地理院・日本測地系（改正前）を使用している。
2. グリッドは、1の座標を用いて1辺10mの方眼を設定している。また、方位も1の座標による方位（座標北）を基準としている。
3. 本書にある図表は、調査で測量・実測したもののはか、下に記した各種地図を使用しているものがある。その他に使用した出典などは、必要に応じて各図中に記している。

国土地理院発行の地形図（縮尺2万5千分の1）

国土地理院発行の地形図（縮尺5万分の1）

森町役場発行の森町都市計画図（縮尺2千5百分の1）

中日本高速道路株式会社東京支社掛川工事事務所管轄（作成時は日本道路公団静岡建設局掛川工事事務所管轄）の第二東名高速道路森地区幅員設置測量（縮尺千分の1）

4. 遺構の表記は、下記のとおりである。ただし、古墳と方形周溝墓については、1号墳や1号周溝墓と称している。また、詳細な位置を表記するにあたって、「○○西部」は○○の西寄り部分、「○○北側」は○○よりも北側（○○の範囲外）を示している。

例) S F 1 5 (S F : 遺構の種別 1 5 : 遺跡内の遺構種類別とおし番号)

S B : 住居跡 S H : 挖立柱建物跡 S F : 土坑 S P : 小穴

S D : 槽 S X : その他・不明遺構

5. 遺物番号は、掲載遺物について種類・挿図の別に関わらず、遺跡ごとのとおし番号を付している。

6. 観察表にある土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2000年版）に基づいている。

7. 金属器の実測図および計測値は、クリーニングや保存処理・復元を終えた状態のものである。

8. 本書の図中に用いたスクリーントーンの使い分け等については、必要なものを各図の中で表記している。



森町および網掛山古墳群・片瀬遺跡の位置

# 目 次

序／例言／凡例／目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と経過 .....	9
第1節 調査の体制 .....	9
第2節 現地調査 .....	10
第3節 整理作業・報告書作成 .....	13
第4章 綱掛山古墳群 .....	15
第1節 概要 .....	15
第2節 1～3区の遺構と遺物 .....	19
第3節 4区の遺構と遺物 .....	25
第4節 5区の遺構と遺物 .....	51
第5章 片瀬遺跡 .....	53
第1節 概要 .....	53
第2節 弥生時代の遺構と遺物 1（北部） .....	64
第3節 弥生時代の遺構と遺物 2（中央部） .....	118
第4節 弥生時代の遺構と遺物 3（南部） .....	147
第5節 古代以降の遺構と遺物 .....	173
第6章 自然科学分析 .....	193
第1節 片瀬遺跡出土炭化材の自然科学分析 .....	193
第2節 片瀬遺跡出土貝印象化石の自然科学分析 .....	199
第7章まとめ .....	207

写真図版

抄録

## 図版目次

### 巻頭図版

- 巻頭図版1 南西から網掛山古墳群・片瀬遺跡を望む  
 巷頭図版2 1 片瀬遺跡上空から南の平野を望む  
 2 片瀬遺跡全景（北東から）  
 巷頭図版3 1 片瀬遺跡南部の住居跡と周溝墓  
 （北から）  
 2 片瀬遺跡の磨製石器と未製品  
 巷頭図版4 片瀬遺跡の土器棺

### 写真図版

- 図版1 網掛山古墳群・片瀬遺跡を南西から望む

### 網掛山古墳群

- 図版2 1 表土除去前の調査範囲（北西から）  
 2 調査中の遠景（西から）  
 図版3 1 1区の全景（西から）  
 2 1号周溝墓（南東から）  
 図版4 1 1号周溝墓 北西部周溝土器出土状況  
 （北から）  
 2 1号周溝墓 東部周溝土器出土状況  
 （北から）  
 3 SF02（北西から）  
 4 1区出土遺物  
 図版5 1 2区の遠景（東から）  
 2 3区集石（北から）  
 図版6 1 4区の遠景（西から）  
 2 4区住居跡群（南から）  
 図版7 1 SB01・02の完掘状態（北から）  
 2 SB04南西部土器出土状況（北から）  
 3 SB04（西から）  
 図版8 1 SB05（東から）  
 2 SB06炉（北から）  
 図版9 1 SB08（北西から）  
 2 SB09（北西から）  
 図版10 1 SB10（東北から）  
 2 SB10炉（北から）  
 図版11 1 SB13（南西から）  
 2 SB11（南東から）  
 図版12 1 SB12（西から）  
 2 SB12炉（北西から）  
 図版13 1 SB14の完掘状態（南から）  
 2 SB15の完掘状態（南西から）  
 図版14 1 SB16・17（南西から）  
 2 SB18の完掘状態（南東から）  
 図版15 1 SB19の完掘状態（西から）  
 2 SB20（南東から）  
 図版16 1 SB20北縁土器出土状況（南東から）  
 2 SB21の完掘状態（東から）  
 3 SB22（南西から）  
 図版17 1 SB23（西から）  
 2 SB23炉（南から）  
 図版18 1 SB24の完掘状態（南東から）  
 2 SB25の完掘状態（南から）  
 3 SB25西縁土器出土状況（南から）  
 4 SB25西部土器出土状況（南から）  
 図版19 1 4区の表土除去後の遠景（南西から）  
 2 1号墳 盛土除去後の壇丘（南から）

- 図版20 1 1号墳 壇丘（西から）  
 2 1号墳 鉄鏃出土状況（北西から）  
 3 1号墳 鉄劍出土状況（北から）  
 図版21 1 2号墳 石室の発見状況（北から）  
 2 2号墳 石室の上部被出状況（南から）  
 図版22 1 2号墳 石室の上部被出状況（北から）  
 2 2号墳 石室の被出状況（北から）  
 図版23 1 2号墳 石室の被出状況（南から）  
 2 2号墳 石室の奥壁（南から）  
 図版24 1 2号墳 石室の東側壁（南西から）  
 2 2号墳 石室の西側壁（南東から）  
 3 2号墳 石室の被出状況（西から）  
 4 2号墳 石室の基底石（西から）  
 図版25 4区出土遺物①  
 図版26 4区出土遺物②  
 図版27 1 5区の遠景（西から）  
 2 5区の全景（南西から）  
 国版28 1 SD03（南東から）  
 2 SD04（南東から）  
 3 SD05（南東から）  
 4 SD06（北東から）  
 5 近現代の山道跡（南東から）  
 6 近現代の山道跡の断面（北から）  
 片瀬遺跡  
 国版29 1 北東からの遠景  
 2 北東から調査区を望む  
 国版30 1 北部の遺構群（南西から）  
 2 SB01・02（南東から）  
 国版31 1 SB03・05（南から）  
 2 SB04（南東から）  
 国版32 1 SB06（東から）  
 2 SB01炉（北東から）  
 3 SB03炉（北から）  
 4 SB04炉（南西から）  
 5 SB05西部土器出土状況（北東から）  
 国版33 1 SB07（北東から）  
 2 SB08（東から）  
 国版34 1 SB09の炭化材と遺物出土状況（東から）  
 2 SB09（床面被出状況）（東から）  
 国版35 1 SB09炉の被出状況（東から）  
 2 SB09-P2の炭化材被出状況（東から）  
 3 SB09-P3の炭化材と土器出土状況  
 （東から）  
 4 SB09-P4の炭化材と土器出土状況  
 （東から）  
 5 SB09南東隅の炭化材と土器出土状況  
 （北西から）  
 6 SB09北縁土器出土状況（南東から）  
 国版36 1 SB09炉の発見状況（東から）  
 2 SB09炉の断面（南西から）  
 3 SB09炉の下部焼土把溝状況（右が北）  
 4 SB09の壠方（南東から）  
 国版37 1 SB10（東から）  
 2 SB10炉（南から）  
 3 SB10北縁土器出土状況（南西から）  
 4 SB10北東部土器出土状況（南から）

- 5 SB10南西部土器出土状況（南から）  
 圖版38  
 1 SB11（南西から）  
 2 SB12（北から）
- 圖版39  
 1 SB12（北部中央地割れの中央部）遺物等検出状況（南西から）  
 2 SB14（北部中央地割れの南西部）土器出土状況（東から）  
 3 北部中央地割れ（北東から）  
 4 北部中央地割れ（南西から）  
 5 北部中央地割れの南西部（南西から）  
 圖版40  
 1 SB13（南から）  
 2 SB13炉（南から）  
 3 SB13南西縁土器出土状況（南東から）  
 4 SB13石巖未製品群出土状況（右上が北）  
 5 SB13石巖未製品群出土状況（西から）  
 圖版41  
 1 SB13の掘方（西から）  
 2 SB15・SX02（南東から）  
 圖版42  
 1 SB16（東から）  
 2 SB16北部土器出土状況（南西から）  
 圖版43  
 1 1号周溝墓（右上が北）  
 2 SF12（北東から）  
 3 SF13（南西から）  
 圖版44  
 1 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（西から）  
 2 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（南西から）  
 3 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（東から）  
 圖版45  
 1 1号周溝墓 方合部（北部南東縁地割れ）上器出土状況（北から）  
 2 SF11土器棺墓（東から）  
 圖版46  
 1 北部南東縁地割れ（南西から）  
 2 北部南東縁地割れ（北東から）  
 圖版47  
 1 北部南西縁地割れ（北東から）  
 2 北部西縁地埋り底（北東から）  
 圖版48  
 北部出土土器①  
 圖版49  
 北部出土土器②  
 圖版50  
 北部出土土器③  
 圖版51  
 北部出土土器④  
 圖版52  
 北部出土土器⑤  
 圖版53  
 北部出土土器⑥  
 圖版54  
 北部出土土器⑦  
 圖版55  
 北部出土土器⑧  
 圖版56  
 北部出土土器⑨  
 圖版57  
 北部出土土器⑩  
 圖版58  
 北部出土土器⑪  
 圖版59  
 1 北部出土土器⑫  
 2 北部出土石器①  
 圖版60  
 北部出土土器②  
 圖版61  
 北部出土土器③  
 圖版62  
 1 中央部～南部の全景（北から）  
 2 中央部中央の遺構群（南東から）  
 圖版63  
 1 中央部南寄りの遺構群（南東から）  
 2 SB17（北東から）  
 圖版64  
 1 SB18（東から）  
 2 SB19（南から）  
 圖版65  
 1 SB20（東から）  
 2 SB21・SF26（北から）  
 圖版66  
 1 SB19-P8（貯蔵穴）土器出土状況（北から）  
 2 SB20炉（南から）  
 3 SB21東部土器出土状況（南東から）  
 4 SF26（SB21北西縁）土器出土状況（南東から）  
 5 SH03（西から）  
 圖版67  
 1 中央墓群（埋葬遺構群）（南から）  
 2 SF19土器棺墓（南東から）  
 3 SF20土器棺墓（南から）  
 圖版68  
 1 SF20土器棺墓（南東から）  
 2 SF21土器棺墓（東から）  
 3 SF22土器棺墓（南から）  
 4 SF23土器棺墓（南西から）  
 5 SF18（北東から）  
 6 SF25土器棺墓（北西から）  
 圖版69  
 1 SF15（西から）  
 2 SF17（北東から）  
 3 SF15土器出土状況（北西から）  
 圖版70  
 1 SF13上部～北側の集石（北東から）  
 2 SF13（北東から）  
 3 SF16（北東から）  
 圖版71  
 1 SD03中央部（東から）  
 2 SD03東部の断面（南東から）  
 圖版72  
 1 SD07（北西から）  
 2 SD07の断面（東から）  
 3 SD07土器出土状況（南西から）  
 圖版73  
 1 SD08（西から）  
 2 SD08の断面（北西から）  
 圖版74  
 1 SD08の炭化物集中と土器出土状況（南東から）  
 2 SD08土器出土状況（南から）  
 3 SD08の断面（南東から）  
 圖版75  
 中央部出土土器①  
 圖版76  
 中央部出土土器②  
 圖版77  
 中央部出土土器③  
 圖版78  
 中央部出土土器④  
 圖版79  
 1 中央部出土土器⑤  
 2 中央部出土土器  
 圖版80  
 1 南部の全景（北から）  
 2 SB22A・23（南東から）  
 圖版81  
 1 SB23B の掘方（東から）  
 2 SB22炉（南東から）  
 3 SB23炉（南東から）  
 4 SB24炉（南から）  
 5 SB23B・P9（南西から）  
 圖版82  
 1 SB24（南西から）  
 2 SB24の掘方（南西から）  
 圖版83  
 1 SB25・26（南から）  
 2 SB27（南から）  
 3 SB29（南西から）  
 4 SB28（南から）  
 5 SB28炉（南東から）  
 圖版84  
 1 2～4号周溝墓（右が北）  
 2 2号周溝墓（北東から）  
 圖版85  
 1 2号周溝墓 西部周溝（南東から）  
 2 2号周溝墓 西部周溝土器出土状況（北東から）  
 3 3号周溝墓 西部周溝土器出土状況（北から）  
 4 3号周溝墓 方合部土器出土状況（南東から）

図版86	5 4号周溝墓 北部周溝（西から） 1 SF34土器棺墓（北西から） 2 SF34土器棺墓（北から） 3 SF31土器出土状況（南西から） 4 SF27・28（南京から） 5 SF33（北東から）	3 SF06・07（東から） 4 SF07土器出土状況（南東から） 5 SF08（東から） 6 SF08土器出土状況（東から）
図版87	南部出土土器①	1 SD02・04（南京から） 2 SD02・04（東から）
図版88	南部出土土器②	1 SD02中央付近（南西から） 2 SD02の断面（北西から）
図版89	南部出土土器③	3 SD04の断面（南東から） 4 SD04中央付近（南から） 5 SF24（東から）
図版90	1 南部出土土器④ 2 南部出土石器	6 北部東側の突出地形（北西から）
図版91	1 SI101（東から） 2 SI102（東から）	古代以降の遺物①
図版92	1 SF01（南京から） 2 SF04・05（南京から）	古代以降の遺物②

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	1
第 2 図	周辺の遺跡分布	3
第 3 図	片瀬城の縄張り図	6
第 4 図	片瀬遺跡・七軒町遺跡の遺物	7
第 5 図	網掛山古墳群・片瀬遺跡と第二東名工事範囲	14

### 網掛山古墳群

第 6 図	網掛山古墳群 調査区・グリッド配置図	16
第 7 図	網掛山古墳群 調査区全体図（1～3区）	17
第 8 図	調査前の周知古墳	18
第 9 図	網掛山古墳群 調査区全体図（4・5区）	18
第 10 図	網掛山古墳群 1区全体図	20
第 11 図	1号周溝墓	21
第 12 図	1号周溝墓の土器出土状況およびSF01・02・22	22
第 13 図	集 石	23
第 14 図	1区出土土器	24
第 15 図	4区全体図（縄文・弥生時代の住居跡跡）	25
第 16 図	SB01・02、SB03・04	26
第 17 図	SB05、SB06・07	28
第 18 図	SB08、SB09、SB10	29
第 19 図	SB11、SB13	31
第 20 図	SB12、SB14	32
第 21 図	SB15、SB16・17、SB18	34
第 22 図	SB19、SB20・21	35
第 23 図	SB22、SB23	36
第 24 図	SB24、SB25	37
第 25 図	住居跡出土遺物	39
第 26 図	4区全体図（網掛山1・2号墳）	40
第 27 図	網掛山1号墳 墳丘	41
第 28 図	網掛山1号墳 副葬品出土状況	42
第 29 図	網掛山1号墳に伴う遺物	43
第 30 図	網掛山2号墳 墳丘	44
第 31 図	網掛山2号墳 横穴式石室検出状況	45
第 32 図	網掛山2号墳 横穴式石室展開図	46
第 33 図	網掛山2号墳 横穴式石室の基底石	47
第 34 図	網掛山2号墳 石室内遺物出土状況	48
第 35 図	網掛山2号墳に伴う遺物	49
第 36 図	4区出土の古代以降の遺物	50
第 37 図	5区出土遺物	51
第 38 図	5区全体図	51

片瀬遺跡	片瀬遺跡 調査区・グリッド配置図	55
第 39 図	片瀬遺跡 調査区・グリッド配置図	55
第 40 図	片瀬遺跡 調査範囲の発掘前測量図	56
第 41 図	片瀬遺跡 調査区全体図	57
第 42 図	北部の地形と断層・地滑り痕	58
第 43 図	遺構配置図1	59
第 44 図	遺構配置図2	60
第 45 図	遺構配置図3	61
第 46 図	遺構配置図4	62
第 47 図	遺構配置図5	63
第 48 図	SB01・02①	65
第 49 図	SB01・02②	66
第 50 図	SB03	66
第 51 図	SB04	68
第 52 図	SB05	69
第 53 図	SB06	71
第 54 図	SB07	72
第 55 図	SB08	73
第 56 図	SB09①	74
第 57 図	SB09②	75
第 58 図	SB09③	76
第 59 図	SB10①	77
第 60 図	SB10②	78
第 61 図	SB11	79
第 62 図	SB12	80
第 63 図	SB13①	82
第 64 図	SB13②	83
第 65 図	SB14	84
第 66 図	SB15	85
第 67 図	SB16	86
第 68 図	1号周溝墓①（全体および木棺墓SF12）	88
第 69 図	1号周溝墓②（周溝内遺物出土状況）	89
第 70 図	1号周溝墓③（地割れ内遺物出土状況）	90
第 71 図	1号周溝墓内の土器棺墓SF11と円形土坑SF10	91
第 72 図	SF02・03、SX02	92
第 73 図	北部出土弥生土器①	94
第 74 図	北部出土弥生土器②	95
第 75 図	北部出土弥生土器③	97
第 76 図	北部出土弥生土器④	98
第 77 図	北部出土弥生土器⑤	99

第78図	北部出土弥生土器⑥	101
第79図	北部出土弥生土器⑦	102
第80図	北部出土弥生土器⑧	103
第81図	北部出土弥生土器⑨	105
第82図	北部出土弥生土器⑩	106
第83図	北部出土弥生土器⑪	107
第84図	北部出土弥生土器⑫	109
第85図	北部出土弥生土器⑬	110
第86図	北部出土弥生土器⑭	111
第87図	北部出土弥生土器⑮	112
第88図	北部出土石器①	114
第89図	北部出土石器②	115
第90図	北部出土石器③	116
第91図	北部出土石器④	117
第92図	SF17	119
第93図	SF18	120
第94図	SB19①	121
第95図	SB19②	122
第96図	SB20	123
第97図	SB21・SF26①	124
第98図	SB21・SF26②	125
第99図	SH03	126
第100図	SD03	127
第101図	SD07	128
第102図	SD09	129
第103図	中央墓群の遺構配置	131
第104図	SF14・15, SF17	133
第105図	SF19, SF22, SF25	136
第106図	SF20, SF21, SF23	137
第107図	SF13, SF16	138
第108図	中央部出土弥生土器①	139
第109図	中央部出土弥生土器②	140
第110図	中央部出土弥生土器③	141
第111図	中央部出土弥生土器④	142
第112図	中央部出土弥生土器⑤	143
第113図	中央部出土弥生土器⑥	144
第114図	中央部出土弥生土器⑦	145
第115図	中央部出土石器	146
第116図	SB22	148
第117図	SB23A	149
第118図	SB23B	150
第119図	SB24	152
第120図	SB25・26	154
第121図	SB27, SB29	155
第122図	SB28	156
第123図	2号周溝墓	158
第124図	3号周溝墓①・4号周溝墓	159
第125図	3号周溝墓②	160
第126図	3号周溝墓内の土器棺墓SF34	161
第127図	SF27・28, SF30	163
第128図	SF31	164
第129図	SF32, SF33	165
第130図	南部出土弥生土器①	166
第131図	南部出土弥生土器②	167
第132図	南部出土弥生土器③	169
第133図	南部出土弥生土器④	170
第134図	南部出土弥生土器⑤	171
第135図	南部出土石器	172
第136図	古代以降の建物跡(SH01, SH02)	174
第137図	古代以降の土坑①(SF01, SH04・05, SF06・07, SF08, SF09)	176
第138図	古代以降の土坑②(SF24)	177
第139図	古代以降の溝SD02①	178
第140図	古代以降の溝SD02②	179
第141図	古代以降の溝SD04①	180
第142図	古代以降の溝SD04②	181
第143図	古代以降の土器	182
第144図	鉄鏹	183
第145図	SF08小臺内金属器片	184
自然化学分析		
第146図	分析資料の概要	193
第147図	片瀬遺跡の炭化材①	197
第148図	片瀬遺跡の炭化材②	198
第149図	SX03出土貝印象化石(二枚貝網)のX線回折図	202
第150図	SX03出土貝印象化石(腹足綱)のX線回折図	202
第151図	SX03出土貝印象化石(薄片)の顕微鏡写真	205
第152図	SX03出土貝印象化石の種類	206
まとめ		
第153図	網掛山古墳群・片瀬遺跡の地形と調査区	207
第154図	弥生集落形成前の遺跡形成	208
第155図	弥生集落に伴う遺構分布	209
第156図	堅穴住居跡の主要出土土器	210
第157図	網掛山古墳群・片瀬遺跡における堅穴住居跡の変遷	211
第158図	埋葬遺構の主要出土土器	212
第159図	区画溝の主要出土土器	213
第160図	古墳時代の遺跡形成	214
第161図	古代・中世の遺跡形成	215
第162図	中遠江における弥生時代の居住域の分布	217
第163図	片瀬遺跡における居住域の区分けと石巒	220

## 挿表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	3
第2表	調査体制と調査実施内容(平成20年度まで)	9
第3表	網掛山古墳群の遺物一覧表	52
第4表	片瀬遺跡の遺物一覧表	185
第5表	放射性炭素年代測定結果	194
第6表	層年較正結果	195
第7表	樹種同定結果	195
第8表	薄片観察結果	201
第9表	検出された貝の分類群一覧	203
第10表	貝印象化石同定結果	203

# 第1章 調査に至る経緯

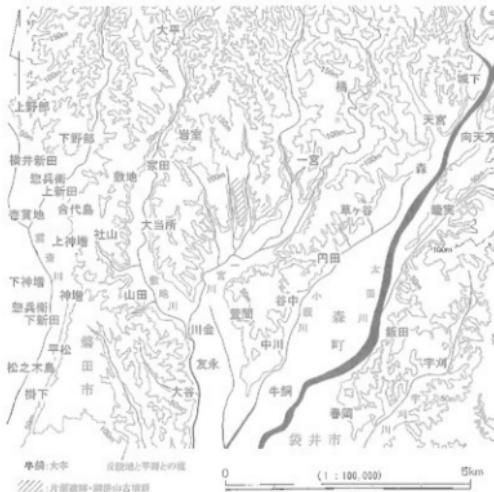
東名高速道路は昭和14年の開通以来、日本の大動脈の一部として大きな役割を果たしてきている。しかし、経済発展に伴って混雑が著しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予測されるようになってきた。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画、静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心にして県内130以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、財団法人を除いて記す）へ委託することが確認されている。平成8年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査がはじまっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民营化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社横浜支社に引き継がれている。

森町域においても、同様に調査がはじまっている。町域には延長約7kmの路線およびパークイングエリア1ヶ所、インターチェンジ1ヶ所が設定されており、21の調査対象地の確認調査を実施、その結果、14地点に16の遺跡の存在が認められた。この結果に基づいて、各遺跡の発掘調査が行われている。全ての確認調査と16遺跡の現地調査・整理作業・報告書作成は、静岡県教育委員会の指導のもとで、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行っている。なお、上記の経緯についての詳細、森町域の確認調査の内容については、既に報告したものがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

一宮川の北側においては、南にのびる複数の丘陵を横断するように路線が設定され、各丘陵上を対象に確認調査を実施している。その結果、本書で報告する網掛山古墳群（No.115）と片瀬遺跡（No.116）が把握されるに至った。なお、磐田市（旧豊岡村）との境がある丘陵では寺山古墳群（No.128）が把握されているが、大半は磐田市域に入っている。



第1図 遺跡の位置

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

森町域は、北の赤石山脈からびる山地と南の袋井・磐田市域に広がる沖積平野の双方にまたがる。

森町の北東にある大日山から町の南東側にかけて、太田川が流れている。太田川は南の袋井・磐田市域で多くの河川と合流し、遠州灘へと流れる。この河川によって、北部の山地が削り取られ、南部に広い沖積平野が形成されている。太田川の西側には、一宮川が流れている。太田川に比べて小さい流れであり、袋井市域では太田川に合流するが、これも沖積平野を形成している。2つの沖積平野の周囲には、丘陵地帯が迫っている。丘陵地帯には太田川東岸・太田川西岸（一宮川東岸）・一宮川北岸の3つがあり、いずれも町の北側から南へとのびている。

一宮川北岸の丘陵地帯は、南にのびる5つの丘陵に分かれる。それぞれの丘陵の間には深い谷が入り込んでおり、丘陵の大半はやせ尾根によって構成されている。綱掛山古墳群が立地する丘陵は、南にのびる丘陵筋と東西に派生する多くの支尾根によって構成されており、東西幅は約800mになる。片瀬遺跡が立地する丘陵も概ね同様の構成となるが、東西に派生する尾根が未発達であり、東西幅約250mと細長い点が大きく異なる。調査対象範囲における標高は、綱掛山古墳群が約80～120m、片瀬遺跡が約80～90mである。周囲の水田面の標高は40m前後である。

### 第2節 歴史的環境

#### 1. 一宮川流域の遺跡の概要

##### (1) 旧石器時代～縄文時代

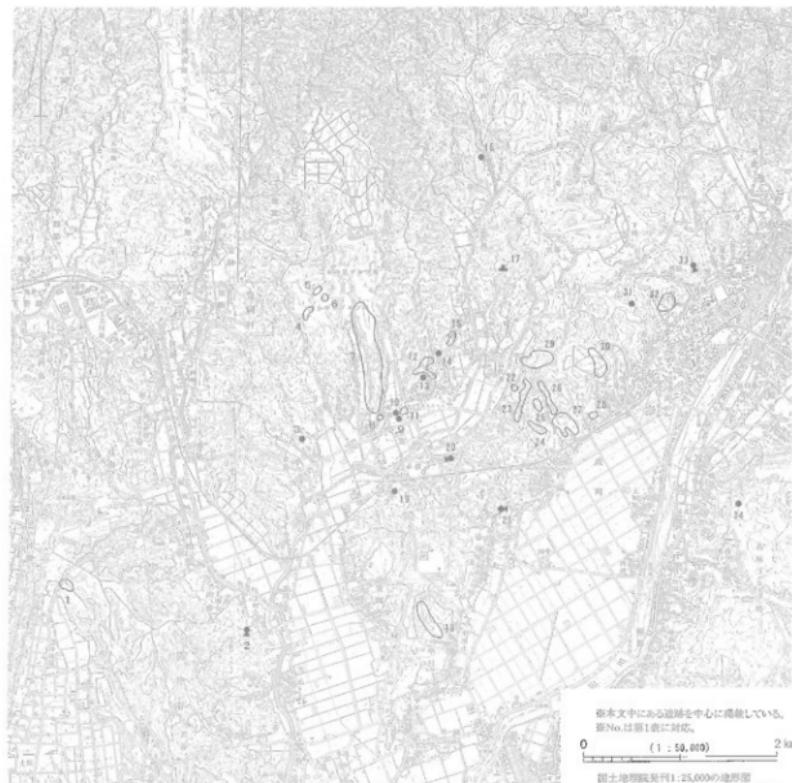
旧石器時代については、南西に広がる磐田原台地において数ヶ所の遺跡が知られている。袋井市山田原遺跡(1)では、疊群や石器ブロックが検出され、ナイフ形石器・槍先形尖頭器をはじめとする石器が多く出土している。しかし、山田原遺跡より北側や磐田原台地以外の場所では、旧石器時代の遺跡が全く把握されていない。太田川西岸においては、丘陵上に立地する森町フケ遺跡(24)においてナイフ形石器1点が出土している。しかし、この遺跡は弥生時代の墓群を主体としており、ナイフ形石器1点の出土以外に旧石器時代に関する検出は認められていない。以上のように、旧石器時代については、遺跡として把握できる場所が磐田原台地に限られている。

縄文時代の遺跡についても、一宮川周辺において確認できる数は非常に少ない。ただし、磐田原台地に分布が限られるということはない。一宮川の東側の丘陵地帯では、第二東名建設に伴う調査によって、やせ尾根に立地する森町文殊堂遺跡(26)に若干の縄文土器片と落し穴が発見されている。さらに、森町北垣遺跡(27)や森町弥勒平遺跡(22)など、やせ尾根の先端に広がる段丘上平坦面の遺跡において、住居跡などの営みの痕跡を確認することができている。一宮川北岸の丘陵地帯においても、若干の縄文時代の遺物が採集されている遺跡はある。丘陵上の開発が少ない地域であることから、縄文時代の遺跡が残されている可能性は否定できない。

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
1	山田原遺跡	13	谷沢横穴群	25	宇藤蓮台古墳群
2	川合坊主山古墳	14	荒立横穴	26	文殊堂古墳群
3	奥ノ谷遺跡	15	坊ノ谷口古墳群	27	北垣遺跡
4	源松遺跡	16	小国神社	28	中屋敷遺跡
5	西峰水戸ヶ谷東跡	17	寛田城跡	29	善千鳥遺跡
6	朝日平遺跡	18	井谷ノ谷古墳群	30	菖蒲ヶ谷古墳群
7	片瀬城跡・片瀬遺跡	19	石仏ノ坪古墳	31	森山古墳
8	七軒町遺跡	20	堤田古墳	32	円明寺古墳群
9	岡海戸横穴群	21	東国古墳	33	西脇1号墳
10	岡海戸古墳	22	弥勒平遺跡	34	般音堂横穴群
11	岡海戸遺跡	23	林古墳群		
12	網掛山古墳群	24	フケ遺跡		

No.は、第2回および文中の遺跡名の後の  
( ) 内と対応



第2図 周辺の遺跡分布

## 歴史的環境

### (2) 弥生時代

森町域においては、弥生時代の遺跡が多く分布している。しかし、その多くは太田川流域に面した丘陵上にある遺跡であり、一宮川流域における分布は比較的小ない（以下、遺跡名の前に付けてきた「森町」を省略する）。

一宮川の東の丘陵上に立地する善千鳥遺跡（29）や林遺跡（23）、その西隣の丘陵上に立地する坊ノ谷口遺跡などでは、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の周溝墓・土坑墓群や土器棺墓が調査されており、やせ尾根における墓域の形成が把握されている。さらに、一宮川の東の段丘上に立地する弥勒平遺跡（22）においては、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居跡が発見されている。以上のように、一宮川流域の中でも東側の丘陵地帯において、弥生時代の様相が把握できるようになってきている。

一方、一宮川北岸の丘陵地帯では、開発に伴う発掘調査数が少ないこともあって、本書で報告する網掛山古墳群と片瀬遺跡を除くと、岡海戸遺跡（11）、西峰水戸ヶ谷東絆遺跡（5）、奥ノ谷遺跡（3）などで弥生時代の遺物が発見されている程度となる。丘陵上の遺跡分布が知られてはいるものの、調査事例の少ない現状において、それらの様相を把握することは難しかった。したがって、本書で報告する網掛山古墳群と片瀬遺跡の調査成果は、一宮川北岸の丘陵地帯では数少ない弥生時代遺跡の事例となる。

### (3) 古墳時代

森町の遺跡の中で、最も多いのが古墳（群）と横穴墓（群）である。ただし、前期古墳の存在は明確になっていない。弥生時代の墓域が古墳時代前期にまで至る場合があるが、そこに古墳は認められない。太田川流域の中屋敷遺跡（28）（本事業、未報告）では、一辺20m弱の方形周溝が検出され、古墳時代前期の土器が出土している。しかし、削平が著しく、古墳か周溝墓かについては検討を要する。

時期の明確な古墳の内、最も古いのは中期中葉の古墳である。文殊堂古墳群（26）・宇藤蓮台古墳群（25）・林古墳群（23）・坊ノ谷口古墳群（15）・菖蒲ヶ谷古墳群（30）・井谷ノ谷古墳群（18）において、中期中葉～後期中葉の木棺直葬墳が確認できる。壇丘径20mに満たない小規模円墳のみで構成された古墳群ばかりであるが、鏡や甲冑を含む副葬品群、初期須恵器を含む供獻土器群の出土が認められる。

前方後円墳は、森町域に堤田古墳（20）・東国古墳（21）・西脇1号墳（33）の3基、一宮川流域では他に袋井市川会坊主山古墳（2）がある。いずれも墳頂40m以下であり、周辺環境や墳丘形態などから中期後葉から後期の間に築造されたものと把握されている。川会坊主山古墳からは、鏡・玉・刀や埴輪・土器の出土があり、中期末葉～後期初頭に位置づけられている。太田川流域をのぞむ西脇1号墳では、後円部の横穴式石室が確認されている。その他は、築造時期を示す根拠がない。

後期後葉になると横穴式石室が普及し、終末期まで横穴式石室墳の築造・追葬が続く。また、横穴式石室墳の展開と併行して横穴墓も認められるようになる。古墳・横穴墓の終焉は概ね8世紀前半とされている。

森町域の古墳には横穴式石室墳が多い。しかし、磐田原台地以西にあるような、広い場所に数十の横穴式石室墳が展開する古墳群ではなく、古墳の群集性は低い。その一方で、石仏ノ坪古墳（19）など、副葬品などから階層的に上位に位置づけできる古墳が目立つ。時期による変化や小地域ごとの差異もあるが、相対的に上位階層にかたよる傾向を指摘することができる。一方、横穴墓については群集する傾向にある。網掛山古墳群の丘陵では、荒立横穴（14）・谷沢横穴群（13）が周知されており、群集しない古墳と群集傾向にある横穴群が近接してつくられていることがわかる。片瀬遺跡の丘陵においても、南先端部に岡海戸古墳（10）と岡海戸横穴群（9）が周知されている。

古墳時代の集落跡は少ない。住居跡の発見については、一宮川の東の丘陵に位置する北垣遺跡（27）と弥勒平遺跡（22）に古墳時代前期のものが数軒、竈を伴うものが数軒検出されている程度である。一

方、片瀬遺跡の丘陵の南先端、低い段丘上にある七軒町遺跡（8）において、5世紀前半の土師器がまとまって出土している（第4図）。集落跡であるかは不明であるが、周辺には少ない時期の土器の出土があり、特記すべき事項である。

一宮川の東の丘陵地帯では、須恵器生産に関連する遺跡が知られている。森山古窯（31）では、終末期の須恵器や窯壁片が散布しており、観音堂6号横穴（34）や円明寺3号墳（32）、菖蒲ヶ谷8号墳（30）から出土した須恵器の中に似た製品がある。

#### （4）古代以降

一宮川北岸の丘陵地帯には、9世紀より記録に認められ、周智郡内の官社であった小国神社がある。遠江国の一宮として現在も鎮座しているが、この本殿裏側に12世紀の経塚があり、経筒と外容器、壺・山茶碗・太刀・和鏡が出土している。

小国神社の南1km弱に位置する御廟所遺跡では瓶子と銅錢、その小河川を挟んだ対岸に位置する宮代稻荷遺跡では灰陶四耳壺が出土している。とともに14世紀のものであり、中世における小国神社との関連が考慮される遺跡である。一方、同じ一宮川の北側丘陵地帯の中でも、西寄りの丘陵上に位置する西峰水戸ヶ谷東跡（5）、朝日平遺跡（6）、涼松遺跡（4）といった遺跡では、平安時代末期の灰釉陶器・山茶碗の出土が認められている。一宮川北岸丘陵地帯の最も西には山岳密教寺院である岩室庵寺があり、その寺域の一部が森町一宮の丘陵にものびていたと把握されている。参道沿いに点在する遺跡として評価することもできる。

森町には戦国時代の城館がいくつか存在しており、一宮川北岸の丘陵地帯においては、最も東の丘陵には真田城（17）、本書で報告する片瀬遺跡には片瀬城（7）があつたことがわかっている。真田城は、15世紀には一宮荘の全体を掌握していた武藤氏の館の詰め城であったとされる山城である。一方、片瀬城については、次項で述べるように局地的な争いに伴って設けられた陣城であり、16世紀の徳川氏によるものである可能性などが評価されている。

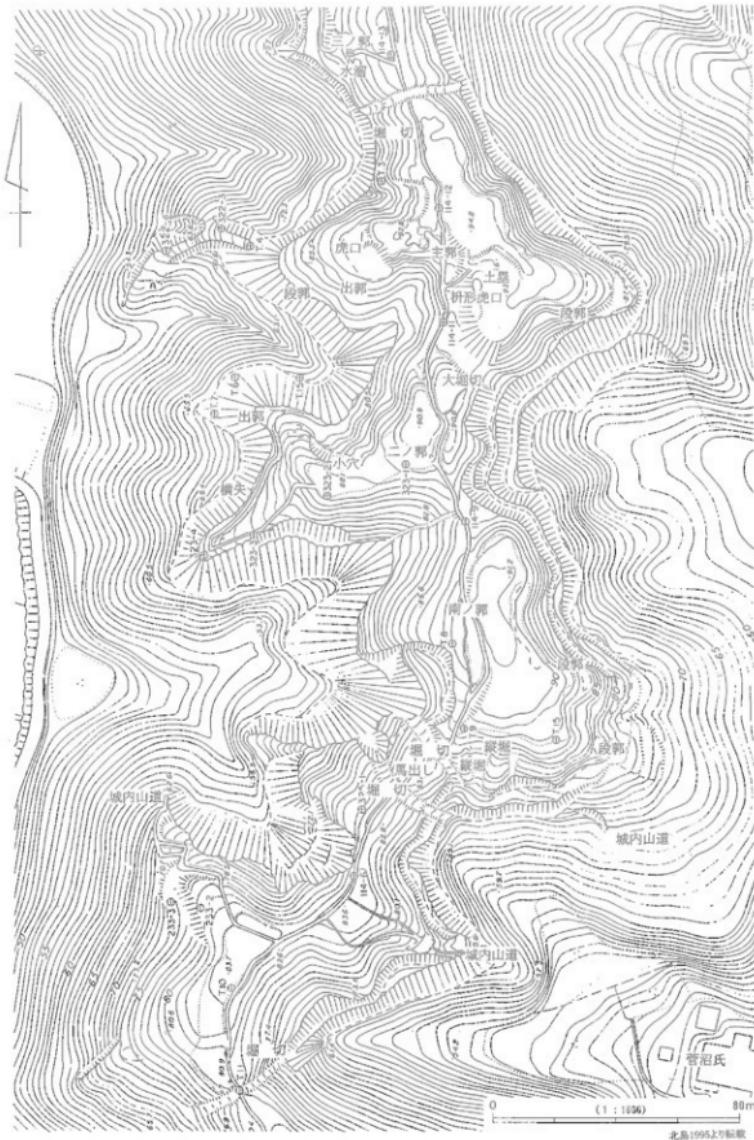
## 2. 綱掛山古墳群・片瀬遺跡の調査歴

#### （1）現地調査の履歴

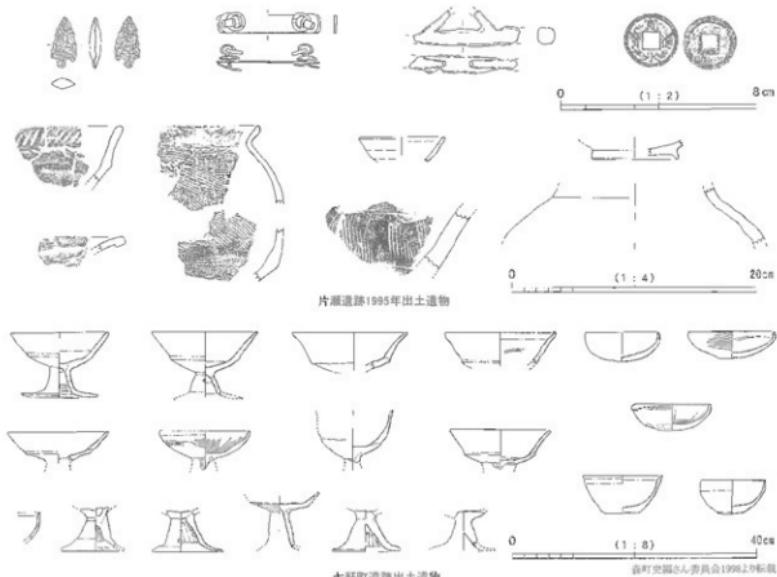
綱掛山古墳群については、以前より周知されていた遺跡であり、2基の古墳が示されていた。しかし、詳細について把握されていたわけではなく、発掘調査は本書で報告するものが初となる。

片瀬遺跡は、森町教育委員会が実施した第二東名高速道路の建設に伴う遺跡分布調査（踏査）によって、1993年に発見された。堀切などが確認できることから、城跡「片瀬城跡」の存在が周知されるに至った。さらに、一部が造成中のゴルフ場の範囲に入っていることから、森町教育委員会が1995年に発掘調査を実施している（第1次調査）。この調査では、城域全体の把握（第3図）とともに、主郭以北（本書で報告する調査範囲よりも北側）について発掘が行われている。中世山城に関する遺構や近世墓などが検出され、第4図にあるような遺物が出土している。

なお、今回の調査において、綱掛山古墳群では縄文・弥生集落跡とともに古墳も発見されたが、周知されていた2基の存在は認められず、異なる場所に立地する2基を調査した。また、片瀬城跡（第2次調査）では、中世山城「片瀬城」についての調査成果が少なく、むしろ弥生時代集落についての成果が主なものとなった。したがって、本書では「片瀬遺跡」として調査成果を報告する。



第3図 片瀬城の縄張り図



第4図 片瀬遺跡・七軒町遺跡の遺物

## ② 片瀬城について

今回の調査成果を報告するにあたって、既に周知され、一部が調査されていた片瀬城について触れておく。以下の記載は、主に森町教育委員会による第1次調査の成果（北島1995、森町史編さん委員会1998）と加藤理文氏の御教示によるものである。なお、繩張りの名称については正式報告によるものではなく、平成20年4月時点での仮称である。

**構造的特徴** 片瀬城は、尾根に沿った南北に細長い繩張りをもつ（第3図）。各要所に6条の堀切が設けられ、図のような郭が配置されている。堀切以外の人为的な造作は、本郭周辺に集中している。こうした構造的特徴から、本郭から南ノ郭までが防衛拠点であり、その南の堀切は侵入の勢いを遅らせるために設けられた可能性が指摘できる。さらに、常駐するための施設があった可能性は評価し難く、局地的な争いに伴う陣城であったと評価されている。北側に尾根に沿った退路が確保されていることなどから、南からの侵入に対して備えられた構造であるといえる。

**歴史的背景** 片瀬城が位置する森町一宮の地域は、遠江一宮である小国神社があることから、遠江国にとって重要な地域であったと考えられる。一宮莊太田郷一藤名は、建武3（1366）年には少弐（武藤）氏の所領であった。永享4（1432）年には、武藤与治郎用定が守護代の代官と争って勝利し、一宮莊全体を掌握している。永禄3（1560）年の桶狭間の戦いで今川義元が戦死した後、永禄11（1568）年から武田信玄が北から駿河へ、徳川家康が西から遠江への侵攻を始める。遠江においては、多くの今川家臣が徳川家康へ服属していく、徳川方によって併合される。そうした中にあって、武藤氏は武田方の庇護によって甲州へ退くことになる。

遠江を併合した徳川家康は、浜松城を拠点として高天神城・掛川城・二俣城、さらに犬居城・天方城・

## 歴史的環境

久野城・馬伏塚城によって対武田の備えを張り巡らせた。しかし、元亀3（1572）年の武田信玄の侵攻によって備えは破綻し、さらに、三方ヶ原の戦いで徳川家康は敗れる。多くが武田方に降り、徳川家康は危機に陥ることとなったが、敵の大将である武田信玄の死を契機に武田方が信濃に引き返し、この危機は脱せられた。遠江においては天正3（1574）年までに、信州街道沿いの犬居城・光明城・只来城・二俣城などを除いて再び徳川方が奪還する。さらに、武田方の遠江・三河侵攻と長篠の戦いの敗戦を経て、遠江は徳川方として安定を迎える。遠江一宮の地域については、今川（武藤）→徳川→武田→徳川という動乱を約5年の間に経験したことになる。

**片瀬城の評価** 片瀬城より西の丘陵に立地する真田城（第2図17）は、小国神社の入口に位置する武藤氏の館と通じる詰め城であったとされている。すなわち、遠江における在地の城の典型例としてあげることができる。一方、片瀬城については、真田城と共に通した構造的特徴は見出し難く、異なる経緯や目的によって設けられた城であった可能性が指摘できる。また、片瀬城に関する文献・伝承がほとんどないことからも、同様の評価が可能である。一方、「丸馬出状の二重堀切」などといった、武田氏による築城の特徴も認められない。堀切重視の防御と後方に退路を確保する陣城造りは、むしろ徳川方の砦の特徴をもつものと評価できる。以上の諸特徴と戦術の歴史的背景を照らし合わせて考えると、片瀬城は永禄11・12（1568・1569）年頃の徳川方の侵攻に伴って、局地的な目的によって設けた陣城であった可能性が高いと判断することができる。

なお、大きな改修の痕跡は把握し難いが、その後の争いの中で若干の改修を行った可能性、再利用した可能性は否定できない。片瀬城のある丘陵の南端部においては、掛川・二俣街道が横断しており、天正18（1590）年12月頃までは、近世に至る一宮神領の代官所が設けられている。

## 参考文献

- 北島恵介 1995 「戦国まったくの連郭式山城——官兵内片瀬城」『静岡の現像をさぐる』 静岡県教育委員会・静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 静岡県 1930 『静岡縣史』第1巻  
1931 『静岡縣史』第2巻  
1992 『静岡縣史』資料編3
- 静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』  
1983 『遠江の横穴群』  
1989 『静岡県の窯業遺跡 本文編』  
2001 『静岡県の前方後円墳』
- 静岡県考古学会 2001 『東海の横穴墓』  
2003 『静岡県の横穴式石室』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『森町疋田の遺跡』  
2006 『森町円田丘陵の遺跡』  
2008 『森町円田丘陵の古墳群』
- 東海考古学フォーラム・静岡県考古学会 2002 『古墳時代中期の大型墳と小型墳』
- 袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』
- 森町 1972 『森町埋蔵文化財調査報告書』
- 森町教育委員会 1991 『涼松・朝日平・西咲水戸ヶ谷東咲遺跡』  
1998 『奥谷田Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡』  
2005 『坊ノ谷口遺跡・坊ノ谷口古墳群』
- 森町史編さん委員会 1997 『森町史』通史編上巻  
1998 『森町史』資料編1
- 森町史編さん室・社会教育課文化振興係 1999 『図説 森町史』

### 第3章 調査の方法と経過

## 第1節 調査の体制

本書で報告する網掛山古墳群の調査と片瀬遺跡の調査は、第2表にある体制で実施した。実際には、第二東名建設事業に伴う掛川工区（金谷町・掛川市・森町・豊岡村城）の埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）として体制を組んでおり、第2表は森町内（以下、森地区）に関する体制である。なお、森地区全体の体制については、既に記したものがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）。

第2表 調査体制と調査実施内容(平成20年度まで)

## 第2節 現地調査

### 1. 遺跡の範囲と調査区

**遺跡の所在と範囲** 天竜浜名湖鉄道遠江一宮駅の北側正面にある丘陵上に片瀬遺跡、その東隣にある丘陵の上に網掛山古墳群が所在する。地形的特徴については第2章第1節で述べたとおりであるが、第二東名高速道路においては、網掛山古墳群が立地する丘陵と片瀬遺跡が立地する丘陵を東西に横断するように路線が設定された（第5図）。

網掛山古墳群は、2基の古墳が周知されていたが、調査歴の乏しい場所であったことから、さらに多くの古墳や遺跡の広がりが残されている可能性が想定された。そこで、確認調査を実施した結果、やせ尾根の各所に遺跡が広がることが判明した（第6図）。

片瀬遺跡については、第2章第2節で述べたように弥生時代以降の遺物が出土しており、とくに中世山城「片瀬城」跡については詳細に把握されていた（第3図）。そうした経緯もあって、遺跡の範囲は網掛山古墳群などよりも広く、丘陵上の南北約2.2kmが周知されている（第2図）。確認調査においては、工事範囲内にある尾根の全体について、弥生時代を主とする遺構・遺物が発見された（第39図）。

**調査区の設定** 発掘調査は、工事範囲内を対象としており、確認調査によって把握した遺跡の有無と範囲に基づいて実施している。したがって、調査区（調査範囲）は工事範囲と遺跡範囲に規定される。

網掛山古墳群については、工事対象範囲の確認調査によって遺構・遺物の存在が確認できた場所および存在する可能性が指摘できる場所について、調査区を設定した。設定した調査区は、南西に派生する尾根の西側緩斜面に位置する1区、その尾根の上に位置する2区、中央の尾根の南端に3区、工事対象範囲北縁の丘陵上に位置する4区、南東に派生する尾根の上に位置する5区の計5ヶ所である。いずれも遺構・遺物の分布範囲が大きく広がらず、調査区の面積は計1,000m<sup>2</sup>以下になった。ただし、4区の遺構群については、工事対象範囲外となる北側へ広がっている可能性が高い。

片瀬遺跡については、工事対象範囲の確認調査によって丘陵上の全域で遺構・遺物が把握されたことから、丘陵上全域を対象に調査区を設定した。なお、遺跡の範囲は工事対象範囲の南側および北側に広がるものと把握できる。一方、この遺跡については山城の存在が指摘されていたことから、調査区の範囲を丘陵上だけではなく、東西斜面の上方を含めて設定した。ただし、確認調査の段階で実施した測量・現況観察（第40図）などによって、以前に縦堀とされていたものが崩落の痕跡であると把握できたことから、その部分は調査区の範囲から除外した。

表紙などに記した「No.○○地点」については、確認調査前に付けられた第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業固有の番号である。詳細は別書にて既述しているが（静岡県埋蔵文化財調査研究所2004）、実際の遺跡の名称・内容と関連するものではない。

### 2. 現地調査の方法と経過

**現地調査の工程** 現地調査は、基本的に遺跡ごと、調査区ごとに行っているが、その順序などは諸条件によって整然としていない。網掛山古墳群については、平成10年10月～平成11年3月に1～4区、平成11年6月～7月に5区の現地調査（本調査）を実施した。片瀬遺跡については、平成11年2月～11月に現地調査（本調査）を実施した。

各遺跡・調査区の調査工程については、検出遺構の種類・バリエーションなどによって、1段階（1面）の場合と2段階（2面）の場合という差異が生じている。

網掛山古墳群の4区については、古墳時代の1・2号墳と縄文・弥生時代の集落跡が重複して発見されたことから、1・2号墳の調査→縄文・弥生時代集落跡の調査という2段階の工程で調査を実施した。また、片瀬遺跡についても、中世山城跡と弥生時代集落跡が重複する遺跡であることから、中世以降（山城等）の調査→弥生時代集落の調査という2段階の工程で調査を実施した。その他の調査区については、1段階の工程で調査を実施している。

一方、各工区内の基本的な方法などについては、概ね下記のように統一されている。

山城の測量 片瀬遺跡については、山城の可能性が指摘されていることから、表土掘削などによって土壘などが把握できなくなる場合を避けるため、発掘前に測量・現況観察を実施した（第40図）。遺跡全体の測量・繩張り調査に関しては、既に森町教育委員会が実施していた（第3図）。今回の測量・現況観察は、改めて工事範囲を対象に実施したものであり、確認調査の段階で行っている。

なお、網掛山古墳群については、この工程を実施していない。

準備→表土除去 伐採の終了など発掘作業が可能な状態であることを確認した上で、重機進入路等を設置し、作業員棟等の搬入・設置、器材などの準備を行った。その後、重機による表土除去、人力による表土除去を行った。重機による表土除去は、概ね約20cmを深度の限度として遺構に影響のないように注意した。抜根の多くは人力にて実施した。

古墳の調査 網掛山1号墳では、表土と若干の流土層を除去した段階で、残存する墳丘上部の表面が検出された。そして、その周間に周溝が埋没した状態で確認された。土層帯を各所に設けて覆土を剥削し、土層の検討・記録、出土遺物の検出・記録などをしながら周溝・墳丘下部を検出した。

網掛山1号墳の埋葬施設については、表土除去後の状態や出土遺物などから木棺直葬であると予測された。しかし、土層の識別が難しく、墓壙範囲（平面プラン）の把握は困難な状況であった。さらに、その残存の有無についても判断し難く、墳丘盛土の流失に伴って消滅してしまっている可能性も考慮された。したがって、平面的な精査に加えて、サブトレンチ（小さなトレンチ）による断面の検討も加えて埋葬施設の把握に努めた。残念ながら、副葬遺物の出土があり、辛うじて木棺直葬があった事は指摘できたものの、明確な埋葬施設の形態を検出するには至らなかった。各状況については、写真・図面によって記録した。遺物は、出土状況図を写真・図面にて詳細に記録した後に取り上げている。

盛土については、埋葬施設の検出状況などを考慮すると、多くが流失していると把握できる。わずかに残存する盛土・整地層を土層帯を残しながら掘削し、その範囲や構造の検討・記録（主に土層断面の記録）を行った。

網掛山2号墳では、表土と若干の流土層を除去した段階で、周溝とともに横穴式石室が発見された。周溝の調査は網掛山1号墳と同様に行つた。なお、盛土の残存はなかった。



写真1 古墳の調査

## 現地調査

横穴式石室は、①崩壊した状態、②残存部だけの状態、③基底石、④墓壙の順に検出・把握していく。一部の石材の解体・運搬には、チェーンブロックを用いた。検出・解体は諸検討を行ながすすめ、各状況を零真や平面図、立面図、さらに覆土・裏込めなどを含めた断面図にて記録した。遺物については隨時、出土状態を検討し、適切と判断される方法で記録・取り上げを実施した。

その他の遺構の調査 その他の遺構の調査は、平面プランなどを把握した後、土層帯や部分的な掘り下げなどによって土層断面を観察し、検討・記録しながら遺構検出を進めた。さらに、出土遺物の検出・検討・記録も行ながす。各遺構の完掘状態の検出・記録までを行った。竪穴住居跡の場合は、①遺物出土状況（廃絶状態）→②床面検出状況→③完掘状況（掘方）の順序で検出・記録していく。付属施設である炉跡などについても、この工程の中で検出・解体を行っている。

なお、同じ遺構面・工程段階で調査する遺構群の中にも、異なる時代・時期の遺構が重なり合う場合が少なくなかった。新しい遺構から順に検出するように努めたが、土層の識別が難しく、同時に検出したり逆の順序で検出したりしてしまった部分もある。

現地調査は、調査区全域（古墳群形成前を含めた全遺構・遺物）の調査・記録作業が終了した後に撤収・撤去を行つて終えている。

記録の方法 遺構調査に際して、座標に合わせた10m方眼のグリッド（第6・39図）を全域に設定し、グリッド杭を委託にて設置した。遺構番号は、古墳以外は遺跡別・調査区分別で遺構種類に関わらずに発見順に付した。ただし、本報告に際しては、遺跡別・遺構種類別に新たな番号を付した。遺物は、遺構外出土遺物は層位およびグリッドなどの一定範囲ごと、遺構内出土遺物は遺構ごとに取り上げた。原位置が復元でき、遺構の性格を反映していると判断できるような遺物の出土状態については、詳細に記録して取り上げた。また、埋葬施設に関しては、覆土下層を対象に簡にかけて、微小遺物を探した。

現地の記録図面は、地形・



写真2 住居跡の調査



写真3 埋葬遺構群の調査

墳丘測量1/50、遺構図1/20、詳細図1/10以下を基本とした。主にグリッドに沿って作成したが、古墳では独自の軸を設定した。現地記録写真の撮影は、 $6 \times 7$ 版モノクロと35mm版リバーサルを用い、作業工程撮影用に35mm版カラーネガを使用した。一部には、 $6 \times 7$ 版リバーサルや $4 \times 5$ 版を用いた。また、全景写真撮影および墳丘測量においては、空中写真撮影・測量を委託にて利用した。なお、網掛山古墳群1～4区の基準点測量・グリッド統打設は株式会社イビソク、同5区の基準点測量・グリッド統打設は株式会社バスコ、片瀬遺跡の基準点測量・グリッド統打設および空中写真撮影・空中写真測量は株式会社フジヤマに委託して行っている。

### 第3節 整理作業・報告書作成

#### 1. 方法と経過

**基礎整理** 本事業においては、現地調査を優先するという方針から、多くの現地調査が終了した後に、各遺跡の整理作業を実施することになった。ただし、現地調査と並行して行える基礎的な整理作業（台帳作成、写真整理・収納、図面整理・収納、出土物の洗浄・注記、遺跡概要の整理など）もある（以下、基礎整理）。この基礎整理については、現地調査を実施している期間の整理作業として行った。

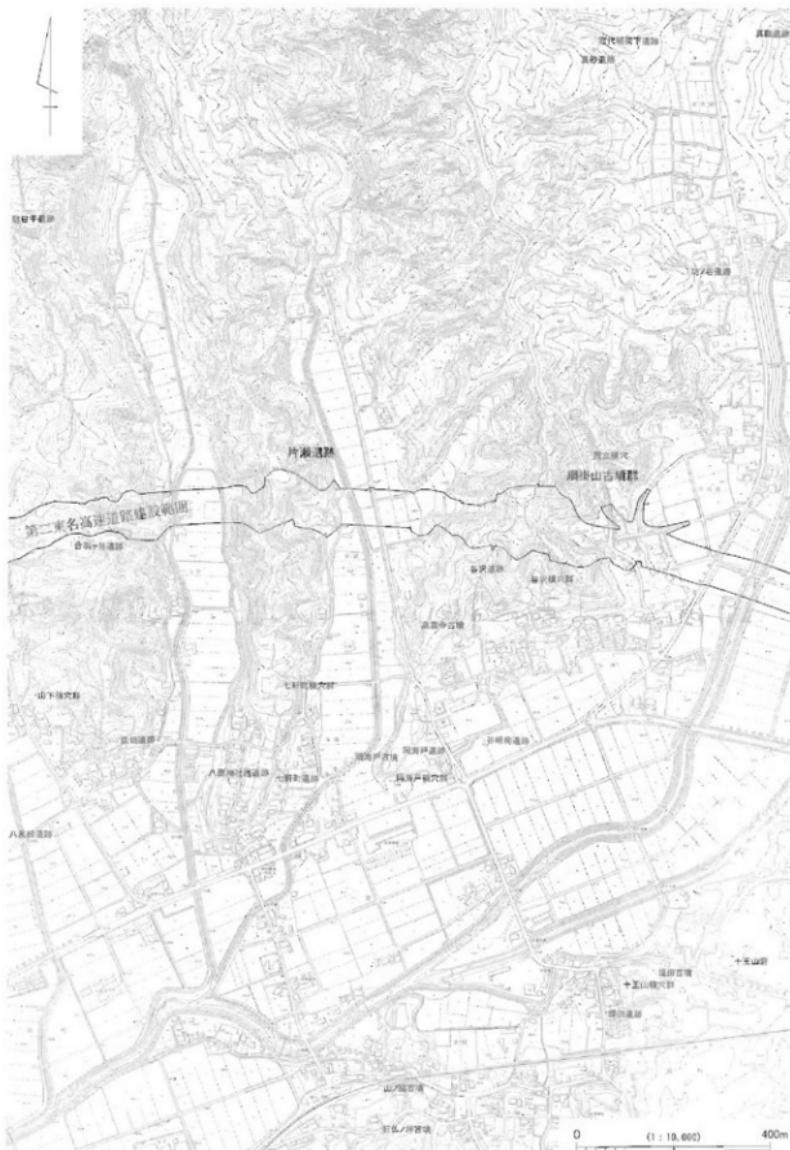
**整理作業・報告書作成** 本書報告遺跡の現地調査後の整理作業を開始したのは、平成13年4月である。出土土器の接合および復元、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらに、これらを編集して報告書を作成した。なお、本書報告遺跡の整理作業は、掛川工区内の他の遺跡の整理作業・報告書作成、さらには一部の現地調査の実施と重なりながら、もしくは切り替えながら実施していった。したがって、整理作業の期間は平成20年度に至る長期間なものとなったが、その間の作業進捗は極めて断続的であった。

遺物写真は当研究所写真室が実施した。 $6 \times 7$ 版モノクロを基本とし、必要に応じて $6 \times 7$ 版リバーサルや $4 \times 5$ 版を用いた。石器の実測・トレース・石材鑑定・計測等については、株式会社アルカに委託して行った。第6章で報告する自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。その他、現地調査および資料整理の中で、多くの方々から様々な御教示をいただきている（第7章末参照）。

**保存処理** 出した金属器について、現地調査から整理作業までの期間の中で、断続的ではあったがクリーニング・保存処理等をすすめた。この金属製品のクリーニング・保存処理の担当は、当研究所保存処理室である。



写真4 土器の復元



第5図 網掛山古墳群・片瀬遺跡と第二東名工事範囲

## 第4章 綱掛山古墳群

### 第1節 概 要

#### 1. 基本土層と地形

**基本土層** 本古墳群の基本土層は、概ね以下のとおりに把握することができる。

- I : 表土・搅乱
- II : 古墳群形成以降の堆積・崩落・流土層
- III : 古墳の盛土
- IV : 古墳築造前の旧表土（堆積・崩落・流土層を含む）
- V : 地山（主に丘陵の基盤層）

I層は、主に灰褐色～褐色を基調とする土層や砂質土層である。表土とした中の多くは、丘陵の崩落・流土層（II層）のうち、表層に近いために根などの影響を多く受けたものと判断することができる。黒色土の堆積はほとんどない。一方、目立った搅乱も少ない。

II層は、褐色～暗赤褐色の砂質土層を主とするが、丘陵を構成する地山（V層）の内容によって砂礫や泥岩粒が混在する場合がある。実際には表土（I層）との見分けが難しく、丘陵上では、ほとんどがI層として把握される。斜面部を中心に、崩落・流土層として確認できる部分がある。

III層は、1号墳の墳丘においてのみ把握することができた。基本的に、丘陵を掘削した土を盛ったものと判断できるが、古墳構築直前の整地層も含まれる。

IV層は、暗褐色の旧表土層と褐色を基調とした堆積・崩落・流土層がある。前者は1号墳の墳丘においてのみ把握することができた（1号墳については第3節4）。

V層は、丘陵を構成する基盤層であり、明黄～赤褐色の砂質土層、黄色～灰色の砂層、白色の泥岩層、河原石による礫層がある。丘陵はこれらの層が互層となって構成されるが、断層の影響もあって単純化はできない。傾向としては、砂層もしくは砂質土層が検出された部分が多く、礫層が現れた部分はほとんどない。2区においては、表土除去をした段階で泥岩層が露出した。

**地形の概要（第6図）** 綱掛山古墳群が立地する丘陵は、北部山岳地帯から一宮川流域へと南にのびる尾根を中心筋としており、そこから東西に派生する多くの尾根によって丘陵地帯を形成している。丘陵地帯の東西幅は約800mであるが、今回の調査対象となる南部では600m弱になる。

それぞれの尾根は幅が狭く、周囲が急斜面になっている。また、丘陵が泥岩層・礫層・砂質層で構成されており、地滑りや丘陵の崩落・流土が多かったと想定することができる。実際に、検出した地形や遺構、古墳の墳丘・盛土などに崩落・流土の影響を確認することができた。一方、この丘陵地帯には大きな造成や搅乱がない。検出地形は古墳群形成時よりも墳頂部（丘陵上部）が低くなり、尾根幅が狭まっている可能性が指摘できるが、基本的な地形の特徴は残されていると推測できる。

このような丘陵地帯であるので、広い平坦面に形成されるような大規模集落が存在したとは考え難い。しかし、尾根の結節点などに幅30m程度の平坦面が形成されている部分があり、これらの中に何らかの營みがあった可能性を予測することができる。

今回の調査は、丘陵地帯の南部を対象としたものである。把握できた遺構・遺物の多くは丘陵上を中心として分布しており、その標高は約80～100mである。周囲の水田面の標高が約40mであるので、比高は約40～60mである。

## 2. 調査区および遺構・遺物

調査区（第6図） 本古墳群については、今回が最初の正式な発掘調査であり、また、現在（平成20年度）までにおいて、本書で報告する以外の発掘調査事例はない。したがって、次に示す1～5区以外の調査区はない。ただし、今回の調査は、丘陵地帯南部を東西に横断する幅約100～150mの工事範囲を対象としており、その南側や北側に遺跡範囲が広がっている可能性はある。実際に、4区の調査では北側に古墳・墓葬の範囲が広がることが把握できている。



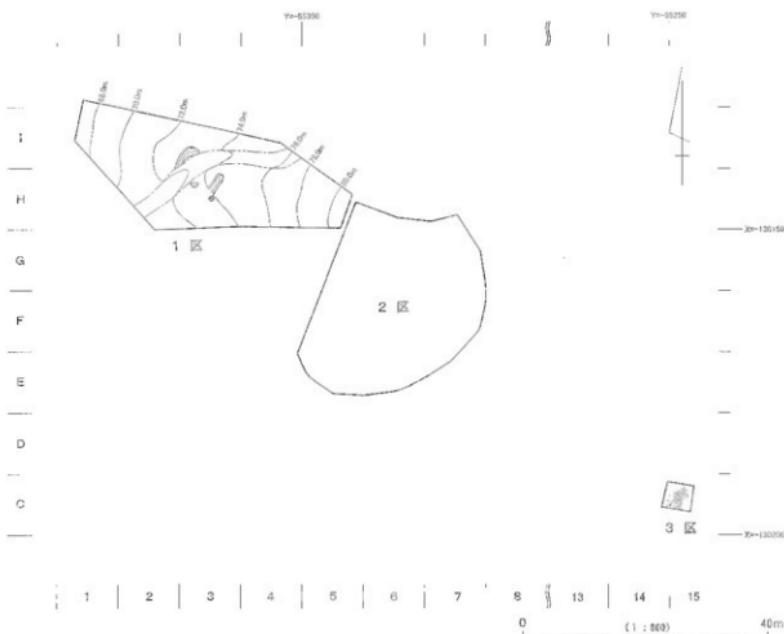
第6図 綱掛山古墳群 調査区・グリッド配置図

調査区（1～5区）は、工事範囲内の確認調査によって遺構が存在する可能性が指摘できた、丘陵上を中心とした範囲に設定した。1区は、最も西の尾根から西に小さく派生する支尾根に立地する。西側へ緩く傾斜する地形にあり、南北は急斜面になっている。2区は、1区の東隣に位置する。丘陵地帯の中心筋から南西に派生する尾根に立地しており、径20m前後の平坦面をもつ。3区は、中心筋となる尾根の南先端部に立地している。4区は、中心筋となる尾根の中で、工事範囲の北縁に位置する。幅20m前後の平坦面を伴うが、調査区はその南寄りを範囲としており、南に緩く傾斜している。5区は、丘陵地帯の中心筋から南東に派生する尾根の先端部に立地している。工事範囲の南縁にあたることから、尾根の北寄りが範囲となっている。各調査区の広さは、いずれも1,000m<sup>2</sup>以下である。

縄文・弥生時代の集落と墓（第7・9図） 4区において、縄文・弥生時代の堅穴住居跡が多く発見された。狭い範囲に密集して分布しており、切り合いが著しい。住居跡は、集石・石開炉を伴う4軒と集石・石開炉のない21軒に分類できる。前者は橢円形、後者は方形と胴張り長方形が主であり、遺構の特徴と切り合い関係、出土遺物などから、前者は縄文時代の可能性が高く、後者は弥生時代中期後半～後期前半の住居跡であると判断することができる。出土遺物は、少量の土器・石器に限られる。

1区においては、弥生時代後期後半の方形周溝墓が発見された。斜面の崩落と後世の山道によって残存状態が悪い。方形にめぐる周溝の一部が検出され、小型壺などの供献土器が出土している。

古墳の名称と概要（第8・9図） 今回の調査では、4区において2基の古墳が発見された。この2基は、調査前には周知されていなかった新発見の古墳である。



第7図 網掛山古墳群 調査区全体図(1～3区)

## 概要



第8図 調査前の周知古墳

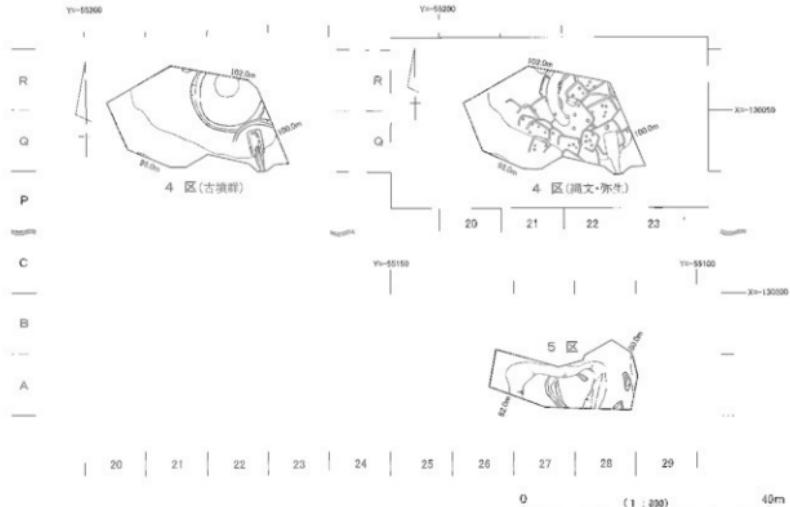
網掛山古墳群では、今回の調査より前に2基の古墳が周知されていた（森町史編さん委員会1998、第8図）。しかし、この2基は地形の起伏によってのみ把握したようであり、その実体・詳細は明確ではなかった。そして、今回の調査（確認調査および本調査）によって、周知されていた2基の存在は把握することができず、かわりに別の場所（4区）に2基の古墳が発見されるに至った。以上の状況から、今回の調査で発見・調査した2基の古墳について、1号墳・2号墳と称することとする。

1号墳は、4区北縁に位置する墳丘直径約11mの円墳であり、木棺直葬を埋葬施設とする5世紀末葉頃の古墳である。

副葬された鉄器と供獻土器について、一部が残されていた。2号墳は、1号墳の南東に隣接しており、1号墳の周溝の一部を破壊して築造されている。墳丘直径約8mの円墳であり、横穴式石室を埋葬施設とする7~8世紀の古墳である。副葬土器の一部と木棺を使用していたと把握できる鉄釘が残されていた。

なお、この2基の古墳は先述の堅穴住居跡群の上に構築されており、一部の住居跡を破壊している。一方、1号墳の周溝の上層からは、十数個体の灰陶陶器碗・小碗が出土している。

その他（2・3・5区）の調査成果（第7・9図） 2区では、1区に隣接することと地形的特徴から、何らかの遺構があると推測された。しかし、調査を実施したところ、露出した泥岩層が検出されただけで、明確な遺構や遺物の発見はなかった。3区では、集石が検出された。しかし、その他の発見はなく、出土遺物も全くないことから、その時期や性格について把握することはできなかった。5区では、確認調査によって溝の存在が指摘され、地形的特徴などから古墳や周溝墓があるものと期待された。しかし、調査を実施すると、数条の不整形な溝が発見され、山茶碗の破片が出土した。



第9図 網掛山古墳群 調査区全体図(4・5区)

## 第2節 1～3区の遺構と遺物

### 1. 1～3区の概要

検出遺構 1区…方形周溝墓1基（弥生時代後期後半）

土坑2基

2区…なし

3区…集石

出土遺物 1区…弥生土器：掲載点数4点

2・3区…なし

### 2. 1号周溝墓・土坑

立地地形（第10・11図） 1区の中央、西に下りながらのびる尾根の中で、やや傾斜が緩くなる場所に立地する。検出面の標高は73～74mである。西側は標高約42mの水田面まで下り、東側は標高約81mの尾根結節点まである。南北は急斜面で下る。

残存状態（第11図） 検出されたのは、方形にめぐる周溝の北角（コーナー）付近と南東辺北寄り部分だけであった。南半部は、丘陵斜面の崩落・流土などの影響によって消失したと推測できる。また、北東から南西の方向にかけて、近世以降のものと把握できる幅4m程度の山道が設けられており、中央北西寄りを横断する形で破壊していることがわかる。以上から、周溝や埋葬施設などの諸施設の多くが破壊され、消失したと把握することができる。

形態と規模（第11図） 残存部分によって方形に周溝がめぐっていたことがわかり、周溝範囲を含む全体規模は一辺8m程度、周溝の内側の下端によって測る方台部の規模は一辺6.4m程度に復元することができる。平面方形の方向は、南北方位より45°程度傾く。

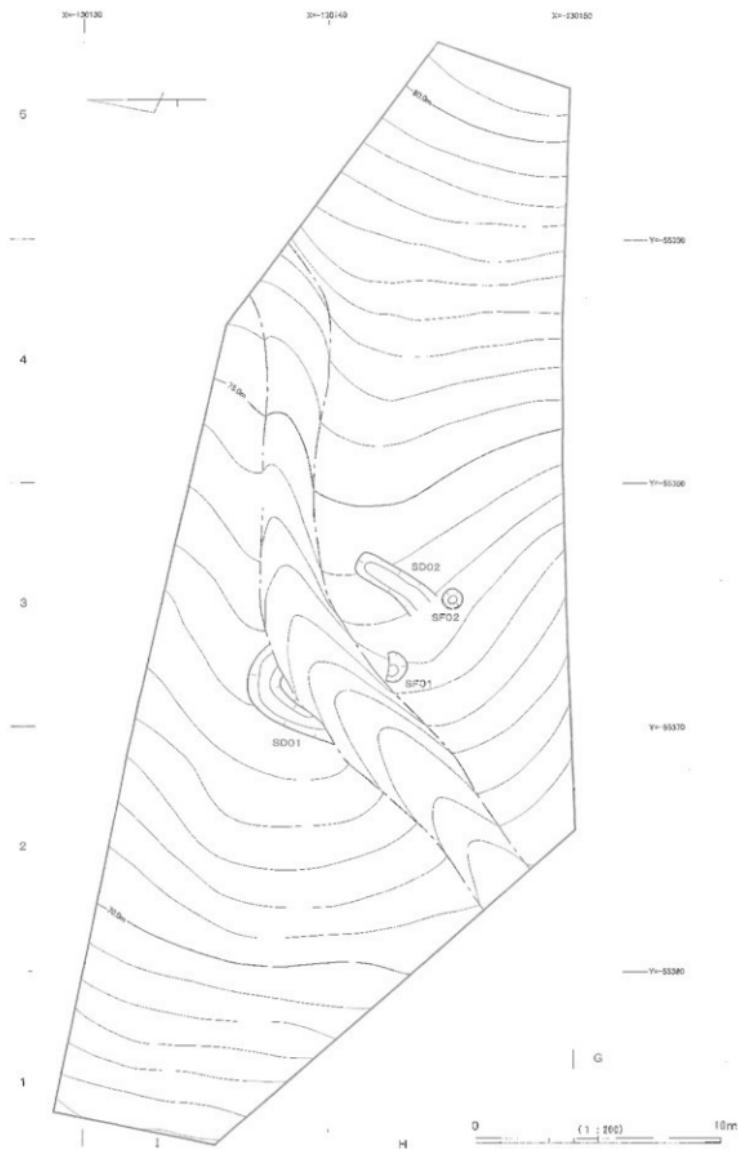
周溝（SD01・SD02）の特徴（第11・12図） 残存する周溝のうち、北角付近をSD01、南東辺北寄り部分をSD02とする。周溝の幅は、約1.1～1.4mである。南東辺の北寄りにおいて幅狭になるが、意図した形状であるかは判断し難い。深さは0.3m前後であり、底面に顯著な凸凹は確認できない。

角（コーナー）について、北角は幅・深さを変えずに周溝がめぐる。一方、東角については、最も高い場所にありながら周溝が検出されず、南東辺の周溝（SD02）が北東端で立ち上がりをもって途切れることから、本来より周溝が途切れる可能性が高いと判断できる。なお、南東辺の周溝（SD02）の北東端部付近において、列状に並ぶ石が検出されている。これだけで明確な評価をすることはできないが、周溝が途切れる角（陸橋部）を意識した造作である可能性も否定できない。

周溝の覆土は、黄～灰色の砂質土で占められている。埋め戻しや掘り返し、火の使用、周溝内埋葬の痕跡などは認められていない。

遺物の出土と遺構の時期・性格（第12図） 周溝内を中心に比較的多くの土器が出土している。その中で図化できたものが第14図1～4の4点である。1・2の壺は、北西辺北寄りの周溝内において、隣り合って出土している。ともに底部に打ち欠きがあることから、墓に対する供獻土器であると判断することができる。4は、南東辺の北寄りにおいて出土している。土器棺墓の残存である可能性もあるが、土器棺を埋設するための土坑状の掘り込みは確認できなかった。

1～3区の遺構と遺物



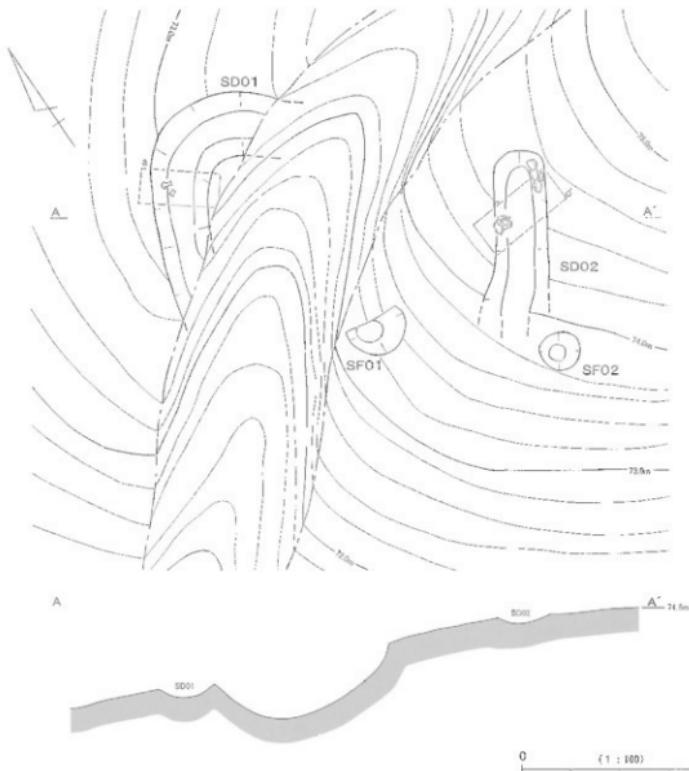
第10図 桶掛山古墳群 1区全体図

出土土器は、弥生時代後期後半に位置づけできる菊川様式新段階で占められている。そして、以上のような土器の出土によって、この遺構（方形周溝）が弥生時代後期後半の方形周溝墓であると評価することができる。なお、この方形周溝墓を「1号周溝墓」とする。

周溝以外の遺構：SF01・SF02（第11・12図） 方形にめぐる周溝以外に、2基の土坑が検出されている。SF01は直径約1.1mの不整円形で、深さは0.5m程度である。黄色～灰色の砂質土を覆土とする。SF02は直径約0.8mの円形で、深さは0.5m弱、断面碗形の土坑である。灰色砂質土を覆土とする。

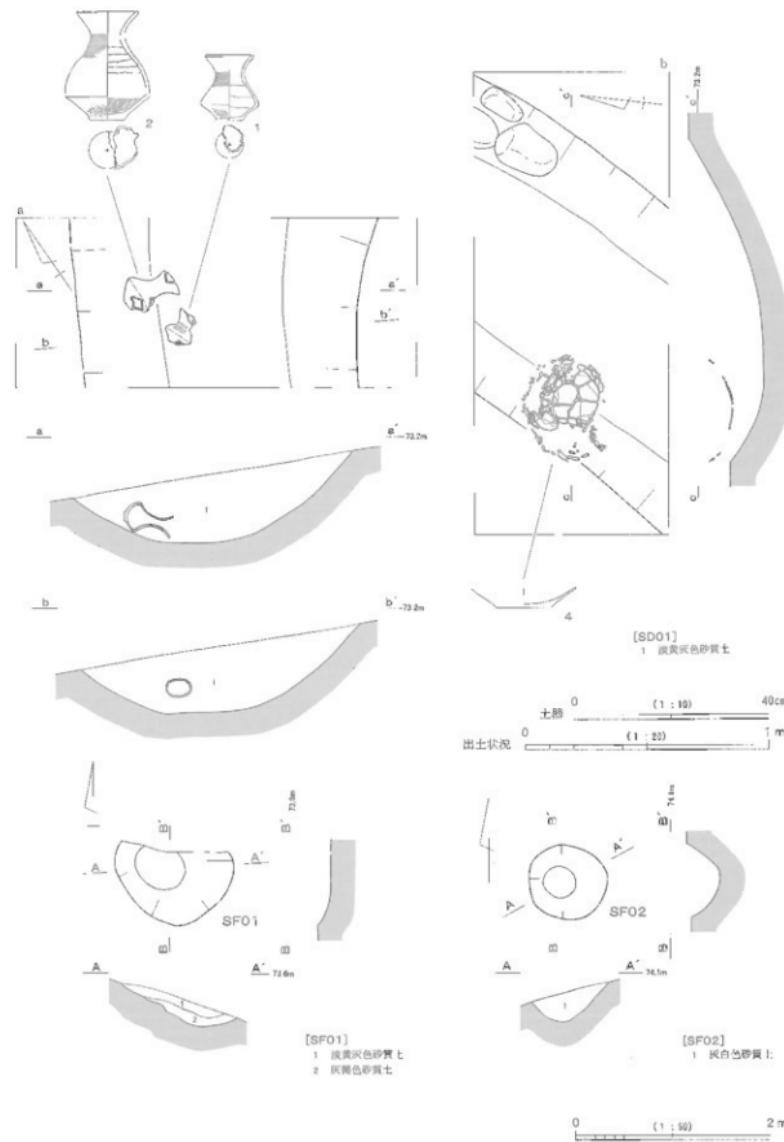
覆土の特徴が方形周溝（SD01・SD02）と近似しており、同様の時期の遺構である可能性も指摘できる。片瀬遺跡の方形周溝墓（第5章第2節）や森町フケ遺跡の方形周溝墓（静岡県埋蔵文化財調査研究所2006）にも、同様の土坑が検出されている。しかし、いずれにおいても、遺構の性格について判断できるような要素は少ない。遺構の性格を明確にすることは難しい。

埋葬施設について（第11・12図） SF01・SF02が埋葬施設である可能性については、判断が難しい。その他に、土坑墓・木棺墓もしくは土器棺墓であるとされる遺構の発見はなかった。埋葬施設については、流土や山道によって消失している可能性も考慮する必要がある。



第11図 1号周溝墓

1~3区の遺構と遺物



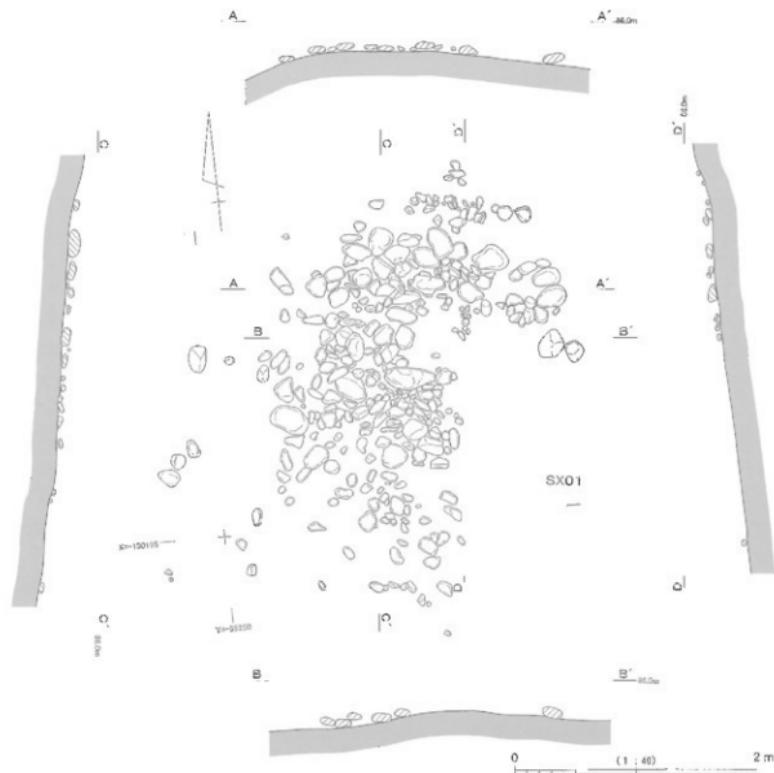
第12図 1号周溝墓の土器出土状況およびSF01・02

### 3. 集石

丘陵上に位置する3区において、3m四方前後の範囲に石が多く密集して検出された（第13図）。立地地形は、わずかに南に傾斜するものの、概ね平坦な場所にあるといえる。

地山に礫層が現れている場所ではなく、周囲の地形などを考慮しても、自然に形成された石群であるとは判断し難い。人為による集石遺構である可能性が高いと判断できる。しかし、石は円礫が主体であり、人為的な加工が施された石はない。また、集石の下や周囲に土坑・溝などが検出されたわけではない。出土遺物もない。したがって、この遺構の性格や時期を明示することは難しい。

石の大きさには、拳大から人頭大のものまでがある。大きめの石は中央付近と北部に多く目立ち、北部においては、東西列を形づくっているような状態を見出すことができる。ただし、集石の検出範囲は不整形であり、大小の石を整然と配置したという状況はない。表土直下の検出のために乱されている可能性も考慮されるが、検出状態において基壇などの構築物の跡であると判断することは難しい。



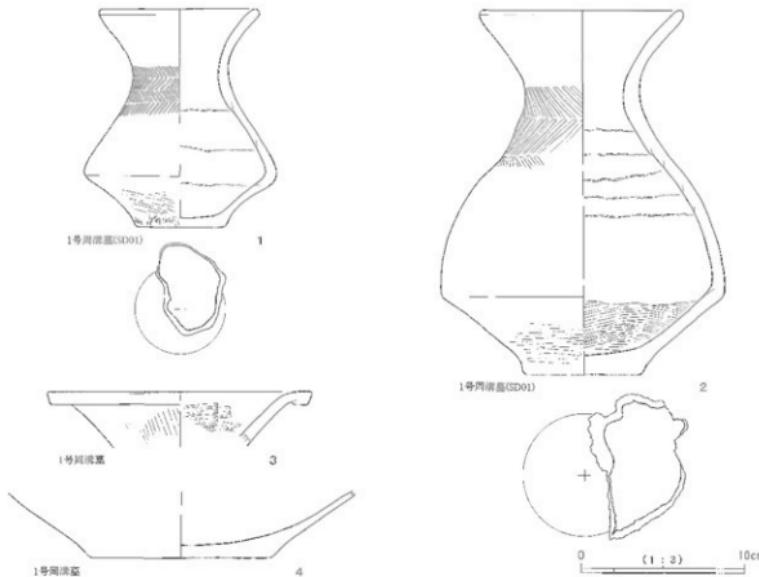
第13図 集石

## 4. 出土遺物

弥生土器（第14図） 1~4は、1号周溝墓に伴って出土した土器である。1は小型の壺であり、底部に打ち欠きが認められる。口縁部は、外反気味に立ち上がる単純口縁である。頸部は直立部がほとんどなく、胴部上半との境が不明瞭になる部分もある。胴部は、肩の張らない上部から明瞭な屈折を介して下部に至る。底部は平底である。頸部～胴部上端には、櫛刺突による多段の羽状文がめぐる。胴部内面に輪積み痕、胴部下部外面に横方向のミガキ調整を観察することができる。その他の調整については、器面の摩滅のために観察が難しい。2は、1よりも一回り大きな壺である。1と同様に底部に打ち欠きが認められる。口縁部は、直線的に立ち上がる単純口縁である。頸部は、1と同様に直立部がほとんどない。ただし、胴部上半の肩がやや張る形態であることから、形態的に頸部と胴部との区分けが分かりやすい。胴部中央下寄りの屈折には明確な棱線を伴う。底部は平底である。頸部～胴部上端に櫛刺突による羽状文がめぐるが、1よりも段数が少ない。外面においては、胴部下部に横方向のミガキ調整が観察できる。内面においては、胴部上半に輪積み痕、下部にハケ調整を観察することができる。

3は、壺の口縁部である。直線的に開き、口縁端部には折り返しを伴う。外面にハケ調整が観察できる。文様については確認できない。4は、比較的大型の壺の底部である。平底である。摩滅・劣化が著しく、調整などの観察はできない。

直立部のない頸部、平底の底部、多段の櫛刺突羽状文などといった特徴から、概ね弥生時代後期後半に位置づけできる菊川様式新段階の土器群であると判断することができる。



第14図 1区出土土器

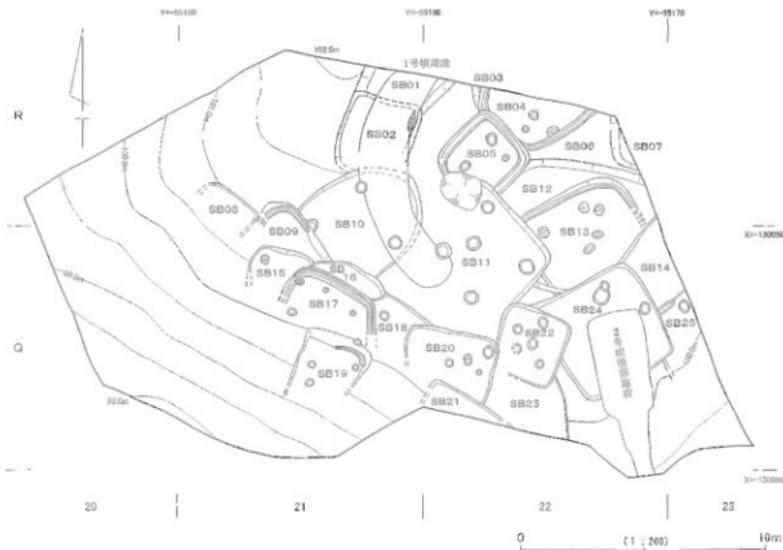
## 第3節 4区の遺構と遺物

### 1. 4区の概要

- 検出遺構** 繩文・弥生時代面…堅穴住居跡25軒：集石・石圍炉をもつ楕円形など（縄文時代中期）  
 集石・石围炉のない方形など（弥生時代中後期）  
 古墳時代面…綱掛山1号墳：木棺直葬の円墳（5世紀末葉墳）  
 綱掛山2号墳：横穴式石室の円墳（7～8世紀）
- 出土遺物** 堅穴住居跡…縄文土器、弥生土器、石器  
 綱掛山1号墳…土師器、須恵器、鎌1、鉄畿2、鉄劍1、吊金具1  
 綱掛山2号墳…須恵器、鉄釘14以上  
 その他（綱掛山1号墳周溝上層および搅乱）…灰釉陶器（碗・小碗）

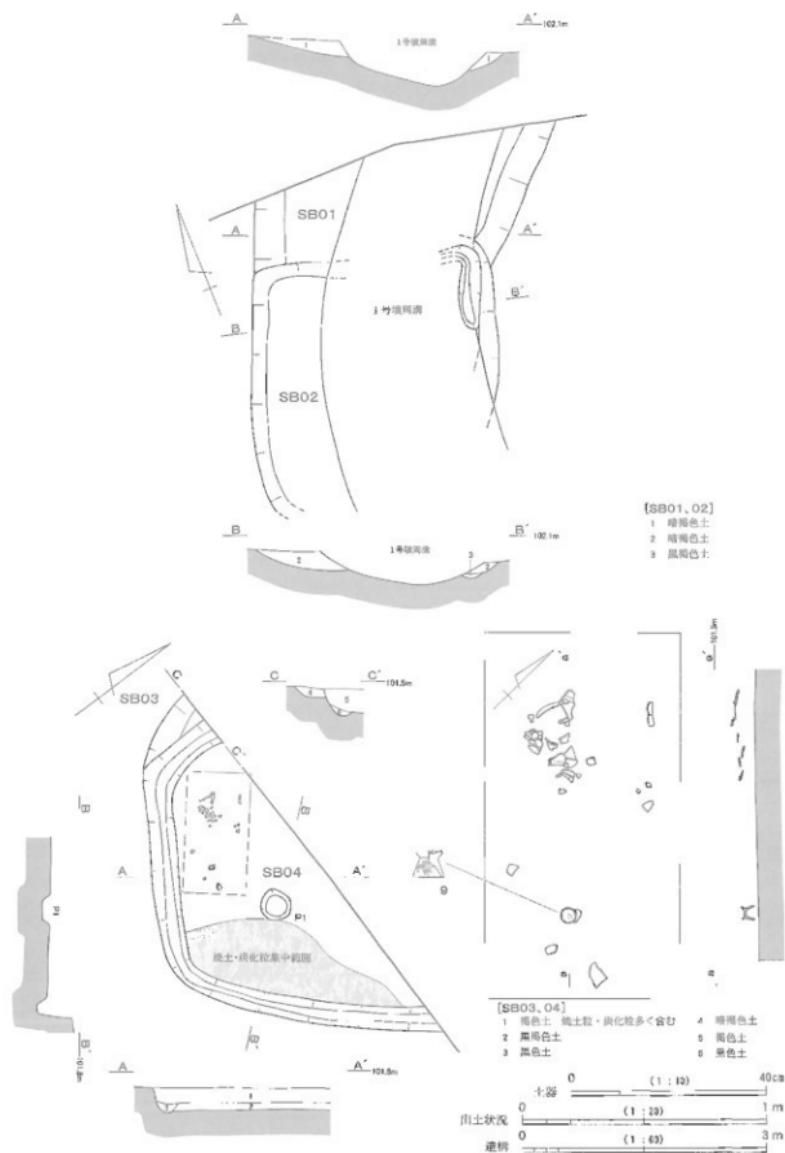
### 2. 堅穴住居跡

SB01・02（第16図） 4区の北縁、R21グリッド東縁に位置する。SB01は、中央部が1号墳周溝に切れられ、南縁部がSB02に切られている。さらに、北部が調査区外となる。SB02は、中央部が1号墳周溝に



第15図 4区全体図(縄文・弥生時代の住居跡群)

4区の遺構と遺物



第16図 SB01・02、SB03・04

切られ、南部が斜面の流土などによって消失している。一方、北側のSB01を切っている。

SB01・02とともに、検出した掘方の形状から、平面方形に復元できる。ただし、SB01は胴の張った長方形である可能性もある。覆土は暗褐色を基調とし、底面の一部に黒褐色土が認められた。貼床・炉・柱穴などは、SB01・02ともに確認できなかった。壁溝は、SB02の北東隅にだけ把握することができた。出土遺物はない。

貼床については、本来よりない構造であった可能性もあるが、SB04などと同様の黒褐色土の貼床であった場合、把握が極めて困難な状況にあったことが推測される。柱穴についても、破壊されている可能性がある一方、SB04などと同様に床面からの深さが浅い柱穴であった場合、掘方底面では検出できないことが推測される。炉については、住居跡の被破壊範囲が広く、本来の有無を検討することが難しい。

**SB03・04（第16図）** 4区の北縁、R22グリッド中央に位置する。SB03は、SB04に切られ、北側が調査区外になるために、掘方の一部分が検出されただけである。形状・構造の検討は難しい。

SB04は、SB05に切られ、SB03・SB06を切っている。SB05と重なる南縁部は、SB05底面の下で検出された。平面形は、検出した形状から胴の張った長方形であると把握できる。黒褐色土による貼床が認められ、壁溝がめぐることも把握できた。さらに、深さ0.1m弱の浅い柱穴（P1）を検出することができ、P1の位置から4本柱であった可能性が指摘できる。南東部の床面には焼土・炭化粒の広がりが認められ、南西部の床面には、ばらばらになった台付壺（第25図9）が残されていた。また、覆土中から多くの弥生土器片や打製石斧（第25図12）が出土している。貼床からは繩文土器片が出土している。

**SB05（第17図）** R22グリッド南西部に位置し、SB04の南西に隣接する。西部が壇乱とSB11によって破壊されているが、残存率は比較的高い。一辺3.3m程の平面方形の竪穴住居跡であり、赤褐色土による貼床と周全する壁溝を把握することができた。さらに、床面上において小穴5基を検出した（岡版8-1）が、その内のP1～3について、方形に配置された柱穴であると判断した。壁溝や柱穴の深さは0.1m前後と浅い。その一方で、炉は床面においても検出されなかった。本来より炉を伴っていないかった可能性も考慮する必要がある。遺物は、床面上において小さな弥生土器片が数点出土している。

**SB06（第17図）** R22グリッド中央に位置する。SB04・SB05・SB12に切られ、SB07を切っている。北部・東部は調査区外、西部はSB04・05によって失われ、南部はSB12によって失われている。

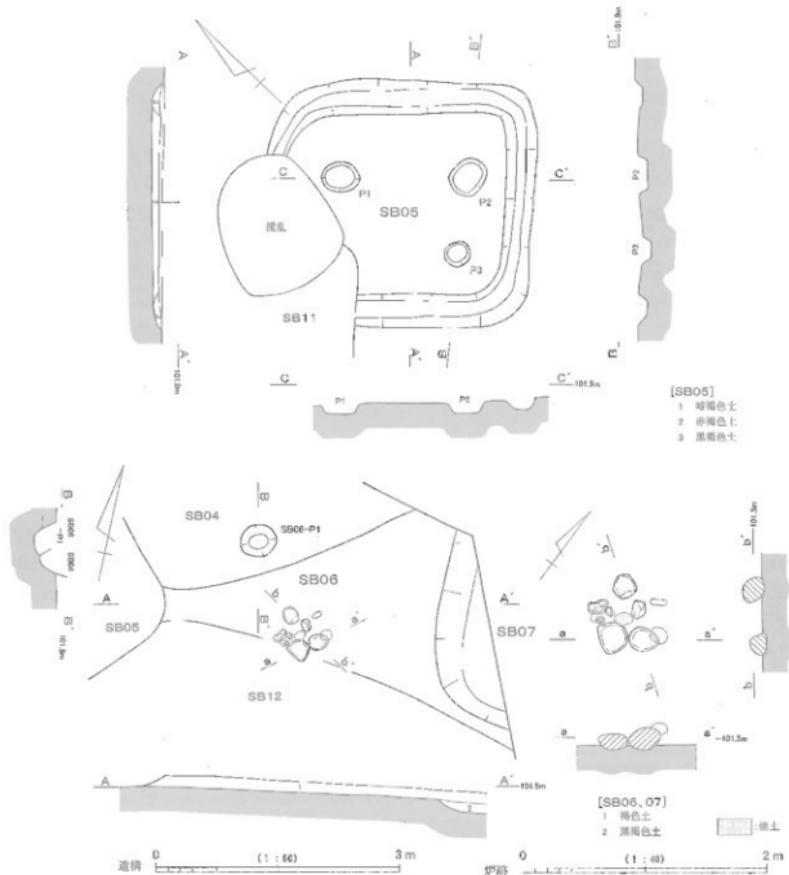
壁体が全く検出されず、平面形についての判断はできない。中央部にあたる場所において、掘方底面と集石炉（もしくは石圍炉）が残存していた。覆土は褐色土である。炉の検出状況などから、厚い貼床はなかったと判断できる。炉は、床面に拳大～人頭大の円礫を5個ほど置いたもので、その上や周囲に焼土を確認することができた。覆土からは、繩文土器を主体とする10～20点の土器片が出土している（第25図5・6）。また、石器片（剥片等）も数点出土している。

一方、SB04の底面において検出された小穴（SB06-P1）について、SB04より前の遺構であることから、SB06に伴う可能性を考慮することができる。

**SB07（第17図）** R22グリッド東部、4区の北東隅に位置する。上部がSB06に切られており、SB06の底面において発見・検出された。また、大半は調査区外となり、検出されたのは住居跡の南西隅だけである。覆土は黒褐色土であるが、今回の検出状況において貼床であるか堆積土であるかを判断するのは難しい。また、壁溝の把握はできなかった。出土遺物はない。

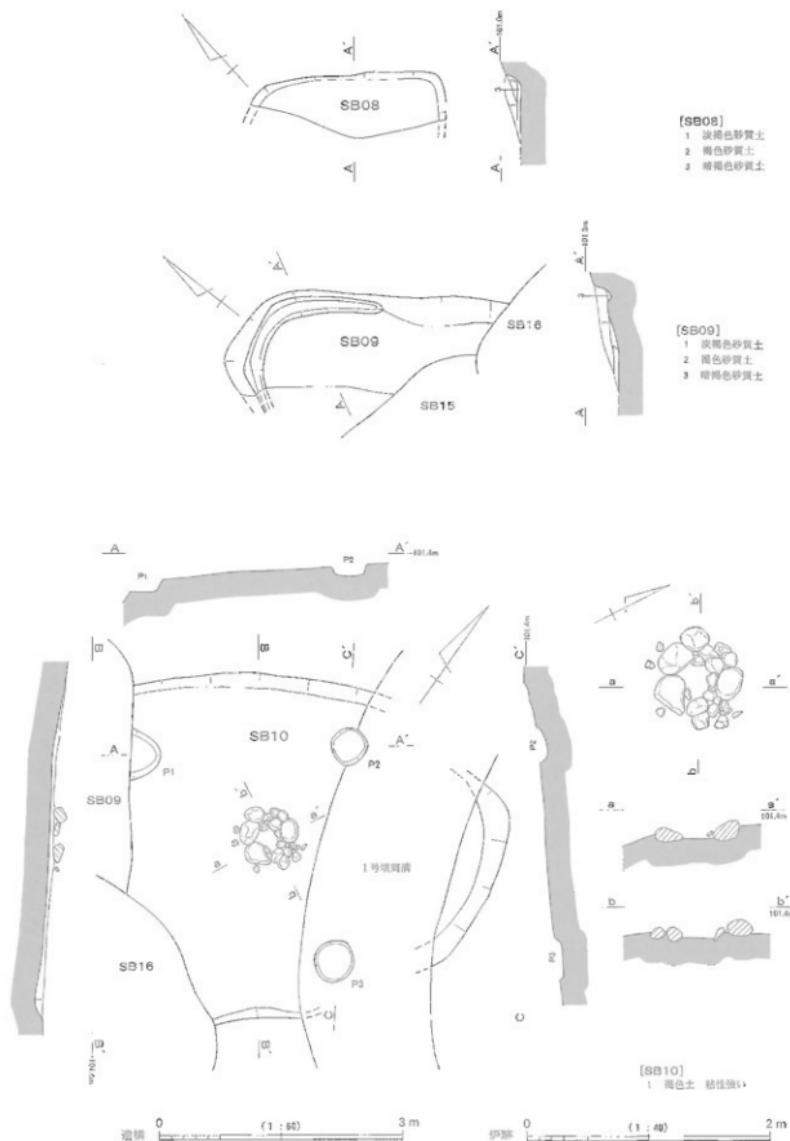
**SB08（第18図）** R21グリッド南西隅に位置する。南西に下る斜面に立地しており、北東縁部以外は流土などによって消失していた。平面形は、残存部からは一辺2.5mほどの方形に復元できるが、胴張りの長方形などであった可能性も否定できない。残存部において、底面が平坦な掘方と暗褐色土による貼床が認められた。炉・柱穴の残存はなく、壁溝についても把握できなかった。出土遺物はない。

4区の遺構と遺物



第17図 SB05、SB06・07

**SB09 (第18図)** SB08の東隣に位置する。SB08と切り合う関係に位置するが、互いの残存状況が悪く、先後関係についての判断はできない。SB10を切り、SB15・SB16に切られている。また、南西に下る斜面に立地していることから、流土などによって北東縁部を除く大半が失われている。平面形は、残存部から一辺3.5m以上の方形に復元できる。褐色砂質土による貼床が把握でき、北縁(角)部においては壁溝を検出することもできた。壁溝の検出範囲は掘方底面における痕跡の有無が左右している可能性があり、本来は北東縁部全体にめぐっていた可能性も考慮される。覆土中からは、弥生土器の小破片が10~20点ほど出土している。



第18図 SB08、SB09、SB10

#### 4区の遺構と遺物

SB10（第18図） R・Q21グリッド東部に位置する。北東部が1号墳の周溝によって壊され、南西部がSB09・SB16に切られている。

平面形は、残存部によって北東から南西への方向に長い梢円形に復元することができる。掘方は、南に緩やかに下る地形に合わせて設けられており、北西側が浅く、南東側が深めになる。粘性・しまりの強い褐色土による貼床が把握できるが、壁溝は認められない。

中央に石匂炉が検出されたほか、柱穴（P1～3）を検出することができた。石匂炉は、床面上に拳大～人頭大の円礎を円形に並べ置いたものである。焼土の検出はなかった。柱穴は、いずれも0.2m以下の深さであり、浅い。残存する柱穴3基の位置から、4本の柱が方形に配置されていた可能性が高いと判断できる。炉の内部から、薄手の土器片が出土している。

SB11（第19図） 4区中央付近に位置する。SB05・SB12・SB13を切っている。SB22とも切り合う位置関係にあるが、先後関係の判断はできなかった。北西部から南部にかけては、傾斜に伴う流土の影響などによって消失している。

平面形は、一辺約4.5mの方形に把握できる。掘方の底面は南西に下っており、低くなる側に貼床（6層）を施していることが把握できる。壁溝と炉は把握できなかつたが、柱穴は方形に配置された4基（P1～4）を検出することができた。柱穴の深さは、掘方底面から0.3m前後である。中央部の北西寄りに小穴が検出されているが、焼土は認められず、炉である可能性は評価できない。遺物は、覆土中から20点以上の弥生土器片が出土しているほか、中央部北東寄りの床面上において、片刃の磨製石斧（第25図13）が出土している。

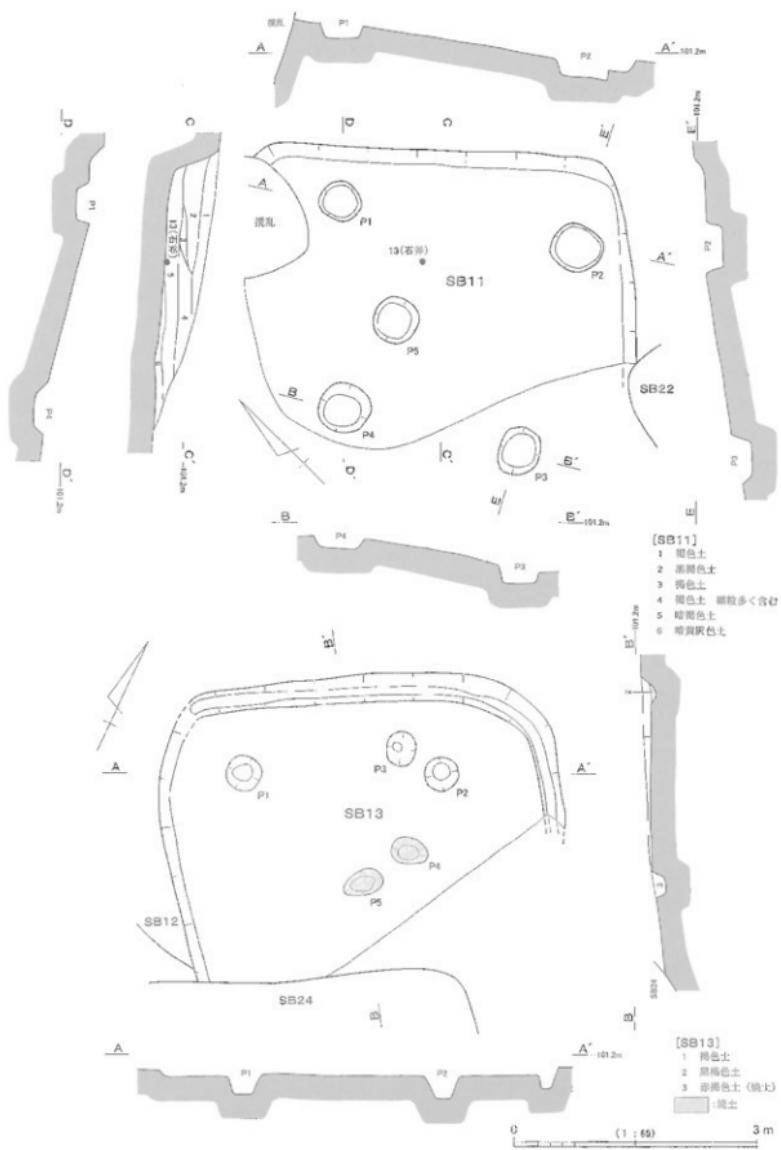
SB12（第20図） R・Q22グリッド東部に位置する。SB06を切り、SB05・SB11・SB14・SB24に切られている。さらに東部が調査区外となっているが、南北約5.4m、東西6.5m以上の比較的大きな住居跡であり、東西に長い梢円形を呈する可能性が指摘できる。

貼床は把握できず、掘方によって検出した。また、壁溝・柱穴も把握できなかつた。そうした中で、北縁部において十数個の石のまとまりが検出されている。しかし、住居跡の壁際に位置すること、焼土が確認されていないこと、石の分布が散在的であることから、石匂炉などである可能性については評価し難い。遺物は、小さな弥生土器片が数点出土しているだけである。

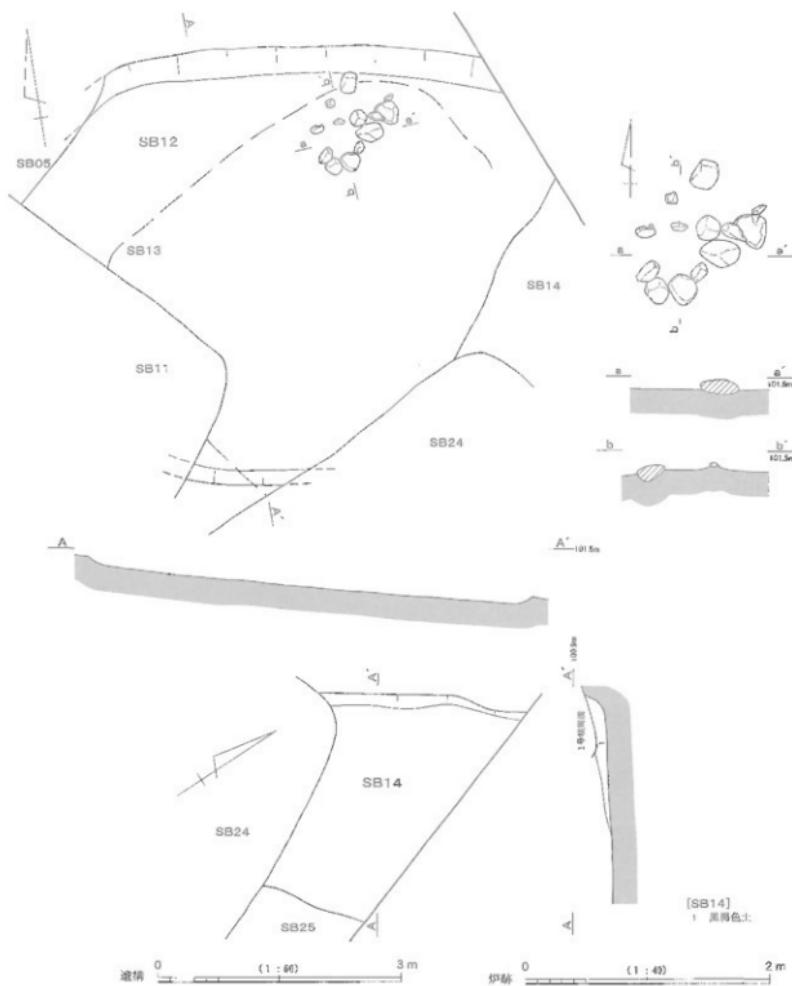
SB12の底面において、弥生時代のSB13が発見されている。発見の経緯から考えると、SB13の上にSB12がつくられたことになる。しかし、土層を含めた検討によって判断した先後関係ではない。SB10やSB23の状況をみると、梢円形の住居跡は方形の住居跡に切られる傾向にあることがわかる。また、SB12に伴う柱穴や炉が全く検出されていない点について、床面（底面）の大半がSB13によって壊されている可能性を考慮することもできる。以上の点を評価するならば、SB13がSB12を切っていると判断することができる。なお、SB12よりもSB13が新しい住居跡であるとすると、先述の石群はSB13覆土内にあることになる。また、SB12の出土とした弥生土器片についても、SB13に伴うものである可能性が高くなる。

SB13（第19図） SB12の下で検出された竪穴住居跡である。SB12との先後関係については、SB12の記述の中で述べたとおりである。その他に、南東部はSB24に切られ、西部はSB11に切られている。南東部は全く残されていなかつたが、西部はSB11の下に下部が残存していた。

平面形は、一辺4.9m程の方形である。貼床は認められなかつたが、掘方底面が平坦である。壁溝は、北西縁から北東縁にめぐるが、南西縁には確認できなかつた。小穴は数基検出されており、位置関係などから、P1・P2が方形に配置された柱穴である可能性が指摘できる。また、焼土の入った2基は炉の可能性を指摘することができる。小穴の深さは0.3m以内である。遺物は、弥生土器の破片が百点近く出土している。ただし、覆土中から出土した小破片が多く、図化したのは第25図7の1点だけである。土器以外には、磨製石鎌の未製品である可能性が指摘できる石器（第25図14）が出土している。



第19図 SB11、SB13



第20図 SB12、SB14

SB14（第20図） Q22グリッド北東隅、4区東縁に位置する。東部は調査区外になっており、南部はSB25に切られ、西部はSB24に切られている。SB13との先後関係は不明である。

残存する北西部の形態から、平面方形である可能性が高いと判断できる。黒褐色土の覆土が認められたが、貼床であるか堆積土であるかは判断し難い。掘方底面は平坦であり、壁溝・柱穴・炉の検出はなかった。出土遺物はない。

**SB15（第21図）** Q21グリッド北部に位置する。南に下る斜面に立地していることから、南部は失われていた。さらに、東部がSB16・SB17に切られていた。

残存する壁体・床面とSB17の下で検出された柱穴（P2）の存在によって、一辺2.7m前後の平面方形に復元することができる。床面は、暗黄褐色土の貼床（6層）が把握でき、断面の5層によって壁溝が存在した可能性が指摘できる。しかし、面的に壁溝を検出することはできなかった。柱穴は、北西隅にP1、SB17の底面においてP2を発見した。位置関係から、4本の柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。炉は把握できなかった。遺物は、弥生土器の小破片が数点出土しているだけである。

**SB16（第21図）** SB15の東に隣接する。SB15を切るが、南側のSB17には切られている。残存する北縁部の形態から、方形よりも丸味を帯びた平面形である可能性が指摘できる。掘方による検出であり、貼床の把握はできなかった。また、壁溝は把握できなかった。柱穴・炉は全く把握できていない。出土遺物はない。

**SB17（第21図）** SB16の南に位置する。SB15・SB16・SB18を切るが、南に下る斜面に立地しているために、南部が大きく消失している。

北部の掘方・壁溝と柱穴4基（P1～P4）を検出することができた。一辺約4.5～5.0mの平面方形であることがわかる。さらに、南側の柱穴2基（P3・P4）の間隔が広がっていることと掘方残存部の形状によって、南に広い台形を呈していた可能性が指摘できる。貼床については、土層断面においても認められなかった。壁溝は、東縁・北縁・西縁においては途切れることなくめぐっている。炉は検出されていない。また、出土遺物はない。

**SB18（第21図）** Q21グリッド東部に位置する。西部はSB17に切られ、東部はSB20に切られている。さらに南部が斜面の流土の影響によって消失しており、残存部は北部の一部に限られている。なお、SB20の下で東壁の一部を把握している。

平面形は、残存部から一辺2.7m前後の方形に復元することができ、南部に広がる台形であった可能性も指摘できる。検出は掘方によるが、貼床があつた可能性も否定できない（土層断面図の2層）。いずれにしても、壁溝は認められない。柱穴は1基（P1）が残存していたが、炉は検出されていない。出土遺物はない。

**SB19（第22図）** Q21グリッド中央に位置する。南西に下る斜面に立地しており、流土の影響によって南部が消失している。重複する遺構はない。

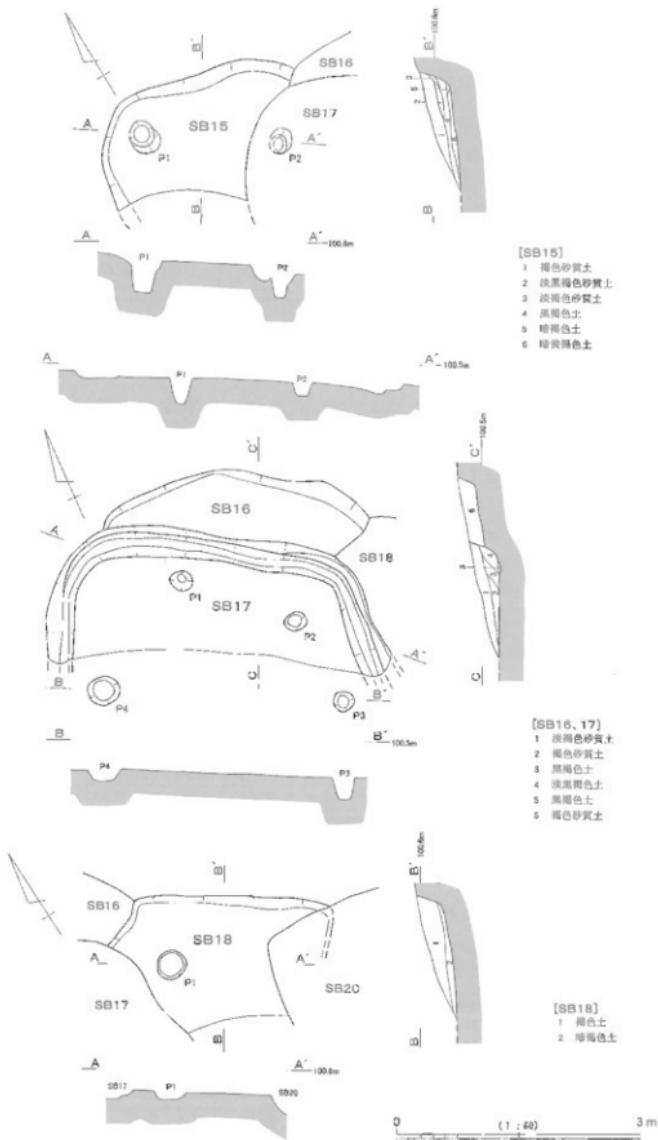
平面形は、東西約2.9m、南北2.7m以上の方形である。掘方による検出となったが、土層断面によつて貼床が施された可能性が指摘できる。北東隅付近において壁溝を把握することができた。また、柱穴の可能性がある小穴3基（P1～P3）を検出した。しかし、P1～P3の配置は、住居の形態に対応していない。炉は検出されていない。遺物は、弥生土器の小破片が数点出土しているだけである。

**SB20（第22図）** Q22グリッド西部に位置する。SB18・SB22・SB23を切る。南部が斜面の流土の影響によって消失し、また、SB21に切られている。

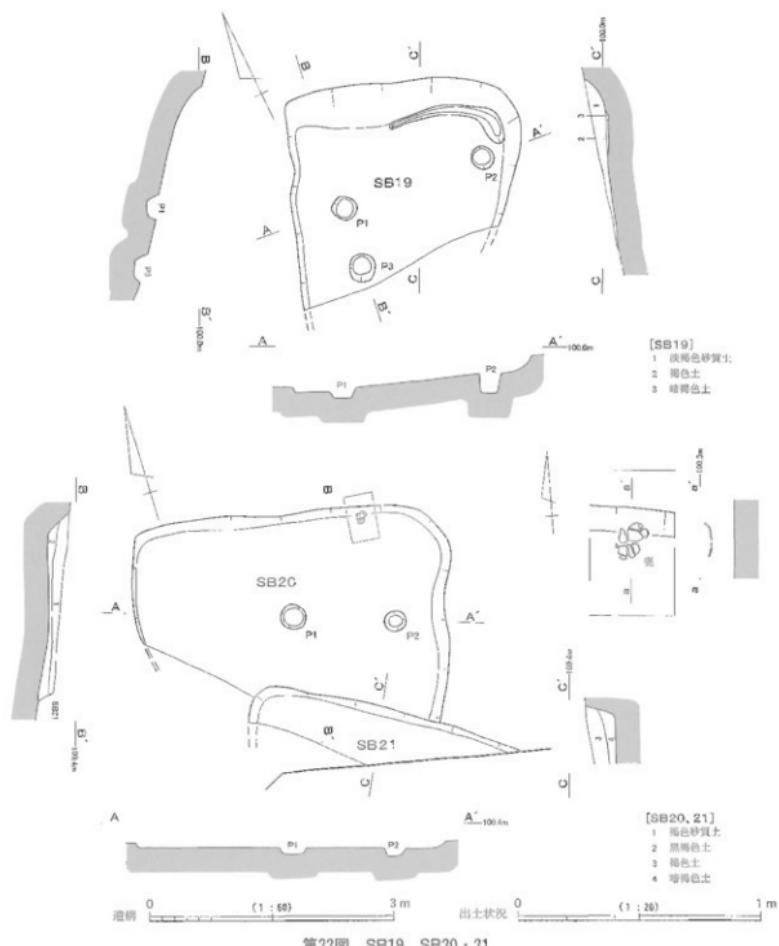
平面形は、一辺約3.8mの方形である。掘方による検出となつたが、土層断面によつて貼床が施された可能性も否定できない（2層）。貼床の有無に関わらず、壁溝は認められない。2基の小穴（P1・P2）を検出しているが、深さは非常に浅く、方形に配置される柱穴とは異なる位置にある。柱穴ではない可能性のほかに、柱の配置が方形に配置される4本柱ではなかつた可能性を考慮する必要がある。炉は検出されていない。遺物は、弥生土器の破片が10～20点出土している。実測図化したのは第25図8の1点だけである。なお、出土状況を図示した土器は壺の胴部である。

**SB21（第22図）** SB20の南に隣接する。斜面の流土の影響によって、北縁部以外が消失している。北縁部はSB20を切っている。平面形は、一辺3.4m以上の方形である。土層断面の4層が貼床である可能

4区の遺構と遺物



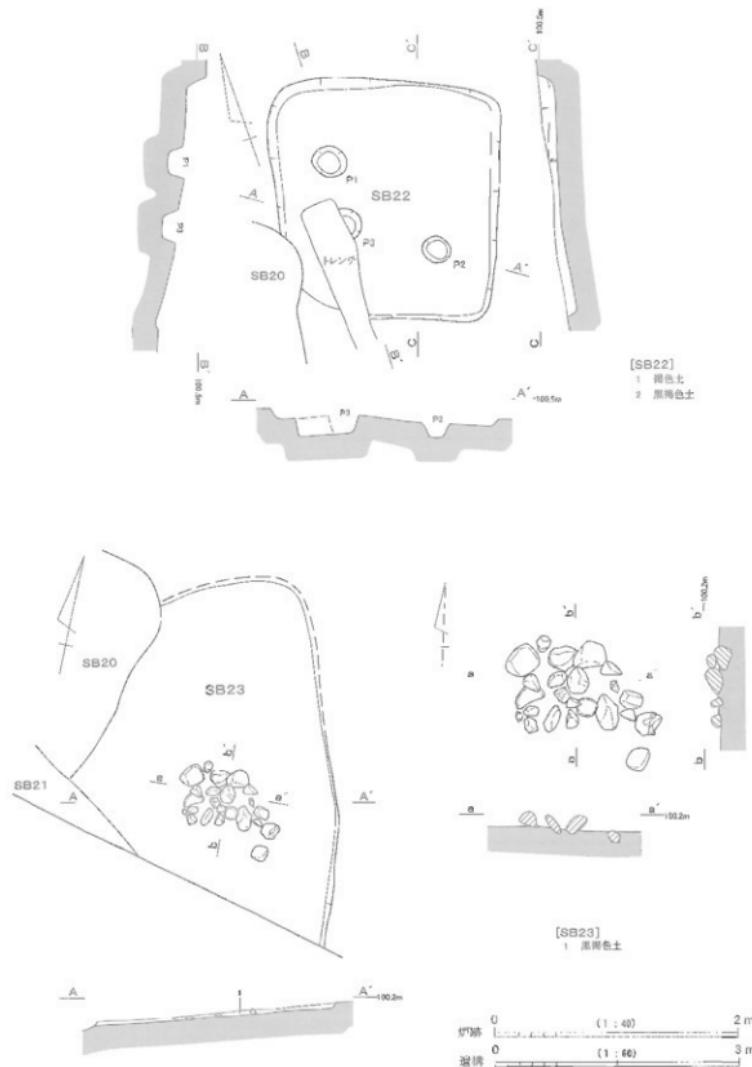
第21図 SB15、SB16・17、SB18



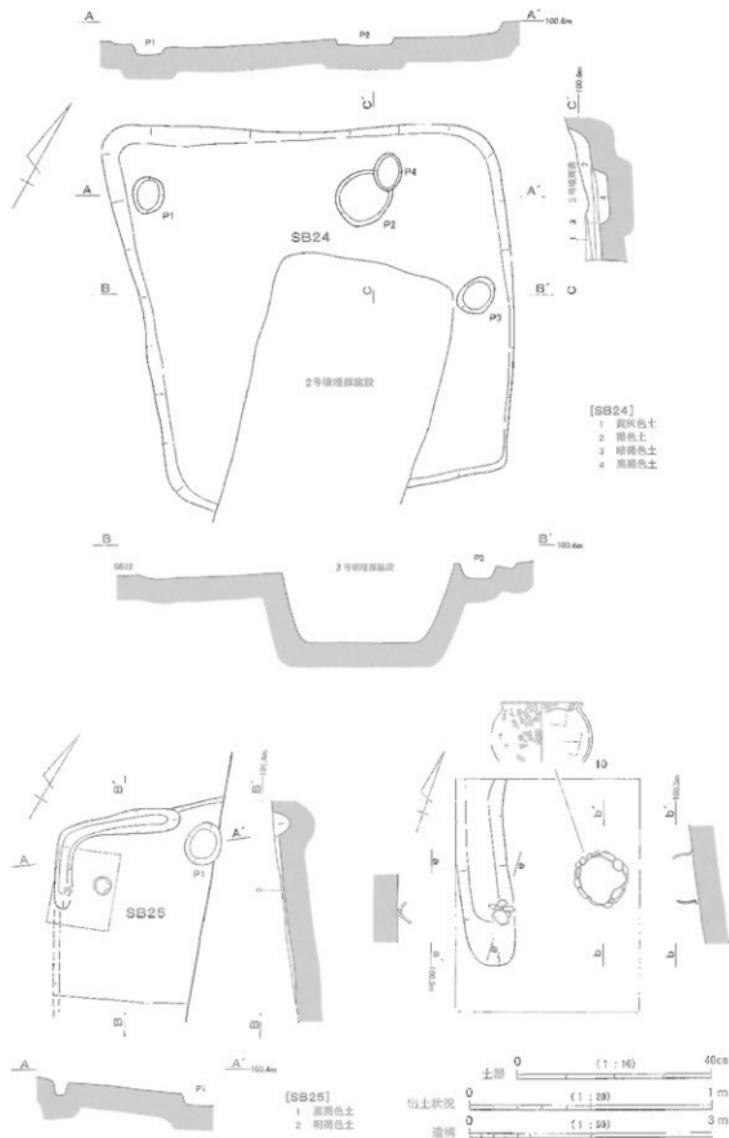
性があるが、いずれにしても壁溝は認められない。また、柱穴・炉などは検出されていない。出土遺物もない。

**SB22 (第23図)** Q22グリッド中央に位置する。SB11・SB23・SB24を切り、SB20には切られている。平面形は、東西約2.8m、南北約3.0mの方形である。掘方による検出となつたが、2層のしまりが強く、遺物の出土がないことなどから、貼床が施されていると判断できる。壁溝は認められない。3基の小穴 (P1～P3) を検出することができ、4本の柱が方形に配置されていた可能性が考慮される。しかし、P1

4区の遺構と遺物



第23図 SB22、SB23



第24図 SB24、SB25

#### 4区の遺構と遺物

とP3の間隔が狭く、また、北東側の柱穴を検出することができなかつた。炉は把握できなかつた。また、出土遺物はない。

SB23（第22図） Q22グリッド中央に位置する。SB22・SB20に切られてい。東部は完全に失われていたが、北部はSB22の下に残存していた。南部は、斜面の流土の影響によって消失している。

平面形は方形に近い不整形であり、南北4.5m以上の比較的大きな住居跡である。掘方による検出となつたが、残存する覆土（1層）が比較的強くしまつてることから、貼床が施されていると判断できる。壁溝・柱穴は認められなかつた。住居の中央東寄りにおいて、20個程度の石のまとまりが検出された。拳大から人頭大の円礫が雑然と集められた集石炉である可能性が指摘できるが、焼土は認められなかつた。住居の形態・構造は、縄文時代の住居跡であるSB06やSB10に近い。切り合い関係についても矛盾はない。しかし、出土遺物は小さな土器片1点だけである。

SB24（第24図） Q22グリッド東部に位置する。中央部付近が2号墳埋葬施設によって大きく破壊されている。また、北西隅がSB22に切られてい。一方、SB12・SB13・SB14・SB25を切つていて。

平面形は、一辺4.8m弱の方形である。検出は掘方によるが、3層が貼床である可能性が高い。壁溝は認められない。P1～P4を検出したが、柱穴であるかは判断し難い。P2は、土層断面によつてSB24よりも前の遺構であると判断できる。炉は検出されていない。遺物は、弥生土器の小破片が数点出土している。

SB25（第24図） Q23グリッド西線に位置する。東半部は調査区外になり、南部は斜面の流土の影響によって消失している。さらに、北西隅の上部がSB24に切られてい。

平面形は方形であり、明褐色の貼床を把握することができた。壁溝は、北西隅において確認できた。さらに、小穴1基（P1）を検出したが、柱穴であるかは判断し難い。炉は検出されていない。床面上において弥生土器が出土してい。甕の上半部（第25図10）が逆位で置かれていることについては、土器台などに転用した可能性が考慮される。ただし、出土状況以外の根拠は把握できない。

### 3. 住居跡出土の遺物

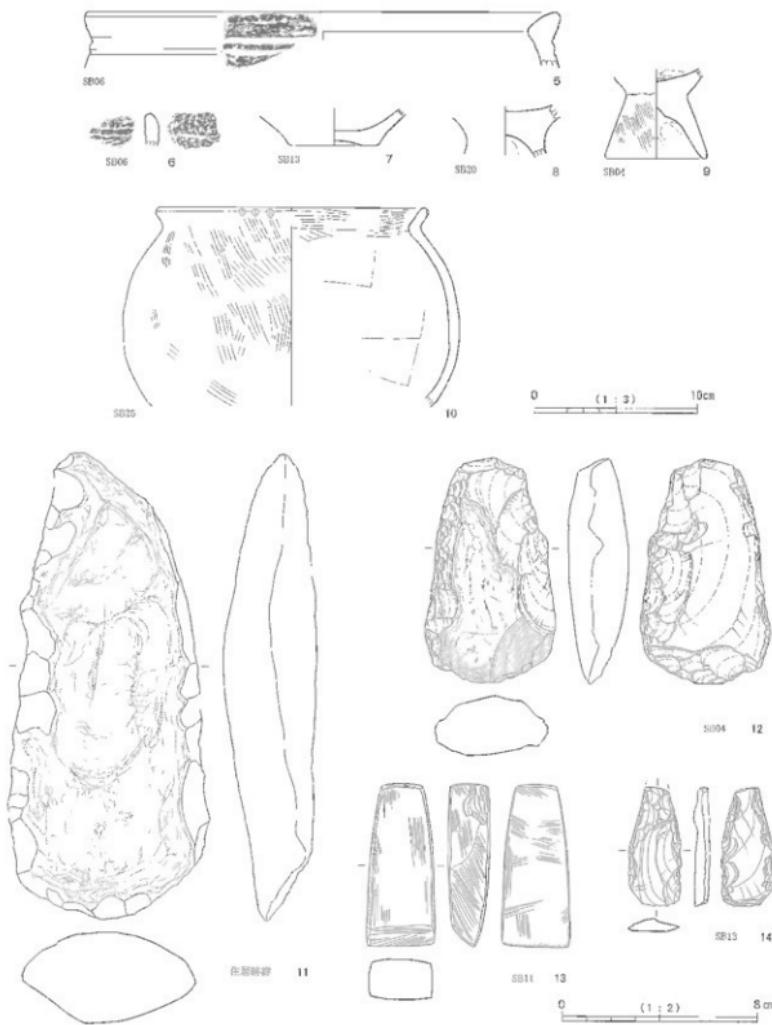
住居跡から出土した遺物のうち、実測図化できたものを第25図に示した。

5・6は、SB06出土の縄文土器片である。5は、外側に短く張り出す口縁部であり、外面の屈折部に二条の沈線を確認することができる。小破片であるため、図にしたような平坦な口縁であったのか、起伏のある装飾豊かな口縁であったのかは確認できない。6も小さな口縁部片であるが、起伏のある口縁であった可能性が高いと判断できる。口縁端部の外面に連続爪形文が細かく施され、その下に沈線を確認することができる。内面にも沈線が認められるが、外面の沈線よりも幅狭で深い。5・6はいずれも小破片であり、詳細な時期・型式の特定は難しいが、縄文時代中期前半前後の東海系土器である可能性などを考慮することができる。なお、図化した以外に胴部片数点が出土しているが、全て無文である。

7～10は弥生土器である。7は、SB13から出土した甕の底部であり、上げ底状になつてゐる。8は、SB20から出土した台付甕の接合部である。9は、SB04から出土した台付甕の台部である。比較的低く小さい台部であり、直線的に開く形態を呈する。外面には接合痕が観察できる。10は、SB25から出土した甕の上半部である。胴部は球形に近く、口縁部は短く外に開く。胴部と口縁部との境について、内面には屈折稜を伴い、調整も口縁部と胴部で異にしているが、外面の屈折稜は不明瞭であり、縦方向に近いハケ調整が口縁部から胴部へと連続して施されている。7～10の弥生土器については、一部の形態的特徴から弥生時代後期前葉の菊川様式古段階（鈴木敏1996など）の前後に位置づけることができる。

11は、住居跡群中から出土した打製石斧である。表面の風化が著しい。12は、SB04から出土した打製石斧である。13は、SB11から出土した磨製の柱状片刃石斧である。刃部に線状痕が顕著に認められる。

14は、SB13から出土した二次加工のある剥片である。石材や形状から、片瀬遺跡の弥生時代集落において多く出土している磨製石鎌未製品と同様のものである可能性が高いと判断できる。



第25図 住居跡出土遺物

#### 4. 綱掛山1号墳

##### (1) 墳丘

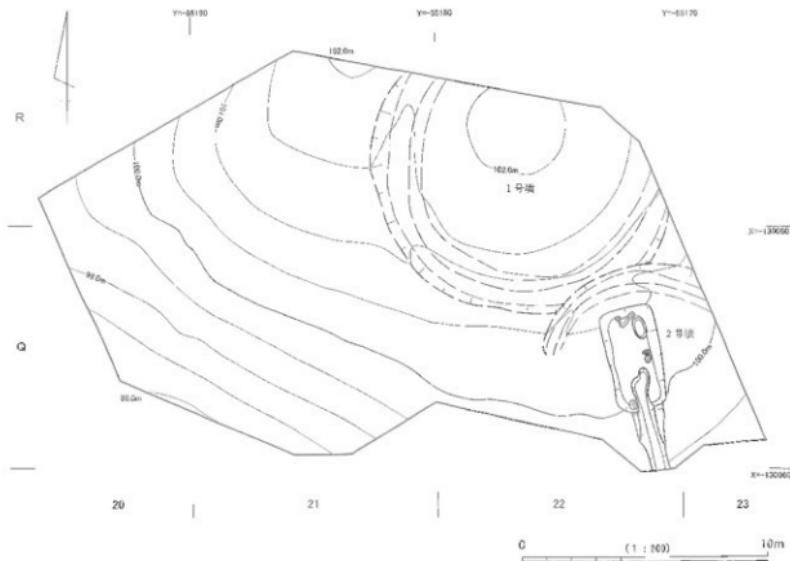
**立地・調査前状況（第26図）** 4区北東部に位置する。丘陵上にある平坦面の南東端部に立地しており、南側には緩やかに下る斜面、東側には急傾斜で下る斜面が迫っている。したがって、南東方向の見晴らしが良いと把握できる。また、大きな搅乱や造成による破壊は受けていないが、南東方向を中心とした流土の影響を受けていると推測することができる。

この古墳の存在は以前より周知されていたわけではなかった（森町史1998）が、明確でないにしても、発掘前に古墳の存在を推測させる立地と地形が把握できた。なお、今回の調査では、北部が工事対象範囲外となるために、その部分を除いた範囲を発掘している。

**周溝（第27図）** 表土を除去すると、墳丘の周囲に弧を描く周溝が発見された。調査区外となる墳丘北部においても、地表面の地形によって周溝の存在を観察することができ、周溝は円形に全周している可能性が高いと判断できる。ただし、東部の一部は崖によって消失しているものと把握できる。また、南東部の一部が2号墳の周溝によって壊されていた。

検出した周溝の幅は1.5～2.2m、深さは0.1～0.3mである。周溝底面は、地形に沿って傾斜しているが、顕著な凸凹はない。以上のように、周溝は概ね一定の形状をもってめぐっていることが把握できる。覆土は、最下層に明褐色土、上層に黒～暗褐色土の堆積が認められた。

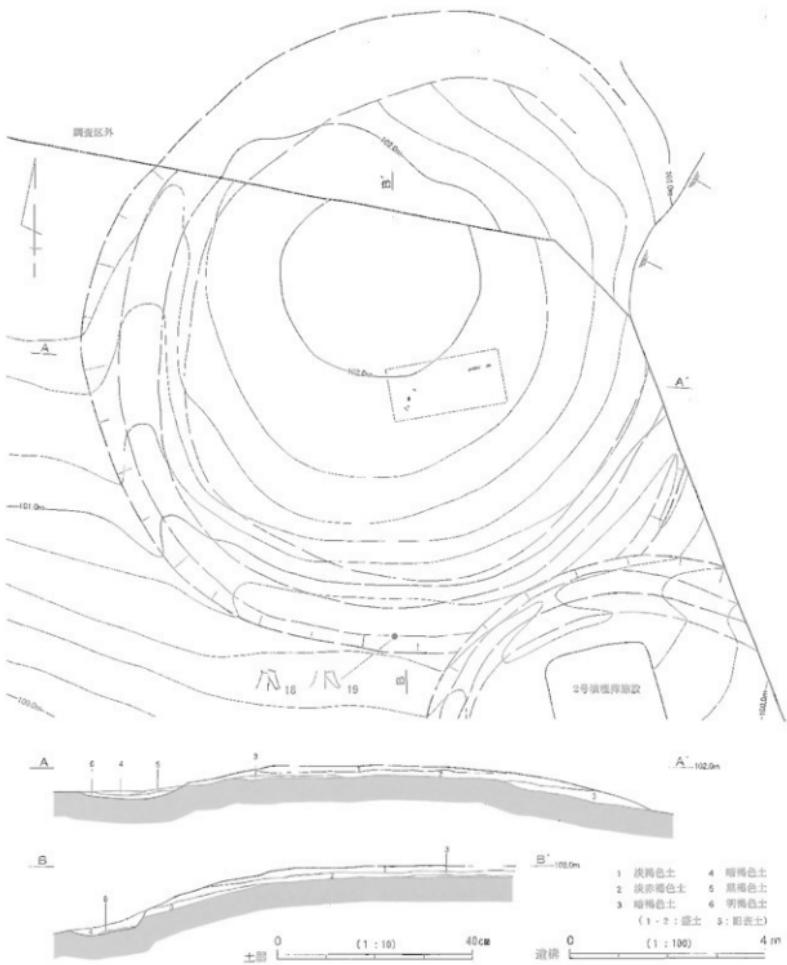
**墳丘（第27図）** 周溝によって区画された墳丘は、平面円形を呈している。墳丘規模は、周溝底面内側（墳裾）によって径約10.5mであることがわかる。高さは、南部周溝底面からの約1.4mが最大であ



第26図 4区全体図(綱掛山1・2号墳)

る。墳丘の構築は、下部が周溝掘削などによる削り出しにより、上部が盛土によるものである。第27図の土層断面図の1・2層が盛土層であり、3層（暗褐色土）が旧表土層であると判断できる。

旧表土層（3層）は、墳丘の周縁部にだけ残されており、中央部には認められなかつた。高まりを均すような整地が行われ、その際に墳丘中央部の旧表土が削り取られた可能性を指摘することができる。さらに、墳丘を構築した場所について、本来より若干高まった地形であったことがわかる。盛土層については、残存高が最大0.2m程度であった。しかし、後述する埋葬施設に必要な深さを満たすためには、



第27図 網掛山1号墳 墳丘

#### 4区の遺構と遺物

1m程度の高さは必要であったと推測される。流土の影響によって、盛土の多くが消失していると把握できる。なお、残存する盛土は褐色を基調とする土層であり、周溝掘削などによって得られた土を用いている可能性が高いと判断できる。盛土・旧表土の下において、整地痕などの古墳構築に伴う痕跡を発見することはできなかった。

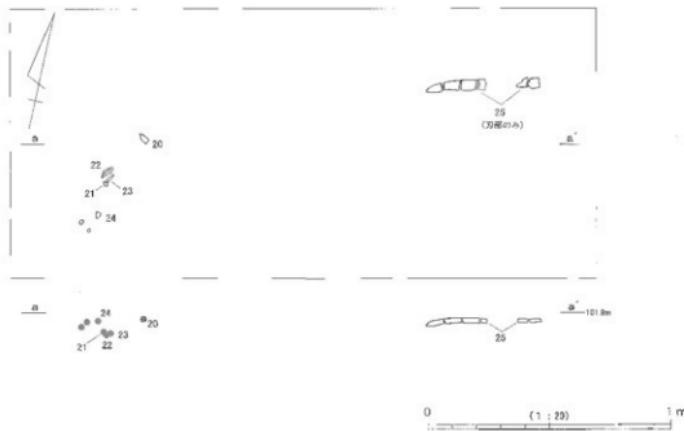
遺物出土状況（第27図） 墳丘・周溝内の各所から、須恵器壊類（第29図15・16）や土師器高杯（第29図17～19）の破片が出土している。破片が散在した状態で出土しており、埋葬・葬送に伴う使用・廃棄の状況を把握することは難しい。

その他に、周溝の上層において灰釉陶器の碗・小碗（第36図50～63）が多く出土している。住居跡の発見や土師質土器の出土がないことから、居住生活による遺物であるとは判断できない。墳丘の高まりが残る1号墳の周囲において、埋葬や信仰に関連する行為があった可能性が指摘できる。

#### ② 埋葬施設

遺構として埋葬施設を検出することはできなかった。流土の影響によって消失したと把握できる。墓穴の浅い埋葬施設であり、石材などを用いない埋葬施設であった可能性が考慮される。

一方、墳頂部の南東寄りにおいて、鉄劍・鉄鎌・鎌といった副葬品が出土している（第28図）。鉄劍は、東寄りの場所において切先を西に向けて出土している。鉄鎌と鎌は、西寄りの場所において散在した状態で出土している。これらの出土状況によって、東西方向を主軸とする木棺直葬の埋葬施設があつた可能性が指摘でき、さらに、被葬者の頭位は東であり、頭の右側（仰向けの被葬者からみた方向）に鉄劍、足元に鉄鎌や鎌が副葬されたと復元することもできる。ただし、流土の影響を受けて位置が大きく移動している可能性は否定できない。また、鉄鎌や鎌については、流土の影響などによって散らばった状況が指摘できることから、より多くの鎌や農工具が副葬されていた可能性も否定できない。



第28図 綱掛山1号墳 副葬品出土状況

## (3) 網掛山1号墳に伴う遺物

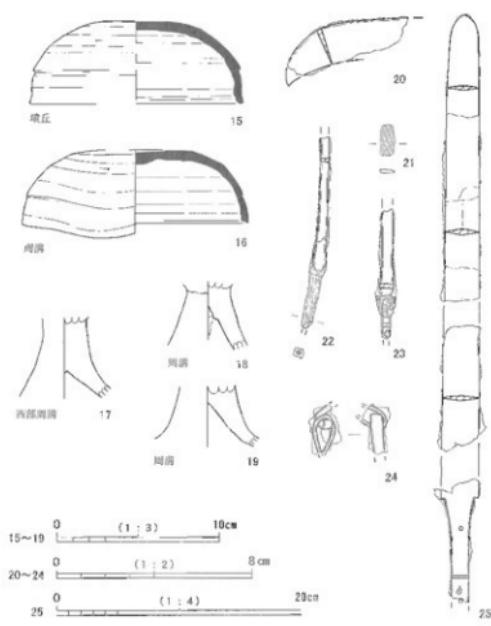
ここでは、網掛山1号墳に伴う遺物を報告する。周溝上層から出土した灰陶器について、4区出土の古代以降の遺物として後述する。

**土 器 (第29図)** 15は、墳丘上から出土した須恵器の壺蓋である。焼成はやや不良である。天井部は丸い形状を呈し、外面中位の稜を介して口縁部に至る。端部は厚く、内面の段には沈線化している部分がある。外面中位の稜は、明瞭に突出しているが、若干つぶれている部分もある。内面においては、全体に回転ナデ調整が施されているが、天井部と口縁部との接合痕が部分的に観察できる。16は、周溝出土の須恵器壺蓋である。焼成は良好であるが、歪みが著しい。端部内面の段は浅く、外面中位の稜は不明瞭である。また、内面において、天井部中央に粘土塊の痕跡が残っている。

以上のように、15と16は色調などの特徴が異なるものの、ともに端部・稜や内面調整において粗雑さを確認することができる。形態的特徴を含めて、概ね陶邑編年TK23～TK47型式期に併行する時期のもとの判断することができる。

17～19は、いずれも周溝から出土した高杯の脚部片である。17は、細く中実の脚柱部から裾部へと緩やかに開いていく。18・19の脚柱部は中実ではなく、裾部への開きも大きい。

**鉄 器 (第29図)** 20は、鎌の先端付近の破片であり、曲刃鎌であることがわかる。重量約4.5g、残存長約5.0cm、残存部での最大幅約1.5cmである。21は、鐵物の痕跡が認められる不明鐵片である。鐵鎌とともに出土している。22・23は、長頸鎌の頭部へ茎部の破片である。幅0.5cm以下の細長い頭部から、角闘を介して茎部に至る。茎部には矢柄と口巻きの一部が残存している。22は重量約2.7g、残存長約7.8cm、頭部残存長約5.3cm、23は重量3.0g、残存長約5.3cm、頭部残存長約3.5cmである。24は、鐵鎌など共に出土した鐵器片であり、重量約1.1gである。幅約0.5cm、厚さ約0.15cmの帯を曲げてついた円環部に、幅0.3cm弱の帯が通してある。形態からは吊金具の可能性が指摘できるが、出土位置は鐵劍から離れている。25は、鐵劍である。流土の影響を受けたためか、刃部の途中と茎尻が欠損している。残存部の総重量は約120.5gである。実測図では刃部長約40.0cmに復元しているが、出土状況図(第28図)の位置関係を高く評価するならば、10cmほど長くなる可能性もある。刃部は、両鍛造であり、わずかに稜を観察することができる。最大幅は約3.1cmである。茎部は、闇寄り部分において幅を狭め、中央へ戻側の部分では幅を変えずにのびる。茎部の残存長は約8.5cm、X線透過写真などによって、2つの目釘穴を確認することができる。また、柄の木質がわずかに残存する。



第29図 網掛山1号墳に伴う遺物

## 5. 綱掛山2号墳

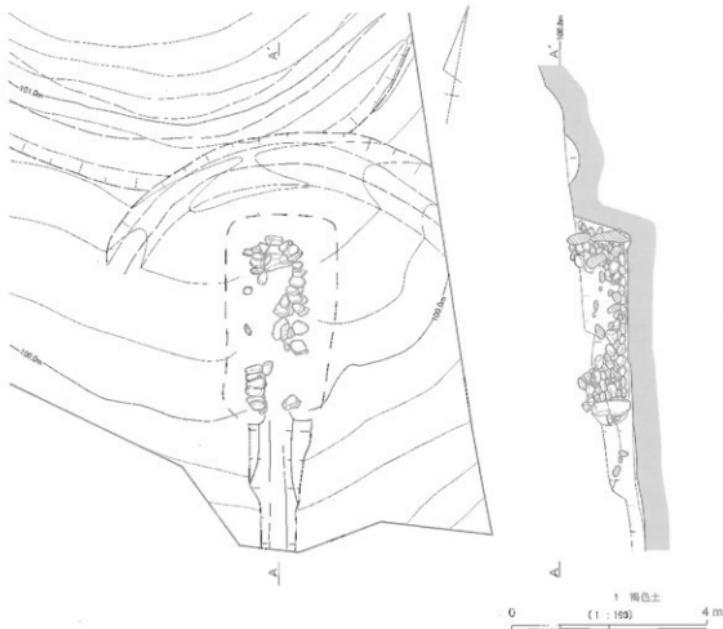
### (1) 墳丘

**立地・調査前状況（第26図）** 4区南東部に位置し、1号墳の南に隣接する。1号墳のある北側から南へと下る斜面に立地するが、その中でも比較的緩くなつた場所が選ばれている。古墳の南側・東側・西側の斜面は急傾斜になる。見晴しは南東方向が良い。

この古墳の存在は、以前より周知されていたわけではなく（森町史1998）、発掘前の地形において墳丘の高まりを観察することはできなかった。しかし、石室石材の一部が地上に露出していたため、発掘前に古墳の存在を予測することはできた。石室の検出状態によって、埋葬施設は盜掘・破壊を受けている可能性が高いと判断することができ、さらに、地滑りによって東側が数cm下がっていることが把握されている。また、墳丘全体が流土の影響を大きく受けていると推測される。

**周溝（第30図）** 表土を除去すると、墳丘の北側に弧を描く周溝が発見された。周溝が全周するかは不明であるが、検出した周溝の西端部の状況などから、斜面の崩落や流土の影響によって消失している部分があるのは明らかである。なお、検出した周溝は、1号墳の周溝の一部を壊している。

検出した周溝の幅は0.8～1.3m、深さは0.1～0.3mである。周溝底面は、地形に沿って傾斜しているが、顕著な凸凹はない。概ね一定の形状をもってめぐっていることが把握できる。覆土は褐色土の堆積



第30図 綱掛山2号墳 墳丘

で占められている。

**墳丘（第30図）** 周溝によって区画された墳丘は、平面円形を呈している。墳丘規模は、周溝底面内側（墳裾）と埋葬施設の形態によって径7～8mに復元することができる。残存する高さは、北部周溝底面からが約0.2m、西部周溝底面からが約0.3mである。

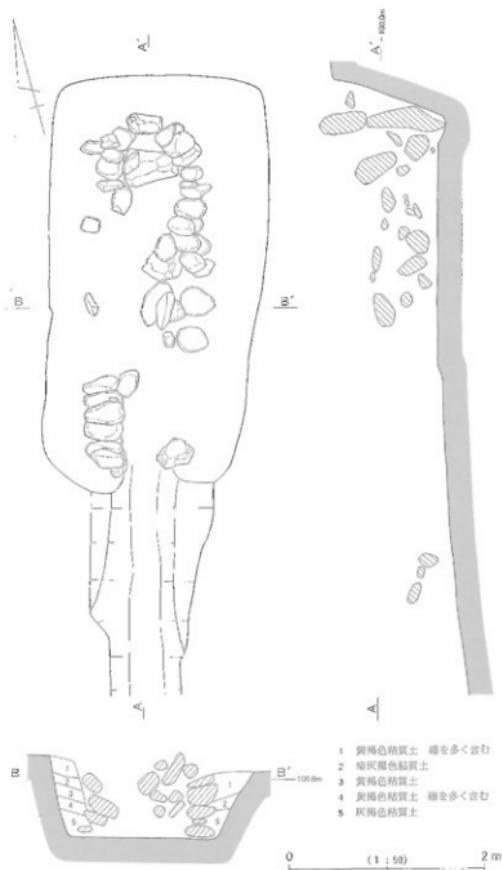
盛土は確認できなかった。斜面の流土や盗掘などによって消失したと推測できる。ただし、横穴式石室は墓坑を深く掘り込んで構築されており、盛土を要する高さは1.0m以下になると把握できる。墳丘の構築は、多くが斜面の地形を利用した部分であり、盛土は1.0mを超えない低いものであった可能性が考慮できる。

**遺物出土状況** 古墳の北側において、須恵器壺蓋片（第35図26）が出土している。縦年の位置から2号墳に伴う可能性が指摘できる。2号墳の墳丘・周溝から出土した遺物はない。

## （2）埋葬施設

網掛山2号墳の埋葬施設は、横穴式石室1基である。発掘前から石材の一部が露出していたが、表土を除去して墳丘を検出すると、石室壁体の上部や崩れた石材が現れた。さらに、石室内に表土・擾乱土が落ち込んでいることが明らかになり、それらを掘り下げるに、崩落した石材が多く確認された（第31図）。側壁石材のほかに、天井石であったと判断できる石材もある。

天井石や側壁の石材は、全てが発見されたわけではない。また、閉塞石は把握できなかった。床面においては、大きな破壊痕跡はないものの、土器が破片の状態で出土している。盗掘などを目的とした石室内の擾乱があることは明らかであると把握できる。本墳の横穴式石室は、残存する側壁などを検出し、さらに調査・解体を行うことによって以下のように把握することができた。



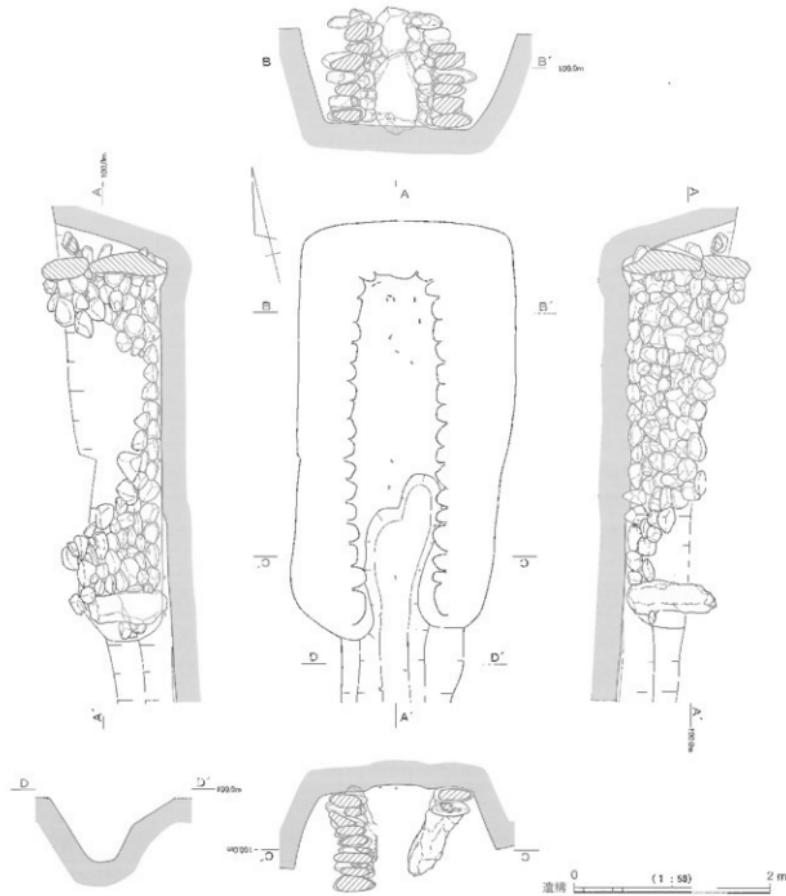
第31図 網掛山2号墳 横穴式石室検出状況

#### 4区の遺構と遺物

なお、石室内の記述において、北側を奥（奥寄り）、南側を前（手前）や玄門寄りとし、左右については東側を左、西側を右とする。

**墓道**（第30～32図） 石室の前端（立柱石のある玄門）から南方向へのびる墓道が検出されている。石室の主軸に沿って南に約2.7mの範囲を検出した（第30図）。調査区外は急斜面になるために、墓道は消失していると判断できる。

石室寄りの長さ約1.8mの範囲においては、幅が最大約1.3m、深さ最大0.6m強であり、上部と下部で権体の傾斜が異なる（第32図）。南寄りになると、石室寄りの上部に該当する部分がなくなり、下部にあ



第32図 綱掛山2号墳 横穴式石室展開図

たる部分だけが連続していくのがでいく。残念ながら、土層断面による墓道内の検討が行えていないため、上部と下部の違いが古墳築造当初の墓道の形態であるのか、上部が追葬や盗掘に伴う掘り返しであるのかは判断できない。ただし、いずれにしても、上部が検出された石室寄りの長さ約1.8mの範囲について、墳丘内にあった範囲である可能性を考慮することはできる。なお、墓道底面は石室内へと連続していく。その部分の長さは約1.5mであり、北端は床面へと立ち上がる。

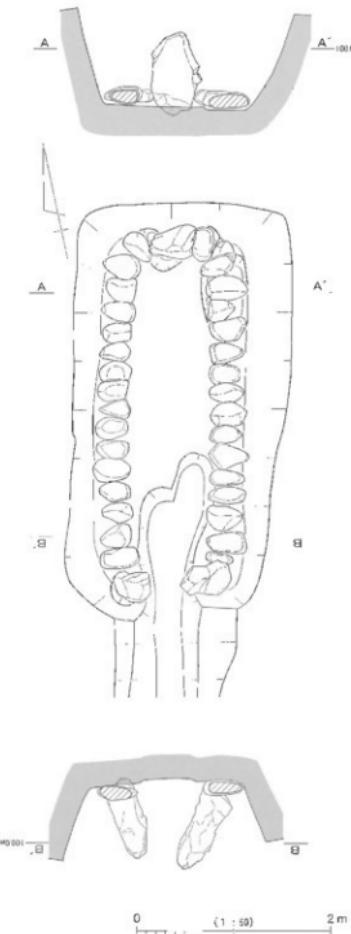
**墓坑（第33図）** 墓坑は、南北長約4.2m、最大幅2.2m強の規模であり、平面形は概ね長方形を呈する。奥側よりも前側の方が、左右の角が隅丸になる。

検出した深さは、奥側で1.0m強である。底面は、わずかに南に下る傾斜を伴うものの、概ね平坦であるといえる。ただし、先述したように玄門寄り約1.5mにおいては、墓道へ連続する部分が掘り込まれている。また、奥壁・立柱石や奥寄り左側壁の基底石の下において、凹部が検出されている。奥壁の下の凹部は比較的深く、奥壁の設置に伴うものと評価できるが、その他の凹部はわずかなものである。墓坑壁は、急傾斜で直線的に立ち上がる。石室構築に伴う凸凹などの痕跡はなかった。

**石室の形態（第32・33図）** 石室については、内部全体が盗掘・破壊の影響を受けていた。天井石と閉塞石は、原位置で検出されることがなかった。奥壁は残存しており、側壁も比較的良く残されていたが、天井石に伴って崩落した側壁石材もある。側壁が上部まで残っていたのは奥壁近辺だけであり、右側壁の中央部や左側壁の玄門寄りでは、下から1～2段だけの残存となっていた。また、左側の玄門立柱などは、内側に倒れかけていた。

玄室は、わずかに胴張り化した平面長方形を呈する。主軸はN-E約14°-E、主軸内法長3.5m強、最大内法幅0.8m強、奥壁寄りの内法幅約0.6m、玄門部内法幅約0.7mである。なお、この石室には石積みによってつくられる羨道が設けられていない。すなわち、玄門（開口部）立柱をもつ無羨道、無袖式の横穴式石室である。

**天井（第31・32図）** 天井は残されていなかったが、石室内の奥壁寄りにおいて、天井石であった可能性が指摘できる石材が発見されている（第31図）。最大長0.5m強の石材であり、これが天井石であったとするならば、天井の内



第33図 網掛山2号墳 横穴式石室の基底石

法幅（奥側）は0.5m以下であったと復元できる。

天井が載せられていた高さについては、残存する2段の奥壁の上に直接、もしくは小さめの石材1段程度を介して載せられていた可能性が高いと判断できる。したがって、奥壁寄りにおける内法高は、墓坑底面を床面とすると1.2m程度であったと復元することができる。

**壁体（第32・33図）** 奥壁は、主に2つの大きな石によって構成されている。下段の石は、高さ0.9m弱、最大幅0.5m強、厚さ約0.3mである。上段の石は、高さ約0.5m、最大幅約0.4m、厚さ0.2m強である。ともに平坦な面を石室内に向けて立てられている。奥壁の傾斜は概ね垂直である。なお、基底石の状態（第33図）をみると、奥壁下段の幅が狭いためか、その両側に側壁との隙間を埋めるような石材を確認することができる。

側壁は、主に0.2~0.4m程度の大きさの円礫による石積みによって構成されている。石の積み方は、小口積みを基本としている。このような石材の種類・大きさや積み方については、場所によって差異があるわけではなく、基底石も全く同じ特徴を伴う。壁体の傾きについては、崩落の影響も考慮する必要があるものの、非常にわずかな持ち送りが伴っていた可能性が指摘できる。

玄門には、左右に立柱石が用いられている。立柱石の高さは0.8~0.9mである。側壁に組み込まれており、石室内に突出することもない。

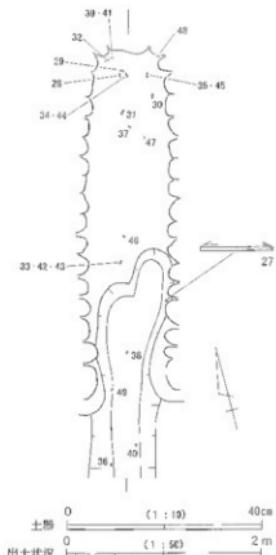
**裏込め（第31・32図）** 残存する側壁・奥壁の裏側（外側）では、粘性の強い土を主体とする裏込めを確認することができた。灰褐色や黄褐色の粘質土、地山の泥岩のブロック（礫）を含む黄褐色粘質土などが互層状になっていた。

なお、奥壁上段の裏側や玄門立柱石の墓道側において、側壁石材よりも小さな石が確認されている（第32図）。裏込め土に混入していた石ではあるが、奥壁や立柱石の設置などに必要な石材であった可能性も考慮しておく必要があると考える。

**床面・閉塞（第31・32図）** 床面については、墓坑の底面が平坦に検出されただけであり、床石は全く発見することができなかった。盗掘などに伴って消失した可能性も否定はできないが、本来より床石を用いていなかった可能性も考慮する必要がある。

閉塞についても、閉塞石を把握することはできなかった。石積みを伴う閉塞であったかは不明である。いずれにしても、閉塞すべき場所から鉄釘の破片が出土していることから、盗掘や破壊などに伴って閉塞が壊されている可能性が指摘できる。

**遺物出土状況（第34図）** 石室内から墓道にかけて、鉄釘（第35図28~49）が多く出土している。石室内の奥寄りに比較的多いことから、その付近にあった木棺に使用した釘であると判断できる。また、一部が墓道（石室の外）から出土していることについて、盗掘・破壊などに伴って床面が荒らされた可能性が指摘できる。鉄釘以外では、須恵器片数点が出土している。図化できたのは坏蓋片（第35図27）だけである。



第34図 綱掛山2号墳 石室内遺物出土状況

## (3) 網掛山2号墳に伴う遺物

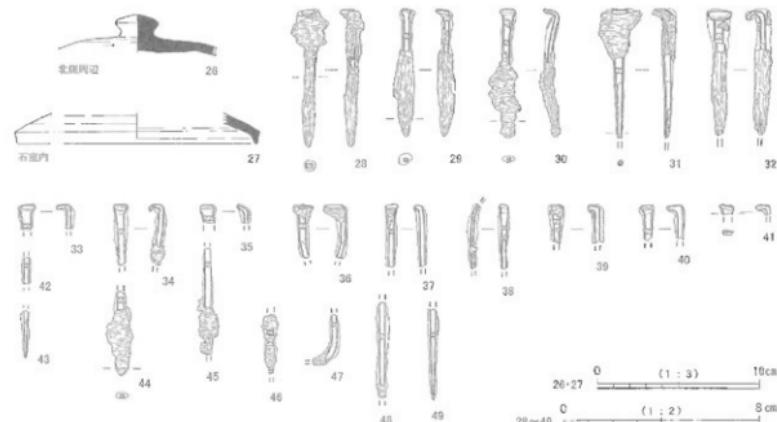
ここでは、網掛山2号墳に伴う遺物を報告する。

**土 器（第35図）** 26は、須恵器の壺蓋である。焼成はやや不良である。2号墳の北側、1号墳の墳丘上から出土しているが、高さのある宝珠形の摘みが付いており、8世紀代に位置づけができる可能性が高い。したがって、1号墳に伴う遺物とは評価し難く、むしろ2号墳に伴う土器である可能性を考慮することができる。27は、2号墳の石室内から出土した須恵器壺蓋（摘蓋）の端部片である。垂直に折れる罐部から、膨らみをもって天井部に至る。須恵器遼江編年のIV期末葉～V期（鈴木2004）の中に認められる特徴であり、7世紀末葉～8世紀代に位置づけることができる。

以上の土器の出土によって、7世紀末葉～8世紀代に網掛山2号墳における埋葬があったことがわかる。ただし、出土遺物の数が少ない（残りが悪い）こと、石室床面や閉塞の把握ができなかつたことなどから、追葬の有無については検討できない。確実に把握できる埋葬は1回であるが、それが初葬であるのか、追葬であるかを断定することも難しい。

**鉄 器（第35図）** 28～49は、石室～墓道にかけて出土した鉄釘である。残存状態の良い28～32について、長さは5.5cm前後で共通している。破片を含めて断面は全て方形であり、先端（図の下にした方の端）に向かって細くなる。頭部（図の上にした方の端）はL字に曲げられ、叩いて広げられている。細さや頭部の大きさなどに個体差はあるが、意図的に数種の釘を使い分けているとは把握できない。

これらの鉄釘は、木棺を構成する木板どうしを打ち付けたものであると推測される。28・29・31・32は、頭部寄りに釘に直交する木目、先端寄りに釘に平行する木目の木材片が付いている。木目の方向が異なる木材を鉄釘で打ち付けていることがわかる。37・39も同様である可能性が指摘できる。一方、30・34・44・45・46・48は28などと異なり、先端より直交する木目が付く。



第35図 網掛山2号墳に伴う遺物

## 6. 古代以降の遺物

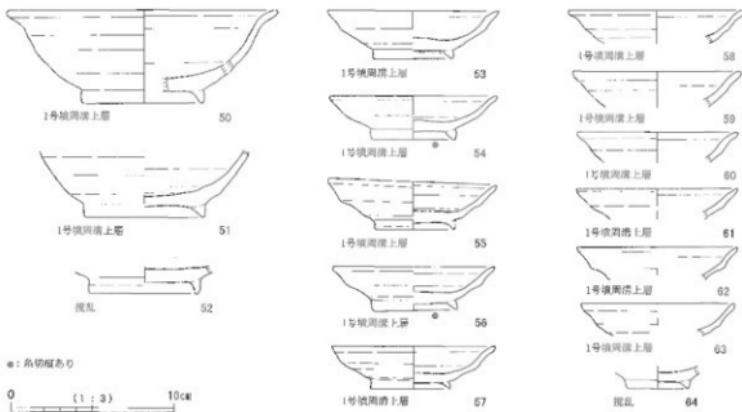
ここでは、4区から出土した遺物のうち、古墳群形成よりも後の時代の遺物について報告する。

**土 器(第36図)** 平安時代の灰釉陶器が攪乱や1号墳周溝の上層から出土している。50～52は碗である。50は、焼成が悪いために白色を呈しており、表面は摩滅している。高台は断面三角形であり、歪みや潰れがほとんどない。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。51は、50よりも焼成は良いが、やや表面がざらつく。高台は、断面三角形で潰れなどはほとんどない。52の高台は断面爪形を呈するが、厚さが一定していない。

53～57は、口縁部から底部・高台まで残存する小碗である。これらは、形態や大きさの特徴が類似している。高台は断面三角形で潰れは56に一部あるだけである。体部は直線的に開き、口縁部は明確に外反しながら立ち上がる。両者の境となる中位では、外面に屈折に近い変換部が形成されている。53・54・56は白灰色を呈し、口縁部・体部の内面には自然釉が付着、内面の底部と体部との境には重ね焼きの痕跡が残されている。55と57は暗青灰色を呈し、自然釉や重ね焼き痕は認められない。

58～63は、小碗の口縁部～体部の破片である。64は、小碗の底部片である。58と64は、53～57よりも黒色粒を多く含む胎土であり、同一個体である可能性が高い。自然釉の付着なども類似しており、口縁部から底部までの内面全体に自然釉が多く付着していることがわかる。59は、他よりも器壁が厚く、砂粒が多く荒い胎土を用いている。さらに、口縁部の外反が弱い。60は、59ほどではないが、52～57に比べて器壁がやや厚く、体部と口縁部との境が曖昧になる。62は55に類似しており、61は53、63は54に近い特徴を伴う。

胎土などの特徴から、50を除く大半が東遠江産の灰釉陶器であると判断できる。その形態的特徴などについては、灰釉陶器の最終段階である概ね11世紀後半に位置づけできるもの（松井1989など）が主体であると把握できる。

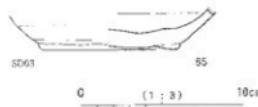


第36図 4区出土の古代以降の遺物

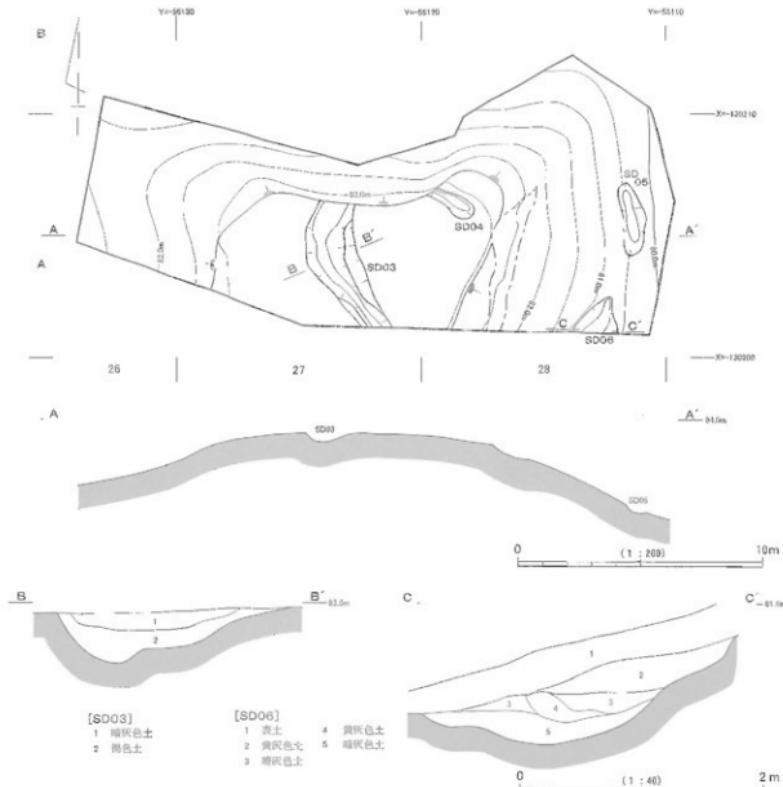
## 第4節 5区の遺構と遺物

**遺構**（第38図） 丘陵上平坦面に2条、東側斜面に2条の溝を検出した（SD03～SD06）。いずれも、不整形・不安定な形態を呈しており、人為的に設けられたものではなく、自然流路などの可能性が考慮される。出土遺物から、SD03は鎌倉時代の溝であると把握できる。

**遺物**（第37図） SD03から山茶碗の底部片（65）が出土している。胎土などの特徴から尾張地域のものである可能性が高く、比較的大きな底部に低く潰れた高台が付く特徴などから、概ね12世紀後葉頃（赤羽・中野1994）2型式期に位置づけることができる。



第37図 5区出土遺物



第38図 5区全体図

## 遺物一覧表

### 参考文献

- 佐藤由紀男・荻野谷正宏・榎原和大 2002 「遠江・駿河地域『弥生土器の様式と編年 東海編』」 木耳社
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『森町田丘城の遺跡』
- 静岡県考古学会 1998 『繩文時代中期前半の東海系土器群』 第5回東海考古学フォーラム  
2001 『静岡県の横穴式石室』
- 鈴木敏則 1996 「遠江・駿河〈後期〉」『YAY!』 弥生土器を語る会
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有志古窯』 浜松市教育委員会
- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」」『中世常滑焼をもつて』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 森町史編さん委員会 1998 『森町史』 資料編 1

第3表 綱掛山古墳群の遺物一覧表

#### 土器類表

番号	神社名	御版番号	出土位置	種類	部位	残存率 (%)	高さ (cm)	直径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調 (外見)	色調 (内面)	備考
1	14	4	1号墳南側(SD01)	弥生土器	全体	83	13.3	11.8	9.5	5.5	淡黄(2.5Y7/4)	淡黄(2.5Y7/4)	底部打火
2	14	4	1号墳南側(SD01)	弥生土器	全体	90	22.2	17.4	12.5	7.1	淡黄(2.5Y7/4)	淡黄(2.5Y7/4)	底部打火
3	14	4	1号墳南側(SD01)	弥生土器	全体	—	—	—	(6.2)	—	淡(5Y7/6)	淡(5Y7/6)	—
4	14	—	1号墳南側	弥生土器	全体	79	—	—	—	11.0	黄(10YR5/6)	黄(10YR5/6)	—
5	25	25	SB06	縦土器	全体	5	—	(29.9)	—	—	赤褐色(5Y2R4/6)	赤褐色(5Y2R4/6)	—
6	25	25	SB06	縦土器	全体	—	—	—	—	—	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	—
7	25	25	SB13	弥生土器	全体	80	—	(5.4)	—	—	に赤(10YR5/4)	に赤(10YR5/4)	—
8	25	25	SB20	弥生土器	全体	70	—	—	—	—	褐(5YR6/6)	褐(5YR6/6)	—
9	25	25	SB04	弥生土器	全体	—	—	—	—	—	に赤(7.5YR5/4)	に赤(7.5YR5/4)	—
10	25	25	SB25	弥生土器	全体	25	—	—	—	6.2	に赤(7.5YR5/4)	に赤(7.5YR5/4)	—
11	—	—	—	—	全体	—	—	—	—	—	褐(5YR6/6)	褐(5YR6/6)	—
15	29	25	1号墳南側	無底器	全体	80	5.1	13.2	13.2	—	灰オリーブ(7.5Y5/2)	灰(7Y5/2)	—
16	29	25	1号墳南側	無底器	全体	50	4.5	(13.0)	(13.0)	—	灰(5Y5/1)	灰(4Y5/1)	—
17	29	25	1号墳南側(SD06)	土器	全体	80	—	—	—	—	褐(5Y6/6)	に赤(10YR5/4)	赤(5Y6/6)
18	29	25	1号墳南側	土器	全体	60	—	—	—	—	褐(2.5YR6/6)	褐(2.5YR6/6)	—
19	29	25	1号墳南側	土器	全体	60	—	—	—	—	褐(2.5YR6/6)	褐(2.5YR6/6)	—
23~25	—	—	(例表: 有志古窯品)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	35	26	2号墳周溝	無底器	全体	49	—	—	—	—	灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	—
27	35	26	2号墳周溝内	無底器	全体	5	—	—	—	—	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	—
28~29	—	—	(例表: 有志古窯品)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
30	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	口	45	(5.7)	(16.5)	(16.5)	(7.4)	淡黄(2.5YR3/3)	淡黄(2.5YR3/3)	—
51	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	口	45	—	—	—	—	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	—
52	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	全体	—	—	—	—	—	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	—
53	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	30	2.9	(10.5)	(10.5)	4.9	灰白(5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	—
54	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	全体	80	2.7	10.2	10.2	5.2	灰白(5Y7/1)	新白(5Y7/1)	赤切痕
55	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	65	3.0	(11.3)	(11.3)	5.4	灰(5Y6/1)	灰(2.5Y6/1)	—
56	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	全体	65	2.7	(14.9)	(14.9)	5.1	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	赤切痕
57	36	26	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	70	2.6	10.0	10.0	4.9	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	—
58	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	口	20	(10.5)	(10.5)	—	—	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	—
59	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	35	(10.3)	(10.3)	—	—	灰(2.5Y7/1)	灰(2.5Y7/1)	—
60	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	20	(9.8)	(9.8)	—	—	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	—
61	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	20	(9.8)	(9.8)	—	—	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	—
62	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	25	(9.8)	(9.8)	—	—	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	—
63	36	—	1号墳南側上部	灰陶輪唇器	小瓶	30	(9.0)	(9.0)	—	—	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	—
64	36	26	—	灰陶輪唇器	小瓶	30	—	—	—	—	灰灰(2.5Y6/1)	灰灰(2.5Y6/1)	—
65	37	26	SB03	山形瓶	全体	62	—	—	—	—	灰(2.5Y6/2)	灰(2.5Y6/2)	毛皮状

( ) は残存量

#### 石器類表

番号	神社名	御版番号	出土位置	種類	石種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	欠損	備考
11	25	25	怪形鉗	打刃石斧	黒曜石玄武岩	19.1	8.2	3.5	612.9	なし	表面加工
12	25	25	怪形鉗	打刃石斧	赤色石英岩	9.2	9.4	2.5	130.2	なし	—
13	25	25	怪形鉗	打刃石斧	赤色石英岩	6.7	2.8	1.7	68.9	なし	怪形加工石斧、刃部に挫傷
14	25	25	怪形鉗	打刃石斧	板岩灰色斑状雲母片岩	4.9	2.1	0.6	7.8	なし	—

#### 鉄製品一覧表

番号	神社名	御版番号	出土位置	種類	石種	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	重量 (g)	備考				
20	29	25	1号墳周溝	鍔	32	35	26	2号墳石室内	鍔	0.4	0.24			
25	29	25	1号墳周溝	鍔	1.2	0.20	33	25	2号墳石室内	鍔	1.1	0.20		
22	29	25	1号墳周溝	鍔	7.8	34	35	26	2号墳石室内	鍔	2.0	0.21		
23	29	25	1号墳周溝	鍔	5.3	35	36	2号墳石室内	鍔	0.8	0.24			
24	29	25	1号墳周溝	鍔	5.1	3.1	3.06	36	35	2号墳石室内	鍔	1.4	1.23	
25	29	25	1号墳周溝	鍔	43.9	12.0	4.9	37	35	26	2号墳石室内	鍔	2.5	0.26
26	35	26	2号墳石室内	鍔	5.6	38	36	2号墳石室内	鍔	2.6	0.62	—		
29	35	26	2号墳石室内	鍔	5.2	2.95	39	35	26	2号墳石室内	鍔	1.5	0.55	
30	35	26	2号墳石室内	鍔	6.3	2.64	43	35	26	2号墳石室内	鍔	1.5	0.56	
31	35	26	2号墳石室内	鍔	5.3	2.99	43	35	26	2号墳石室内	鍔	3.7	0.82	

## 第5章 片瀬遺跡

### 第1節 概 要

#### 1. 基本土層と地形

**基本土層** 本遺跡は、堆積よりも崩落・流土が顕著な丘陵上に立地しており、そこに弥生時代の集落跡と中世遺構群が展開している。基本土層については、理論的に把握するならば以下のようになるが、実際には、Ⅱ層とⅢ層との区別が判然としていない場合が多い。また、中世遺構群に伴う造成などは顕著でなく、明確にⅢ層を把握することはできなかった。発掘調査は、I～IV層を掘削・除去し、V層上面を遺構検出面として実施している。

- I : 表土・擾乱
- II : 中世以降の堆積・崩落・流土層
- III : 中世遺構群に伴う整地・造成など
- IV : 中世山城より前の堆積・崩落・流土層
- V : 地山（主に丘陵の基盤層）

I層は、主に灰褐色～褐色を基調とする土層や砂質土層である。表土とした中の多くは、丘陵の崩落・流土層（II・IV層）のうち、表層に近いために根などの影響を多く受けたものと判断することができる。黒色土の堆積はほとんどない。表土のほかには、丘陵上を行き来するために設けられた山道による擾乱が確認されている。

II・IV層は、褐色～暗赤褐色の砂質土層・土層を主とするが、丘陵を構成する地山（V層）の内容によって砂礫や泥岩粒が混在する場合がある。丘陵上では表土（I層）との見分けが難しく、同一層として把握されている場合が多い。斜面部では崩落・流土層として確認できる部分があり、北部の西側斜面（M5・6グリッド付近）では、遺構検出面（V層上面）において崩落・流土の痕跡が検出されている。また、北部の中央（K7～M9グリッド）や南斜面際（K7～K10グリッド）では、断層が東西に横断しており、崩落土が入り込んだ断面V字の地割れを検出することができた（第42図）。

V層は、丘陵を構成する基盤層であり、明黄～灰色の砂層・砂質土層・白色の泥岩層・河原石による礫層がある。丘陵はこれらの層が互層となって構成されるが、断層の影響もあって単純化はできない。大半においては、砂層もしくは砂質土層が検出されている。礫層はI5グリッドやM5グリッドの斜面部、泥岩層はSD03（J6～I7グリッド）の底面付近やK11グリッドやD8グリッドといった斜面下方において確認することができた。

**地形の概要（第39・40図）** 片瀬遺跡が立地する丘陵は、北部山岳地帯から一宮川流域へと南にのびる尾根を中心筋とする。東西に派生する尾根は短く、丘陵全体の東西幅は概ね250m前後に限られる。

丘陵上の平坦面は、中心筋の尾根にのみ形成されている。その東西幅は最大でも50m程度であり、極端に幅狭になって平坦面が途切れる部分も多い。尾根の東西は急斜面となる部分が大半であり、崖になっている部分も存在する。なお、丘陵が泥岩層・礫層・砂質層で構成されており、地割れ・地滑りや崩落・流土が多かったと想定することができる。実際に、検出した地形や遺構などに痕跡を確認することができている（第42図など）。一方、若干の擾乱はあるものの、大きな造成はない。検出地形は遺跡形成時よりも丘陵上部が低くなり、尾根幅が狭まっている可能性が指摘できるが、基本的な地形の特徴は残

## 概要

されていると推測できる。

以上から、広い範囲に形成されるような大規模集落が存在したとは考え難い。しかし、断続的に南北に連なる丘陵上平坦面において、何らかの営みがあった可能性を予測することができる。

今回の調査は、南北に長い丘陵の中央を貫く工事範囲内を対象とする。その範囲での丘陵上の標高は約82~91m、周囲の水田面の標高が約40mであるので、比高は約40~50mである。

## 2. 調査区および遺構・遺物

**調査区（第41図）** 第2章第2節2でも述べたが、片瀬遺跡（片瀬城跡）については、1995年に現ゴルフ場の範囲（遺跡の北部）を森町教育委員会が発掘調査している（第1次調査）。今回の調査（本書で報告する調査）は、片瀬遺跡の2回目の発掘調査（第2次調査）ということになる。

調査区は、丘陵の中央部を東西に横断する南北幅100m強の工事範囲内（第5図）において、遺構・遺物の存在が指摘できる範囲に設定している。丘陵上については、確認調査によって全域に遺構・遺物が分布していることが把握されたことから、全てを調査区域内とした。遺構・遺物の分布は、地形的特徴や調査結果などから、調査区より北および南に広がるものと把握できる。

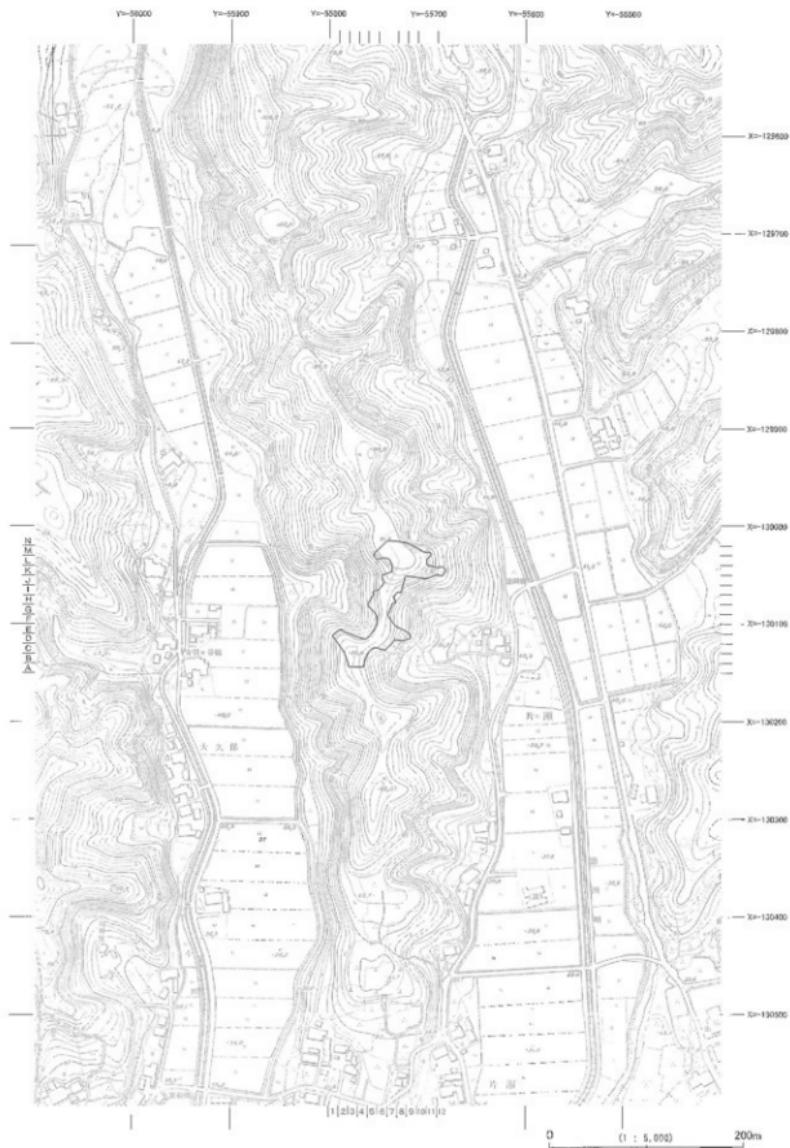
一方、山城（片瀬城）の存在が指摘されていることから、調査区の範囲を丘陵上だけではなく、東西斜面の上方を含めて設定し、さらに、東西に派生する尾根（K11グリッド付近・D8グリッド付近・D1グリッド付近）に関連施設が設けられた可能性が考慮されることから、それらも含めて設定した。ただし、以前（第3図）に継続とされていた部分については、発掘前測量・現況観察（第40図）によって斜面崩落の痕跡であると把握できることから、調査区の範囲から除外した。

設定した調査区は、南北方向に約130mと長く、地形的特徴から北部・中央部・南部に区分することができる。北部は、調査区外を含めて比較的広い平坦面を伴う。平坦面の幅は約15mである。また、その標高は約91mであり、中央部に比べて8mほど高くなっている。中央部は、細長くのびる尾根があり、平坦面の幅は5~8mと狭い。南部は、中央部から鞍部を介して南東に連結する。調査区外を含めて幅10m前後の平坦面が広がり、中央部に比べてわずかに高くなる。

**弥生時代の遺構と遺物（第41~47図）** 検出遺構の中で最も多いのが竪穴住居跡である。29軒が調査区全体に広く分布するが、中央部に住居跡のない区域があり、北半住居跡群と南半住居跡群に二分して捉えることができる。弥生時代中期後葉～後期前葉を主とする時期の土器が出土しており、さらに、石器の出土が認められる。磨製石鎌について、北部と中央・南部とでは出土鎌の形態に違いがあり、北部においては、未製品が束の状態で出土するなどの生産に関わる状況が認められている。

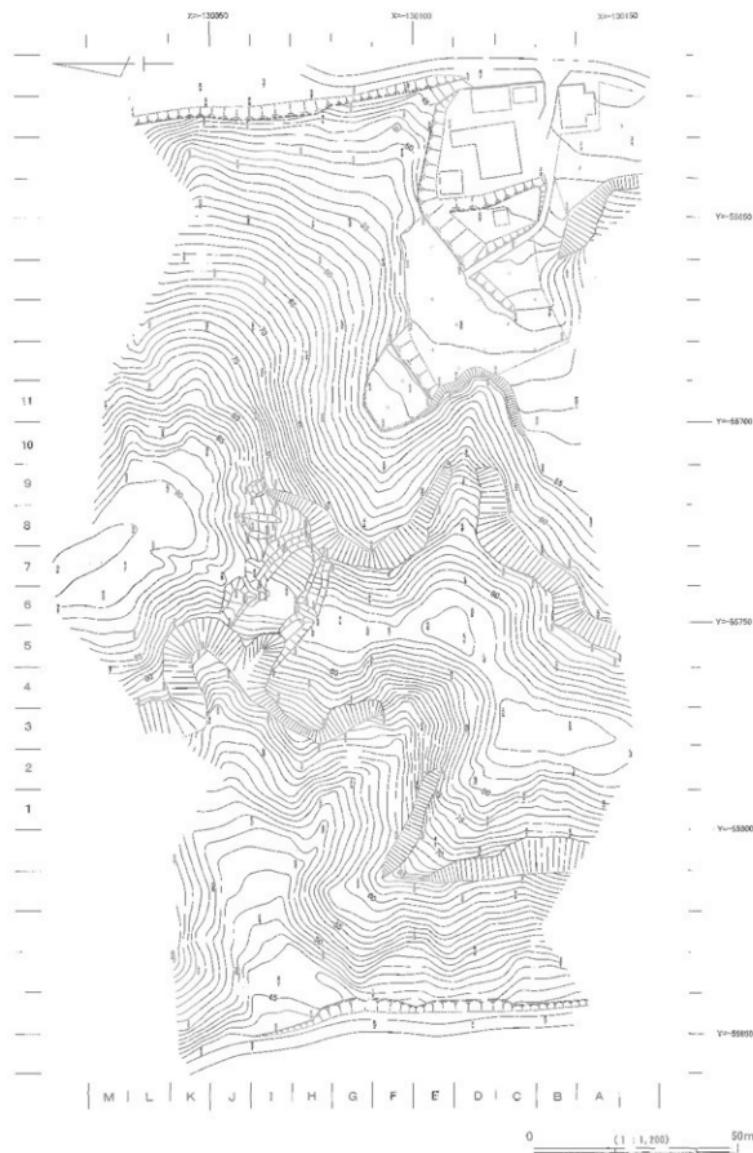
北部の南東縁に方形周溝墓1基（1号周溝墓）、南部に3基の方形周溝墓（2~4号周溝墓）を検出することができた。方台部中央の理葬施設については、1号周溝墓に1基（SF12）、2号周溝墓に1基（SF29）が把握されたが、残存状態は良くない。一方、1号周溝墓周縁部と3号周溝墓周縁部においては、残存状態の良い土器棺墓（SF11・SF34）が検出されている。方形周溝墓のない調査区中央部（G5グリッド付近）では、土坑墓・土器棺墓群が発見されている。遺構の特徴や數・配置などから、方形周溝墓とは異なる墓群であったと把握できる。以上の墓・墓群について、竪穴住居跡を切る場合が多く、出土した供獻土器や土器棺の多くは弥生時代後期中葉～末葉に位置づけできる。住居群に比べて後出的に墓群が営まれた可能性が高いと判断できる。なお、副葬品の出土はなかった。

G5グリッド付近では落し穴2基（SF13・SF16）、D6グリッド付近では掘立柱建物跡（SH03）が検出されており、さらに、尾根の鞍部を横断する溝（SD03・SD07・SD08）が3ヶ所で発見されている。落し穴は、切り合い関係によって土坑墓・土器棺墓群より古い時期の遺構であると判断できる。ただし、

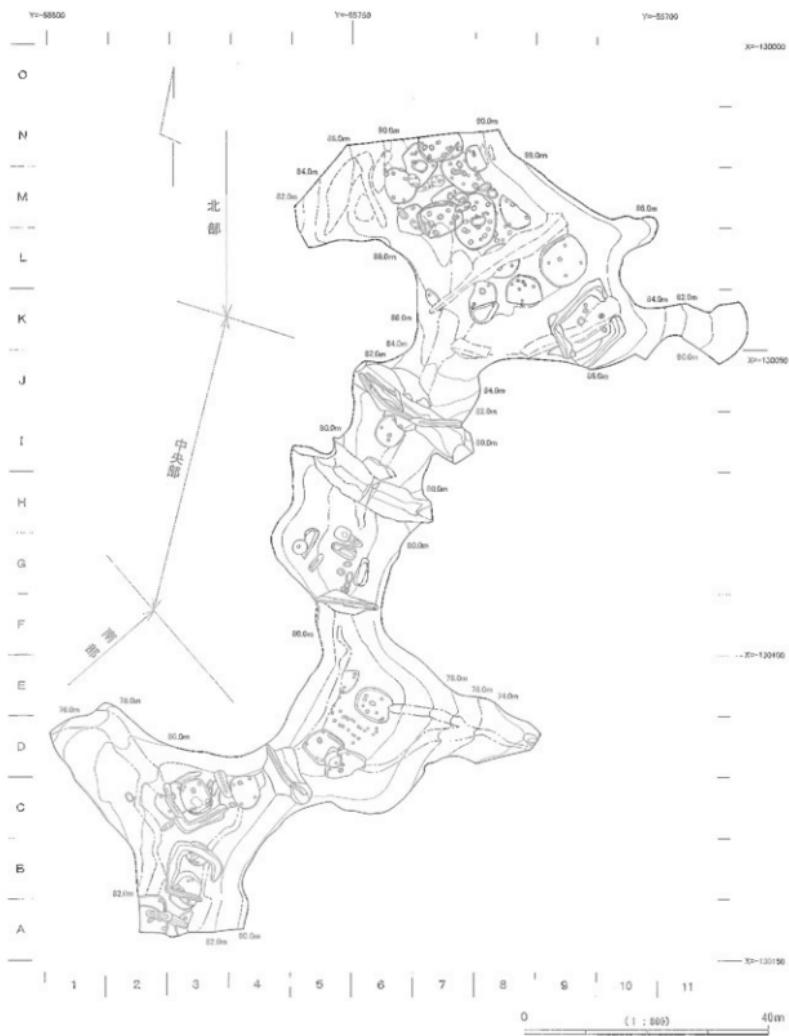


第39図 片瀬遺跡 調査区・グリッド配置図

概要



第40図 片瀬遺跡 調査範囲の発掘前測量図



第41図 片瀬遺跡 調査区全体図

## 概要

出土遺物がほとんどなく、竪穴住居跡などと同時期であるかは明確ではない。掘立柱建物跡は、その性格や配置関係から竪穴住居跡と同時期の可能性が高いと推測できる。3条の溝については、竪穴住居跡よりも新しい時期の土器が出土しているが、いずれも中～上層の出土遺物である。遺構の配置や切り合ひ関係からは、住居群が営まれた時期に設けられた可能性を評価することもできる。

この他にも弥生時代の可能性が高い土坑などが各所で検出されており、調査区の全域において弥生時代中～後期の集落（居住域・墓域）の営みがあったことがわかる。

古代以降の遺構と遺物（第41～47図） 調査区北部において、暗赤褐色の覆土を伴う土坑が7基発見されている（SF01・SF04～09）。切り合ひ関係や出土遺物（常滑焼の壺片など）から、概ね15世紀前半以降の遺構であると判断できる。同じ場所には縦柱の掘立柱建物跡2棟（SH01・SH02）があり、これらも中世遺構である可能性が指摘できる。さらに、周辺の住居跡の覆土上層から鐵鎌が出土している。

北部南縁や中央部・南部では、表土・流土層や遺構覆土上層から須恵器・灰釉陶器・山茶碗の破片が出土している。いずれも少數の出土である。

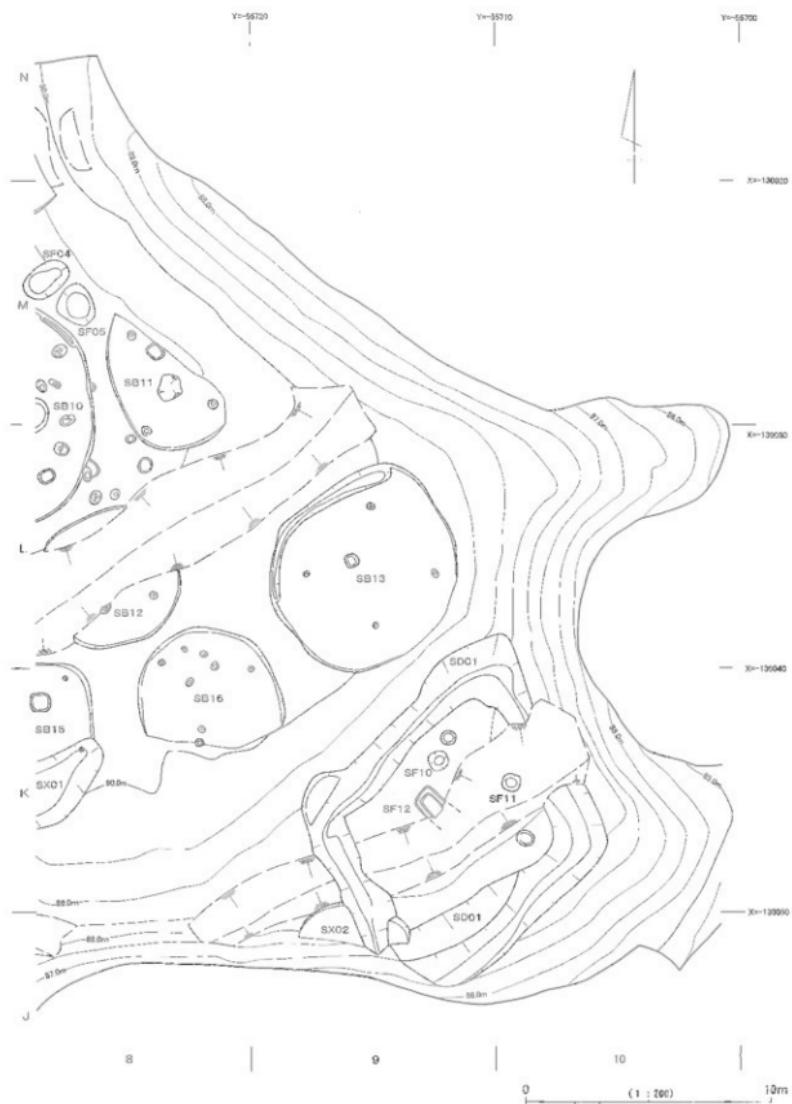


第42図 北部の地形と断層・地滑り痕

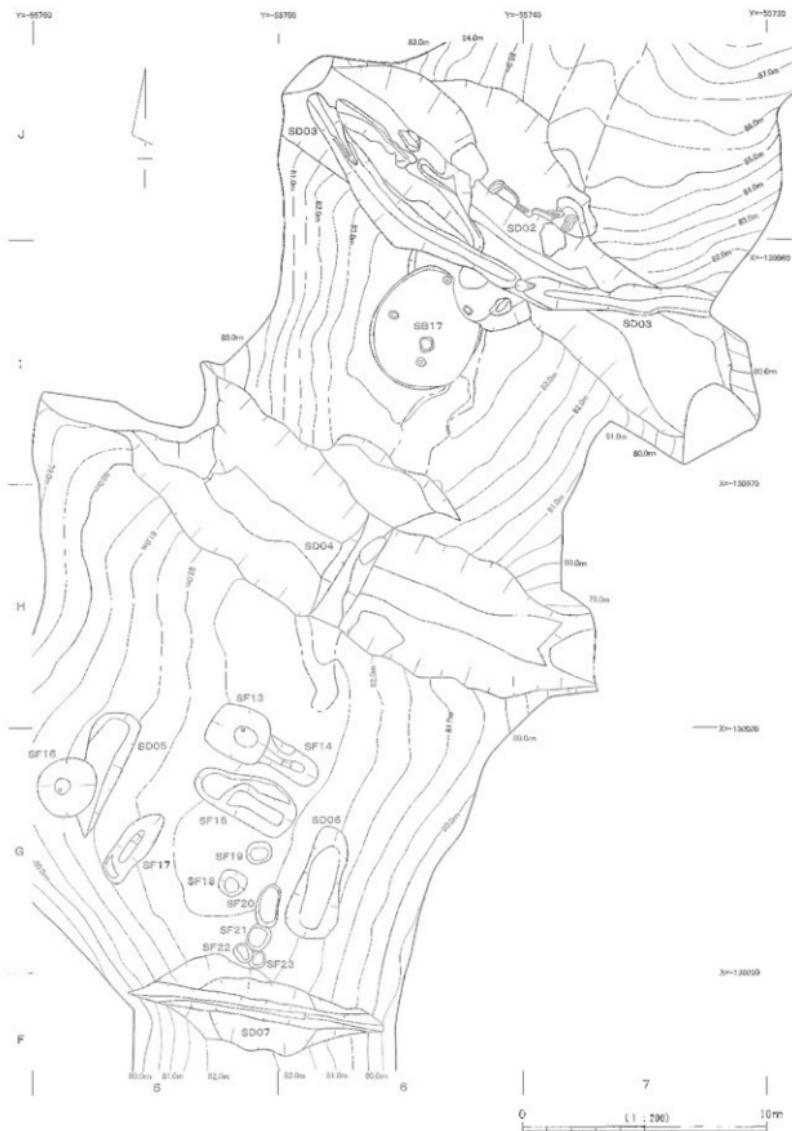


第43図 遺構配置図 1

概要

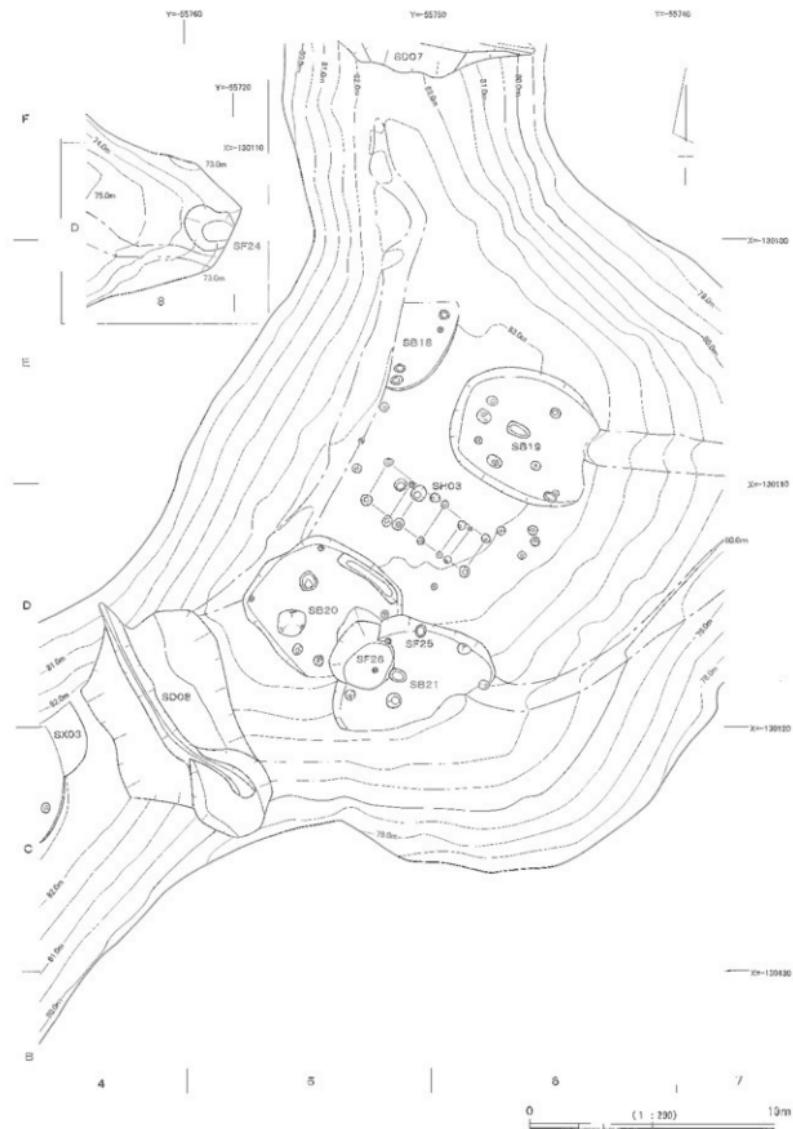


第44図 遺構配置図2

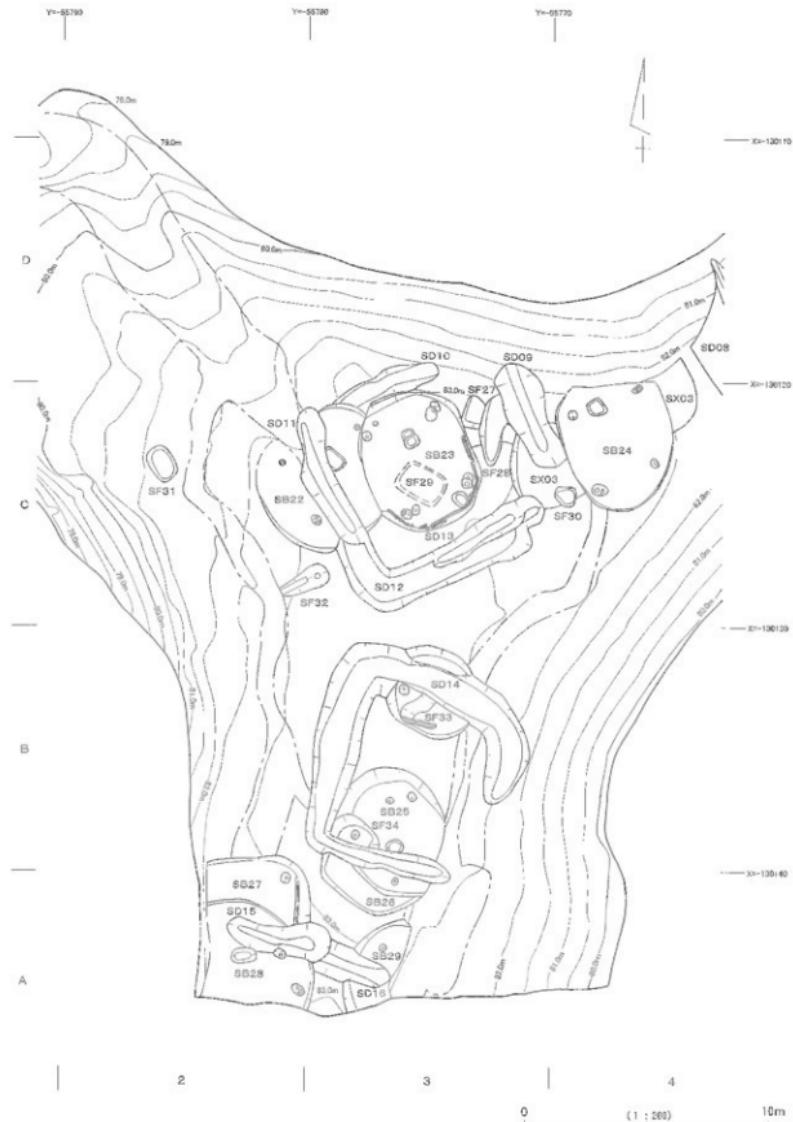


第45図 遺構配置図3

概要



第46図 遺構配置図4



第47図 遺構配置図 5

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物1(北部)

### 1. 北部における弥生時代の遺構・遺物

検出遺構 穫穴住居跡16軒 (SB01～SB16)

方形周溝墓1基 (1号周溝墓) …木棺墓1基 (SF12)

土器棺墓1基 (SF11)

円形土坑1基 (SF10)

土坑2基 (SF02・SF03)

不明遺構2基 (SX01・SX02) ※SX02は竪穴住居跡の可能性あり

※SF01・SF04～09、SH01・02は古代以降の遺構として本章第5節で報告する。

出土遺物 掘載遺物

竪穴住居跡…弥生土器各種多數

有孔磨製石鐵2、磨製石鐵未製品等41、磨耗礫1、台石1

方形周溝墓…弥生土器各種多數、土器棺

遺構外…弥生土器各種多數、石鍤1

### 2. 竪穴住居跡

SB01 (第48・49図) 調査区北縁のN7グリッドに位置し、丘陵上平坦面の中央に立地する。SB02と大きく重なった状態で検出されており、土層断面や検出過程における検討によって、SB02を切ってSB01がつくられていることが判明している。

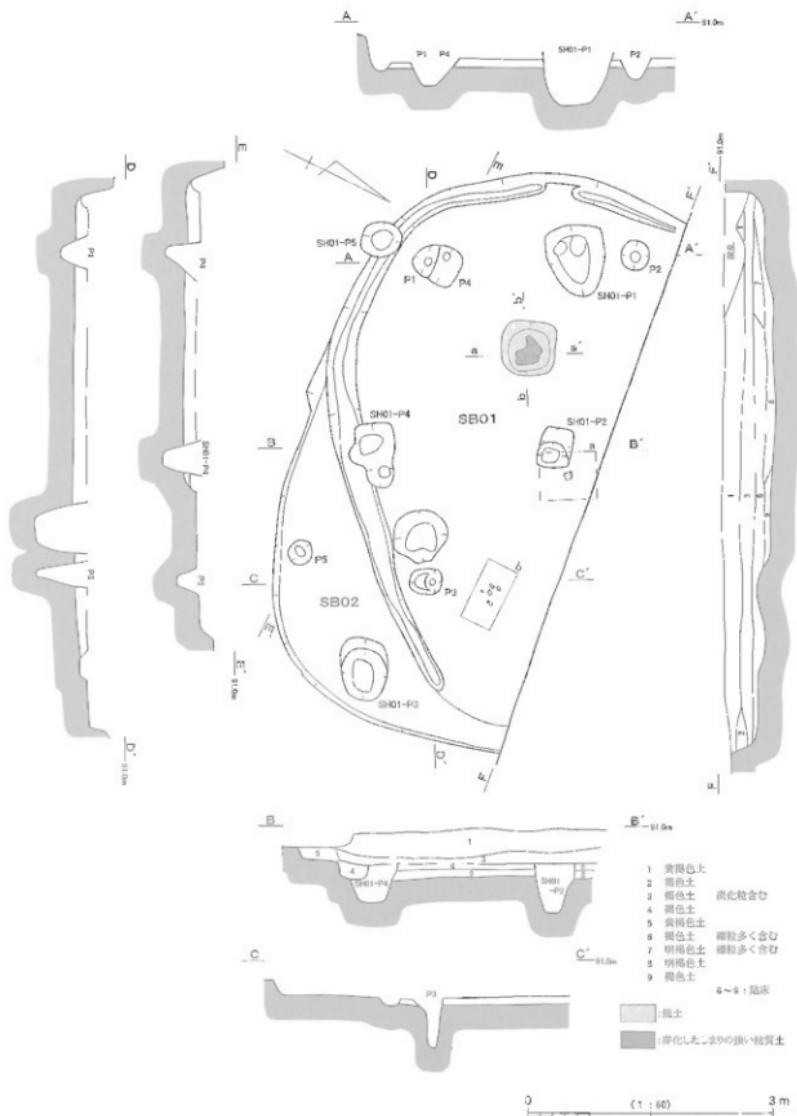
平面形は東西に長い梢円形を呈するが、南側辺は直線的である。北～東縁部は調査区外となるために不明である。平面規模は5.0m×7.0m前後に復元できるが、本来の深さは上部の削平のために不明である。掘方の底面は凹凸が多く、西側に深くなる。

貼床 (6～9層) が把握でき、床面上において壁溝・柱穴・炉跡を検出することができた。柱穴はP1～P3が該当すると判断でき、4本の柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。しかし、その際に復元される方形配置は、住居内の西寄りにかたより、主軸方向もずれる。北東部が調査区外となることから、4本柱の配置とは異なる可能性も考慮する必要がある。炉跡は中央部の西寄りに位置する。掘り込みは一辺約0.6mの平面方形であり、底面に焼土が認められ、その上に赤化した硬い粘質土が板状に検出された (以下、赤化粘質土板)。赤化粘質土板の高さと床面の高さが概ね一致する。

遺物は、覆土から弥生土器片が多く出土している。しかし、出土土器の中に新古の差 (弥生時代後期前葉～末葉) があり、重複する中世建物跡 (SH01) に伴う整地等が推測されることなどから、外からの土器片の混在が考慮される。床面上において出土した甕 (第73図1～18) は摩滅が著しい。

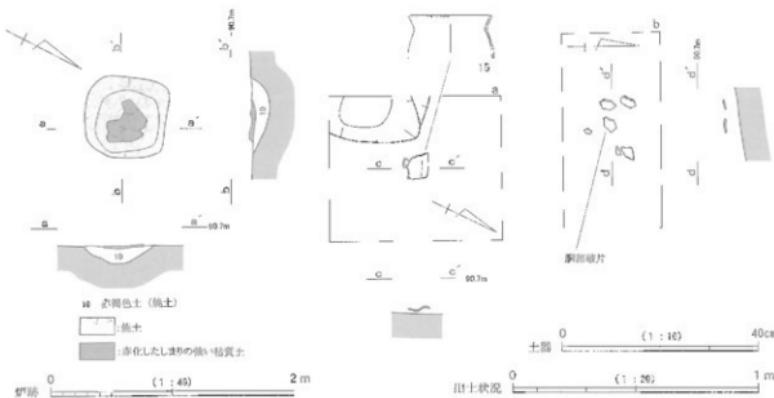
SB02 (第48図) 調査区北縁のN7グリッドに位置し、丘陵上平坦面の中央に立地する。SB01と大きく重なっている。南東部の掘方と柱穴2基を検出することができたが、SB01に切られたことによって大半が失われていた。

平面形は東西に長く、隅丸長方形に近い梢円形に復元することができる。上部の削平のために検出は浅い。掘方による検出となつたが、残存する覆土 (5層) は貼床の土である可能性もある。壁溝と炉跡

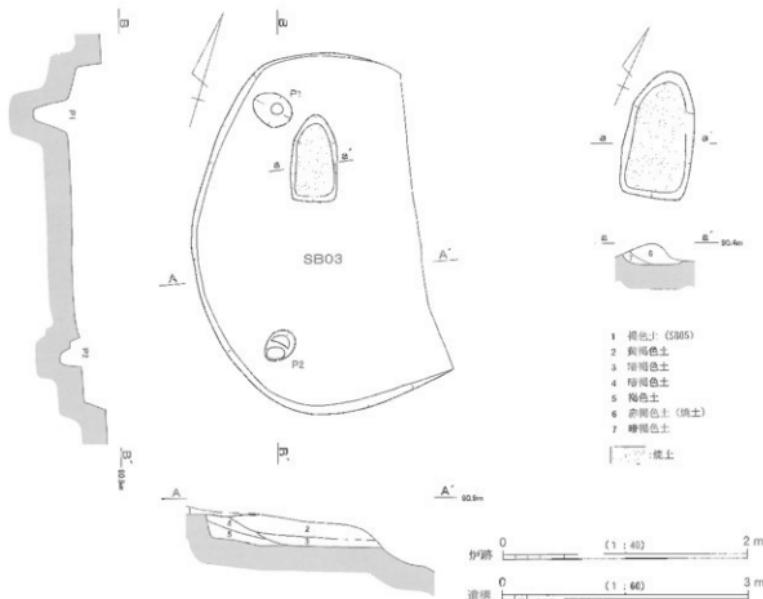


第48図 SB01・02①

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第49図 SB01・02②



第50図 SB03

は把握できていない。柱穴は南縁部に配置された2基（P4・5）を検出した。4本の柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。

出土遺物は少ないが、切り合い関係からSB01より古いことは明らかである。さらに、SB01出土土器の中に新古の差が認められ、古相の土器（第73図1・2など）がSB02からの混在であるとするならば、SB02は弥生時代中期後葉～後期前葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断することができる。

**SB03（第50図）** N7グリッド南東隅付近に位置する。丘陵上平坦面の東縁部に立地しており、東部が斜面の崩落・流土によって失われている。また、西部においてSB05と重なるが、土層断面によってSB03が埋没した上にSB05がつくられたことがわかる。

平面形は楕円形である。南北規模は4.5m弱であるが、東西方向の規模は不明である。長軸が南北であるとするならば、本遺跡の中では小型に分類され、円形に近い可能性もある。検出は掘方によるものであり、土層断面においても貼床と壁溝は把握できなかった。掘方の底面は平坦であり、炉跡が検出されていることから、本来より貼床を厚く施さなかつた可能性が指摘できる。炉跡は、南北1.0m強×東西0.6m弱の掘り込みに焼土が残されていた。柱穴は、西縁部に配置された2基（P1・2）を検出した。

遺物は、覆土から弥生土器片が出土している（第73図19～21）。少數の遺物から住居跡の時期を特定することは難しいが、弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づけできる可能性が指摘できる。

**SB04（第51図）** M7グリッド北西隅付近に位置する。丘陵上平坦面の西寄りに立地しており、西部が斜面の流土によって失われている。また、北東部はSB01によって切られ、中央部は中世遺構であるSF01によって大きく壠されている。南東部のSB06との切り合い関係は不明である。

平面形は、北東～南西方向に長い楕円形であるが、長側辺がやや直線的である。検出は掘方によるが、住居跡全体が流土などの影響を多く受けしており、覆土の検討が良好にできなかつたためである。掘方の底面が水平・平坦ではないこと、出土遺物が非常に少ないとことから、貼床が施されていた可能性を考慮する必要もある。壁溝の有無についても、掘方による検出のために把握できなかつた。柱穴は4基（P1～4）を検出することができた。住居の平面形に合わせて長方形に配置されている。なお、住居跡の西側辺に張り出す部分がある。地滑りや流土による変形であるかもしれないが、P5・6を柱穴とする別の住居跡が重なっている可能性も考慮することができる。

中央西寄りの覆土中においては、焼土の集中が検出されている。掘り込みを伴う炉跡として把握することはできなかつたが、住居跡が掘方による検出であったこと、覆土の多くが流土の影響を受けていることなどを考慮すると、床面において設けられた炉跡の残存である可能性も否定できない。

出土遺物は非常に少なく、図化・掲載できたのは壺の底部片1点（第73図22）だけである。住居跡の時期については、切り合い関係によって弥生時代後期中葉以前である可能性が指摘できる。

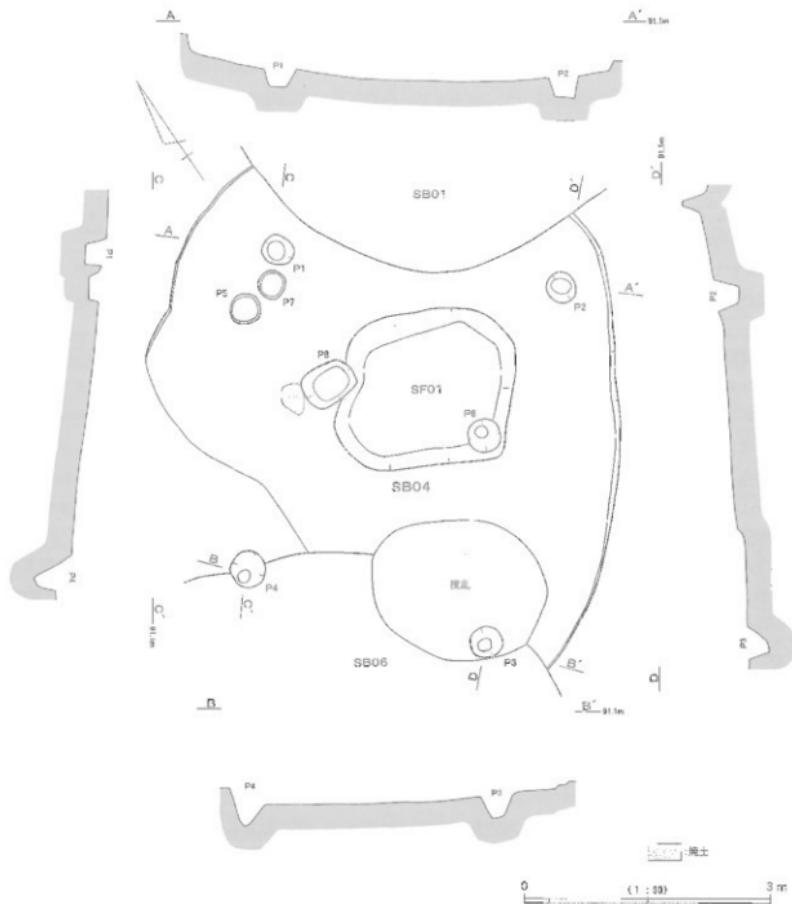
**SB05（第52図）** M7グリッド北東隅付近に位置する。丘陵上平坦面の東寄りに立地しており、北東寄りが流土によって失われている。北東部においてSB03と重なるが、SB05はSB03が埋没した上につくられている。また、北部ではSB02と重なるが、検出が浅かつたために、土層などから切り合い関係を検討することができなかつた。

平面形は、北西～南東方向に長い楕円形である。検出は浅い掘方によるが、その底面は概ね水平・平坦であり、ある程度の遺物が覆土中から出土していることから、貼床のほとんどない住居であった可能性が指摘できる。壁溝は検出されなかつた。柱穴は、方形に配置された4本柱であったとするならば、P1～4が該当することになる。しかし、全体に中央に寄りすぎてしまう。P6やP8を含めた6本程度の配置を指摘することもできる。P9は、柱穴としては大きく深い掘り込みであり、その位置から炉跡の可能性が評価できるが、焼土の検出はなかつた。また、南東部にも比較的大きな掘り込み（P10）が検出され、その位置から貯蔵穴である可能性が指摘できるが、深さは0.3m足らずであり、出土遺物もない。なお、

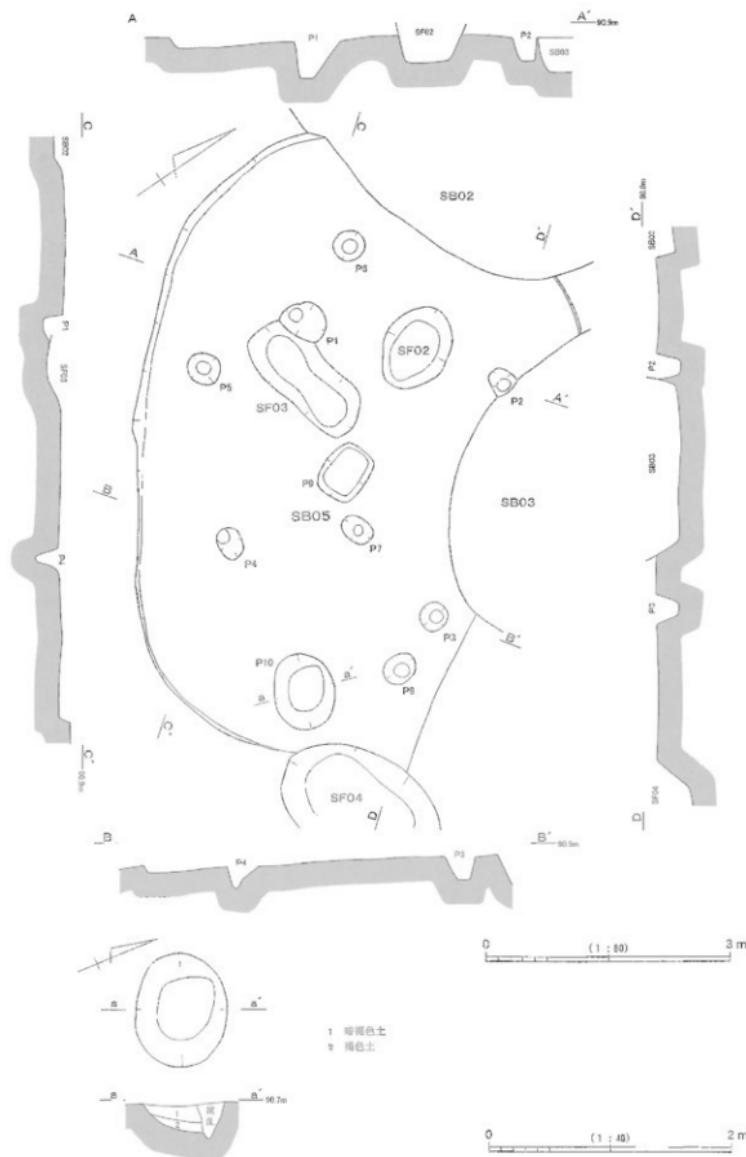
## 弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

SF02・03については、検出状況および出土遺物（第73図23）によってSB05廃絶・埋没後の土坑であると判断した。本節4（第72図）で報告する。

出土遺物は比較的少ないものの、壺の口縁部や底部といった固型化された土器片（第73図24～29）がいくつかあり、弥生時代中期後葉～後期前葉の堅穴住居跡である可能性が高いと判断できる。



第51回 SB04



第52図 SB05

SB06 (第53図) M6グリッド東部に位置する。丘陵上平坦面の西側緩斜面に立地しており、地滑りや流土によって西部は失われている。

平面形は、円形に近い梢円形を呈する。検出は掘方によるものであり、浅い。住居跡全体が地滑りや流土の影響を多く受けており、貼床・壁溝の有無は検討できなかった。炉跡について、住居跡中央に焼土の集中が検出されたが、掘り込みは把握できなかった。貼床上からの掘り込みがあった可能性は否定できない。一方、西部では掘方底面上に土器が出土している。貼床はそれほど厚く施されではなく、中央部付近など部分的であった可能性も指摘できる。柱穴は、4基 (P1~4) を検出することができた。長方形の配置を指摘できるが、住居の平面形に対して東西方向の柱間が狭い。

出土遺物は多くないが、西部の底面において壺の下半 (第73図31) と台付甕の胴部下半 (第73図32) が並んで出土している。上半は地滑り・流土の影響で失われた可能性が高い。これら出土遺物から弥生時代中期後葉～後期前葉の堅穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB07 (第54図) M7グリッドに位置する。丘陵上平坦面の中央に立地するが、上部が大きく削平されしており、検出の深さはわずかであった。また、多くの遺構と重なり、検出できたのは北部の掘方と柱穴4基 (P1~4) だけであった。

平面形は、南西～北東に長い梢円形に復元できる。検出は浅く、掘方による。貼床・壁溝の有無は明確にできないが、掘方底面は水平・平坦であり、覆土から若干の遺物が出土していることから、貼床を厚く施すことはなかったと推測できる。4基の柱穴 (P1~4) は、住居の四隅寄りに方形に配置されているが、平行四辺形の配置になってしまっている。

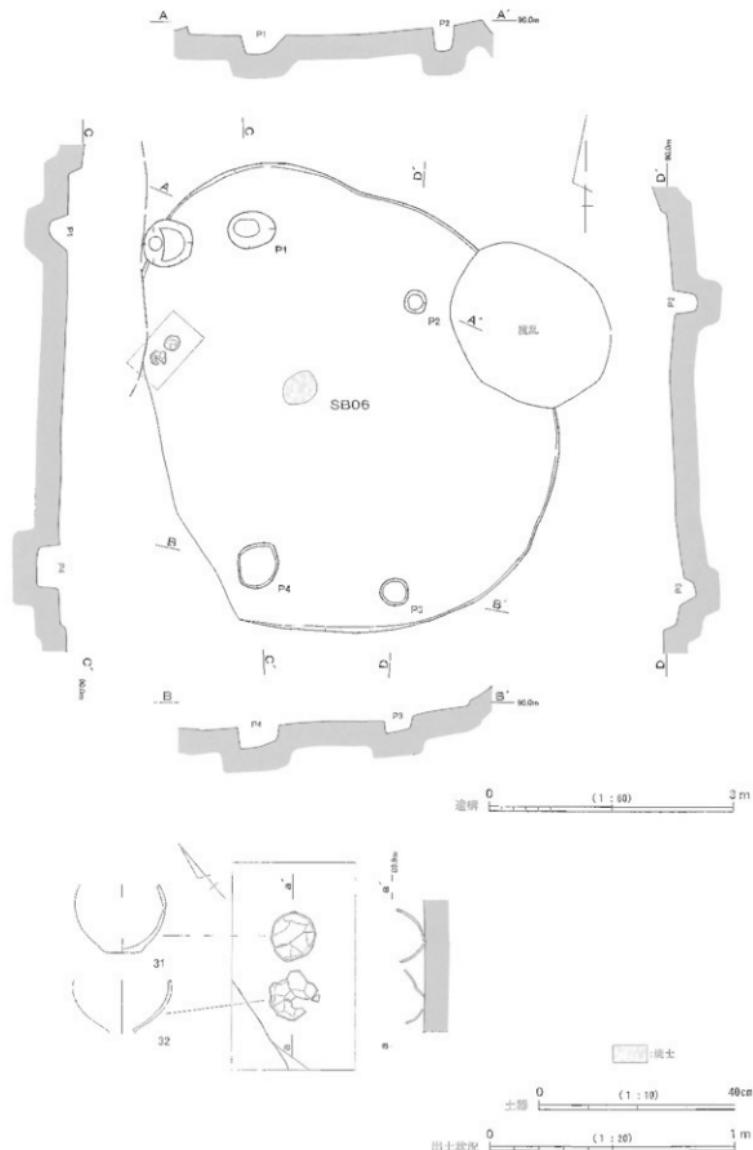
SB07はSB05・09・10と重なるが、土層などによる切り合い関係の検討はできなかった。SB09の上層で検出された焼土 (第54図と第56図の両方に図示) がSB07の炉跡であるとするならば、SB07はSB09廃絶・埋没後につくられたことになる。しかし、焼土はSB09の焼失に伴う可能性がある。一方、SB07の柱穴と判断したP1・P2は、SB09の掘方底面において検出されている。その発見・検出経緯を評価するならば、SB07はSB09より古い遺構であることになる。出土土器 (第74図33~39) においても、SB09との混在が多く、時期の詳細について明確にすることが難しい。全般的にみれば、弥生時代中期後葉～後期前葉の堅穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB08 (第55図) M6グリッド南東隅付近に位置する。丘陵上平坦面の西側緩斜面に立地しており、崩落・流土によって西部と南部が失われている。東部ではSB09と重なっている。検出状況からはSB09がSB08を切っている可能性が指摘できるが、土層による検討はできていない。

平面形は、隅丸 (長) 方形である可能性が指摘できるが、詳細は不明である。検出は浅く、掘方による。全体に流土などの影響を強く受けており、貼床・壁溝の有無については検討できなかった。掘方底面に顕著な凸凹はなく、ある程度の数の遺物が覆土から出土していることから、貼床を厚く施すことはなかったと推測できる。炉跡の検出はなかった。小穴1基 (P1) を北東隅に検出したが、住居の隅に寄りすぎている。柱穴であるかは明確にできない。

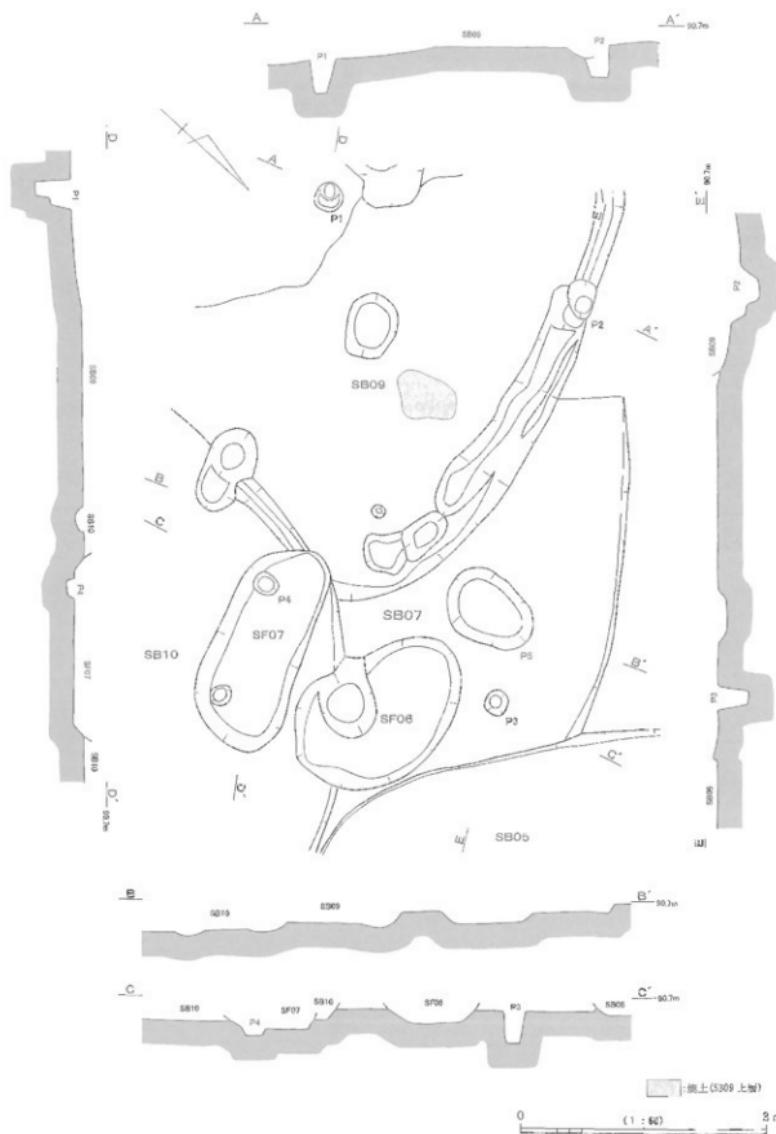
覆土中から弥生土器の破片が出土している (第74図40~47)、流土などによるSB09との混在 (47) もあるが、弥生時代後期前葉～中葉の堅穴住居跡である可能性が高いと判断することはできる。

SB09 (第56~58図) M7グリッド南部からL7グリッド北部にかけて位置する。丘陵上平坦面の西寄りに位置し、南西縁が流土によって失われているが、概ね全体を把握することができる。SB08・10を切り、SB07も切っている可能性が高い。なお、南西部は地滑りの影響を大きく受けており、掘方および覆土が南西方向にずれ落ち、貼床が崩れてしまっていた。覆土の断面においても、地滑りによって崩れ乱れた土層 (1・2層) が底面に達していることがわかる。また、炭化材も粉碎されたのか、良好に検出することができなかった。

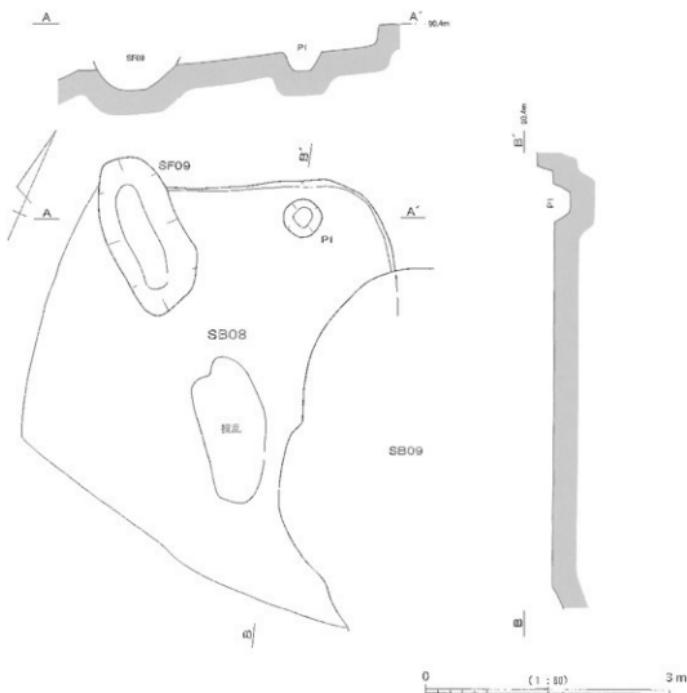


第53図 SB06

弥生時代の遺構と遺物 I (北部)



第54図 SB07



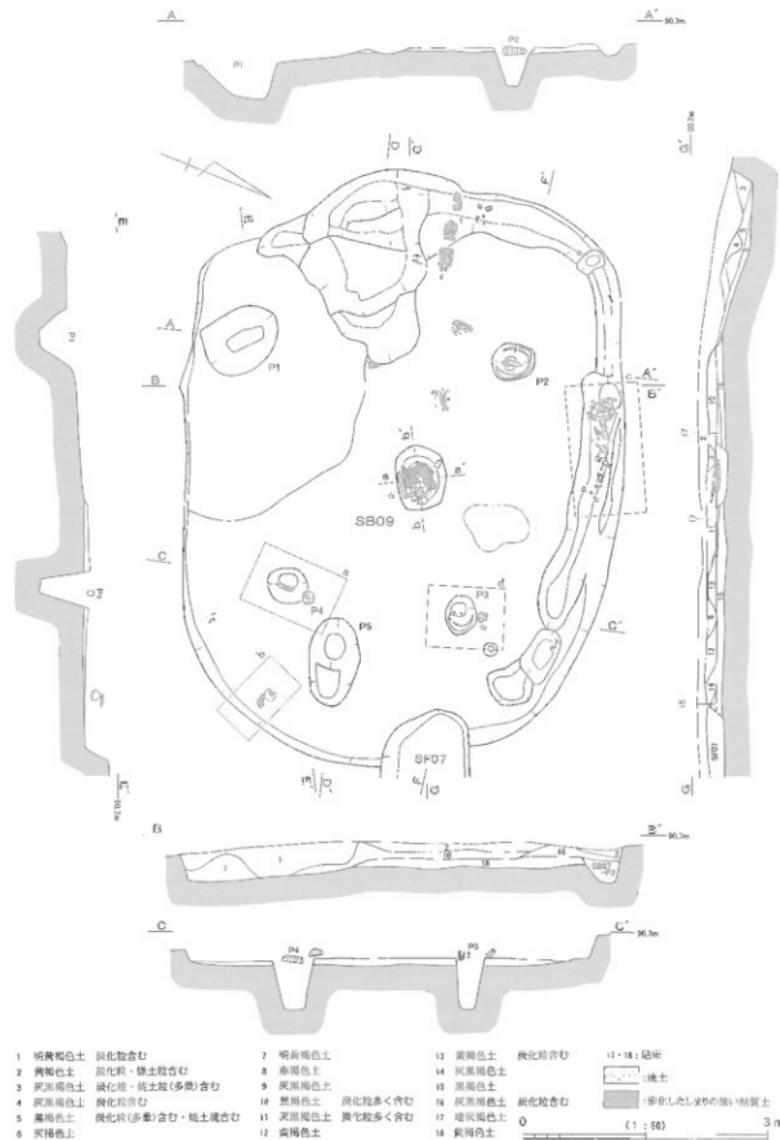
第55図 SB08

平面形は東西に長く、東部に若干の丸味を伴う隅丸長方形である。掘方は、底面の凸凹が周縁部に多い。床面は、貼床（17・18層）が全体に施されており、概ね水平・平坦である。壁溝は、北縁から西縁にかけて認められた。その幅は比較的広く、0.2m前後の場所と0.4mを超える場所がある。柱穴は4基（P1～4）あり、4本柱が長方形に配置されたことがわかる。P1は他より大きいが、地滑りの影響によって変形・拡大した可能性がある。

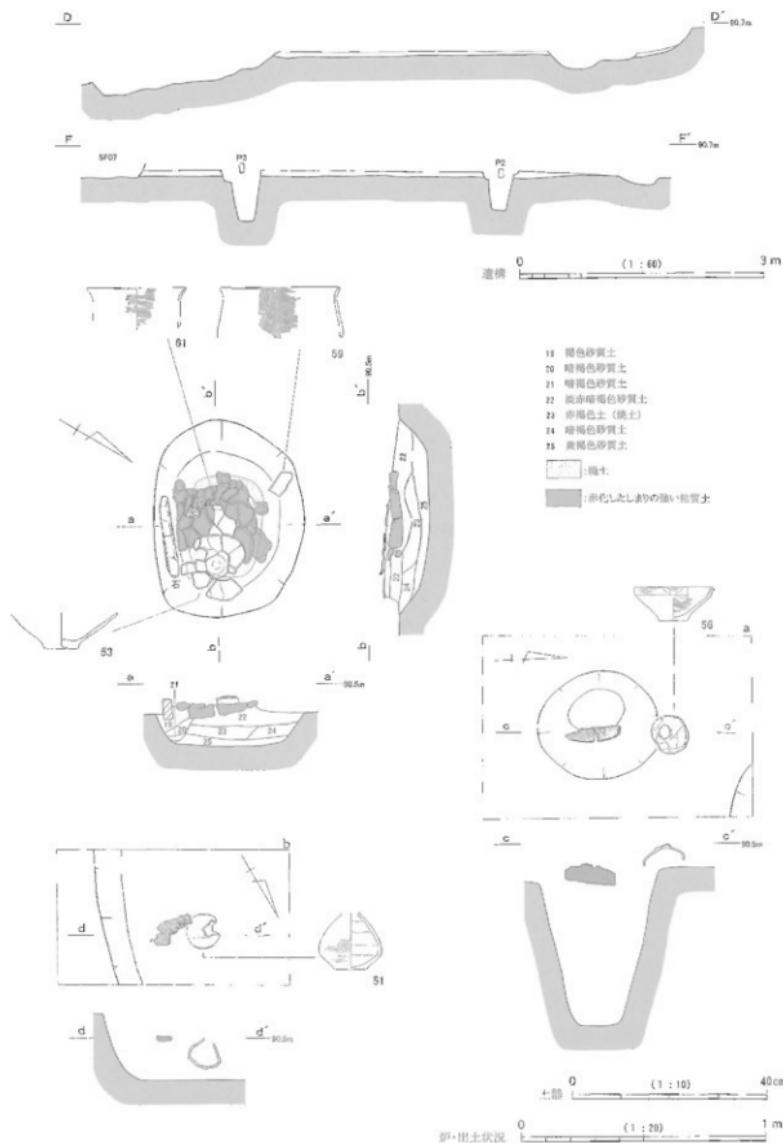
南東部では、約0.6m×1.1mの梢円形の土坑（P5）が検出された。床面からの深さは0.2mに満たないが、その位置から貯蔵穴の可能性を考慮することもできる。西部においては、階段状の落ち込みが検出されている。調査の過程では、地滑りの影響による変形の可能性も考慮された。しかし、P1周辺とは異なり、崩落による乱れた覆土（1・2層）が底面まで達しているわけではない。炭化材の残存も認められることから、ある程度は本来の形状を反映しているものと把握できる。機能としては、出入口もしくは排水に関する可能性を考慮することができる。

炉跡は、住居のほぼ中央に残されていた。掘り込みは、住居の平面形と同様に東西に長い梢円形を呈し、規模は約0.6m×0.8m、深さは床面から約0.15mである。下層においては、約0.3m×0.4mの長方形の範囲に厚さ5cm前後の焼土層が認められた。一方、上層（上面）においては、赤化した硬い粘質土が板状に検出され（以下、赤化粘質土板）、その南縁には板状の石が横倒しに立てられていた。赤化粘質

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

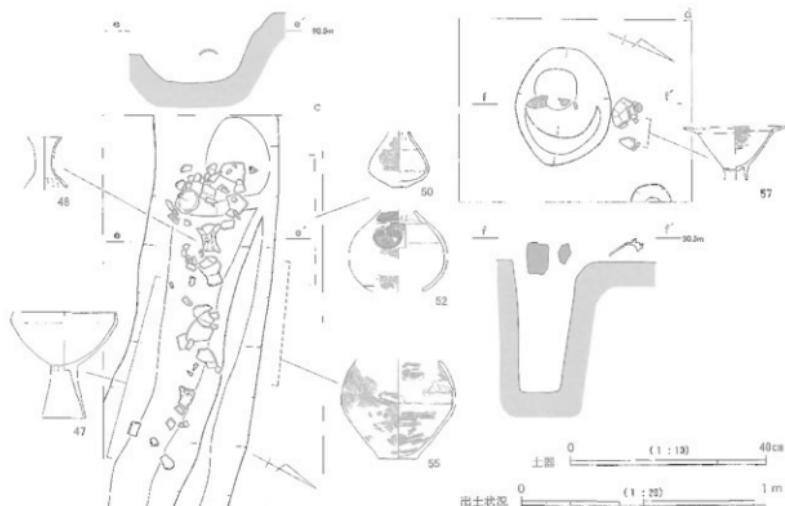


第56図 SB09①



第57図 SB09(2)

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



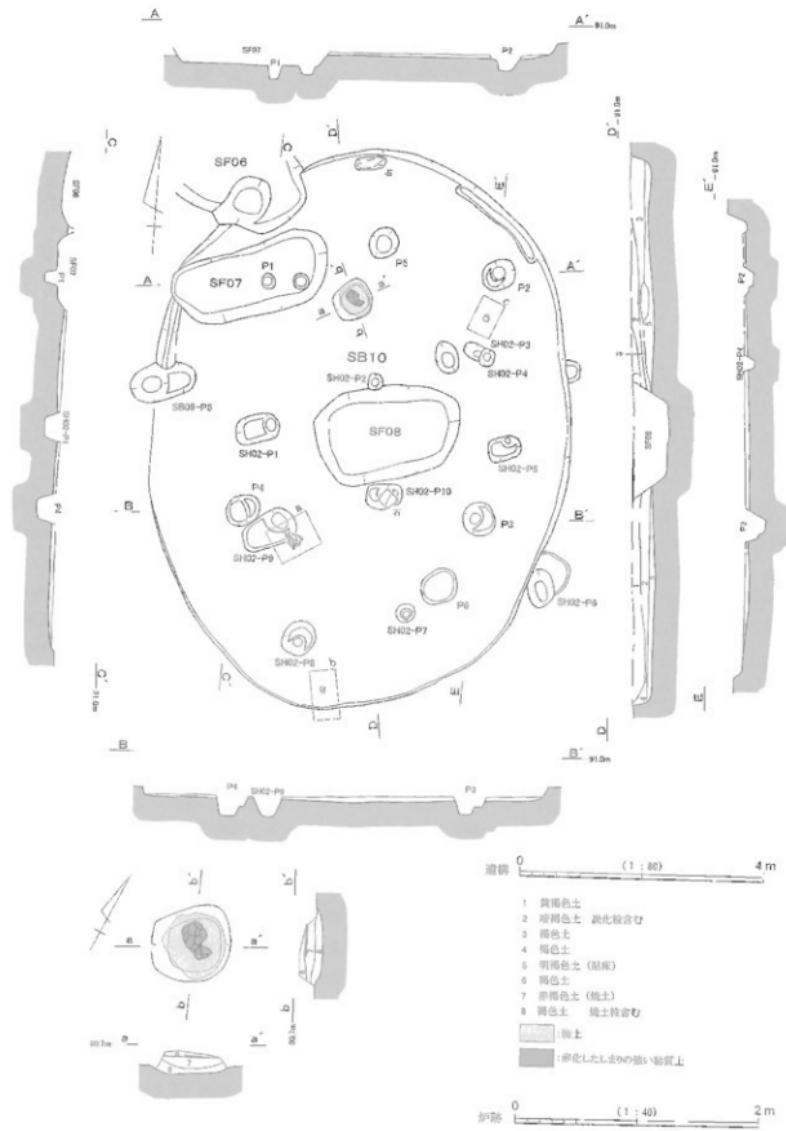
第58図 SB09③

土板は、赤化しているのが上面部だけであり、下部は白～明黄色を呈している。壺の破片が上面に残されていたことからも、粘質土板の上面において調理などの火の使用があったことがわかる。石は砂岩質であり、長さ0.35m弱、幅約0.08m、厚さ約0.04m、下にしている面は割られた断面になっていた。火を受けて赤化している部分が多い。土層断面によって、石の下に掘り返しが確認できる。下層の焼土層が形成される段階があり、その後の段階として、埋没した上面から掘り込んで板石を設置し、さらに粘質土板を敷いたと復元することができる。

覆土に焼土粒・炭化粒を多く含み、床面では炭化した木材片（炭化材）が検出された。したがって、焼失した住居であることがわかる。P2・3・4のそれぞれには、立った状態のまま炭化した柱の一部が残っていた。その他には、横倒しになった炭化材が住居跡周縁部にいくつかあり、炉跡の上にも小破片を確認することができた。これらについては自然科学分析を行い、 $2110 \pm 30$  BP (BP = 1950年) という年代が測定され、P2・3・4の柱材がコナラ属コナラ亜属コナラ節、炉跡の上の炭化材がコナラ属アカガシ亜属、住居跡周縁部の炭化材がスダジイという樹種が同定されている（詳細は第6章で報告）。

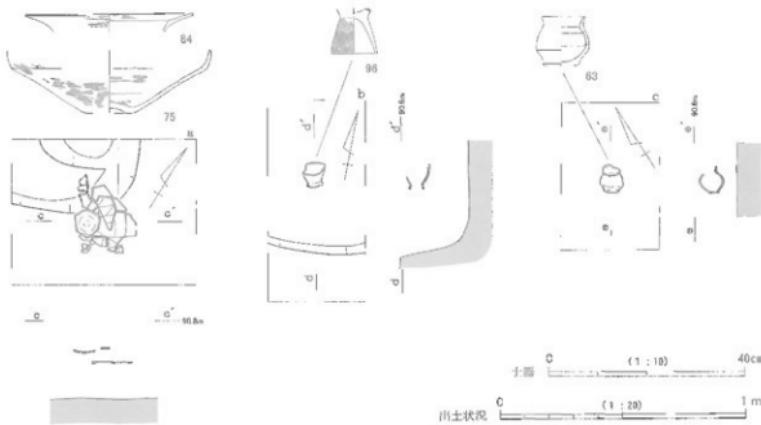
遺物は、覆土から土器片が出土しているほか、廃絶時に床面に残された土器が発見されている。南東部では小型壺（第75図51）が正位に、P4脇では鉢（第75図56）が逆位に、P3脇では高杯の壺部（第75図57）が逆位に置かれていた。炉跡の上からは甕を主体とする土器群（第75図53・59・61）、北側壁溝からは壺・高杯群（第74図47、第75図48・50・52・55）がつぶれた状態で出土している。土器以外には、磨製石鎌の未製品2点（第88図260・263）が出土している。260は一部に研磨が施されている。出土遺物の特徴から、SB09は弥生時代後期前葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

**SB10 (第59・60図)** M7グリッド南東隅付近に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しており、SF 06・07・08やSH02といった中世遺構と重なるものの、概ね全体を把握することができる。北西部ではSB 09に切られているが、辛うじてSB09の下に床面・掘方が残存していた。



第59図 SB10①

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第60図 SB10②

平面形は、南北に長い楕円形を呈する。南北約9.1m、東西約6.8mであり、本遺跡の中では規模が大きい。掘方の底面に凹凸が多いわけではないが、全体に貼床が施されている（5層）。壁溝は、北縁部において部分的に確認することができた。北縁中央の壁寄りには、長軸0.5mを越える石が置かれていた。柱穴は、方形に配置された4基（P1～4）が把握できるが、南北方向の柱間が住居の平面形に対して短い。4本柱以外に補助的な柱を伴っていた可能性も指摘でき、P5・6のような浅い小穴について、その痕跡である可能性を考慮することができる。炉跡は、中央北寄りに残されていた。掘り込みは、径0.6m強の不整円形で浅い。中に焼土層が認められ、その上に赤化した硬い粘質土が板状に検出されている。この粘質土板は、SB09などのものに比べて薄い。

多くの土器片が覆土から出土している（第76・77図63～96）が、南側の地割れなどから出土した土器片と接合する場合があることから、ある程度の数の土器片がSB10から周囲に移動している可能性が指摘できる。弥生土器片の移動については、中世の土坑（SF07）からSF10出土土器片と同一個体の弥生土器が出土していることがわかっている（本章第2節3・5および第5節3参照）。したがって、弥生集落の營みの中で生じた土器片の移動や地滑りなどの影響も否定できないが、中世遺構に伴う整地等による土器片の散乱・混在を評価することもできる。SB10における土器片の混在については、南側の地割れとの間だけではなく、隣接するSB09などを含めた混在を考慮する必要もある。SB10の床面から出土した遺物としては、第76・77図63・75・84・96がある。出土土器や遺構間の切り合い関係などから、SB10は弥生時代中期後葉～後期初頭の堅穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB11（第61図） M8グリッド南部に位置する。丘陵上平坦面の東縁部に立地しており、斜面の崩落・流土によって北東部が大きく失われている。

平面形は、南北に長い楕円形であり、南北6.3m以上、東西4.0m以上である。掘方による検出となつたが、その底面は概ね水平・平坦であり、炉跡の掘り込みが底面において検出されていることから、本来より貼床を厚く施すことはなかったと推測することもできる。ただし、覆土から出土した遺物は少ない。壁溝は把握できなかった。柱穴は3基（P1～3）が検出されており、4本柱が長方形に配置されていたと復元できる。炉跡は、中央北寄りに残されていた。焼土層は認められなかったが、覆土に焼土粒を

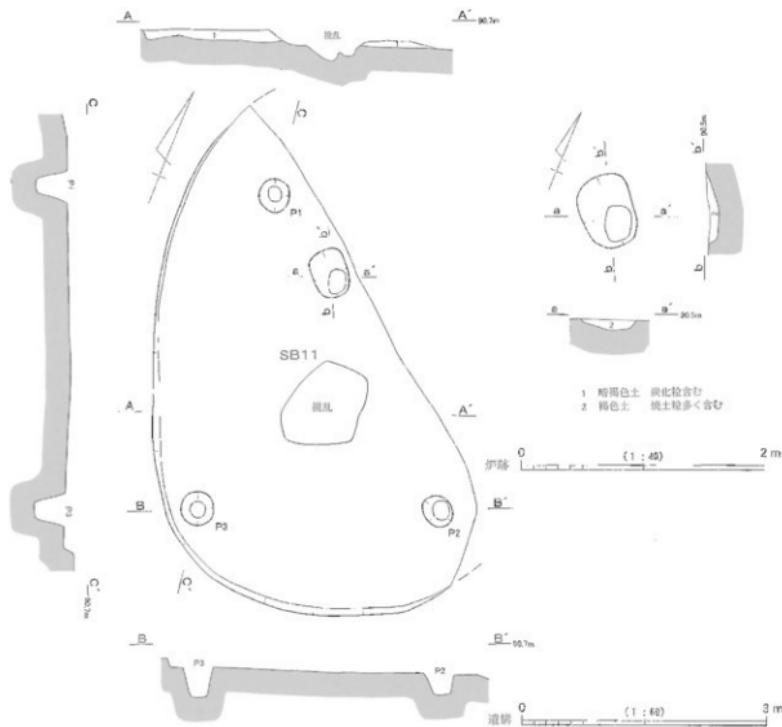
含んでいることから炉跡であると評価した。

出土遺物は少なく、図化できたものは窯1点（第78図98）だけである。遺構・遺物の特徴から、SB11は弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴住居跡である可能性が高いと判断することはできる。

SB12（第62図） L8グリッド中央に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しているが、丘陵を東西に横断する地割れによって中央部が大きく破壊され、遺物や炉跡の焼土が地割れの中に落ち込んでいる。

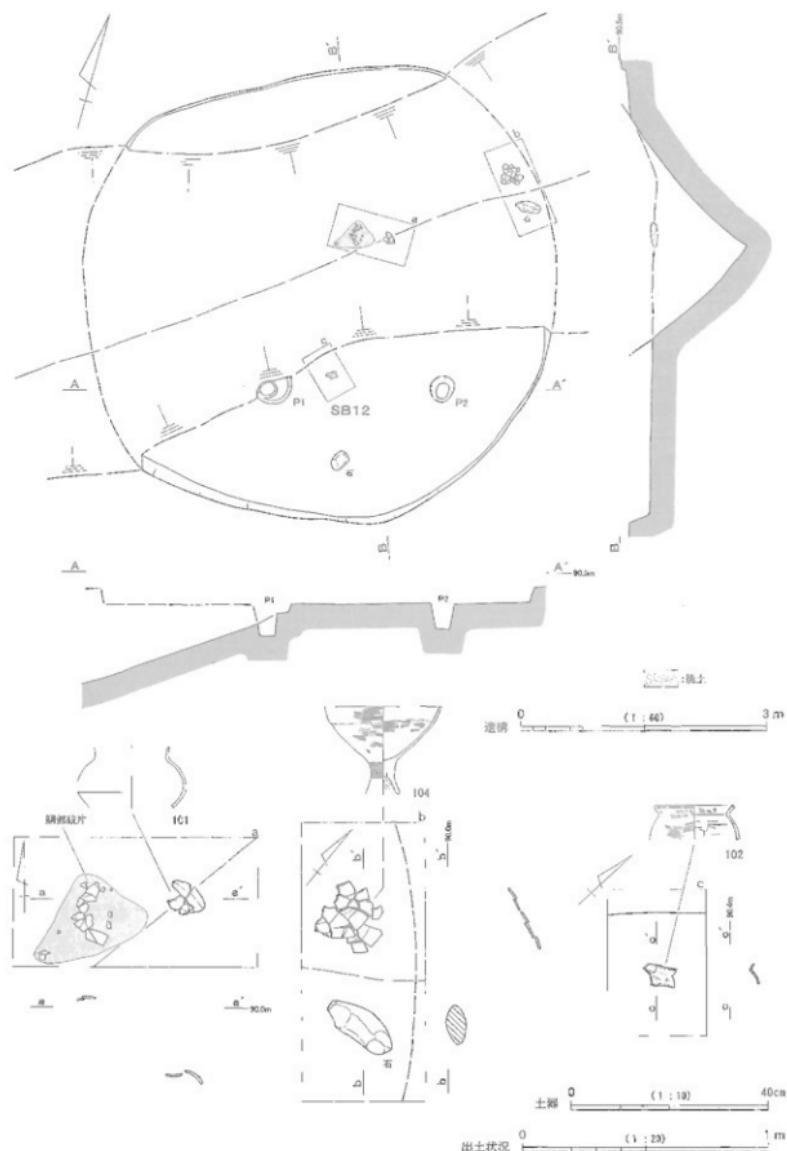
平面形は概ね円形を呈するが、断層によって変形している可能性もある。検出状態での規模は、南北約5.8mである。検出は掘方による。その底面は概ね水平・平坦であるが、覆土の観察が良好にできなかつたため、貼床・壁溝の有無については判断し難い。出土状況を図化した第78図102の土器片は、底面より0.1mほど高い場所で出土している。柱穴は、南寄りに配置された2基（P1・2）を検出することができた。4本柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。炉跡は、地割れ内の上層において焼土の集中として残存していた。その近傍から壺（第78図101）が出土している。また、住居跡東縁部にあたる地割れ内の上層においては、高坏（第78図104）と長軸0.3m強の石が検出されている。

遺物は、上記した以外にも土器片の出土があり（第78図99～104）、それらの特徴からSB12は弥生時代後期中葉前後の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。なお、地割れ内出土土器（第79・80図）のうち新相を示すものについては、SB12に伴っていた可能性を考慮することもできる。



第61図 SB11

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第62図 SB12

SB13（第63・64図） L9グリッドに位置する。丘陵上平坦面の南東隅に立地しており、南東寄りを中心に流水などの影響を受けている。また、南側と北側に断層による地割れがあることから、その影響も受けている可能性が考慮される。ただし、平面的には概ね全体を検出することができている。

平面形は、南西から北東の方向に若干長い楕円形である。規模は長軸7.8m強、短軸約6.3mであり、本遺跡の中では大きい。掘方は、底面の凹凸が著しく、西縁部が他より一段高くなっている。床面は、全体に貼床を施して平坦に構築している（10層）。全体的に東側に下がっているのは、地割れ（断層）の影響による可能性がある。壁溝は、斜面上方側に該当する北西縁にのみ把握できた。幅は比較的広く、最大で0.5mを超える。柱穴は、方形に配置された4基（P1～4）を検出することができた。南東側の2基（P3・4）が深くなる。

炉跡は、中央やや北西寄りに残されていた。掘り込みは長軸0.6m弱の楕円形を呈しており、その全体に厚さ約0.15mの焼土層が残されていた。焼土層の上面には、赤化した板状の粘質土は認められず、被熱で赤くなった砂岩質の板石が載っていた。なお、焼土は炉跡の南東側にも検出されているが、掘り込みを伴うものではない。また、住居跡の南部においては、砂岩質の板石が散在的に分布している。住居跡の北縁部や東部・西部にある石は円礫である。

遺物は、覆土から多くの上器片が出土しているが、良好に残存しているものはほとんどない（第81・82図141～187）。出土土器などの特徴から、SB13は弥生時代中期後葉～後期初頭の竪穴住居跡であると判断できる。

住居跡南部のP4の北側においては、磨製石鎌の未製品29点（第89・90図271～298）がまとまった状態で出土している。これらは研磨する前の未製品の集積であり、全て同じか類似した石材である。10点が重なる束が2つ（271～280と281～290）並び、やや離れた場所に6点（291～296）の束と287・298がまとまっている。それぞれの束は、石鎌の先端になる方向をそろえて重ねられている。並び置かれた2つの束は、石鎌の先端になる方向を互い違いにさせている。この未製品の集積に伴う掘り込みや容器の痕跡などは認められなかった。なお、束の下面の高さは、床面より0.1mほど高い。

周囲からは、有孔磨製石鎌1点（第88図257）や未製品の破片（第88図269）があり、他の場所からも破片（第88図259・270）が出土している。これらの内、有孔磨製石鎌（257）は集積された未製品群より良質の石材であり、部分的に研磨された259もやや石材が異なる。石鎌以外の石器としては、台石（第91図301）が出土している。

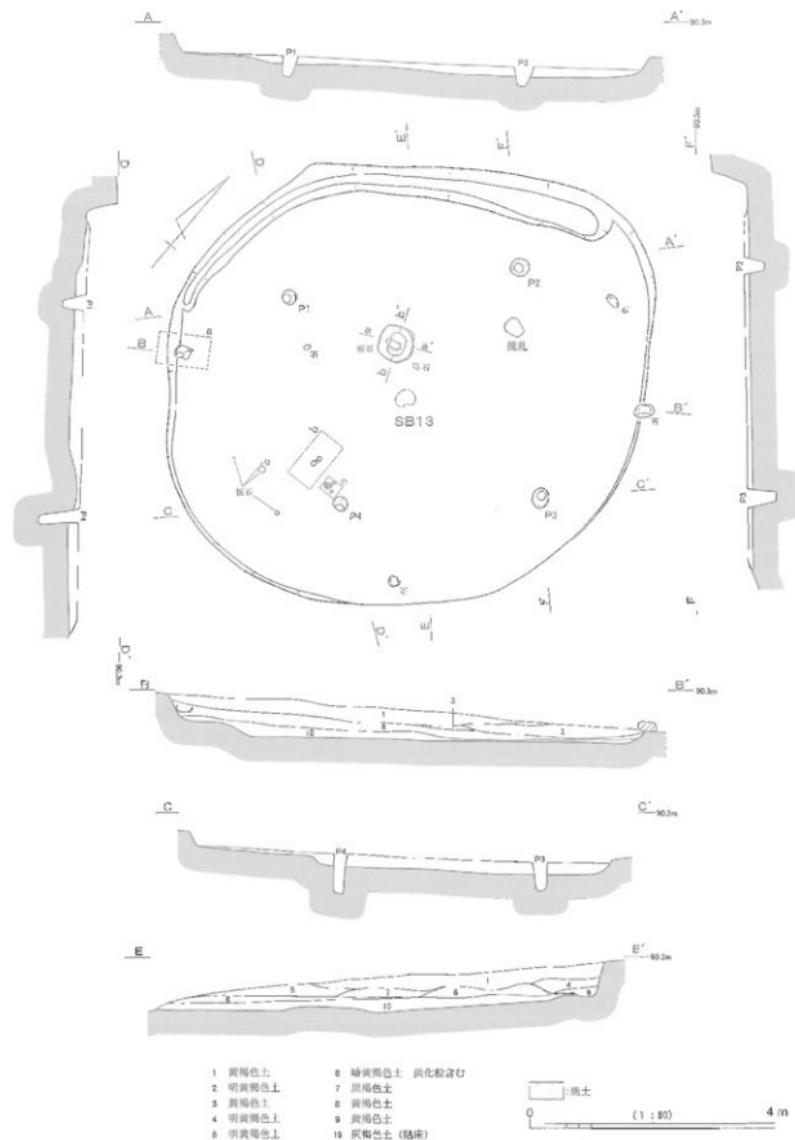
SB14（第65図） K7グリッド北部に位置する。丘陵西側斜面に立地しており、斜面の崩落によって大半が失われている。また、地割れによる破壊も受けている。

平面形は、楕円形の可能性が指摘できるが、詳細は不明である。土層断面によっても貼床が把握できなかったため、掘方による検出となった。底面において、柱穴の可能性も指摘できる小穴1基（P1）を検出した。聖溝・炉跡は把握できない。出土遺物は非常に少なく、図化できるものはない。

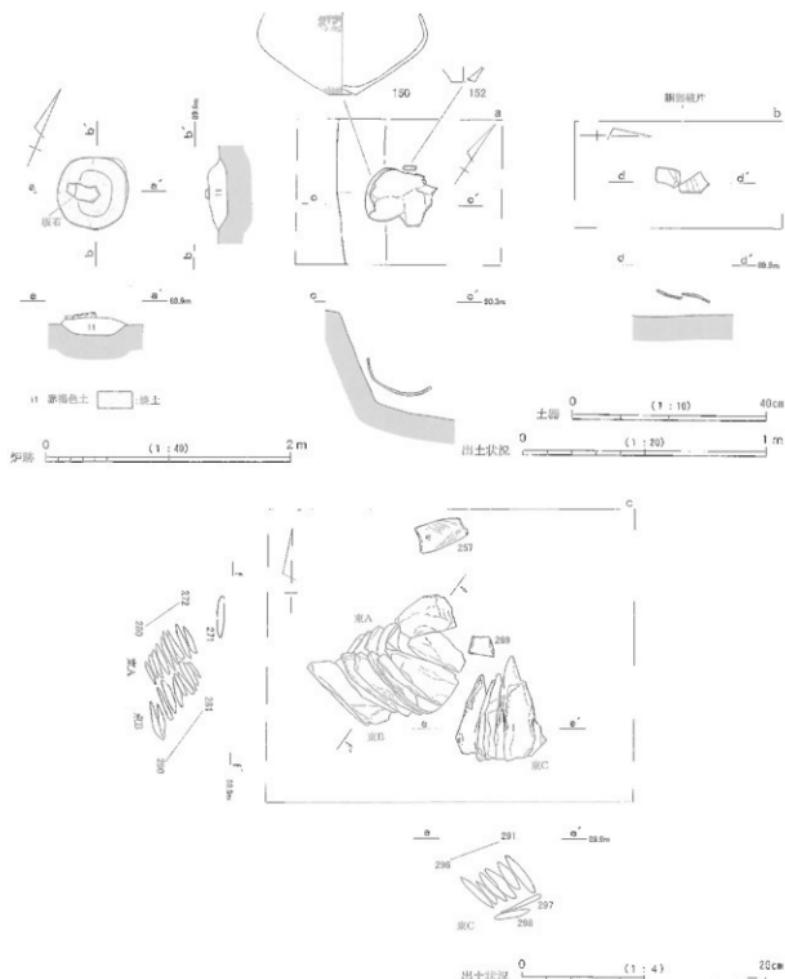
SB15（第66図） K8グリッド北西隅付近に位置し、丘陵上平坦面の南西隅に立地している。西部は後世の山道によって壊されている。南部はSX01に切られている。また、南側と北側に断層による地割れがあることから、その影響も受けている可能性が考慮される。

平面形は、隅丸（長）方形に復元することができる。床面は、掘方底面の若干の凹凸を埋めるように貼床が薄く施されている（6層）。壁溝は把握できなかった。柱穴は3基（P1～3）を検出することができ、4本柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。炉跡は、中央北寄りに設けられていた。一辺約0.7mの方形の浅い掘り込みがあり、焼土層が全体に認められた。住居跡の南西隅にも焼土を伴う掘り込みが認められており、焼土層上面において赤化した硬い粘質土が板状に検出されている。別の住居跡がSB15に重なっていた可能性を指摘することもできる。

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第63図 SB13①



第64図 SB13(2)

### 弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

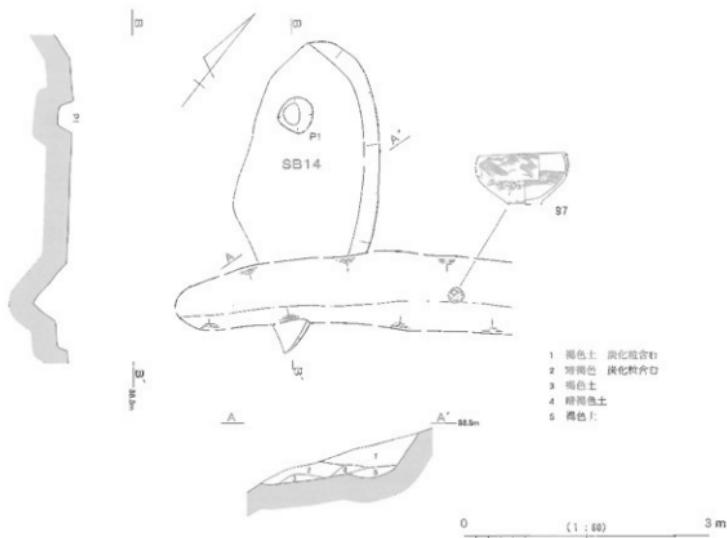
遺物は、覆土中から多くの土器片が出土しているが、残存状態の良い個体はない(第83図188~201)。出土遺物の特徴などから、SB15は弥生時代中期後葉~後期前葉の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

**SB16(第67図)** K8グリッド北東隅付近に位置する。丘陵上平坦面の南縁に立地しており、南部が流土などによって失われている。また、南側と北側に断層による地割れがあることから、その影響も受けている可能性が考慮される。

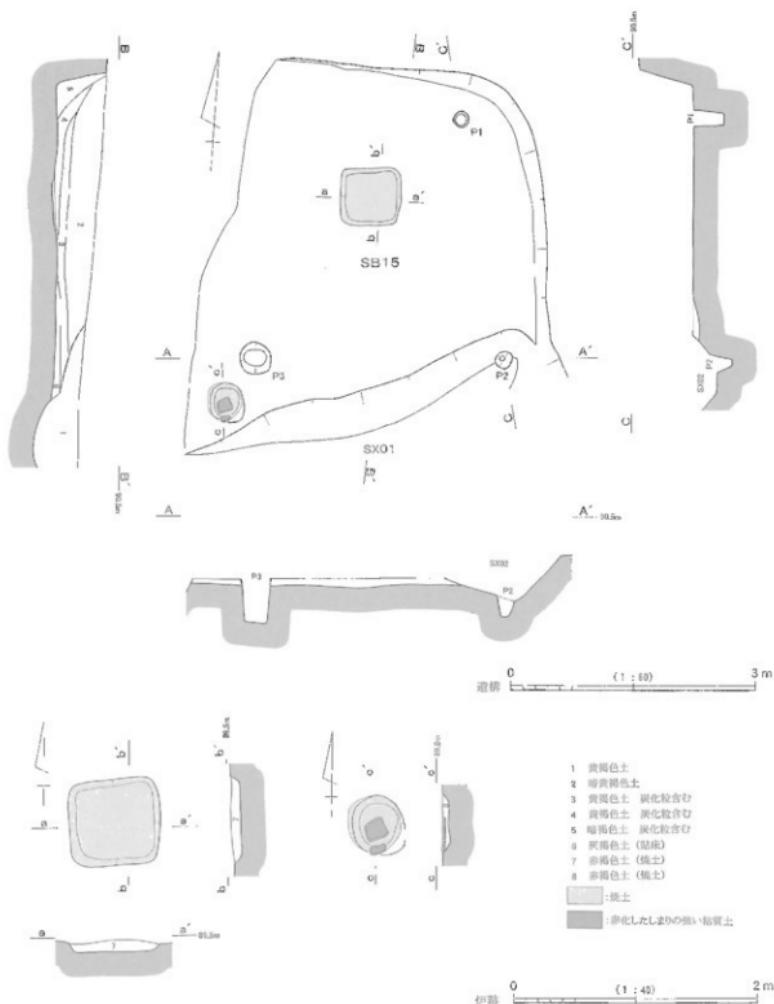
平面形は、南北に長い楕円形に復元できるが、円形に近い可能性もある。貼床・壁溝については、土層断面の観察においても把握できず、住居跡の検出は掘方によることになった。掘方の底面は、概ね水平・平坦である。しかし、遺物の出土状況において、土器の出土が掘方底面より0.1mほど高い位置にあることから、若干の厚さの貼床が施されていた可能性も考慮する必要がある。

掘方底面において、7基の小穴を検出した。住居跡内の位置や深さから、P1・2は主柱穴である可能性が指摘できる。覆土中位(4層上面)においては、2ヶ所で焼土の集中を検出した。検出位置が高すぎることから、床面に伴う炉跡であるとは判断できない。しかし、このほかに炉跡と判断できる遺構を検出することはできなかった。明確にすることはできなかったが、断層の影響によって住居跡内部(覆土・貼床・炉跡)に乱れが生じている可能性も考慮する必要がある。

遺物は、覆土中から土器片が出土しており、下位層(4層)においては、鉢(第83図203)や台付壺(第83図207)などの出土が北部で認められた。また、磨製石錐の未製品である可能性が高い石器(片)(第88図258・265・266)が覆土内から出土している。265・266は、SB13に集積されていた未製品群と同じ石材によるものである。

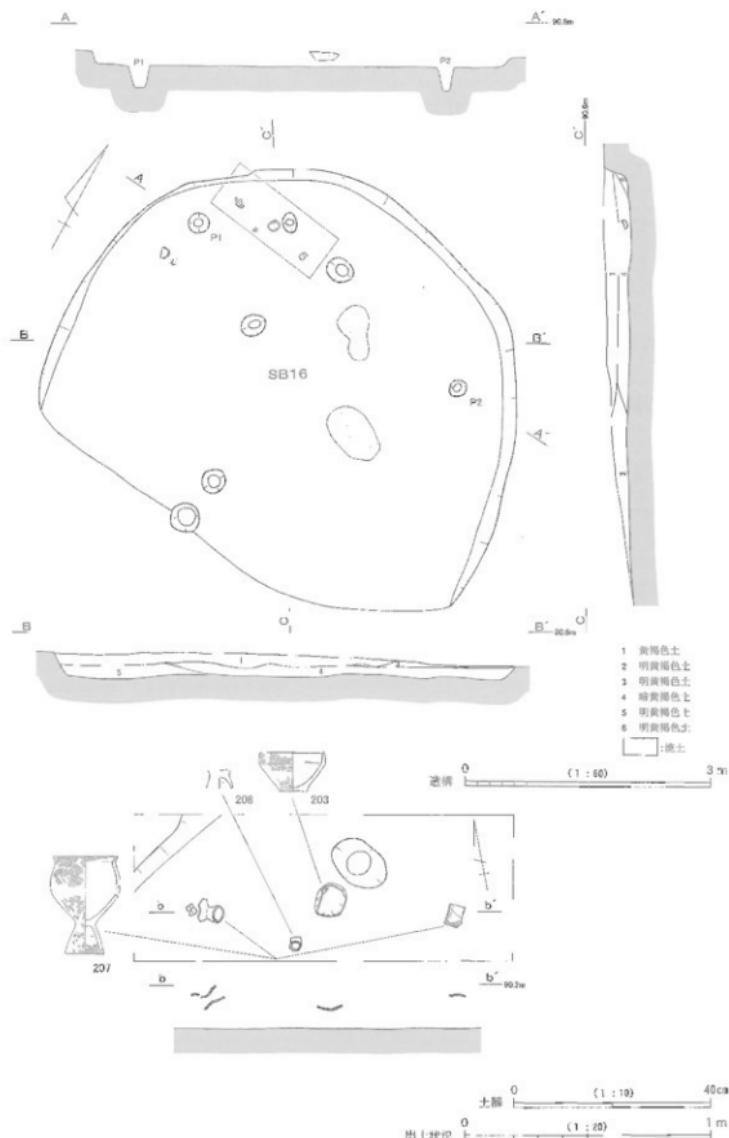


第65図 SB14



第66図 SB15

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第67図 SB16

### 3. 方形周溝墓

#### (1) 1号周溝墓

立地と環境（第44・68図） K9グリッド南東隅を中心とした範囲に位置し、丘陵上平坦面の南側緩斜面に立地している。

周溝墓の中央部には、断層による地割れが横断している。この断層は、調査区北部の南縁を東西に横断するものであり、東端部では断面U字、その他では断面V字の地割れを伴う。周溝墓の中央は大きく壊され、土器片や土器棺墓が地割れ内の上層に落ち込んでいた。さらに、この地割れは調査区北部中央の地割れと連動したものと把握でき、地形の傾斜は断層の影響によって形成された可能性が評価できる。したがって、1号周溝墓がつくられた場所については、本来より斜面地であったわけではなく、丘陵上平坦面の南東隅に該当していた可能性が高いと判断できる。また、検出した周溝墓の形態については、断層による変形を考慮する必要がある。現地調査においては、とくに南半部の崩れや変形が顕著であることが把握できている。

周溝SD01（第68・69図） 周溝（SD01）は方形にめぐっており、周溝外縁による方形の規模は10m強×11m前後である。南隅が斜面の崩落によって失われているが、残存部の状況から周溝は全周していた可能性が高いと判断できる。

周溝の深さは1.0mを前後する程度であり、極端に深さが変化する場所はない。周溝の断面はV字形に近い逆台形を呈するが、北東辺中央～南東辺と南西辺北半部は底面の幅が広くなっている。北東辺中央～南東辺については、断層の影響が顕著であり、そのために変形した可能性が考慮できる。南西辺北半部については、供獻土器がまとまって出土していることから、意図的に底面の幅を広くしている可能性も評価できる。しかし、この部分にも断層の影響があり、断定はできない。

周溝内から多くの土器が出土している（第84・85図）が、小破片の中には他から流れ込んだ可能性が高いと判断できるものもある。比較的良好な残存状態であったのは、南西辺において出土した第84図209～211だけである。3個体の壺であり、底部穿孔は認められなかったが、出土状況や縦年の位置から1号周溝墓に伴う供獻土器である可能性が高いと判断できる。また、遺構の特徴と出土土器群の特徴から、1号周溝墓は概ね弥生時代後期後葉～末頃の周溝墓であると判断できる。

方台部（第68・70図） 周溝（SD01）によって区画されている方台部について、周溝底面内側によつて測る規模は、約8.3m×約9.4mである。盛土は全く確認できなかつたが、断層や流土の影響を受けていることから、本来の有無は不明である。

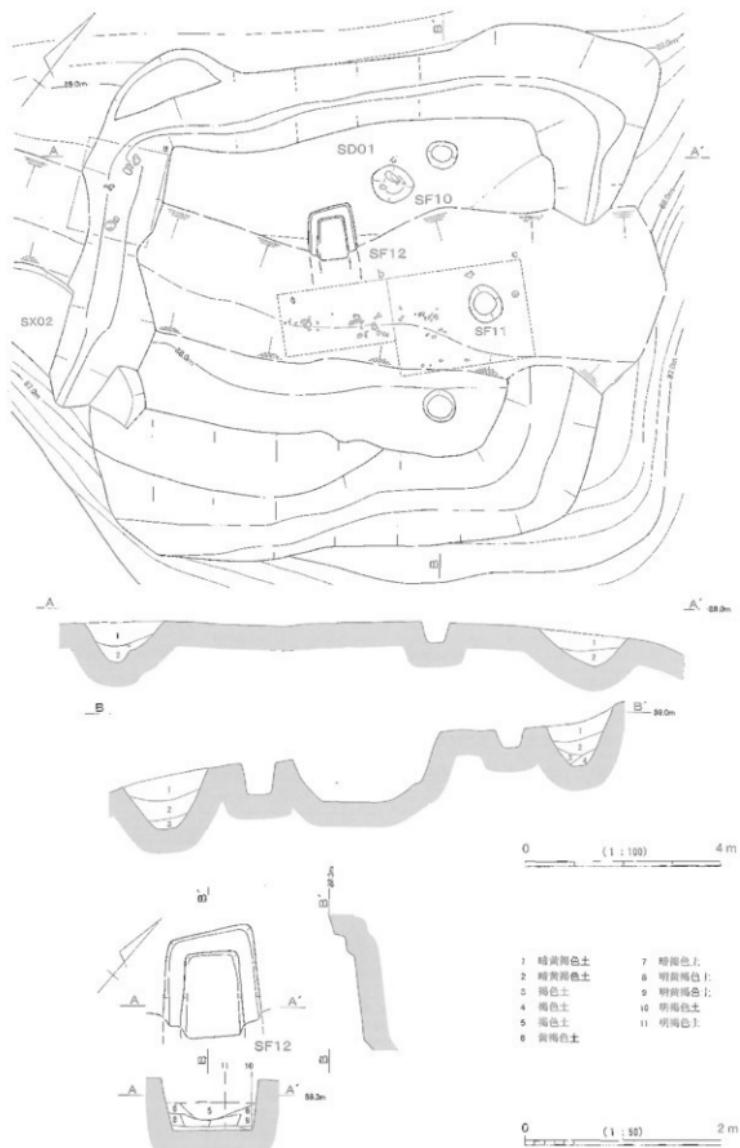
方台部を横断する地割れの中～上層において、多くの土器が出土している（第84・85図）。転倒・崩壊した状態のものが大半であったが、個体間の破片の混在は少なく、各個体の破片が大きく散乱しているという状況ではなかった。出土土器の縦年の位置については、周溝出土の供獻土器と概ね同じ時期のものと把握することができる。以上の出土状況および縦年の位置づけから、これらの多くは方台部（埋葬施設周辺）における供獻に使用した土器であった可能性が高いと判断できる。

木棺墓SF12（第68図） 方台部の中央において、木棺墓である埋葬施設（SF12）を検出した。南東半部は断層による地割れによって失われている。墓坑（掘方）は約1.0m×1.1m以上の平面長方形であり、主軸は周溝墓の方向と概ね一致する。検出した深さは0.5m強である。

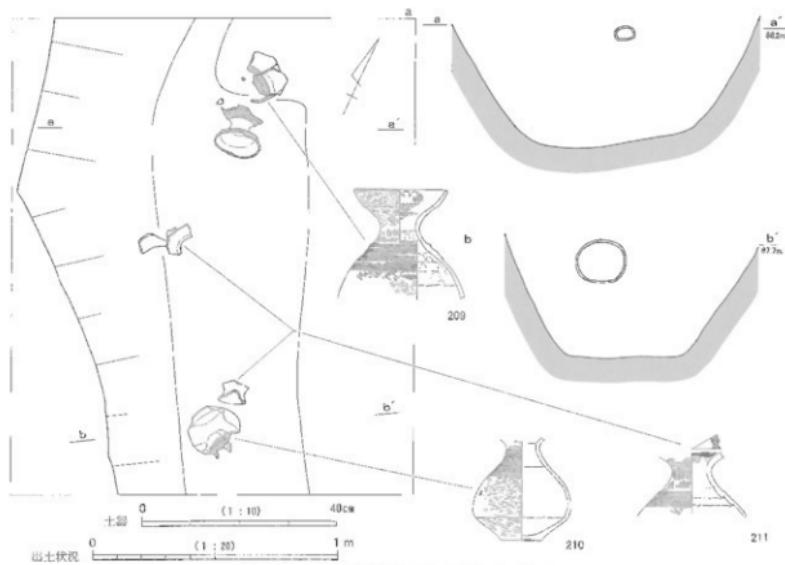
覆土下半において、木棺の使用を把握することができた。木棺部の平面形は長方形であり、幅約0.65mである。木棺の断面形については、土層断面の状況から箱形であった可能性が考慮される。墓坑底面においては、木棺の北西小口にあたる部分にのみ段差が検出された。

副葬品などの出土遺物はない。

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第68図 1号周溝墓①(全体および木棺墓SF12)



第69図 1号周溝(2)(周溝内出土状況)

土器棺墓SF11（第68・71図） 方台部の北東部、地割れ内の上層において土器棺墓（SF11）を検出した。流土などのために、北西寄りの上部が失われていた。

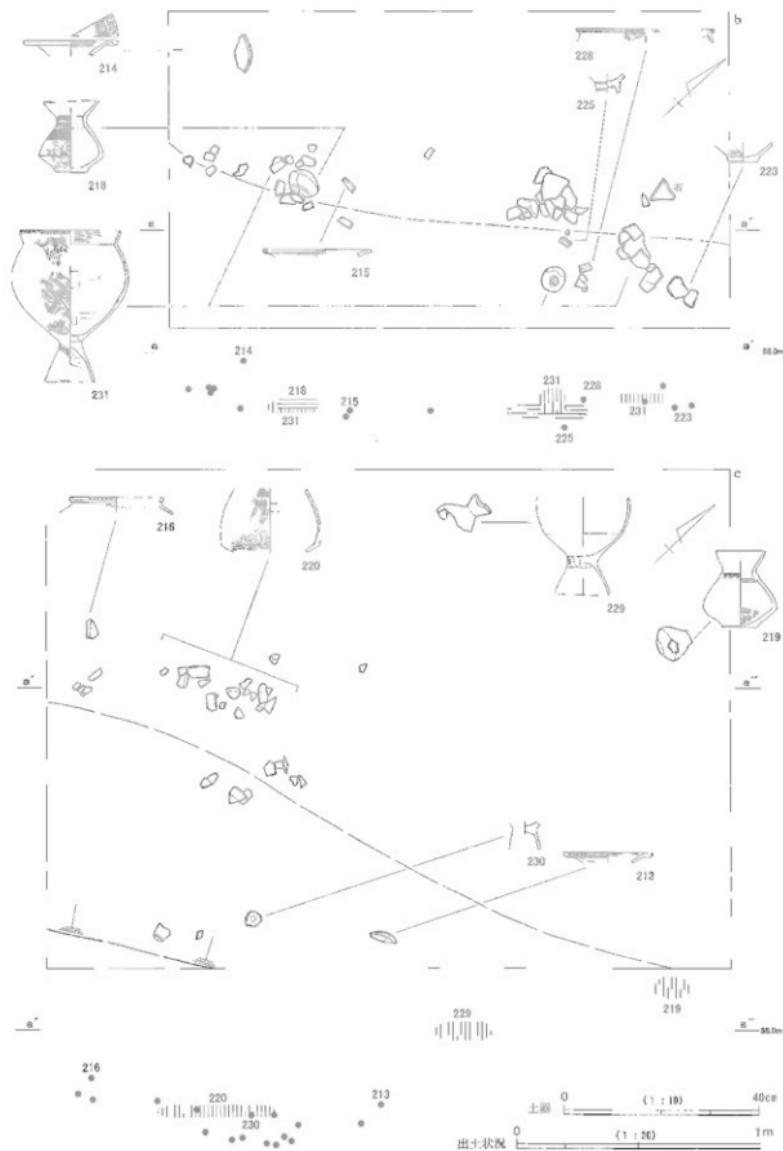
土器棺の身は、頸部以上を欠いた大型壺（第86図234）を用いており、概ね正位に置かれていた。蓋は、壺の胴部下半（第86図233）を用い、身の穴を塞ぐように逆さにして載せられていた。土器棺に伴う土坑は、地割れの中で地面全体が崩れた状態にあったため、非常に不明瞭な状況であった。しかし、その中で図示したように検出することができた。土器棺より一回りだけ大きな土坑である。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴から、SF11は概ね弥生時代後期後葉前後の土器棺墓であると判断することができる。

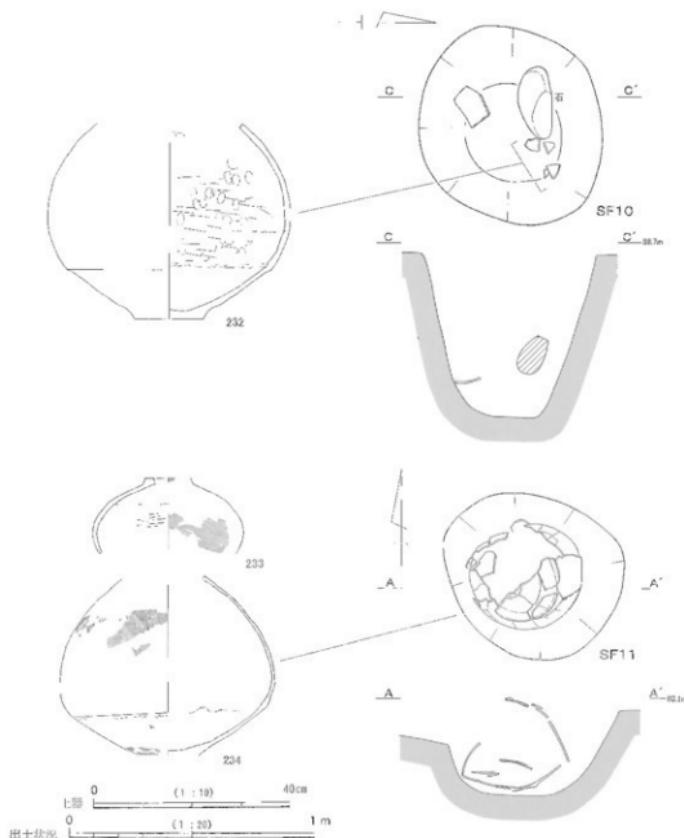
円形土坑SF10（第68・71図） 方台部上においては、SF11・12以外に3基の土坑・小穴を検出している。その内の2基は、出土遺物のない小穴であり、覆土は断層の影響もあって他と比較できないことから、時期・性格は不明である。

SF12の北側に位置するSF10については、2基の小穴よりも規模が大きく、長軸0.3m以上の円窓とともに弥生土器片（第86図232）が出土している。しかし、この土器片は、中世土坑SF07から出土した弥生土器の大型壺の一部にすぎない。一つの仮説として、SF07が設けられた中世において、弥生大型壺（232）をSF10からSF07に移動し、その際に一部の破片がSF10内に落ちたまま残されたと推測することができる。そのように判断できるのであれば、SF10は大型壺を伴う弥生時代の土坑であるということになり、大型壺を伴う土器棺墓であった可能性も考慮される。しかし、断層や流土に伴って大型壺の破片が斜面上方からSF10の中に流れ込んだと判断するのであれば、SF10は大型壺と無関係の遺構であることになり、さらに、弥生時代より後の遺構である可能性も考慮される。

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第70図 1号周清墓③(地割れ内遺物出土状況)



第71図 1号周清墓内の土器棺墓SF11と円形土坑SF10

#### 4. その他の遺構

SF02・03（第52・72図） SB05の中央北西寄りにおいて並んで検出された2基の土坑である。SB05の床面において検出しているが、土層による検討および出土遺物によって、SB05が廃絶・埋没した後に設けられた土坑であることが判明している。

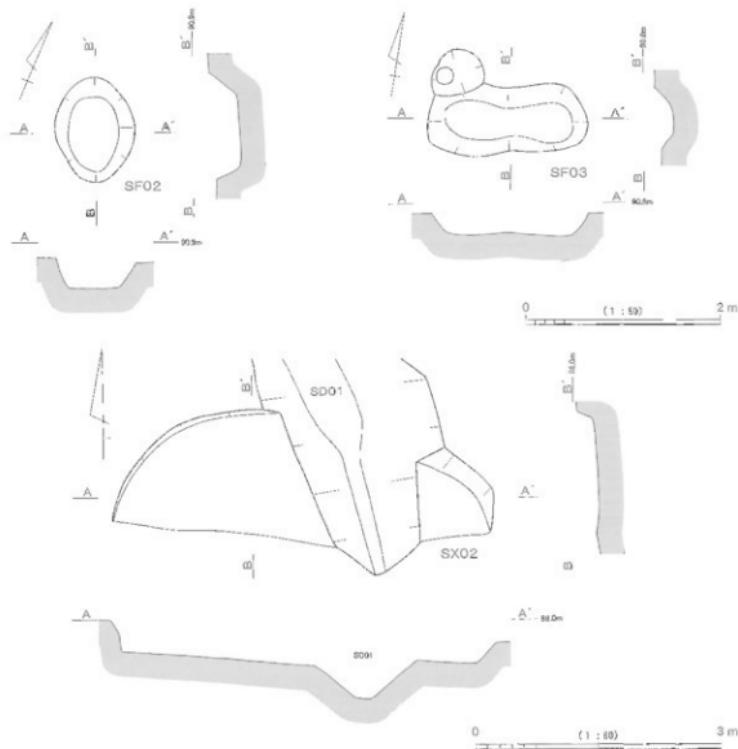
SF02が約0.8m×1.1mの楕円形を呈するのに対して、SF03は0.8m弱×約1.6mの長軸の長い平面形を呈している。深さは、SF02が遺構検出面から約0.4m（SF05床面から約0.3m）であるのに対して、SF03は遺構検出面から0.3m前後（SF05床面から0.2m前後）とわずかに浅くなる。これら土坑からは弥生土器片が出土しているが、図化できたのは第73図23の1点だけである。しかし、遺構の切り合い関係と出

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

土遺物の特徴によって、SF02・03は弥生時代後葉～末頃の土坑である可能性が高いと判断することができる。

SX02(第72図) J9グリッド北部、1号周溝墓の南西部に位置する。丘陵上平坦面の南側緩斜面に立地しており、斜面の崩落によって南部が大きく失われている。また、1号周溝墓の周溝に切られており、残存状態は決して良くない。

残存する北部の平面形は半円形を呈する。失われた南半部の状況は不明であるが、平面円形もしくは椭円形の竪穴として設けられた可能性が指摘できる。検出した深さは0.3m前後であり、掘り込みの底面は概ね平坦・水平である。形態的特徴から弥生時代の竪穴住居跡である可能性が考慮できるが、柱穴・炉跡などの施設は確認できず、遺物の出土もなかった。



第72図 SF02・03、SX02

## 5. 出土遺物

### (1) 弥生土器

**SB01・02出土土器 (第73図1～18)** 1～18はSB01から出土した弥生土器であるが、多くは覆土中・上層から出土した小破片である。重複するSB02との混在もある。また、SB01は中世建物跡（SH01）とも重なっており、後世の整地等による周辺遺構との混在を推測することもできる。SB01に伴うことが確実なものは、床面上において出土した15だけである。

1～6は壺の口縁部であり、受口状口縁である1・2と折り返し口縁の3～6がある。折り返し口縁のうち、3・6は頸部から直線的に開き、屈折を介して折り返し口縁に至る。一方の4・5は、外反しながら開いて口縁端部に至る形態を呈する。4の端部外面下端には刻み、3・5の端部外面には縦方向の刺突があげぐる。5・6の内面には縄文が観察できる。7～9は壺の頸～胴部である。7・8の頸部には羽状の櫛刺突文があげぐる、7・9の胴部上半に縄文が観察できる。7は、胎土に赤色粒子などの砂粒が多く、白色に近い明るい色調を呈する。縄文には結節を伴い、頸部内面と胴部中位以下の外面に赤彩が残る。10～14は壺の底部である。13はやや上げ底状になるが、主体は平底である。15～18は台付壺である。15は、直線的に弱く開く口縁部と張りの弱い胴部を伴う。摩滅のために調整などが観察し難くなっているが、口縁端部については、間隔の広い刻みを辛うじて把握することができる。16の台部接合部には、指頭痕が連続する粘土帶を伴う。

1・2のように弥生時代中期後葉～後期前葉に位置づけできるものから、8などのように後期中葉以降に位置づけできるものまである。SB01に伴うことが明確な15については、編年的位置にかんする詳細な判断が難しいが、器形の特徴については後期中葉以前に該当する可能性が指摘できる。

**SB03出土土器 (第73図19～21)** 19は壺の口縁部であり、頸部から外反しながら開いて折り返しの端部に至る。端部外面には縦方向の刺突があげぐる。20は上げ底状の壺の底部、21は台付壺の破片である。少數の出土であるが、総じて弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づけることはできる。

**SB04出土土器 (第73図22)** 22は壺の底部である。詳細な編年的位置づけは難しい。

**SF02出土土器 (第73図23)** 23は、折り返しの端部を伴う壺の口縁部である。頸部から開きながら立ち上がり、内面の屈折を介して口縁端部は水平に開く。内面には円形浮文と羽状の縄文があげぐる。屈折を挟んで2段の結節縄文を羽状に施し、その後に屈折の下（羽状縄文の境）に円形浮文が貼り付けられている。口縁端部外面には縦方向の刺突があげぐる。以上の特徴などから、弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づける可能性が高い。

**SB05出土土器 (第73図24～29)** 24は壺の口縁部である。直立に近く立ち上がる頸部から屈折を介して、ハの字に開く単純口縁に至る。25～27は、上げ底状の壺の底部である。28は、壺の胴部下半～底部である。底部は平底であり、胴部は下寄りに屈折を伴わない下膨れ形であることがわかる。摩滅のために調整などの観察はできない。29は台付壺の台部であり、裾へと直線的に開く。

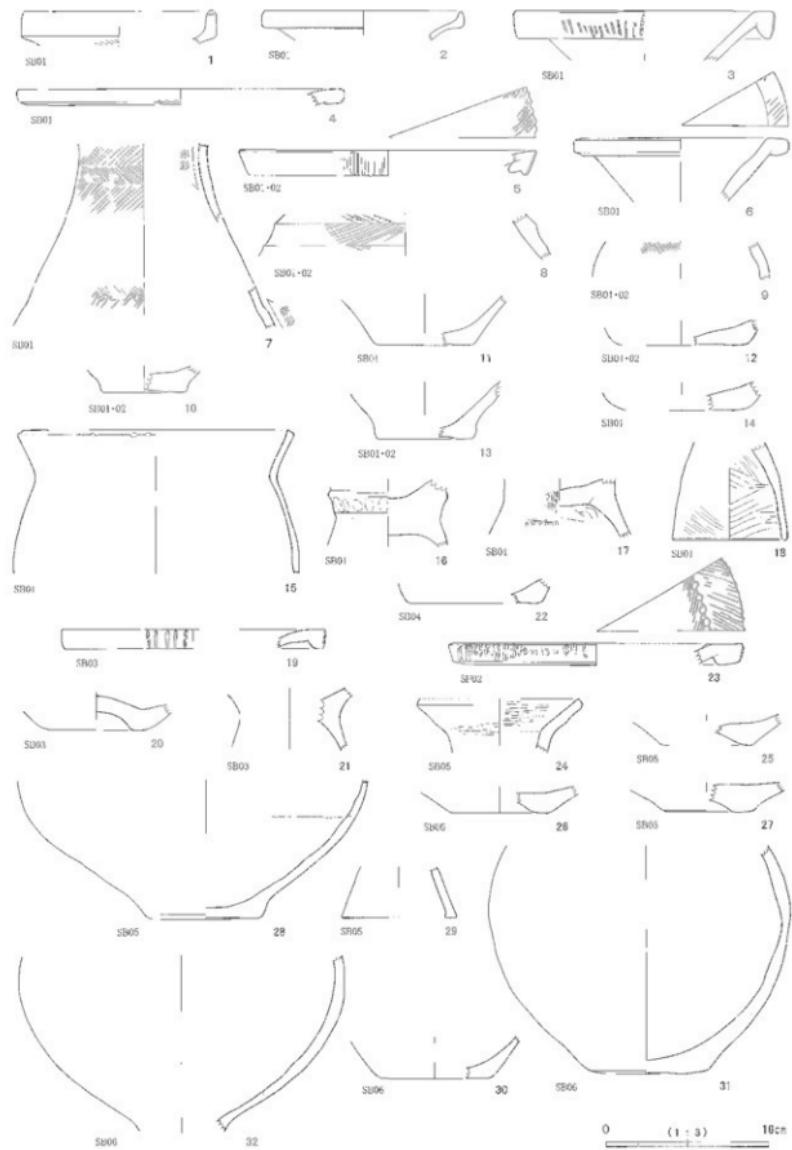
主に壺の特徴から、概ね弥生時代後期前葉に位置づけることができる。

**SB06出土土器 (第73図30～32)** 30は壺の底部片である。31は、床面上において残されていた壺の下半部である。底部は平底であり、胴部は下寄りに屈折を伴わない下膨れ形である可能性が高い。器壁は比較的厚いが、摩滅のために調整などは観察できない。32は、台付壺の胴部下半である。緩やかな丸味を帯びる形態を呈し、胴部下寄りの屈折はない。摩滅のために調整は観察できない。

主に壺（31）の特徴から、弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づけることができる。

**SB07出土土器 (第74図33～39)** 33～39はSB07から出土した土器であるが、いずれも散在的に出土した小破片である。SB07は、SB09等との切り合いによって多くが失われており、一部の出土土器はSB09

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

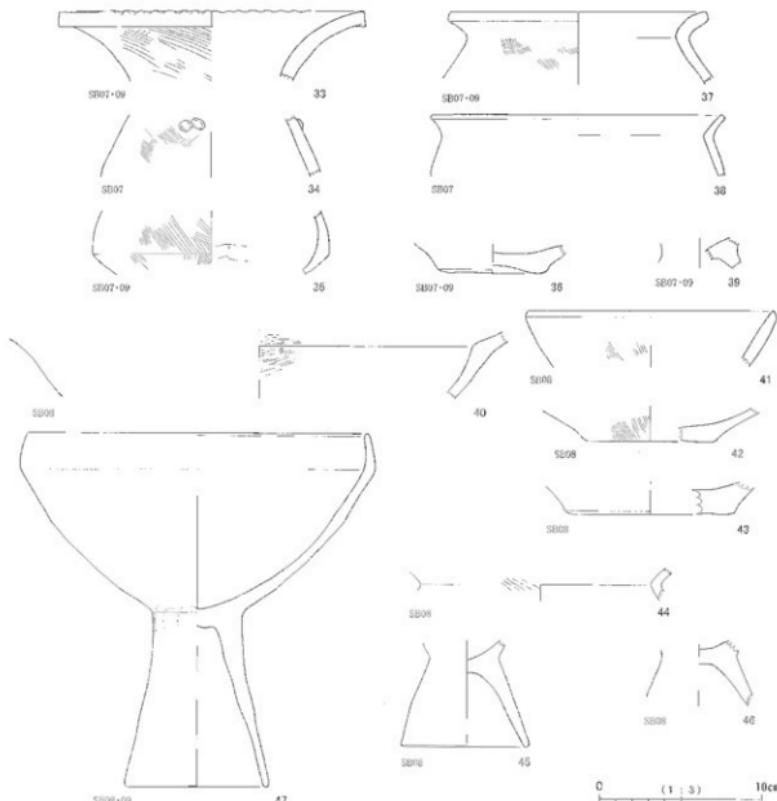


第73図 北部出土弥生土器①

との間で散在している。さらに、周辺域は中世土坑・建物跡に伴う整地等の可能性が指摘でき、遺構上部における土器片の散乱・混在を考慮する必要がある。

33は、外反しながら開く壺の口縁部である。外反は大きくない。端部には下方向へのつまみと若干の折り返しを伴う面がつくられ、その上縁には刻みがめぐる。胎土には赤色粒などの砂粒が多く、白色に近い明るい色調を呈する。34・35は壺の胴部である。34は胴部上位の破片であり、円形浮文が認められるほか、ハケ目を辛うじて観察することができる。しかし、龜文や櫛刺突文・横線文などはない。35は屈折稜を伴う胴部下位の破片である。36は壺の底部であり、上げ底状を呈する。37は、短く外反する口縁部を伴うが、器壁が厚く内外面の調整がハケ調整でないことから、壺の類に該当すると判断できる。38も摩滅のために調整などは観察できないが、器壁が薄いことから壺であると判断できる。口縁端部の刻みは認められない。39は台付壺の接合部の可能性が高い破片であるが、比較的小さい。

33・34・36があるように、弥生時代後期前葉頃の土器片が多いと判断することができる。



第74図 北部出土弥生土器②

SB08出土土器 (第74図40~46) SB08からは、40~46のほかにSB09に伴う可能性が高い47の破片も出土している。SB07と同様に、SB09などの土器片の混在を考慮する必要がある。

40は高壺の壺部片であり、鉢状の口縁部を伴う。体部と口縁部の境について、内面にのみ屈折を伴う。41は壺の口縁部であり、内湾気味に開く単純口縁である。42・43は壺の底部であり、平底の可能性が高い。44は明確に「く」の字に屈曲する壺の頸部、45・46は内湾気味に開く台付壺の台部である。

多くは弥生時代後期中葉頃に位置づけできる可能性が高く、SB09出土土器よりも新しい傾向にある。しかし、検出状況においては、SB09よりもSB08の方が古い可能性もある。これら小さな土器片について、SB08に伴っていたものであるか評価し難い。

SB09出土土器 (第74・75図47~62) 47は、SB08およびSB09から出土した高壺である。SB08では破片の出土であったのに対して、SB09では壁溝内からまとまって出土していることから、SB09に伴うものと判断できる。壺部は鉢形であり、内湾しながら開く体部から屈折を介して内傾気味に立ち上がる口縁部に至る。脚部は細長く、裾へと直線的に弱く開く。接合部の文様や脚裾の屈折・屈曲などはない。

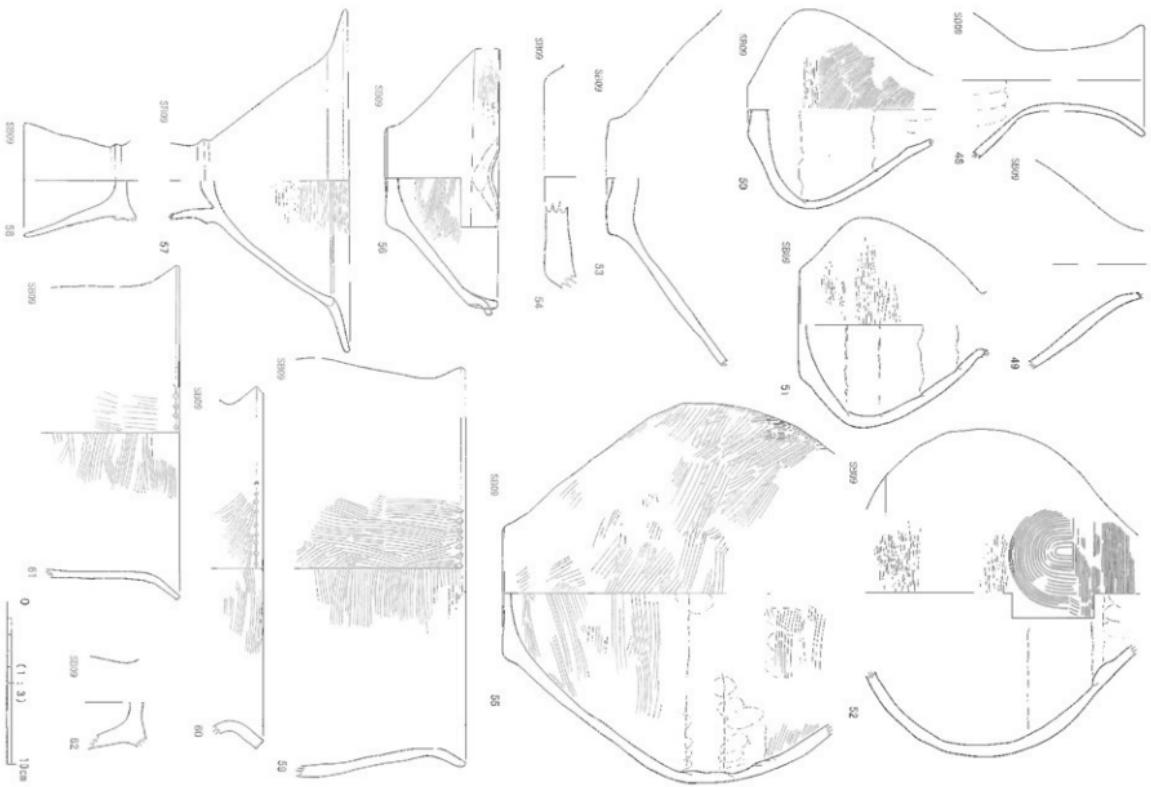
48~51はSB09出土の小型壺である。いずれも個体は異なるが、下膨れ形の胴部と細長い頸部、弱く開く単純口縁といった類似した形態を伴う可能性が高い。文様は認められない。調整は、50の胴部外面では上半にハケ調整、下半に横方向のミガキ調整が観察できるが、51ではハケ調整が認められない。胴部内面については、いずれも粗雑で輪積み痕が残る。底部は、50が上げ底状であるのに対して、51は平底である。52は中型壺の胴部片である。小型壺と同様に細頸であるが、胴部は50・51に比べて丸味が強く、胴部最大径の位置が高い。頸部から胴部上半には幅広の描描横線文がめぐり、その下にU字の描文が施されている。胴部外面には横方向のミガキ調整が施されているが、内面には輪積み痕が残る。55も中型壺の胴部であり、胴部最大径の位置が比較的高い。しかし、52よりも全体に綾長であり、胴部の丸味は弱い。文様は全くなく、外全体と内面上部・内面下部にハケ目が残されている。胴部最大径付近の内面にはハケ調整が施されておらず、指頭痕と輪積み痕が残されている。底部は平底である。53・54は大型壺の底部であるが、53が上げ底状の小さい底部であるのに対して、54は平底で大きい。

56は片口鉢である。平底の底部から直線的に開き、明確な屈折を介して直立する口縁部に至る。体部内面にハケ調整、口縁部外面に横方向のミガキ調整を観察することができる。内面の上部は横方向のナデ調整によってハケ目が消えている。片口は、口縁部の下寄りをつまんで折るようにして、大きく曲げてつくられている。したがって、口縁端面は潰れていない。片口直下の外面に指頭痕の可能性がある凹みを認めることができる。57は、鉢状口縁の高壺片であり、三角突帯のめぐる接合部から深い体部、屈折して開く口縁部が残る。口縁端部には折り返しがなく、単純口縁となる。器壁は全体に薄く、内面には横方向のミガキ調整が観察できる。58は高壺の脚部片であり、57と同様の三角突帯が接合部にめぐる。脚部は低く、裾部の屈曲・屈折はない。台付壺の台部に近い形態を呈する。59は壺の破片であり、肩の張らない胴部から緩やかに屈曲して短く開く口縁部までが残る。口縁端部には刻みがめぐる。外面は綾方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施されており、この調整は口縁部から胴部まで連続している。61も同様の特徴を伴う壺の破片である。60の壺については、胴部から口縁部への屈曲が大きく、外面ハケ調整が斜方向になっている。62は形態および器壁の厚さなどから台付壺の台部であると判断したが、高壺である可能性も否定はできない。

以上の土器は、周辺との混在も多少は考慮されるものの、多くは出土状況などからSB09に伴うものであると判断でき、総じて弥生時代後期初頭前後に位置づけることができる。

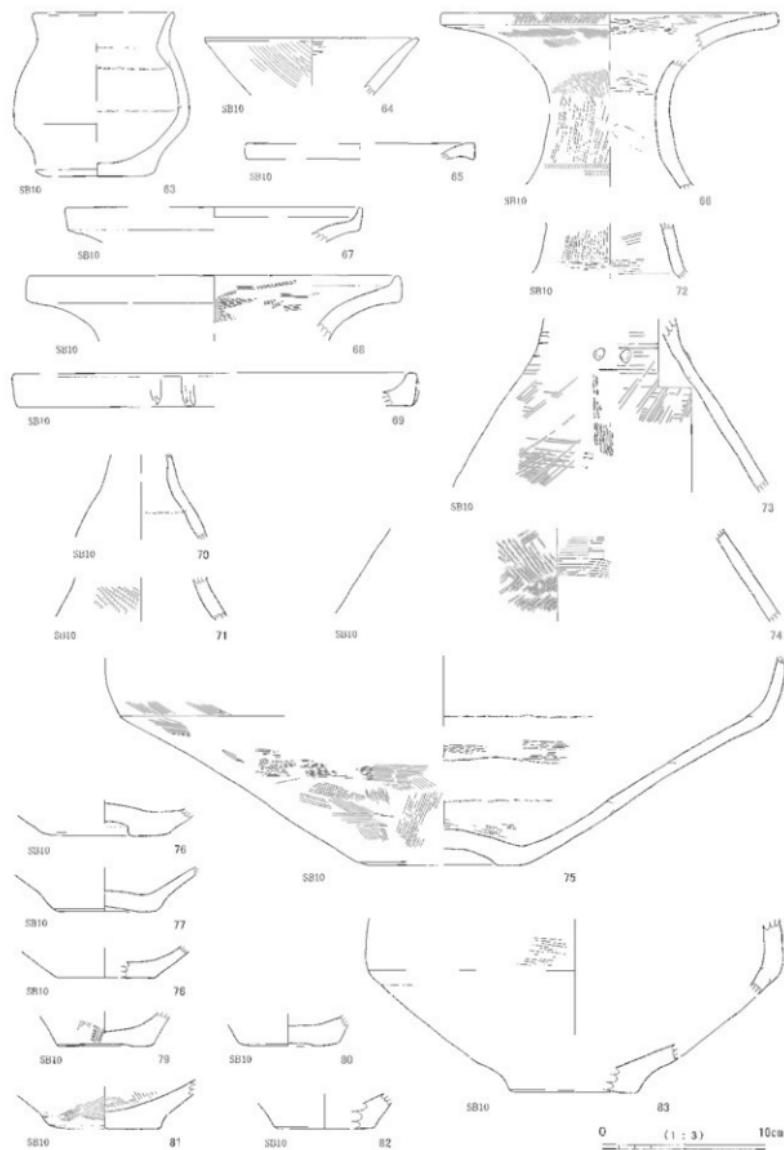
SB10出土土器 (第76・77図63~96) 63は床面近くから出土した小型壺である。底部は平底であり、全体に対して大きめである。胴部は下位に稜を伴い、下部が外反、上部は内湾しながら立ち上がる。頸は太く、口縁部は短い。文様はなく、摩滅のために調整は観察できない。64は直線的に開く壺の単純口

第5章 片頭遺跡

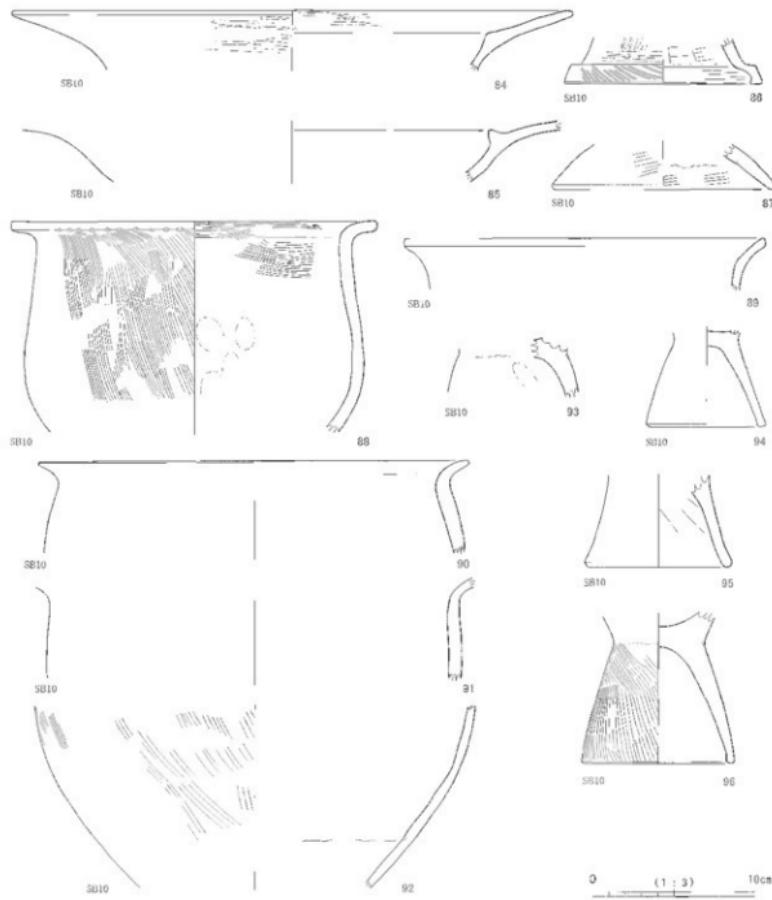


第75圖 北部出土跡生土器③

弥生時代の遺構と遺物 1 (北部)



第76図 北部出土弥生土器④



第77図 北部出土弥生土器⑤

縁、65は外反しながら開き、下方向に広く設けた端面を伴う口縁部である。66も外反しながら開く単純口縁であるが、内面のミガキ調整と外面のハケ調整が観察でき、さらに端面に縄文が施されていることがわかる。66には直立する頸部片もあり、外面に縦方向のミガキ調整、その下に押圧横線文が施されていることがわかる。72の頸部片も似た特徴を伴うが、文様はない。67～69は受口状を呈する壺の口縁部であり、69の端部外面には棒状浮文が貼り付けられている。70は細頸の小型壺の破片、71は櫛刺突がめぐる壺の頸部片である。73は壺の頸部下端から胴部上半の破片である。頸は比較的細く、胴部は肩の張らない下膨れ形に復元することができる。頸部には櫛描横線文と2個1組の円形浮文が施されている。その下の胴部上半においては、斜方向と横方向の櫛描が格子状に施されており、さらに、縦方向に区画

する櫛描波状文を確認することもできる。74は壺の胴部中位片であり、羽状に施された縄文を観察することができる。75は大型の壺であり、上げ底状の底部から大きく開く胴部下位、さらに屈折を介して胴部上位へと立ち上がる部分までが把握できる。底部片には上げ底状になるもの(76・77・79・80・83)が目立つが、平底もある(78・81)。

84・85は、高环の坏部片であり、ともに鈍状口縁を伴う。84の口縁端部に折り返しは伴わない。85にも伴わない可能性が高い。体部と口縁部の境について、84は内面の屈折稜が著しく、85は内面に突出部を伴う。86・87は高环の脚据部である。86は大きく屈曲する形態であり、外面に無節縄文が施されている。87は、脚柱部から屈折を介して大きく開く形態を呈する。高环片の胎土について、84・86・87は比較的近い特徴を伴うが、85だけは明らかに異なる。

88は、壺の胴部上半から口縁部までの破片である。胴部上半は直立に近く立ち上がり、大きく屈曲して短く開く口縁部に至る。破片下端に認められる湾曲から、胴部下位は大きく開く形態であったと復元することができる。口縁端部には刻みがめぐる。外面においては、口縁部から胴部まで連続的に縦方向のハケ調整が施されている。内面においては、上部に横方向のハケ調整、下寄りに指頭痕が観察できる。89も壺の破片であるが、88に比べて口縁部が長く、胴部からの屈曲が緩い。また、口縁端部の刻みはない。90・91は、88に近い形態的特徴を伴うが、90の口縁端部に刻みは認められない。92は、89に近い形態を呈する可能性が指摘できる。93~96は台付壺の台部である。多くは直線的もしくはわずかに内湾しながら階へと開くが、95だけは裾端部がやや外反する。96是比较的大型の台付壺である可能性が高い。

SB10についても、SB07やSB09などで述べたのと同様に、周辺遺構との間で土器片の散乱・混在がある可能性が指摘できる。南側に検出された地割れへと移動して落ち込んだ土器片も考慮される。そうした中にあって、SB10出土土器の大半については、総じて弥生時代中期後葉～後期初頭の中に位置づけることができる。

**SB14・15周辺出土土器（第78図97）** 北部中央に検出された地割れの中にあって、SB14とSB15との中間付近から97が出土している。したがって、97はSB15かSB14に伴っていた可能性が考慮される。

97は片口鉢であり、全体の形状を把握することができる。また、ほかの出土土器と同様に器面の摩滅が顕著であるが、調整を把握することはできる。底部は平底、体部は弱く内湾しながら開き、口縁部の立ち上がりにも内湾を伴う。体部と口縁部の境については、連続する内湾形態を呈するために、稜を伴わない。ただし、体部の外面には横方向のミガキ調整、口縁部の外面には斜方法のハケ調整が観察でき、外面調整において両者の差異が明確化されていることがわかる。口縁端部には明確な面を伴う。片口は、内面側から端面を潰すように押し出してつくっている。内外面の周間に工具や指頭の痕跡はほとんど認められない。以上の形態的特徴から、概ね弥生時代中期後葉頃に位置づけることができる。

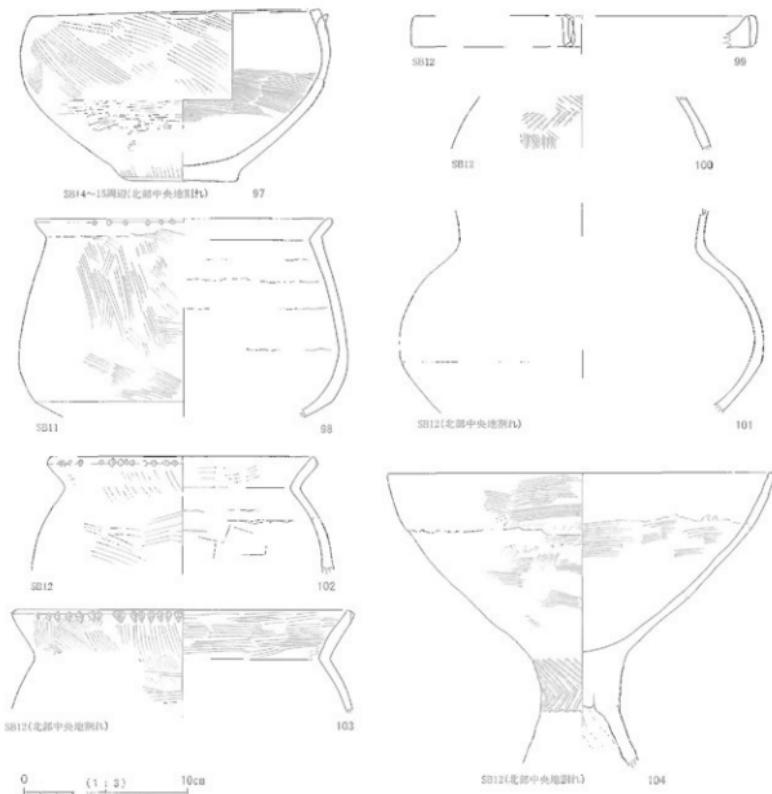
**SB11出土土器（第78図98）** 98はSB11出土の壺の破片であり、口縁部から胴部下位までを把握することができる。口縁部は、胴部から屈折して短く開き、端部には刻みがめぐる。屈折には内面に稜、外面にも稜もしくは接合底を伴う。胴部は、下位において大きく開き、屈曲する中位を介して直立に近く立ち上がる上位に至る。下位と中位との境には、外面の稜を伴う。外面においては、上位に縦方向のハケ調整、中位に斜方向のハケ調整を観察することができる。口縁部の調整は摩滅のため不明であるが、胴部から連続しない可能性が高い。内面の摩滅も著しく、輪積み痕が観察できる。形態的特徴などから、概ね弥生時代後期前葉頃後に位置づけることができる。

**SB12出土土器（第78図99～104）** 101・103・104は、北部中央の地割れから出土した土器のうち、出土位置・出土状況からSB12に伴っていた可能性が高いと判断できる。その他はSB12の出土である。

99は、壺の受口状口縁であり、棒状浮文が貼り付いている。100は壺の胴部片であり、上位に羽状の櫛刺突文がめぐる。101は頭が太く、口縁部は直立に近く立ち上がる。口縁端部は欠損しているが、図にし

た長さから大きく伸びる可能性は低い。胴部は全体に低平である。下部は大きく開きながら立ち上がり、上半部は内湾しながら立ち上がる。両者の境には、外面の後を伴う。摩滅が著しく、調整は不明である。102・103は、球形に近い胴部と「く」の字の口縁部を伴う甕である。両者は、共通して口縁端部に刻みがめぐり、口縁部外面に縦方向のハケ調整、口縁部内面と胴部外面に横方向のハケ調整、胴部内面にケズリ調整が施されている点でも類似している。ただし、102に比べて103の方が大型である。104は、脚部上位から坏部が残存する高坏であり、鉢形の坏部を伴う。脚部は、菊川様式の高坏としては上部からの開きがやや大きい。接合部は円柱形に近く、羽状の櫛刺突文がめぐる。坏体部は、接合部から立ち上がりながら開き、内湾しながら口縁部に至る。口縁部は、体部から連続するように内湾しながら開き、端部には上向きの面を伴う。体部と口縁部との境は、明確に屈折するわけではなく、接合痕によって把握できる程度である。坏部の外面にはハケ調整を観察することができる。

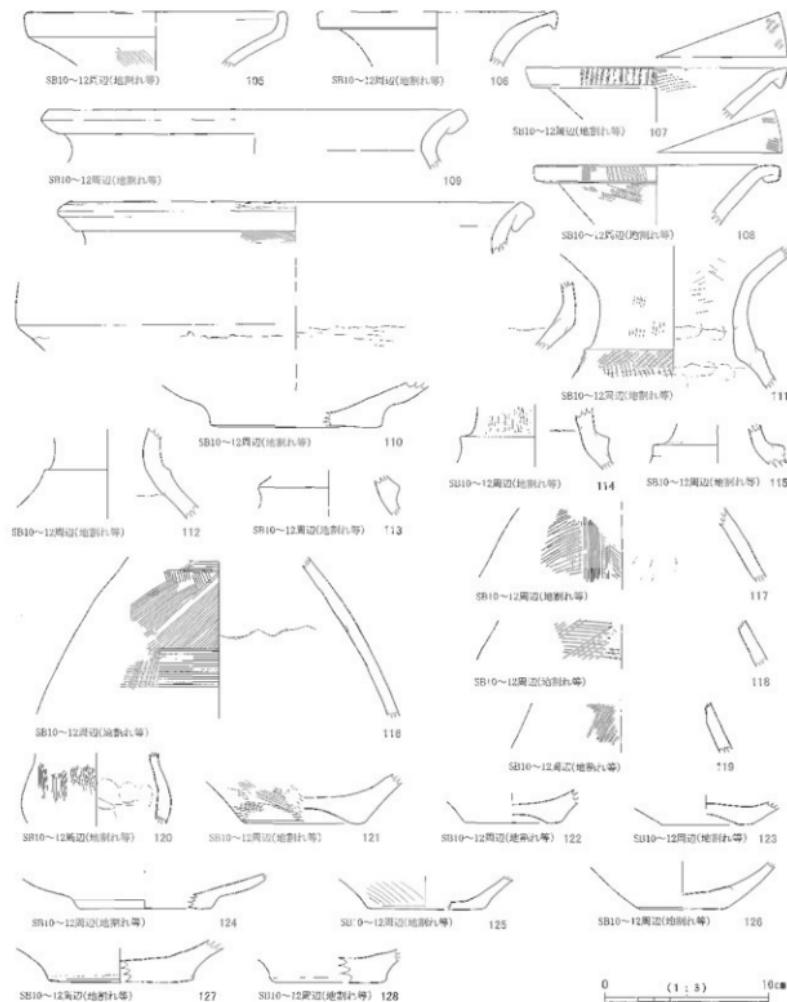
以上の土器群は、その特徴から概ね弥生時代後期中葉頃に位置づけることができる。



第78図 北部出土弥生土器⑥

弥生時代の遺構と遺物 1 (北部)

SB10～12周辺出土土器（第79・80図105～140） 北部中央の地割れから出土した土器のうち、SB14・15もしくはSB12に伴っていたと特定できるものについては、既に述べてきた。しかし、その他にも多くの土器片が地割れ内から出土している。地割れの北側（SB09・10周辺）においては、中世の整地などによる遺構間の土器片の散乱・混在が指摘されている。したがって、以下に述べる小破片については、本来の遺構を特定することが難しく、SB10～12周辺の可能性が高い地割れ等出土土器として把握する。

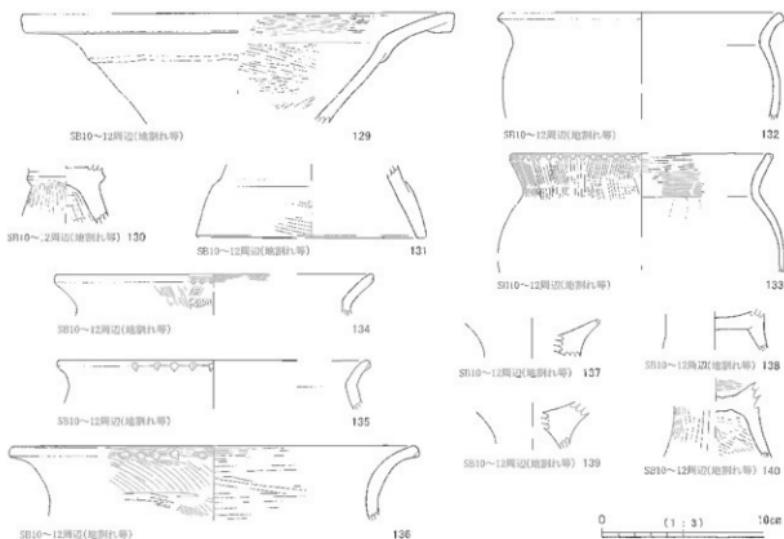


第79図 北部出土弥生土器⑦

105～108は、細い頸部から聞く壺の口縁部である。105は外反しながら開き、受口状の端部を伴う。106も外反しながら開くが、端部は外向きの面を伴う。107と108は直線的に開き、端部に折り返しを伴う。端面に縦方向の刺突、内面に繩文が施されている点でも共通する。109・110は、太い頸と短く聞く口縁部を伴う壺である。口縁端部には折り返しを伴う。110には胴部片や平底の底部片が伴う。111～115は、壺の頸部である。いずれも細い長頸の壺であり、頸部下端に断面三角形の突帯を伴っている。その中で、111は他に比べて頸部がやや太く、突帯に羽状の櫛刺突文が施されている点で異なっている。頸部外面の調整においても、111が縦ハケの後に横方向のナヂが施されている点で異なっている。114には縦方向のミガキ調整が施される点で異なる。116～119は、長頸の壺の胴部片である。116～118には櫛文、119には繩文が胴部上半の広い範囲に施されている。120は小型壺の胴部片であり、頸が太く無文である。121～128は壺の底部であり、上げ底状になるものと平底がある。

129～131は、高坏の破片である。129は鍔状口縁の坯部であり、端部に折り返しを伴う。体部と口縁部の境について、内面の稜が部分的に不明瞭になる。130は三角突帯を伴う接合部、131は屈曲・屈折の弱い脚裾部である。132～136は、壺の口縁部～胴部の破片である。132・133は球形に近い胴部と外反気味に聞く口縁部を伴う。133には口縁端部にめぐる刻みが把握できるが、132は摩滅が著しいために把握できない。134・135は端部の刻みを伴う口縁部であるが、133に比べて口縁部全体が短い。136の口縁部は長く、大きく外反する。137～140は台付壺の台部である。粘土紐や文様を伴うものはない。

これらの土器には、弥生時代中期後葉～後期初頭に位置づけできるもの（105、112～115、116～119、130など）と、より新しい時期の可能性があるもの（111、129、131～133など）とがある。複数の造構から混入している可能性が高いと判断することができる。



第80図 北部出土弥生土器⑧

**SB13出土土器** (第81・82図141～187) 141～143は壺の口縁部である。いずれも長頸の壺に伴う可能性が高い単純口縁であるが、外反の程度などに個体差がある。144～149は、頸部から胴部上半の間に該当する壺の破片である。頸部が残る144～146においては、いずれも頸部下端に無文の三角突帯を伴う。胴部上半の形状については、144～149の全てが肩の張らない下膨れ形の胴部に復元でき、148以外については、細い頸部へと緩やかに内湾しながら立ち上がっていることがわかる。146・148には繩文、145・147・149には櫛描文が胴部上半の広い範囲に施されている。150は、SB13の西壁寄りから出土した壺の胴部下半であり、上げ底状の底部を伴う。下膨れ形の胴部に復元することができるが、胴部最大径付近の屈曲に稜は伴わない。外面においては、最大径付近より下にミガキ調整、その上には縦方向のハケ調整を観察することができる。152は150とともに出土した底部片であり、上げ底状を呈する。151は壺の胴部最大径付近の破片、153～165は壺もしくは鉢の底部片である。底部は、上げ底状のものと平底がある。166・167は鉢の直立する口縁部の破片であり、167には片口が確認できる。166に片口を伴うかは不明である。166には櫛描波状文、167には繩文が施されている。

168・169は、鈍状口縁を伴う高杯の杯部片である。体部と口縁部との境には、内面に断面三角形の突出を伴う。170は突帯を伴う高杯の接合部であるが、他の三角突帯とは形状が異なる。また、焼成が良好であるためか、器壁が硬く、白色に近い明黄色を呈する点で他の多くと異なっている。171は明確な屈曲を伴う高杯の脚据部であり、脚据部の外面には無節の繩文が施されている。172～178は、口縁部が残る壺の破片である。172は、胴部上半が直立に近く立ち上がる可能性が高く、そこから大きく述べて開く口縁部へと屈曲する。口縁端部は明確な面がつくられており、そこに刻みは伴わない。174の器形も近い特徴を有する可能性があるが、174の口縁端部には明確な面が把握できず、廻済した中に刻みを観察することができる。173や175～177は172などとは異なり、球形に近い胴部に復元することができる。口縁部は外反しながら開き、端部には刻みがめぐる。178は、他より大型の壺の口縁部である。胴部の形状は不明であるが、口縁部は外反しながら開き、端部に刻みがめぐる。口縁部と胴部との境の外面には、接合痕が残る。179～187は、台付壺の台部である。179の接合部には、指頭痕が連続する粘土紐を伴う。186・187の裾には、内面に張り出しや折り返しを伴う。

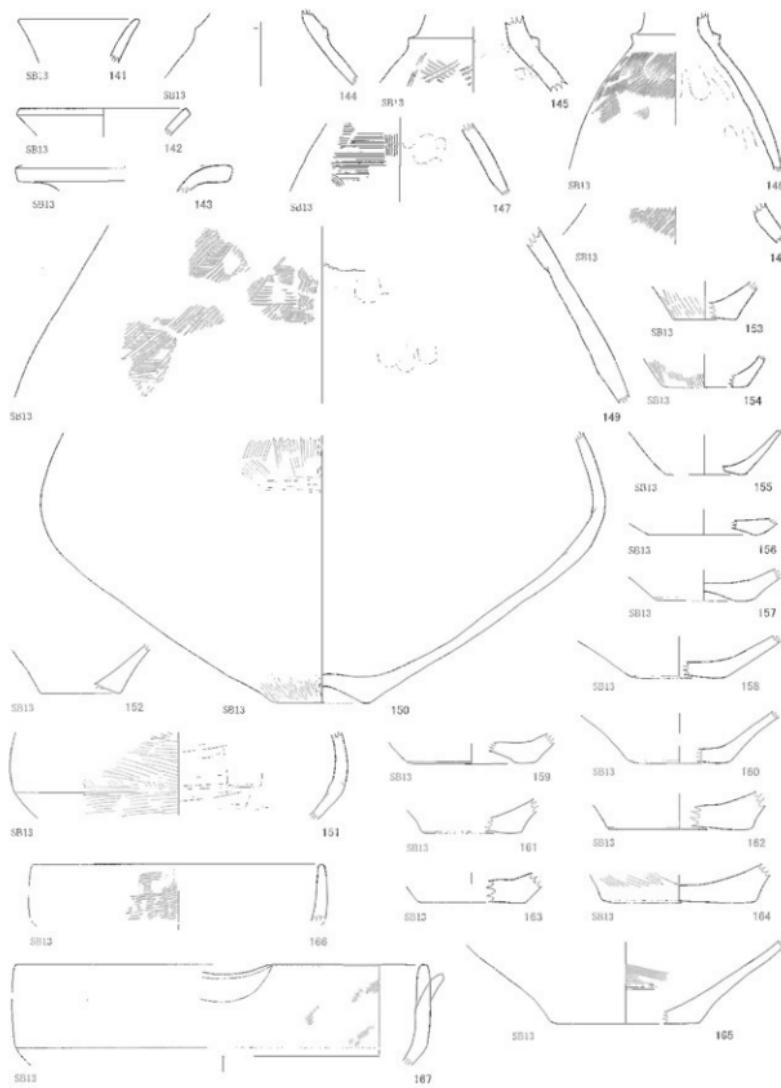
SB13付近は断層の影響を受けており、小さな土器片については他からの混在が含まれている可能性を考慮する必要がある。しかし、弥生時代中期後葉～後期初頭の中に位置づけできるものが主体となっていることがわかる。SB13に伴う可能性が高い150についても、同様に位置づけることができる。

**SB15出土土器** (第83図188～201) 188は、受口状の壺の口縁部である。189は、直立するように立ち上がる口縁部であり、外面に繩文を観察することができる。鉢もしくは広口の壺である可能性を考慮することができる。190～192は壺の胴部片であり、胴部上半の広い範囲に櫛描文や繩文が施されたことがわかる。191には円形浮文も確認できる。193・194は壺の底部であり、194は上げ底状になる。

196～198は高杯の杯部である。197と198は、胎土・色調が類似することから同一個体の可能性があり、比較的深い形状を成すことがわかる。ただし、体部は外反する。体部と口縁部の境は、内面に明確な突出を伴う。199は、接合部に三角突帯を伴う高杯の脚部であるが、台付壺の台部のように短小である。195は端部の刻みを伴う壺の口縁部、200・201は台付壺の台部である。

これら出土土器の全体をみると、弥生時代中期後葉～後期前葉の中での位置づけを考えることができる。しかし、SB15は断層や擾乱の影響を受けており、小さな土器片については他からの混在を含む可能性がある。残存状態の比較的良好な高杯（197～199）は、後期前葉に多く認められる特徴を伴う。

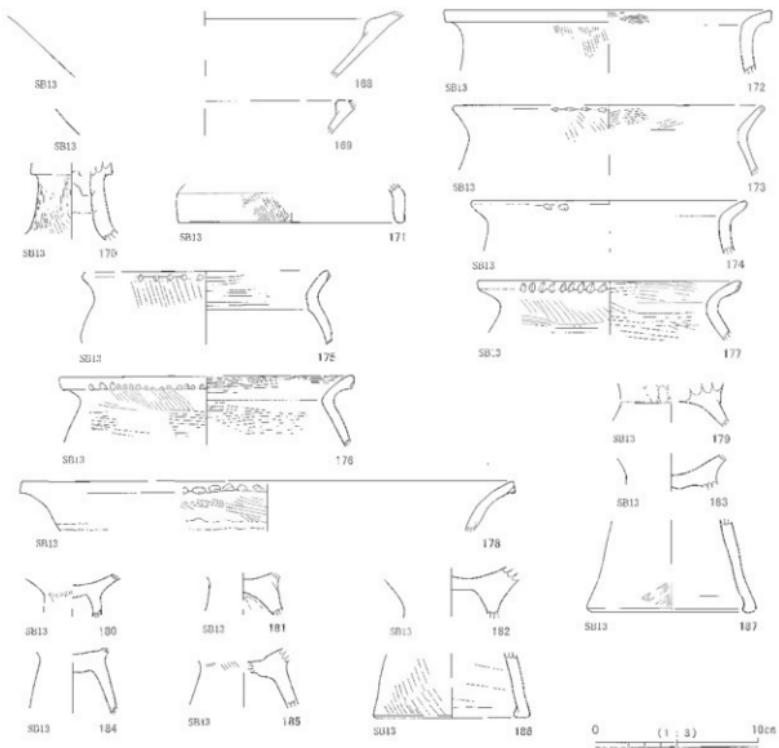
**SB16出土土器** (第83図202～208) 202は、櫛描文が広い範囲に施されている壺の胴部であり、小破片が数点出土している。203は、残存状態の良い鉢である。底部から直線的に立ち上がり、明確な屈折稜を介して直立する口縁部に至る。体部外面にはミガキ調整、口縁部外面には斜格子状のハケ目に近い櫛描



0 (1 : 3) 10cm

第81図 北部出土弥生土器⑨

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

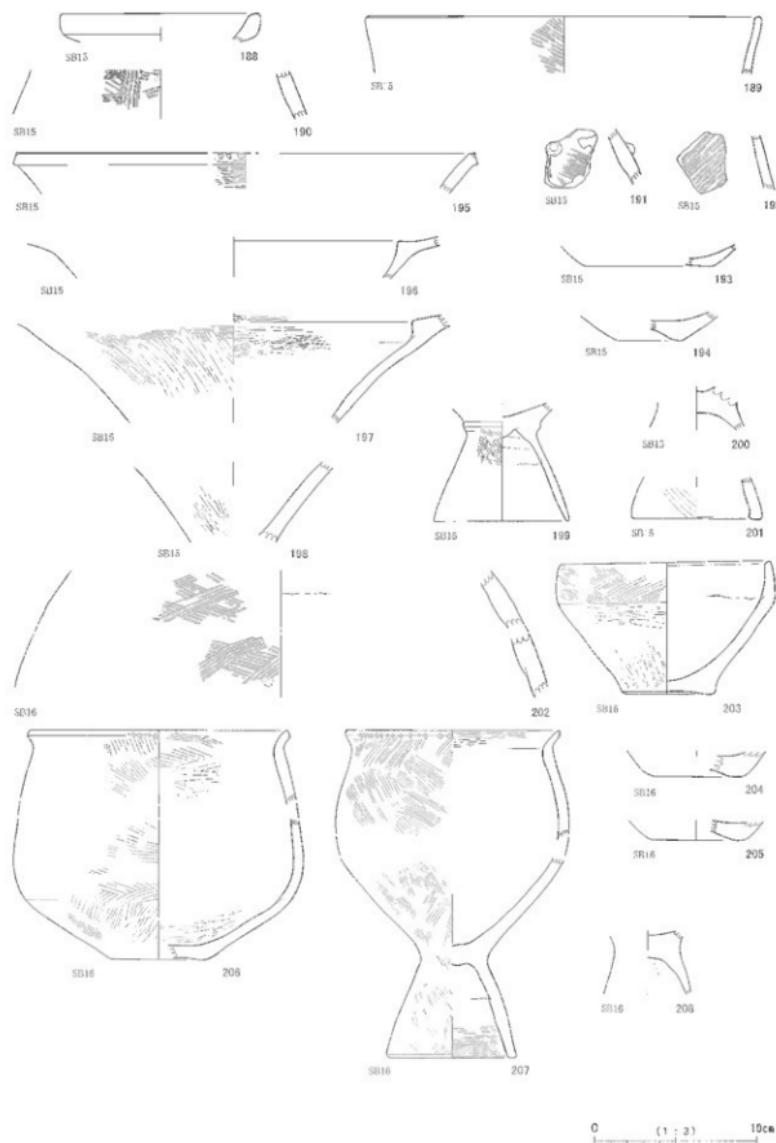


第82図 北部出土弥生土器⑩

文を把握することができる。片口について、欠損部（口縁部の約6分の1）に設けられていた可能性は否定できないが、現状においては確認できない。204・205は、上げ底状の壺の底部である。

206は菱形の胴部・口縁部を伴うが、台部を伴わず、底部や内面調整に鉢の特徴を併せもつ。底部は上げ底状であり、そこから大きく開いて胴部最大径となる屈曲部に至る。その屈曲部は、胴部の下寄りに位置する。胴部上半は、弱く内湾しながら直立に近く立ち上がり、緩やかな屈曲を介して口縁部に至る。口縁部は短く開き、端部には刻みがめぐる。外面全体と口縁部内面にはハケ調整が残されているが、胴部内面には滑らかな器面を有する。207は台付壺である。比較的小型の壺に復元でき、胴部最大径となる屈曲は概ね中位に位置すると把握できる。胴部上半の特徴は206に近い。208は台部である。

これら出土土器の全体をみると、弥生時代中期後葉～後期前葉の中での位置づけを考えることができる。しかし、SB16は断層などの影響を受けており、小さな土器片については他からの混在を含む可能性がある。残存状態の比較的良好鉢や台付壺（203・207）については、弥生時代中期後葉よりも後期前葉に位置づけできる可能性が考慮される。



第83図 北部出土弥生土器①

## 弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

1号周溝墓出土土器（第84・85図209～231） 209～211は、西辺周溝内から出土した壺である。209は、丸味を帯びた頸部上半から連続するように頸部に至り、屈曲を介して口縁部に至る。頸部には直立部分がほとんどない。口縁部は、外面に段を伴う複合口縁であり、わずかに内湾しながら開く。頸部下端～胴部上端に2条の突帯がめぐり、羽状の櫛刺突文が施されている。また、上の突帯には棒状の浮文が付く。浮文は3方向に9個ずつが並ぶ。突帯の下には結節を伴う無節繩文がめぐる。口縁部については、内面に結節を伴う無節繩文が施されている。その他の外面にはハケ調整、内面には指頭痕と輪積み痕を観察することができる。複合口縁に伴う段（外面）に、刻みのような凹凸が認められる。しかし、部分的に連続するものであり、頸部外面を調整している縦方向のハケがぶつかったものと判断できる。210は、口縁部が欠損している。欠損は胴部の一部にまで至っており、打ち欠きによるものかは判断が難しい。底部は中央がわずかに上がるが、概ね平底であると評価できる。胴部最大径は下寄りにあり、胴部～頸部の形態的特徴は209に近い。頸部から胴部上半にかけて、羽状の櫛刺突文が多段に施されている。突帯は伴わない。文様帶の下には、ハケ目の上から施したミガキ調整を観察することができる。211は胴部上位～頸部の破片であり、口縁部内面に繩文、頸部下端～胴部上端に突帯を伴う羽状の櫛刺突文、その下に結節繩文が施されている。形態的特徴は209と類似する。

212～215は、方台部を横断する地割れから出土した壺の口縁部片である。いずれも大きく外反することなく開き、端部に折り返しを伴う。端面における棒状浮文の有無や配置、口縁部内面の繩文や刺突文などには個体がある。216は太い頸と短い口縁部を伴う壺である。口縁端部には折り返しを伴い、刻みがめぐる。217は周溝出土の壺の口縁部片であるが、212などに比べて古い時期の特徴を伴う。

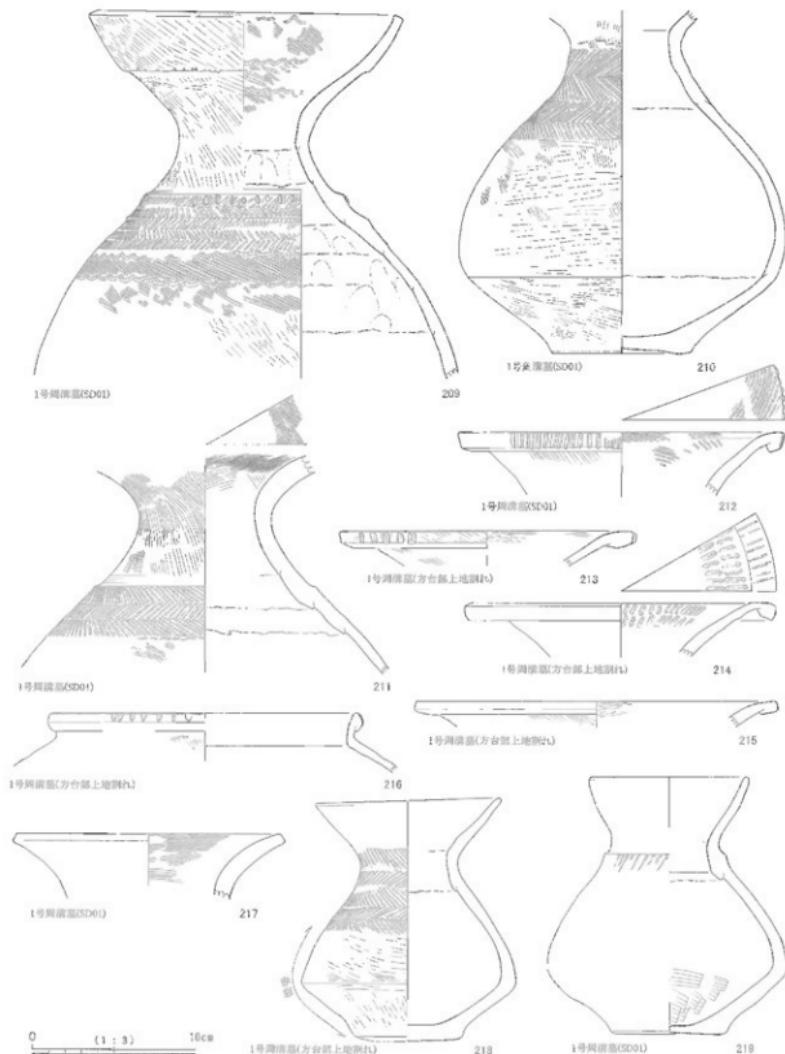
218・219は、地割れ出土の小型壺である。ともに欠損部分が少なく、大きな欠損は口縁部に限定される。ただし、器面の摩滅は著しい。218は、直線的に聞く口縁部を伴い、頸部から胴部上位にかけて羽状の櫛刺突文が多段にめぐる。一方の219は、内湾しながら開く口縁部を伴い、突帯を伴う櫛刺突文が頸部下端にめぐる。底部はともに平底であり、胴部の形態も類似している。218については、胴部下半外面の調整と赤彩を観察することができる。220は櫛刺突文を伴う壺の胴部片であり、下部にミガキ調整と赤彩を把握することができる。221～224は平底を主体とする壺の底部片である。

225～227は高杯の脚部片である。225の接合部には、櫛刺突文を伴う2条の突帯がめぐる。226・227の据部は低く、比較的明確に屈曲していることから、菊川様式の中でも古い段階の特徴を伴うと把握できる。228は壺の口縁部であり、端面に刻みを伴う。229～231は台付壺である。229だけは、指頭痕が連続する粘土紐を接合部に伴う。231は概ね全体を把握することができる。台部は直線的に開き、胴部は上半が球形に近くなる形態を呈する。口縁部は比較的長く立ち上がり、端部に刻みがめぐる。全体的にハケやケズリの調整が把握でき、胴部中位外面と底内面にススの痕跡を観察することもできる。

出土状況から、209～211が1号周溝墓に伴う可能性が最も高いと判断できる。それらは、概ね弥生時代後期末葉頃に位置づけることができ、218・219なども同様の時期に把握することができる。一方、217や226・227などについては、土器の特徴から弥生時代後期中葉以前の可能性が高いと判断でき、住居跡群からの混在の可能性を指摘することができる。

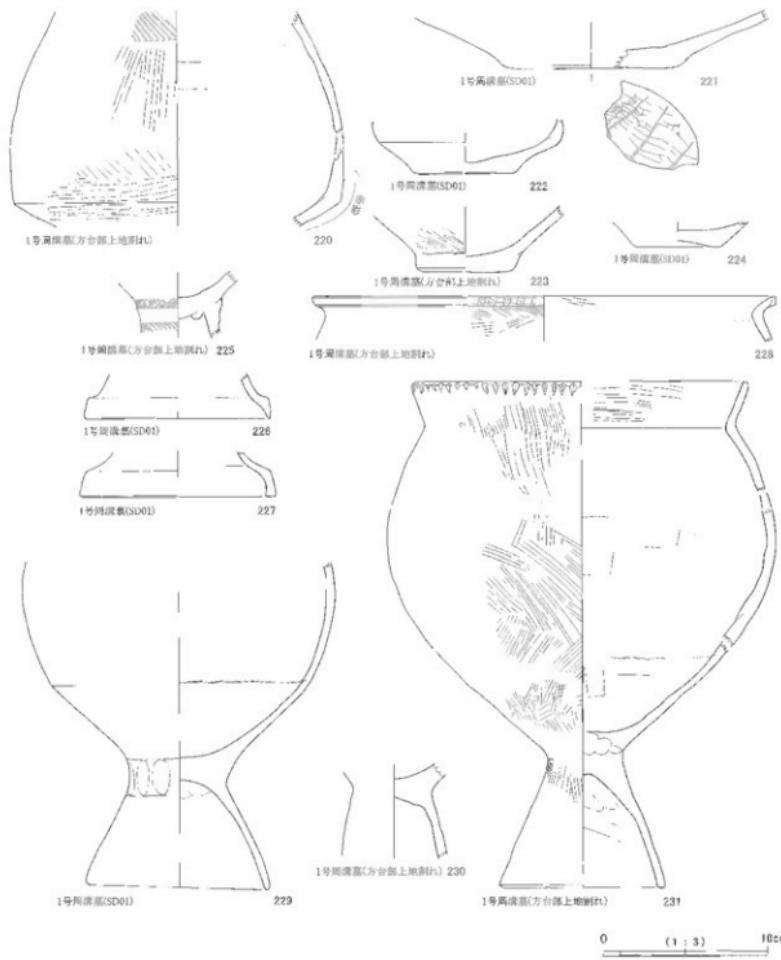
SF07・10出土大型壺（第86図232） 232は中世の土坑であるSF07から出土し、SF10からもいくつかの破片が出土した大型壺である。頸部～口縁部は欠損している。底部は平底であり、胴部は球形に近い形態を呈する。ただし、胴部下位の接合部に稜を伴っている。外面調整は摩滅のために不明、内面にはケズリと指頭痕、胴部下位の接合痕を観察することができる。形態的特徴から、概ね弥生時代後期後葉～末葉の中に位置づけできる可能性が高い。

SF11土器棺（第86図233・234） 233は土器棺の蓋として使用されていた壺の胴部下半である。底部は平底、胴部は下彫れ形に復元できる。234は土器棺の身として使用されていた大型壺の胴部である。頸部～



第84図 北部出土弥生土器②

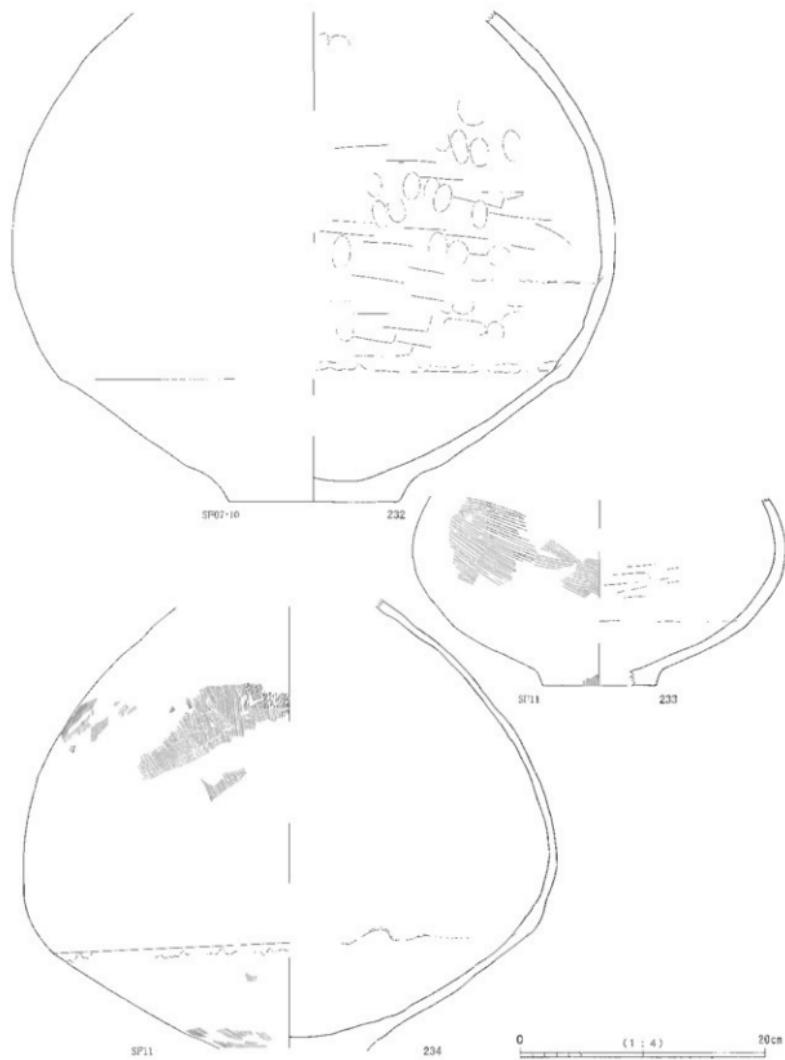
弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第85図 北部出土弥生土器①

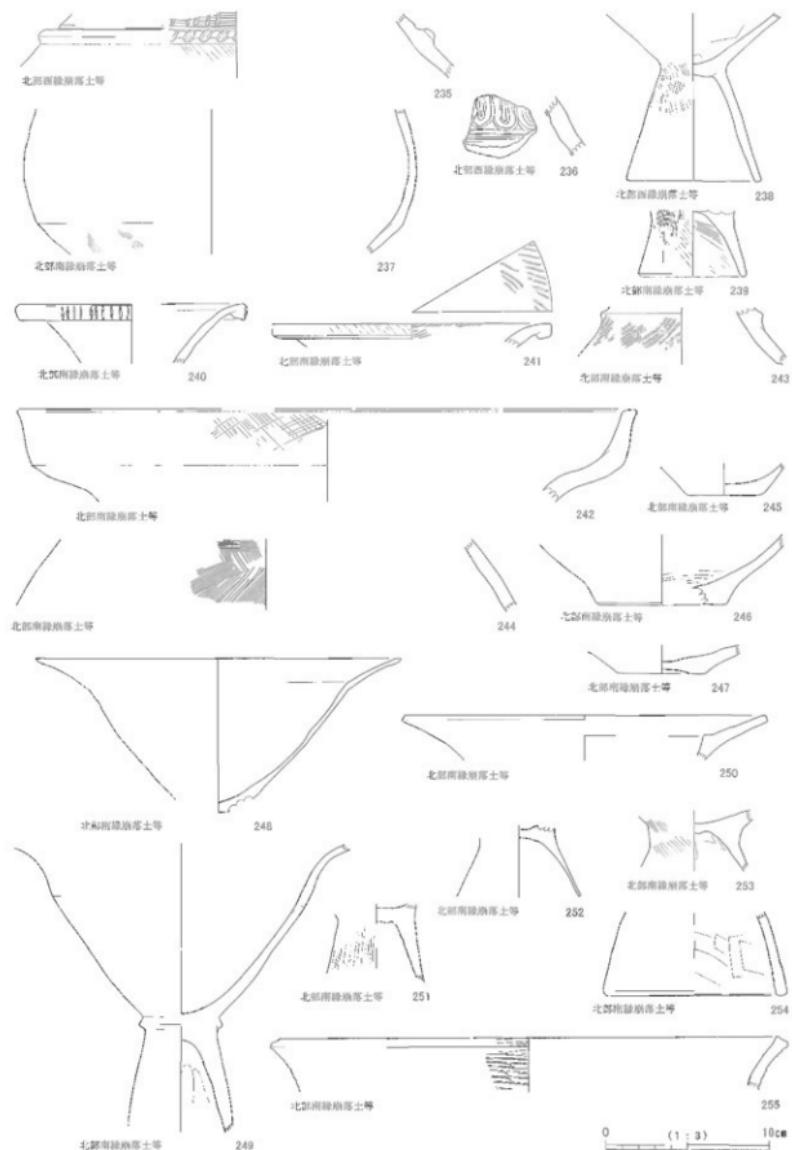
口縁部が失われている。232に比べて胸部は下膨れ形に近い。下位に接合に伴う痕跡と外面の継ぎを伴う。形態的特徴などから、弥生時代後葉～末葉の中に位置づけできる可能性が高い。

調査区北部南縁崩落土等出土土器（第87図235～255） 調査区北部の南縁では、斜面の崩落土や流土などから多くの土器片が出土している。住居跡から出土するような弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づけできる土器が主体となっているが、弥生時代中期中葉に遡る可能性がある土器片（235・236・255など）も出土している。



第86図 北部出土埴生土器④

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



第87図 北部出土弥生土器⑫

## (2) 石器

**有孔磨製石鎌**（第88図256・257） 256と257は、有孔磨製石鎌の完成品である。抉りの弱い凹基式の石鎌で、側刃が弱い弧状を描く細長い二等辺三角形を呈する。茎部はない。基部寄りの中央には、円形の穿孔があり、両面から穿たれたことがわかる。全面に施される研磨は、中央付近の研磨、刃の研磨、基部の研磨に大別して把握することができる。

256は、北部中央の地割れからの出土であったが、ほぼ完存している。凝灰質粘板岩製である。SB13の未製品群から製作されたとするには小さすぎる。むしろ、259のような小型の未製品からの製作が適当であると判断できる。なお、表面の赤紫色は保存環境などによって変化したものであろう。257は、SB13石鎌未製品群の近辺から出土している。しかし、石材は未製品群よりも良質の黒色粘板岩である。また、断層や崩落の影響が少ない場所からの出土であるにも関わらず、先端が欠損している。

**磨製石鎌未製品等**（第88図258～270） 258～270は、SB09・SB13・SB19および北部南縁崩落土から散在的に出土した磨製石鎌の未製品である。形態的特徴などから、256・257のような有孔磨製石鎌（無茎）の未製品である可能性が高いと判断できる。

268は玄武岩製、258・267は角閃岩製であるが、その他の多くは粘板岩製である。粘板岩製の中でも違いがあり、262のように良質のものもある。しかし、基本的にはSB13石鎌未製品群（271～298）と同類の石材が多く用いられていると評価できる。未製品の大きさについては、大型と小型（259、267～270）に大別することができる。大型のものはSB13石鎌未製品群と同等の大きさである。ただし、石材と大きさの相関関係について、厳密には認め難い。

これら未製品には、二次調整までの多くの剥離が施されている。擦切技法は認められない。とくに粘板岩製の大型品には、刃になる側縁に細かい剥離が多く認められる。ただし、全ての両側縁に細かい剥離が連続しているわけではなく、一方の側縁にかたよるもの（261・266）もある。基部に細かい剥離があるのは260と264だけであり、しかも、片面の剥離に限られる点で側縁調整とは異なっている。小型品および角閃岩製の258については、側縁を含めて細かい剥離が少ない。

259～261の3点には、部分的に研磨が施されている。研磨痕の場所や研磨方向から、これらの研磨は完成品における中央付近の研磨に該当すると判断できる。

**SB13石鎌未製品群**（第89・90図271～298） 271～298は、SB13において集積された状態にあった石鎌未製品群である。未製品群の集積は、3つの東（東A：271～280、東B：281～290、東C：291～298）によって構成されていた。なお、掲載順（番号）は各東の上にあった順であり、各実測図について、出土状況において上を向いていた面を左側に掲載している。

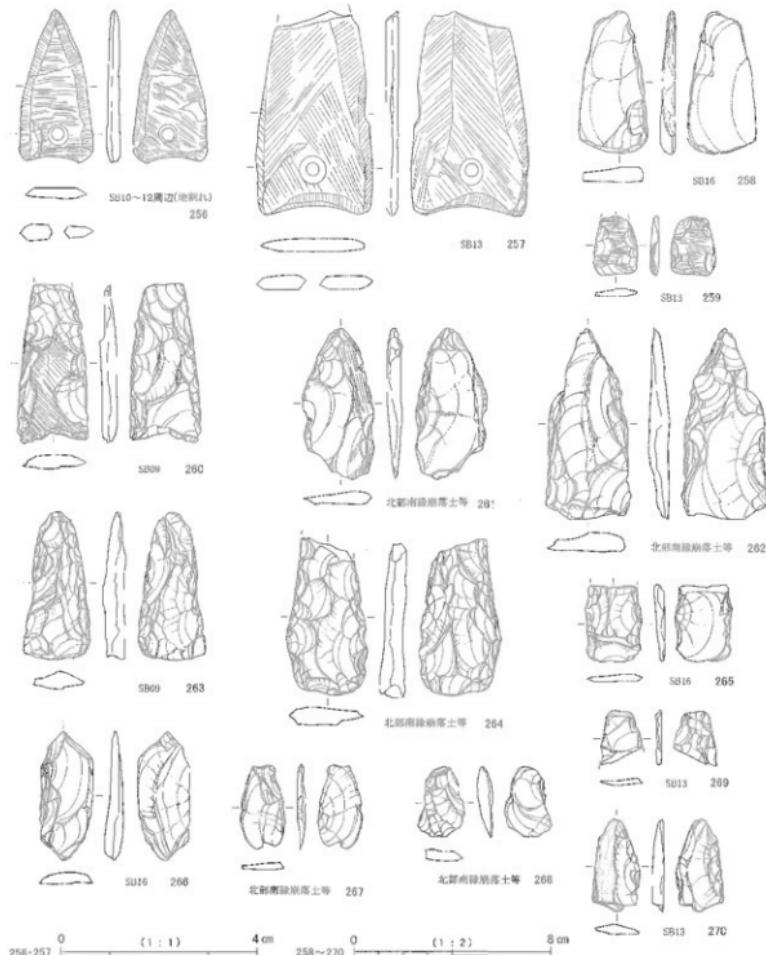
形態的特徴は全て260～264と同様であり、有孔磨製石鎌（無茎）の未製品群であると判断できる。石材は全て千枚岩質粘板岩製である。278・290は褐色化の弱い比較的良質のものであるが、その他は暗褐灰色を呈しており、良質とは言えない。大きさは全て本遺跡において大型に分類される。形態は、いずれも細長い二等辺三角形を呈するが、長さや基部の幅、側縁の膨らみなどに個体差がある。さらに、東ごとの形態差も指摘することができる。東Aは、全体的に短く小振りのもので占められており、東の下の方へと小振りになる傾向にある。東Bは、東Aに比べて全体的に大きく、東の下の方へと大振りになる傾向にある。また、285のような二等辺三角形に近いものから、281・282のような細長く側縁が弧状を成すものまである。東Cは、全体的な特徴は東Bに近いが、292・295・297のように細長いものが東Bよりも目立つ。また、東の上の方に大振りなもの（291・292）がある点は、東Bと異なっている。

石鎌未製品群を構成する全ての個体において、側縁を中心に細かい剥離（二次調整）が認められ、研磨と穿孔を経れば完成品（有孔磨製石鎌）になる形がつくられている。一方、部分的にでも研磨痕のある個体は含まれていない。以上から、細かい剥離による二次調整が終了し、研磨を開始する前段階のも

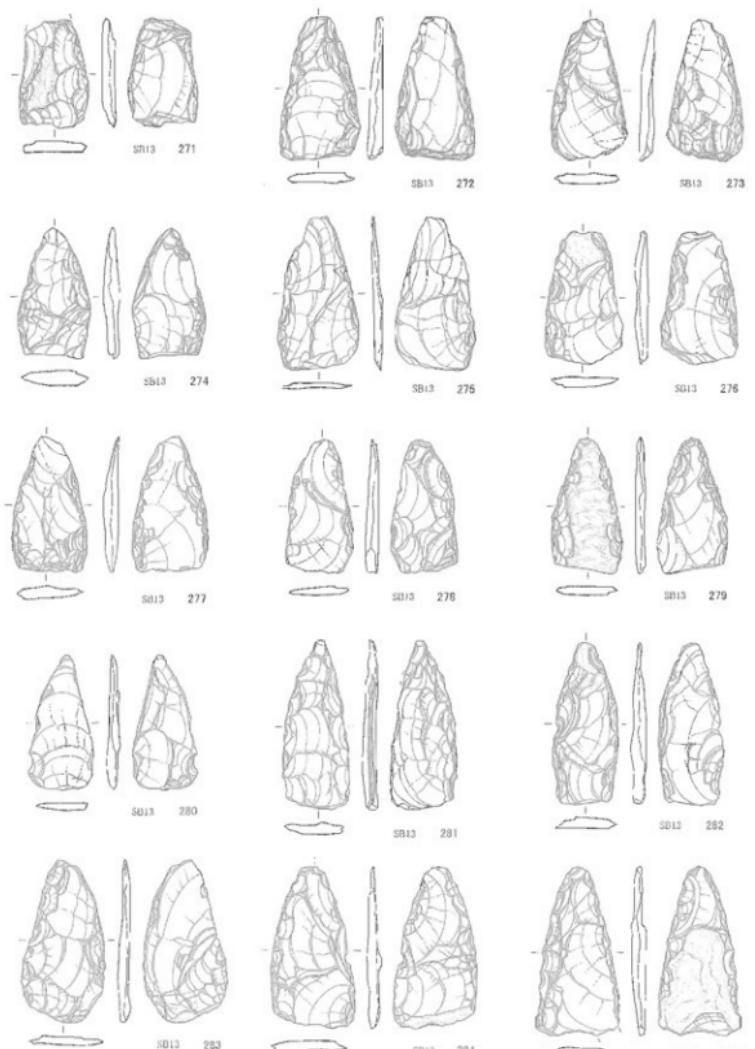
弥生時代の遺構と遺物 1(北部)

のを束にしていたことがわかる。なお、280をはじめとする小振りなものの中には、細かい剥離(二次調整)が少ないものや、片面や一方の側縁にかたよるものがある。また、基部に二次調整があるものは3分の1以下であり、その大半が片面の剥離に限られている。二次調整は、研磨前段階の整形として必要な部分に施したものであり、自然面が残されているものもある。なお、擦切技法は認められない。

有孔磨製石鏃の製作について 以上のように、調査区北部では磨製石鏃および磨製石鏃の未製品が多く出土しており、これらは全て無茎の有孔磨製石鏃であることがわかる。一方、中央～南部から出土す



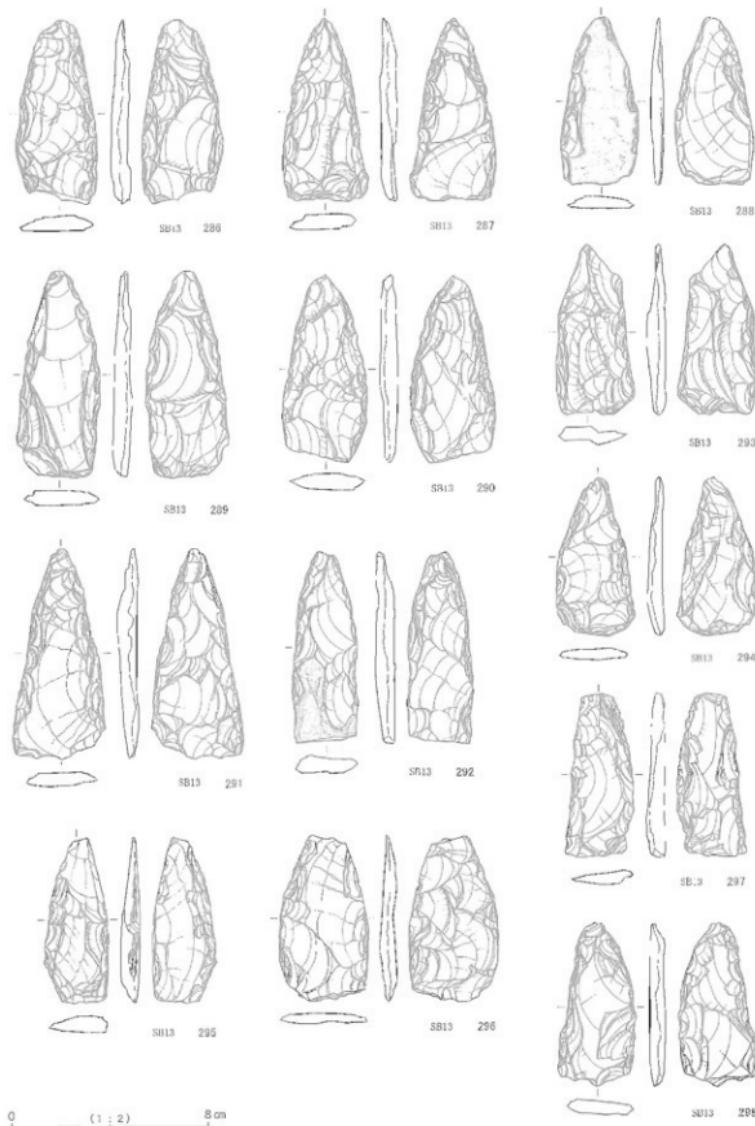
第88図 北部出土石器①



0 (1 : 2) 5 cm

第89図 北部出土石器②

弥生時代の遺構と遺物 1(北部)



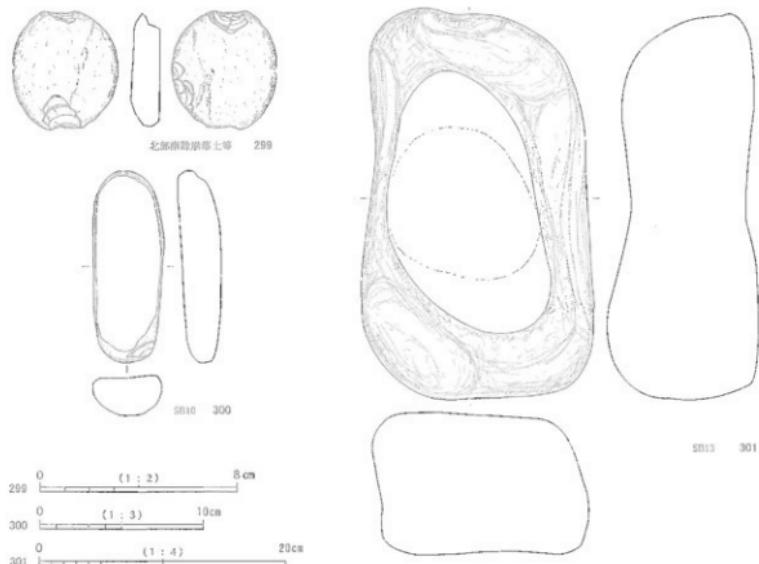
第90図 北部出土石器③

る磨製石鎌は完成品に限られ、その形態も無茎の有孔磨製石鎌とは異なっている（本章第3節8、第4節5参照）。したがって、有孔磨製石鎌は調査区北部に居住する者の中で扱われ、中央～南部にはない生産活動が行われていた可能性が指摘できる。

石鎌の生産に関連する未製品の出土について、SB09・SB13・SB16などにおける研磨前段階および研磨を開始した未製品の散在的な出土と、SB13における研磨前段階の未製品群（集積）の検出がある。前者は、各住居において研磨（および穿孔）作業が行われ、有孔磨製石鎌を完成させていたことがわかる。一方の後者は、そのための素材（研磨前段階の未製品）を一ヶ所（SB13）にまとめて保管していた可能性を指摘することができる。

SB13石鎌未製品群に至るまでの製作工程を示す原石や石核は出土していない。碎片については、SB13石鎌未製品群が発見された後（現地調査の後半）になって精査するようになったため、それ以前の廃土に含まれていた可能性はあるが、少なくとも精査した中においては確認されなかった。以上を評価するならば、研磨前段階の未製品群は調査区外から持ち込まれたものであると判断できる。研磨前段階までの製作工程は、採石場所付近や中継地といった本遺跡以外の場所で行われ、そこで用意された未製品群（束）が本遺跡のSB13に持ち込まれたと推測することができる。

石鍤・砥石・台石（第91図299～301） 299は、北部南縁の崩落土等から出土した石鍤である。円形で扁平な河原石を用い、その両端を打ち欠いてつくられている。300は、SB10から出土した砥石である。細長い纏（片麻岩）によるものであり、広く平坦な面に研磨が認められる。301は、SB13から出土した台石である。砂岩の河原石を用いており、広い面（表裏2面）に使用が認められる。



第91図 北部出土石器④

## 第3節 弥生時代の遺構と遺物2(中央部)

### 1. 中央部における弥生時代の遺構・遺物

検出遺構 堪穴住居跡5軒 (SB17～SB21)

土坑1基 (SF26) ※SB21内において検出

掘立柱建物跡1棟 (SH03) ※複数回の建替えあり

溝(区画溝) 3条 (SD03・SD07・SD08)

埋葬関連 中央墓群…土坑墓3基 (SF14・SF15・SF17)

円形土坑1基 (SF18)

溝状遺構2基 (SD05・SD06)

土器棺墓5基 (SF19～SF23)

単独立地…土器棺墓1基 (SF25)

落し穴2基 (SF13・SF16) ※縄文時代～弥生時代の遺構

※SF24、SD02・SD04は古代以降の遺構として本章第5節で報告する。

出土遺物 掲載遺物

堪穴住居跡…弥生土器各種破片、磨製石鎌2、凹石1

土坑…弥生土器壺2

掘立柱建物跡…弥生土器各種破片

区画溝…弥生土器各種

埋葬関連…弥生土器各種、土器棺

遺構外…弥生土器各種破片

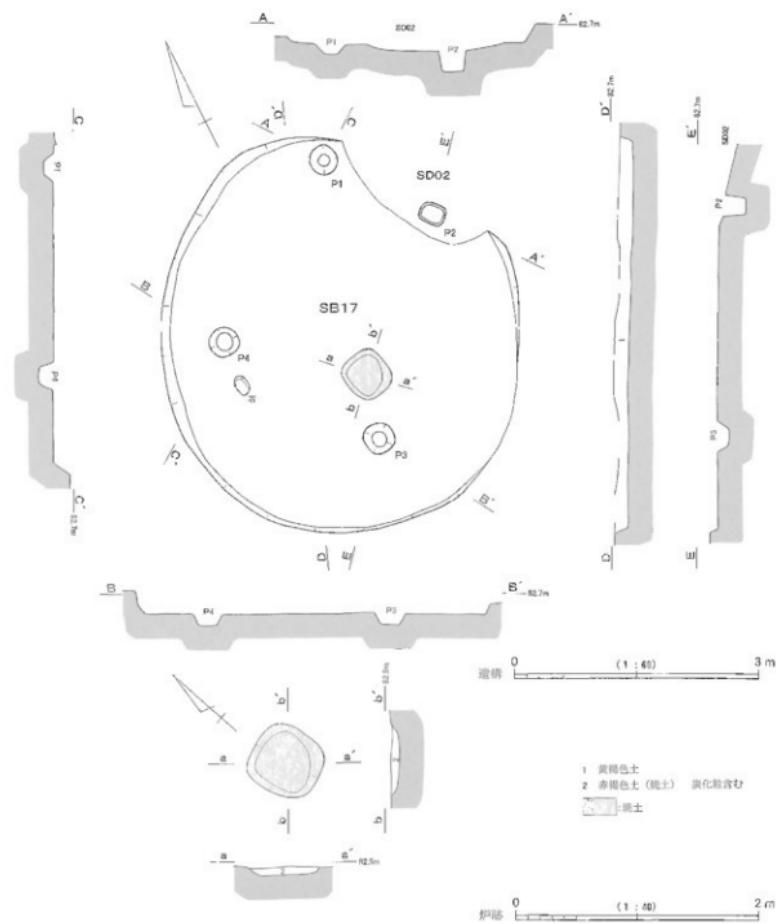
### 2. 堪穴住居跡

SB17 (第92図) 調査区中央のI6グリッドに位置し、幅の狭い丘陵上平坦面に立地する。この平坦面は南へとのびる一方、北側は済 (SD02・SD03) を介して調査区北部へと上の斜面となる。SB17は単独的に立地する住居跡であるが、北東部がSD02によって切られている。

平面形は梢円形であり、本遺跡の中では規模が比較的小さい。検出は掘方によるものであり、貼床・壁溝は把握できなかった。掘方底面が概ね水平・平坦であること、掘方底面において炉跡の掘り込みが検出されていること、覆土から一定量の土器片が出土していることなどから、貼床が厚く施されていた可能性は評価できない。炉跡は中央南寄りに位置する。一辺0.5m前後の方形を呈し、深さ0.1mに溝たない掘り込みの全体に焼土が認められた。柱穴は、長方形に配置された4基 (P1～4) を検出した。いずれも深くはない。また、柱穴の方形配置について、住居の平面形や炉跡の位置に対してずれている。

遺物は、少数ながら弥生土器片が出土している (第108図302～304)。小破片の出土に限られているが、概ね弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づけできる堪穴住居跡であると判断できる。

SB18 (第93図) E5グリッド東縁に位置する。丘陵上平坦面の西際に立地しており、南東部以外は崩落・流土の影響や擾乱によって失われている。

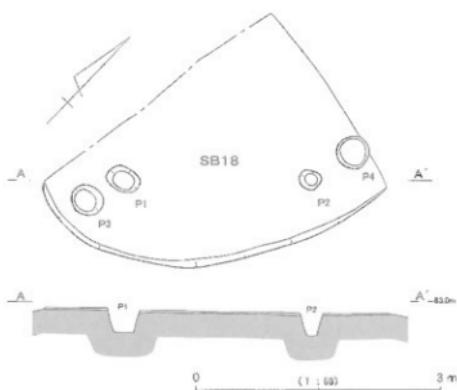


第92図 SB17

平面形は、楕円形に近い形状に復元できる。掘方底面に厚さ数cmの薄い貼床が施されているが、壁面は設けられていなかった。炉跡の有無は把握できない。柱穴については、南東壁寄りの2ヶ所に2基ずつ、計4基の小穴を検出した。小穴の位置から、4本柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。さらに、P1・P2が深く、P3・P4が浅いという対応関係が把握でき、控え柱の可能性もしくは建替えがあった可能性などを考慮することができる。出土遺物はない。

SB19（第94・95図） E6グリッド南部に位置する。丘陵上平坦面の東寄りに立地しており、東端部が

弥生時代の遺構と遺物2(中央部)



第93図 SB18

斜面の流土によって失われている。他の遺構との切り合いはない。

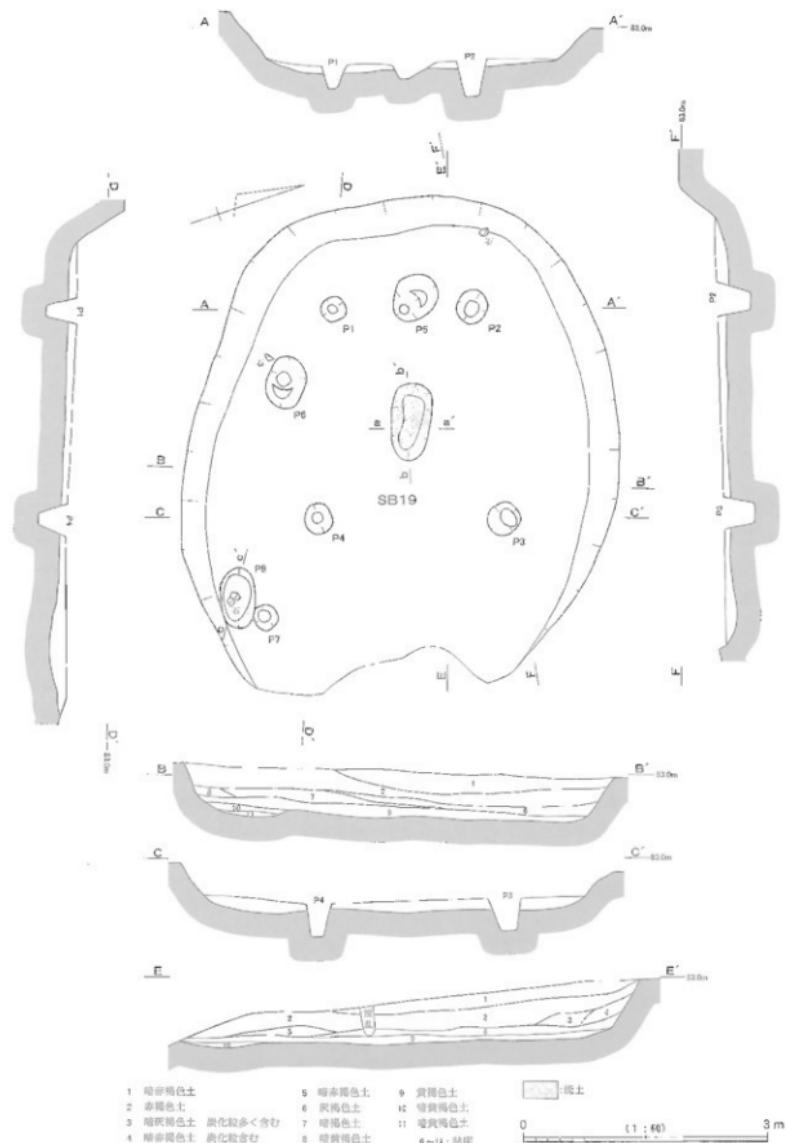
平面形は、短辺が直線的な楕円形である。壁体の立ち上がりが緩やかであるのが特徴的である。貼床(9~11層)による床面を検出することができたが、壁溝は認められなかった。掘方底面は南縁部が深くなる。炉跡は、床面の中央に位置する。平面形は、住居の主軸方向に長い楕円形を呈する。掘り込み内の全体に焼土が認められた。柱穴については、長方形に配置された4基(P1~4)を把握することができる。その他にP5~8を検出しているが、P5・6はP1~4に比べて大きな柱穴であり、SB19とは異なる柱穴が重複して検出されている可能性もある。P8は、その位置や大きさから貯蔵穴である可能性が指摘できる。P7はP8に隣接する柱穴である。

遺物は、弥生土器の小破片が出土している(第108図305~308)。遺構や出土遺物の特徴から、概ね弥生時代後期前葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB20(第96図) D5グリッド中央に位置する。丘陵上平坦面に立地するが、南東端部が流土などによって失われている。さらに、南東端部はSF26に切られている。北西縁部は擾乱(山道跡)と重なるが、床面までは壊されていない。住居跡南西部において、床面まで達する円形の擾乱がある。

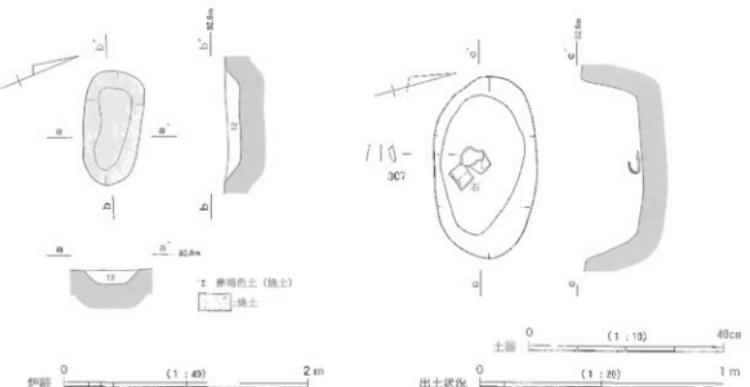
平面形は、胴張り部分のある隅丸長方形である。掘方はSB19と同様に南寄りの縁が深くなる。壁体の立ち上がりが緩やかである点も共通する。薄い貼床(6層)による床面を検出することができたが、壁溝が設けられていたのは北東縁部だけである。しかも、その壁溝はSB01のような細いものではなく、幅が0.5m前後もある。炉跡は、中央北西寄りに検出されている。径0.6m強の楕円形の掘り込み全体に焼土が認められ、その上面には赤化した硬い粘質土が板状に検出されている(赤化粘質土板)。炉跡の底は掘方底面に達している。柱穴は、方形に配置された4基(P1~4)を把握することができる。他の住居跡に比べて、柱穴が四隅の壁に寄っているのが特徴である。また、比較的小さい柱穴が目立つが、深さは決して浅くはない。

遺物は、弥生土器の破片が多く出土しているほか、有茎の磨製石鏟1点と凹石1点も出土している(第108図309~317、第115図357・359)。遺構・遺物の特徴から、概ね弥生時代後期前葉前後の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。



第94圖 SB19①

## 弥生時代の遺構と遺物2(中央部)



第95図 SB19②

SB21（第97・98図） D5グリッド南東隅に位置する。丘陵上平坦面の南東際に立地しているため、斜面の崩落などによって南東部が大きく失われている。北西部ではSF26によって切られている。SF26の掘り込みは、SB21覆土上から床面（貼床）をわずかに掘り込む深さまで達している。北縁部ではSF25（土器棺墓）と重なるが、SF25はSB21覆土上層を掘り込んで設けられており、SB21の床面や壁体への影響はほとんどない。

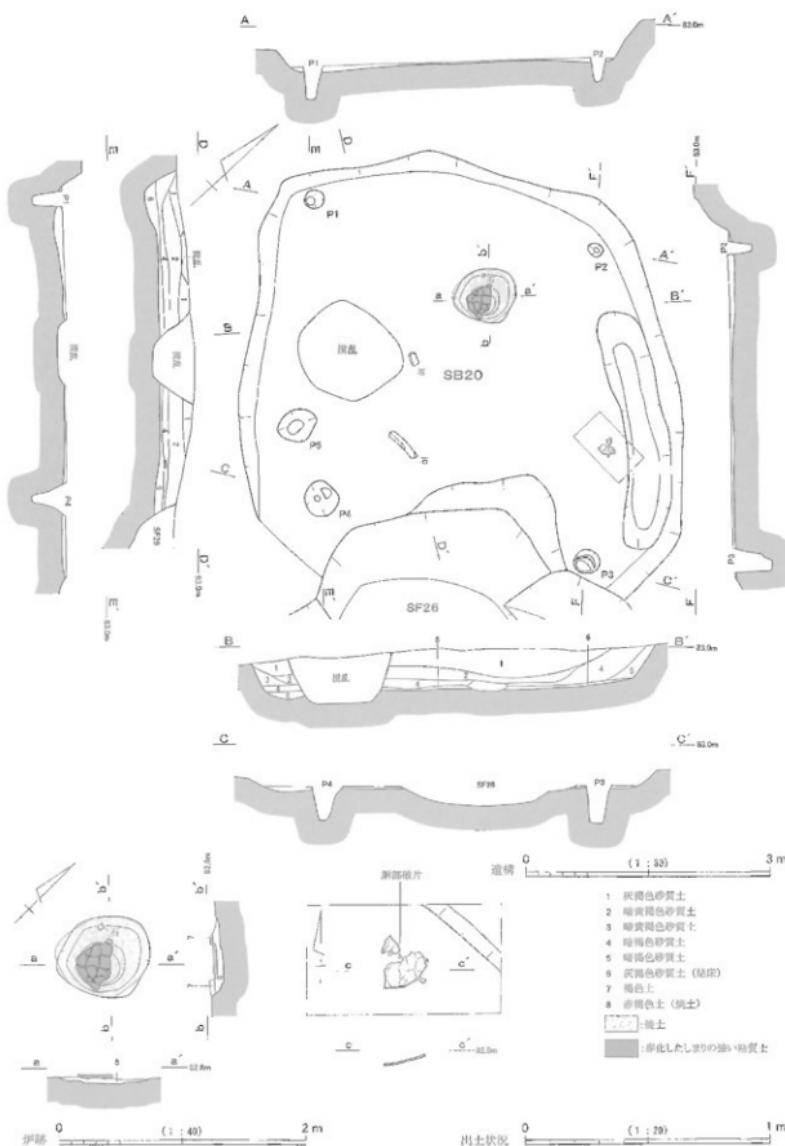
平面形は、隅丸長方形に近い梢円形を呈する。約1.0mもある深さの掘方は、壁体の傾斜が緩く、底面には凸凹がある。底面においては、貼床（18～20層）によって平坦な床面がつくられている。壁溝は認められなかった。炉は、中央西寄りに2基を検出した。とともに梢円形の掘り込み全体に焼土が認められるが、南側の方が深い。柱穴は3基（P1～3）を検出することができた。4本柱が長方形に配置されていた可能性を指摘することができる。また、SB20と類似した特徴として、柱穴が壁際に寄っている点が把握できる。なお、P2の東に白色粘土の帯状の堤が検出されている。本遺跡では唯一の例である。

遺物は、弥生土器片が少數ながら出土しているほか、磨製石鎌1点も出土している（第108図318、第115図358）。SF26との切り合い関係や出土遺物の特徴から、概ね弥生時代中期後葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

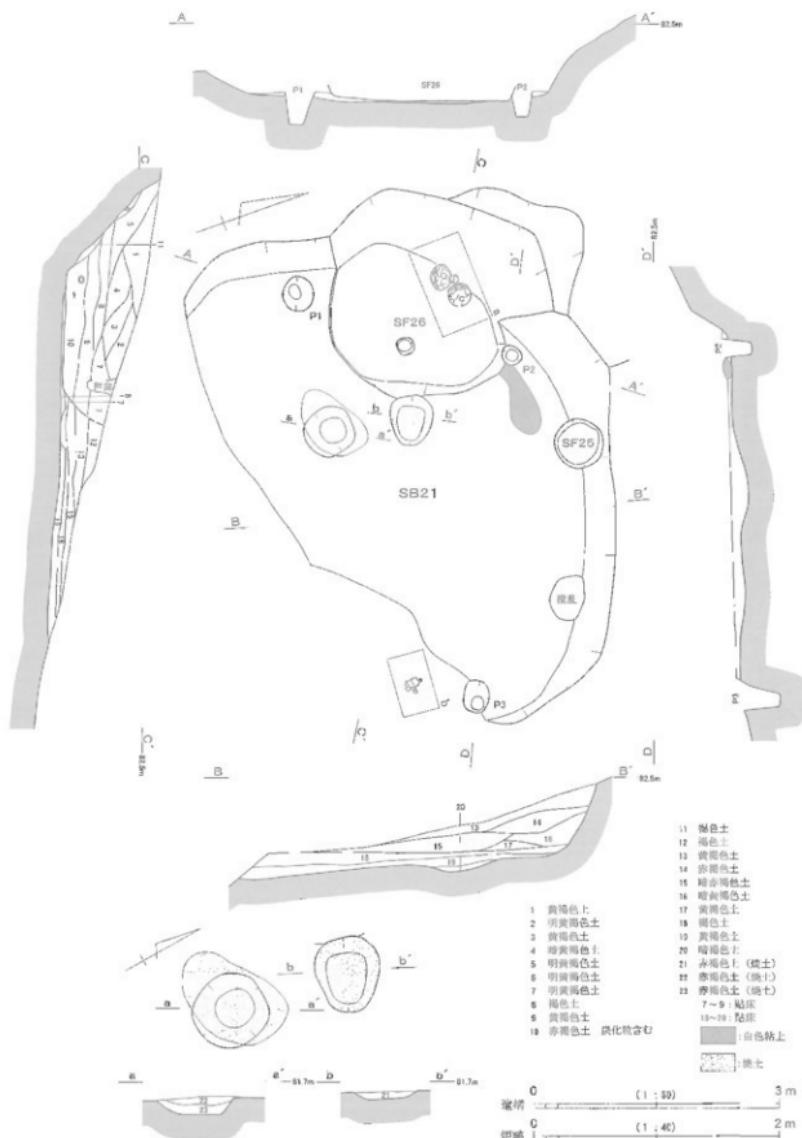
### 3. 土 坑

住居跡との関連が考慮される土坑をとりあげる。埋葬関連の土坑や落し穴は本節6・7で報告する。

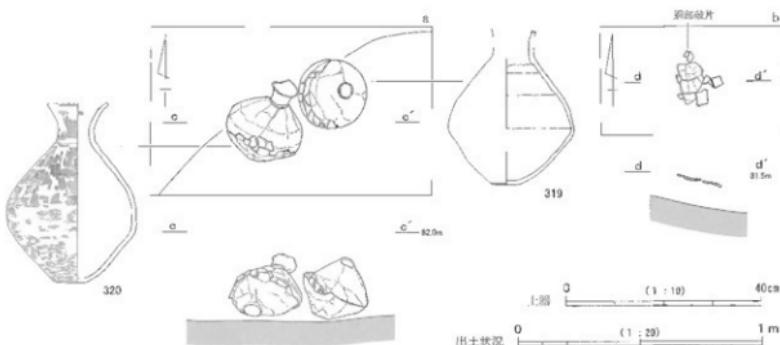
SF26（第97・98図） SB21の西縁部に重なり、土層断面によってSB21の下部が埋没した後に掘り込まれたことが判明している。平面形は南北方向に若干長い梢円形、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は、住居跡の覆土と大きく違わない。底面に小穴が検出されたが、SB21に伴う可能性もある。北西壁寄りの底面において、壺2点（第109図319・320）が正位で並び置かれていた。一方は口縁部が欠けていた。出土土器から、SF26は弥生時代中期後葉頃の土坑である可能性が高いと判断でき、SB21との時期差は大きくないと把握することができる。



第96図 SB20



第97図 SB21・SF26①



第98図 SB21・SF26(2)

#### 4. 掘立柱建物跡

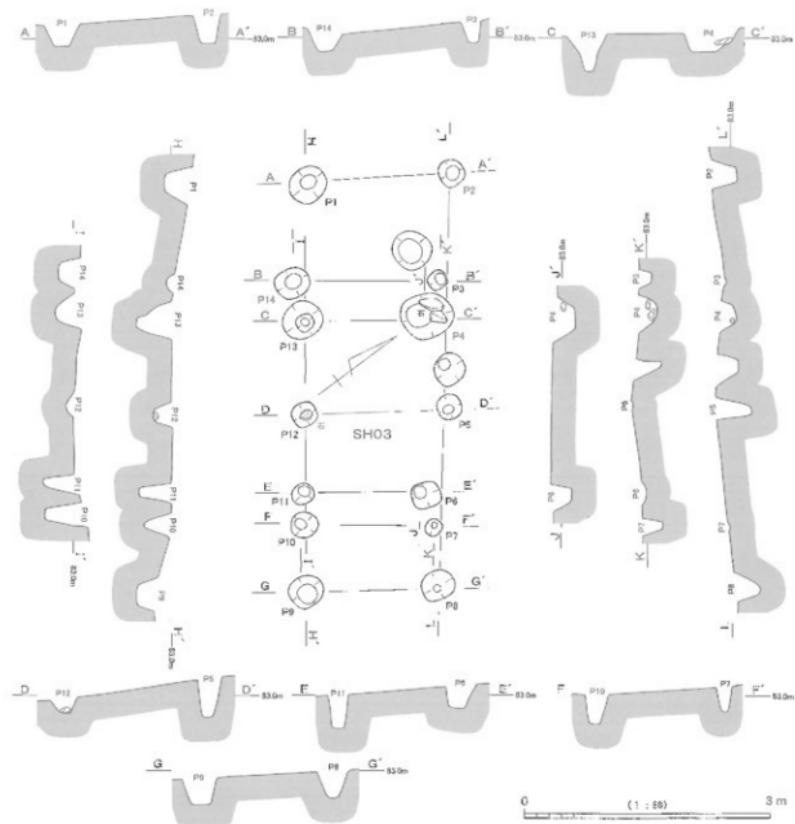
SH03（第99図） D5・6グリッド北部に位置し、丘陵上平坦面の中央に立地している。他の遺構との切り合いはない。長軸（桁行）方向は北西であり、尾根筋に直交させている。短軸（梁行）は約1.7mであり、柱間1間である。長軸規模は全体で約5.1mであるが、桁行に7基前後の柱穴が並んでおり、しかも柱間は等間隔ではない。数回の建て替えが重なったために桁行が長くなっている可能性がある。礫が検出されている柱穴がある（P4・12）。根固めなどの可能性が指摘できるが、礫は周囲の地山層に含まれているものと変わらない。

建物・柱穴の特徴は、SH01・02のような古代以降の建物跡とは異なっている。また、柱穴内から弥生時代後期前葉前後に位置づけできる土器片が出土している（第114図351～353）。周辺から出土した土器（第114図354～356）に後期中葉以降に位置づけできるものもあるが、竪穴住居跡と概ね同時期に存在していた可能性を考えたい。

#### 5. 溝（区画溝）

SD03（第100図） J6グリッドからI7グリッドにかけた範囲に位置する。この場所は調査区中央部の北端に該当し、南には幅狭の尾根がのびる一方、北側は調査区北部へと上の斜面となっている。そうした地形変換点において、SD03は尾根を分断するように東西にのびている。なお、全体的にSD02（中世以降の講）と重なっているため、SD03の上部は失われていた。

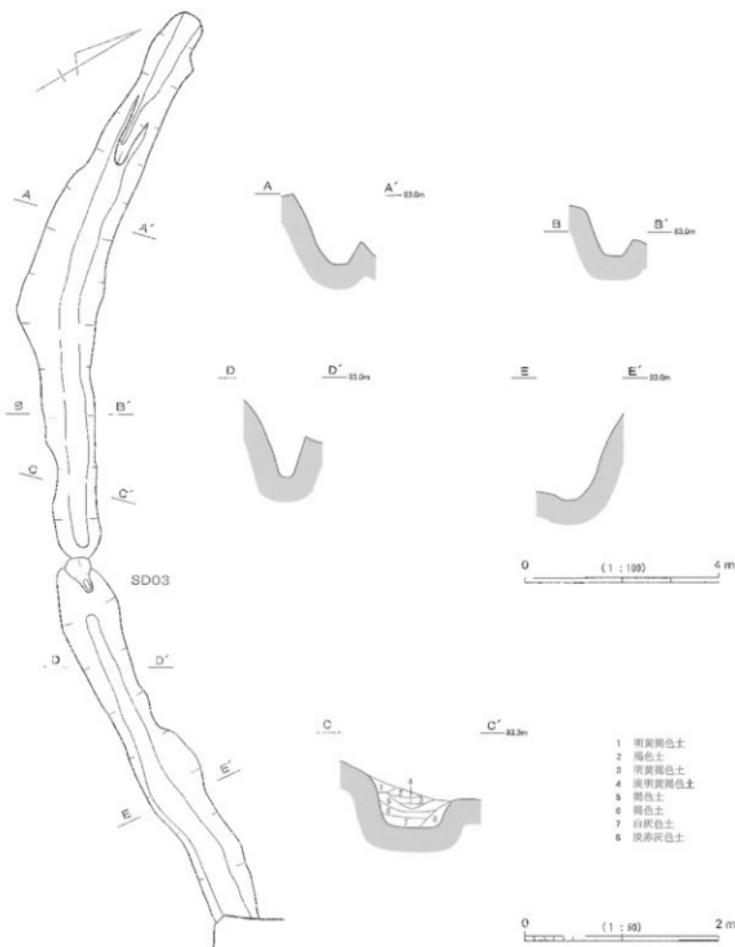
検出した長さは約19.9mであり、途絶えることなく尾根を横断している。直線にのびているわけではなく、南西側に凸の弧を描いている。検出は下部に限定されているが、深さは最大2.5m以上であったと把握できる。横断面形については、検出した下部はV字形、上部は不明である。底面は幅0.3～0.5mと狭く、地形の傾斜に沿って中央が高くなる。その最も高くなる中央部では、東側に約0.5m下がる段差が



第99図 SH03

生じており、東西に分かれて掘削されているように把握できる。覆土は最下層に白灰色の泥岩・シルト質の土層、その上に明黄褐色を貴重とする土層が認められる。故意に埋め戻した形跡は認められなかった。出土遺物はない。

SD03の時期については、中世以降のSD02に切られていること、溝の横断面が弥生時代の漆（環濠）にもみられる形状であること、本遺跡が弥生時代の遺構群を主体としていること、SD03以外に尾根を横断する弥生時代の溝（SD07・SD08）が検出されていることから、弥生時代の遺構である可能性が高いと判断できる。また、検出された位置や平面形から、調査区北部の南を区画する溝（漆）であった可能性が指摘できる。

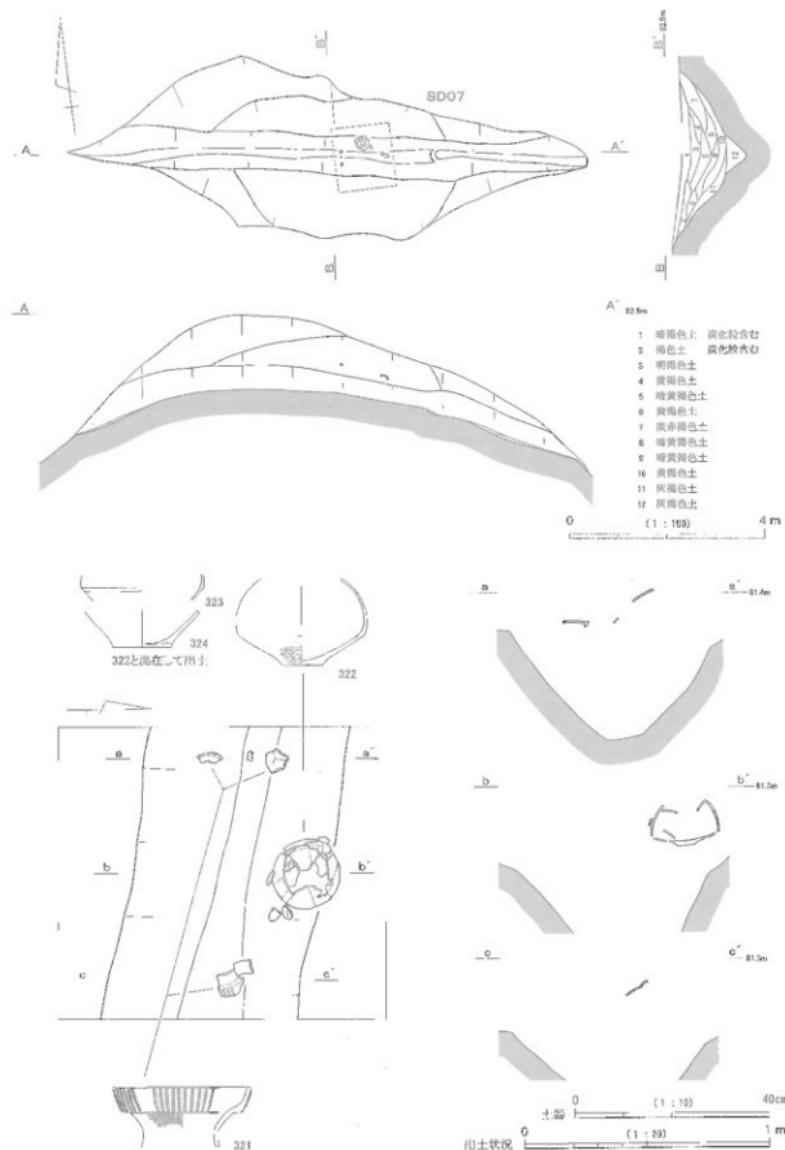


第100図 SD03

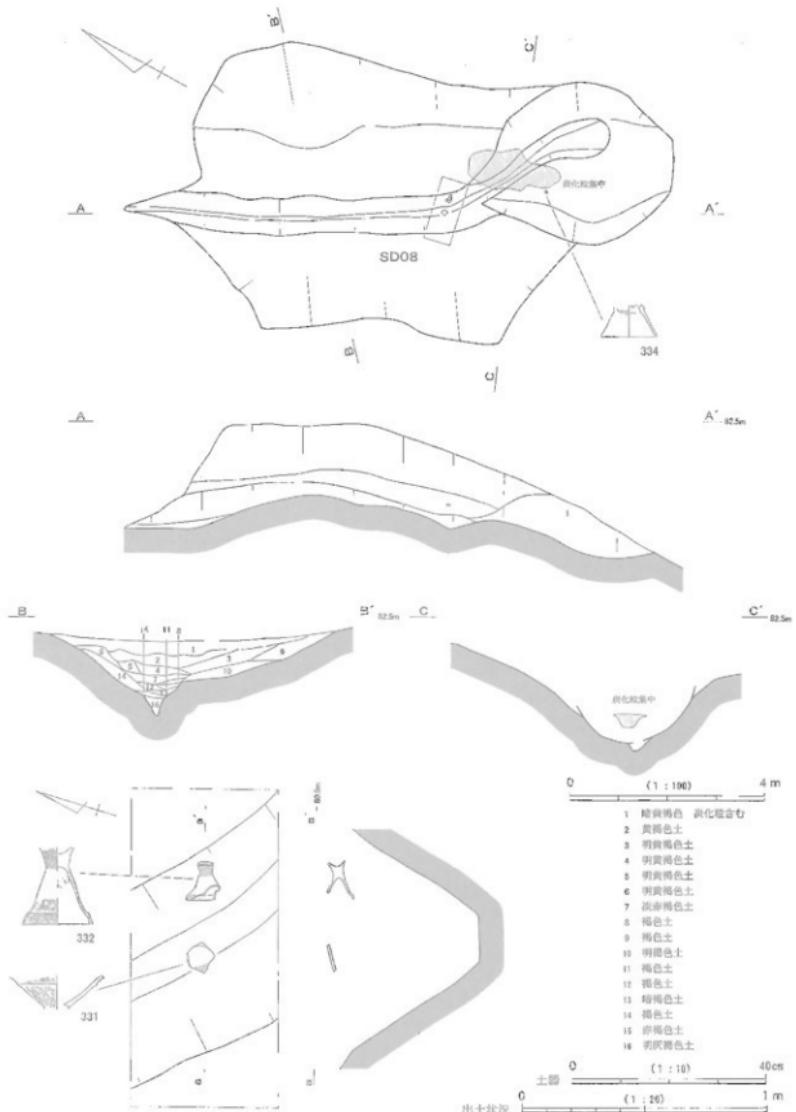
SD07（第101図） F5・6グリッドの北部、南北にのびる尾根の中で鞍部にあたる場所に位置する。直線的に東西にのびる溝であり、尾根を分断している。北縁がSF22・SF23（土器植墓）と重複する位置にあるが、上面の流土などによって切り合い部分が失われていた。

検出した長さは約10.7m、深さは最大約1.5mである。横断面は下部がV字形、中位以上が楕円形を呈する二段構造である。底面は幅0.2m以下と狭く、地形の傾斜に沿って中央が高くなる。覆土は、下部に砂質の強い灰褐色土層、中位以上に黄褐色を基調とする土層の堆積が把握できる。故意に埋め戻した形跡

弥生時代の遺構と遺物2(中央部)



第101図 SD07



第102圖 SD08

は認められなかった。

遺物は、覆土中位において弥生土器が出土している(第110図321~324)。弥生時代後期後半に位置づけできる土器群であるが、下部が埋没した後に入り込んだものであることから、SD07はそれ以前に設けられたと判断することができる。一方、弥生時代後期中葉～後葉の土器棺墓と切り合う関係にあることから、土器棺墓群より前に営まれていた集落(居住域)に伴う区画溝(濠)であった可能性を考慮することができる。

SD08(第102図) D4グリッドからC5グリッドにかけた範囲に位置する。南西方向にのびる尾根の鞍部において、その尾根を横断している。

検出した長さは約10.3mである。直線的な溝であるが、南東端部で屈曲している。深さは最大約1.7mであり、横断面は下部がV字形、中位以上が碗形を呈する二段構造である。とくに、上段の北東壁の傾斜が緩くなっている。底面は、地形の傾斜に沿って中央が高くなる。その幅は、大半の場所では約0.1mと狭いが、屈曲する南東端部で広がる。覆土は、下部に砂質の強い明灰褐色土層、中位以上に褐色・黄褐色を基調とする土層の堆積が把握できる。故意に埋め戻した形跡は認められなかった。

遺物は、覆土中位層を中心に弥生土器が出土している(第110図325~334)。弥生時代後期後半に位置づけできる高壙などもあるが、下部が埋没した後に入り込んだものであることから、SD08はそれ以前に設けられた溝であると判断することができる。基本的にはSD07と同様の区画溝(濠)であったと把握できる。

なお、SD08の南東端には円形部分がある。この覆土中層において集中していた炭化材を分析したところ、樹種はマツ属およびコナラ属コナラ亜属クヌギ節、年代は $990 \pm 30$ 年BP(BP=1950年)であるという結果が得られた(詳細は第6章で報告)。SD08とは大きな時期差があることから、異なる遺構が重なっているものと評価できる。覆土や出土遺物による把握はできなかったが、円形部分がSD08に重なる平安時代の土坑であった可能性が考慮される。

## 6. 埋葬関連遺構

### (1) 中央墓群内の土坑墓

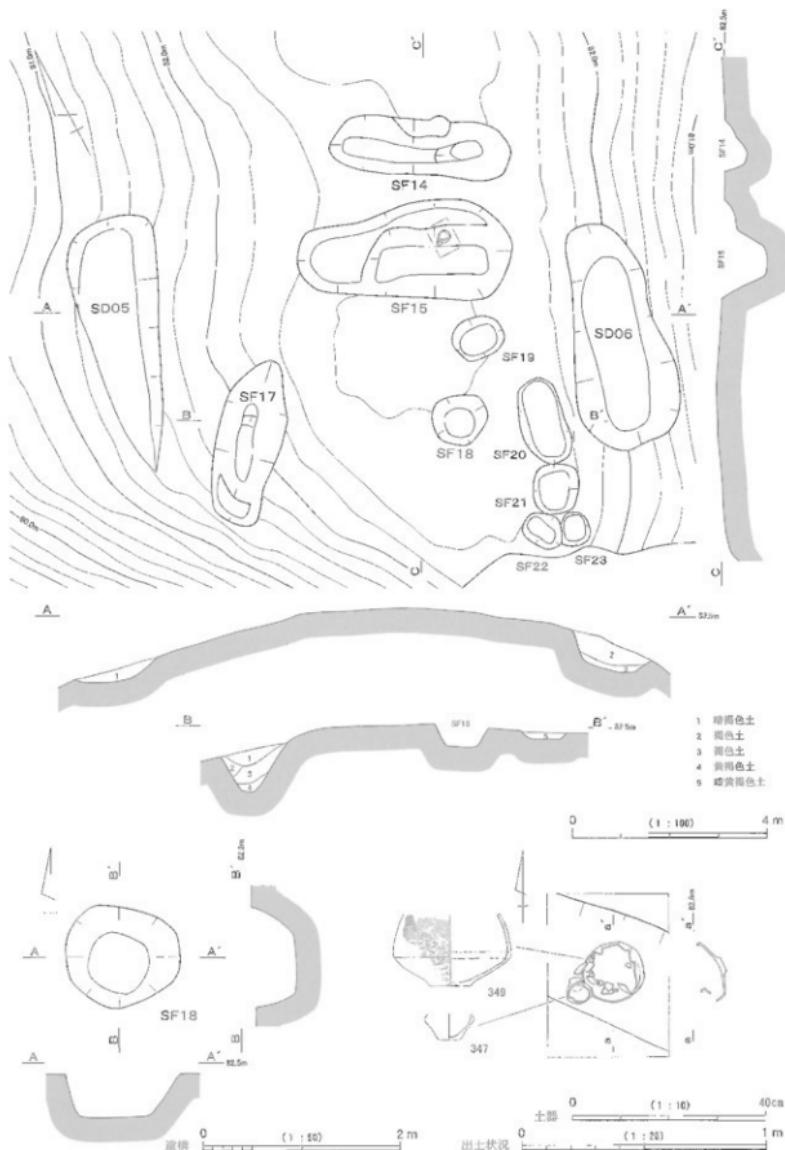
SF14(第103・104図) G5・6グリッドの墓群内に位置する。幅の狭い丘陵上平坦面に立地しており、長軸を尾根筋に直交させている。北西部では落し穴であるSF13と重なるが、SF14の方が新しい遺構であると把握できている。遺構の残存状態は比較的良好。

平面形は、約1.2m×3.7mの細長い梢円形である。深さは中央～北西部が0.3m弱、南東部は0.4m強と深くなる。覆土は、底面に暗褐色土、中位以上に炭化粒を含む褐色土層が認められた。埋葬主体(被葬者)や木棺の痕跡は確認できなかった。また、遺物は弥生土器の小破片が数点出土しているだけである(第114図346)。

遺構の形状やSF15と平行する配置などから、SF15と同様の土坑墓である可能性が高いと判断できる。時期については、墓群全体の時期的傾向から弥生時代後期中葉以降の可能性が指摘できるが、明確な判断は難しい。

SF15(第103・104図) G5・6グリッドの墓群内に位置する。幅の狭い丘陵上平坦面に立地しており、長軸を尾根筋に直交させている。残存状態は良く、遺構の切り合いがない。

この土坑は二段構造になっている。上部は、細長い不整梢円形を呈し、深さは0.3m弱である。南東寄りに長方形の土坑(下部)が掘り込まれており、上部底面は西部から北緯の範囲にのみ検出された。下部の土坑は、約1.4m×2.8mの平面長方形を呈し、上部底面からの深さは約0.6mである。覆土は褐色を



第103図 中央墓群の遺構配置

## 弥生時代の遺構と遺物2(中央部)

基調とする土層で占められるが、部分的に炭化粒を含む。埋葬主体（被葬者）や木棺の痕跡は確認できなかった。

覆土上層において、弥生土器の壺（第114図349）が出土している。墓上の供獻に用いた可能性が指摘できる。なお、未盜掘であると判断できるが、副葬品の出土はなかった。出土遺物や墓群全体の時期的傾向から、SF15は弥生時代後期中葉以降の土坑墓である可能性が指摘できる。しかし、明確な時期の判断は難しい。

SF17（第103・104図） G5グリッド中央に位置する。丘陵上平坦面の西縁から西側斜面にかけた場所に立地しており、とくに南西部は流土の影響を大きく受けている。ただし、削平は上部に限られており、下部・底面においては全体を把握することができた。ほかの遺構との切り合いはない。

平面形は、約1.3m×3.4mの細長い梢円形を呈し、長軸方向は尾根筋に平行している。深さは最大0.9m前後である。中央部が深く、南西端部との間には約0.3mの段差、北東端部との間には0.1m強の段差が検出されている。中央部の長さは約1.4m、底面幅は0.4m弱と狭い。覆土は明褐色を基調とする。出土遺物はない。

中央墓群の中に位置しており、遺構の形状はSF14などに近い。明確な判断は難しいが、弥生時代後期中葉以降の土坑墓である可能性が考慮できる。

### ② 中央墓群内の円形土坑

SF18（第103図） G5グリッド東部に位置する。丘陵上平坦面の中央、土器棺墓群の中に立地している。ほかの遺構との切り合いはない。

直径1.0~1.2mの平面円形の土坑であり、深さは0.5m弱である。土坑の形状・規模や覆土の特徴などは、周辺の土器棺墓に類似している。しかし、覆土中からは弥生土器の破片（第114図350）が出土しただけであった。

弥生時代後期中葉以降の土器棺墓が集中する墓群の中にあり、出土遺物からも後期中葉以降の土坑である可能性が評価できる。SF15などの土坑墓、SF18などの土器棺墓、そのいずれとも異なる形態の埋葬があった可能性が考慮される。ただし、埋葬主体（被葬者）や棺に関わる痕跡は把握できなかった。

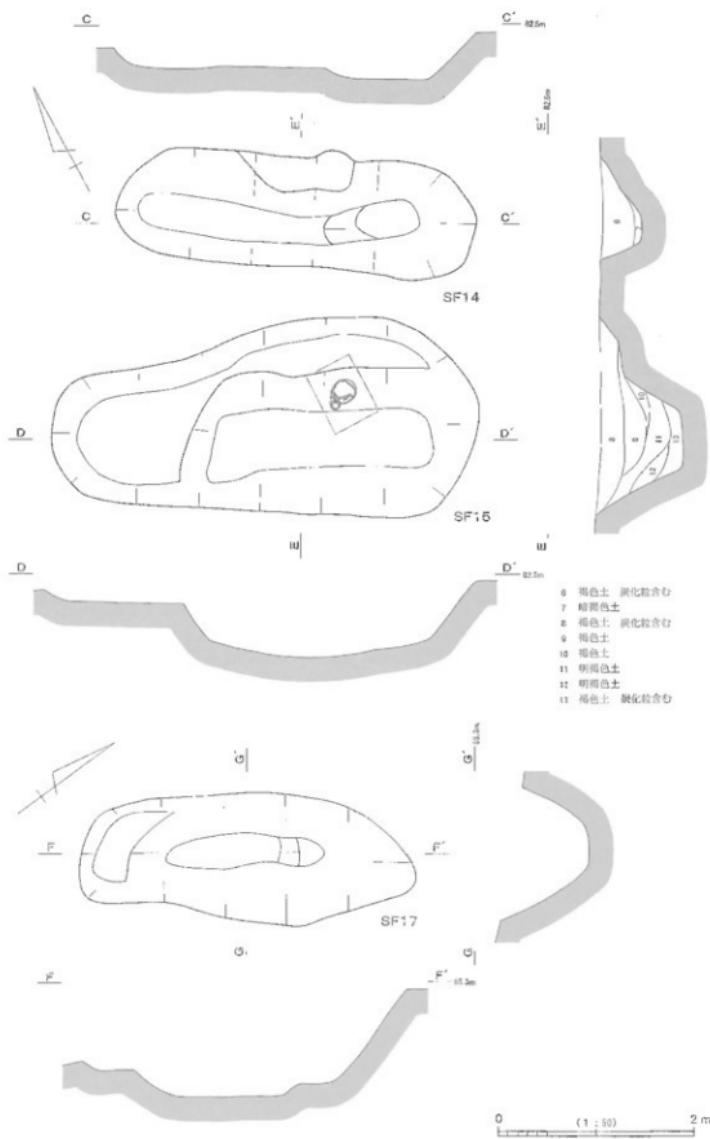
### ③ 中央墓群内の溝状遺構

SD05（第103図） G5グリッドの北西部、尾根の西側斜面に立地している。尾根筋方向に長い溝状遺構であるが、非常に浅い窪地のような検出状態であった。人為的な掘り込みであるかは判断が難しく、窪地や地滑りの痕跡などである可能性も考慮される。南西部において落し穴（SF16）と重なるが、SD05の方が新しいと把握できている。出土遺物はない。

SD06（第103図） G6グリッド西部に位置する。尾根の東斜面上端に立地しており、流土などの影響が考慮されるが、概ねの全体像は把握することができる。ほかの遺構との切り合いはない。

平面形は、1.6~2.1m×4.6m強の細長い梢円形である。長軸は尾根筋に平行する。深さは最大約0.8mであり、横断面は逆台形を呈する。覆土は褐色を基調とする。出土遺物はない。

掘り込みが明確であり、人為的に設けられた遺構として評価できる。さらに、比較的長いことから溝状遺構としたが、遺構の形状などから土坑墓である可能性も考慮される。なお、埋葬主体（被葬者）や棺の痕跡は確認されていない。



第104図 SF14・15、SF17

(4) 中央墓群内の土器棺墓

SF19 (第103・105図) G5グリッド東縁に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しており、土器棺墓群の最も北側、SF15（土坑墓）の南隣に設けられている。ほかの遺構との切り合いはない。

土器棺の身には、頸部以上を欠いた大型壺（第111図336）を用いている。概ね正位に置かれたと把握できるが、若干西に傾いた状態で検出されている。土器棺の蓋には、中型壺（第111図335）を用いている。口縁部までが残存しているが、完形の状態で蓋になっていたとは限らない。出土状況から、胴部下半が逆位の状態で身の上に載せられており、胴部中位から口縁部までは切り離されて別に置かれていた可能性が考慮される。土器棺に伴う土坑は、約0.9m×1.1m弱の平面円形であり、土器棺を埋納するのに適度な大きさである。検出した深さは0.4m前後であり、他の土器棺墓に比べてとくに深い。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴から、SF19は概ね弥生時代後期後葉頃の土器棺墓であると判断することができる。

SF20 (第103・106図) G5グリッド東縁に位置する。丘陵上平坦面に立地しており、上部は破壊を受けている。南はSF21と隣接するが、切り合いがわずかであり、土層による諸検討はできなかった。

土器棺の身には、大型壺（第112図338）が用いられている。概ね正位に置かれた胴部下半が把握できるが、その上がどこまで伴っていたかについては、上部の破壊によって明確にできない。混在して出土した壺の頸部（第112図339）について、身の大型壺（338）と同一個体である可能性も否定できない。土器棺の蓋には、高坪の鉢部（鉢形）（第112図337）を逆位にして用いている。大型壺（身）の上での検出であったが、底付近で出土していることについては、ほかに少ない特徴である。身の大型壺について、胴部中位より上を欠いた状態（広口の状態）で用いられた可能性が考慮される。土器棺に伴う土坑は、南北長約1.8mの長椭円形を呈する。土器棺は土坑の北部に置かれており、その南には大きな空間が空いている。また、検出した深さは0.2m以下であり、SF19に比べて浅い。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴から、SF20は概ね弥生時代後期前葉～中葉の土器棺墓であると判断することができる。

SF21 (第103・106図) G5グリッド南東隅に位置する。丘陵上平坦面の東際に立地しており、上部は流土などに伴う破壊を受けていると判断できる。北にSF20、南にSF22・23が隣接しているが、切り合はずかであり、土層による先後関係の判断もできなかった。

土器棺の身には、口縁～頸部を欠いた大型壺（第112図341）を正位にして用いていた。土器棺の蓋については、身とは別の壺の底部（第112図340）が混在して出土しており、この壺を逆位にして用いた可能性が高いと判断できる。土器棺に伴う土坑は、約0.9m×1.0m強の方形に近い平面形を呈しており、土器棺より一回り大きい。検出した深さは0.2m強であり、比較的浅い。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴から、SF21は概ね弥生時代後期中葉頃の土器棺墓であると判断することができる。

SF22 (第103・105図) G5グリッド南東隅に位置する。丘陵上平坦面の東際に立地しており、上部は破壊を受けている。SF21・SF23が隣接するが、切り合はずかであり、土層による諸検討もできなかった。また、南隣のSD07との先後関係についても、土層による判断はできなかった。

土器棺の身には、大型壺（第113図342）が用いられている。正位に置かれた底部～胴部下半が残存している。土器棺の蓋は残存していない。土器棺に伴う土坑は、平面不整椭円形を呈する。長軸0.9m弱であり、土器棺より一回り大きい。検出した深さは約0.1mであり、極めて浅い。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴などから、SF22はSF21などと大きな時期差がないと把握できる。したがって、弥生時代後期中葉以前の可能性が高いと判断できるSD07よりも新しい（SD07を切っていた）可能性が評価される。

SF23（第103・106図） G5グリッド南東隅に位置する。丘陵上平坦面の東際に立地しており、上部は破壊を受けている。SF21・SF22が隣接するが、切り合いはわずかであり、土層による諸検討もできなかった。また、南隣のSD07との先後関係についても、土層による判断はできなかった。

土器棺の身には、大型壺（第113図343）が用いられている。正位に置かれた底部～胴部下位が残存している。土器棺の蓋は残存していない。土器棺に伴う土坑は、不整椭円形を呈する。長軸約0.7mであり、土器棺より若干大きい程度である。検出した深さは0.1m強であり、極めて浅い。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。土器棺に用いた土器の特徴などから、SF23はSF21などと大きな時期差がないと把握できる。したがって、弥生時代後期中葉以前の可能性が高いと判断できるSD07よりも新しい（SD07を切っていた）可能性が評価される。

#### ⑤ 単独立地の土器棺墓

SF25（第103・105図） D5グリッド東縁、丘陵上平坦面の南東寄りに立地する。SB21の覆土上位で発見されており、住居廃絶後の土器棺墓であると判断できる。南東部は調査の過程で崩壊した。

土器棺の身には、口縁～胴部上位を欠いた大型壺（第113図345）が用いられている。検出状況から、概ね正位に置かれたことがわかる。土器棺の蓋には、大型壺の底部～胴部下位（第113図344）を用いている。検出状況から、逆位にして身の上に載せられていたことがわかる。土器棺に伴う土坑は、径約0.6mの平面円形に検出されているが、土器棺の下部にあたる部分のみの検出となっている。上半部については、SB21覆土内において土坑の掘り込みを検討することができなかった。SB21覆土最上面から掘り込まれたとするならば、土器棺が完全に埋設できる深さがあったと復元できる。ただし、SB21の埋設途中で配置され、土器棺上部はSB21を埋め戻すようにして埋納したとする復元も可能である。

土器棺内は流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨などの発見はなかった。また、副葬品の出土もなく、出土遺物は土器棺に使用した土器だけである。遺構の切り合いや土器棺に用いた土器の特徴から、SF25は弥生時代後期中葉以降の土器棺墓である可能性が高いと判断できる。

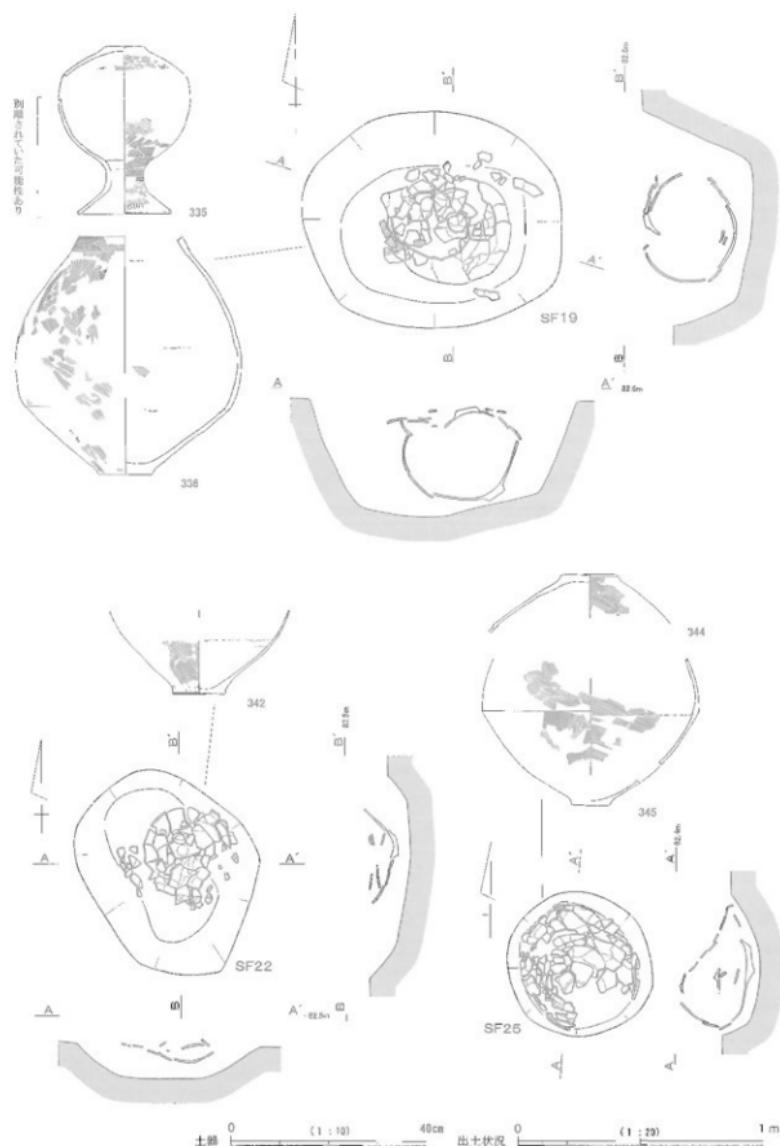
## 7. 落し穴

SF13（第107図） G5グリッド北東隅に位置する。丘陵上平坦面に立地しており、上部の一部がSF14に切られている。平面は約2.2m×2.5mの楕円形である。検出した深さは約1.6mであり、底面は0.8m前後である。底面北寄りに小穴があることから、逆茂木を伴っていた可能性が考慮できる。覆土上層からSF13北側にかけた範囲に集石が検出されている。自然の礫によるものである。

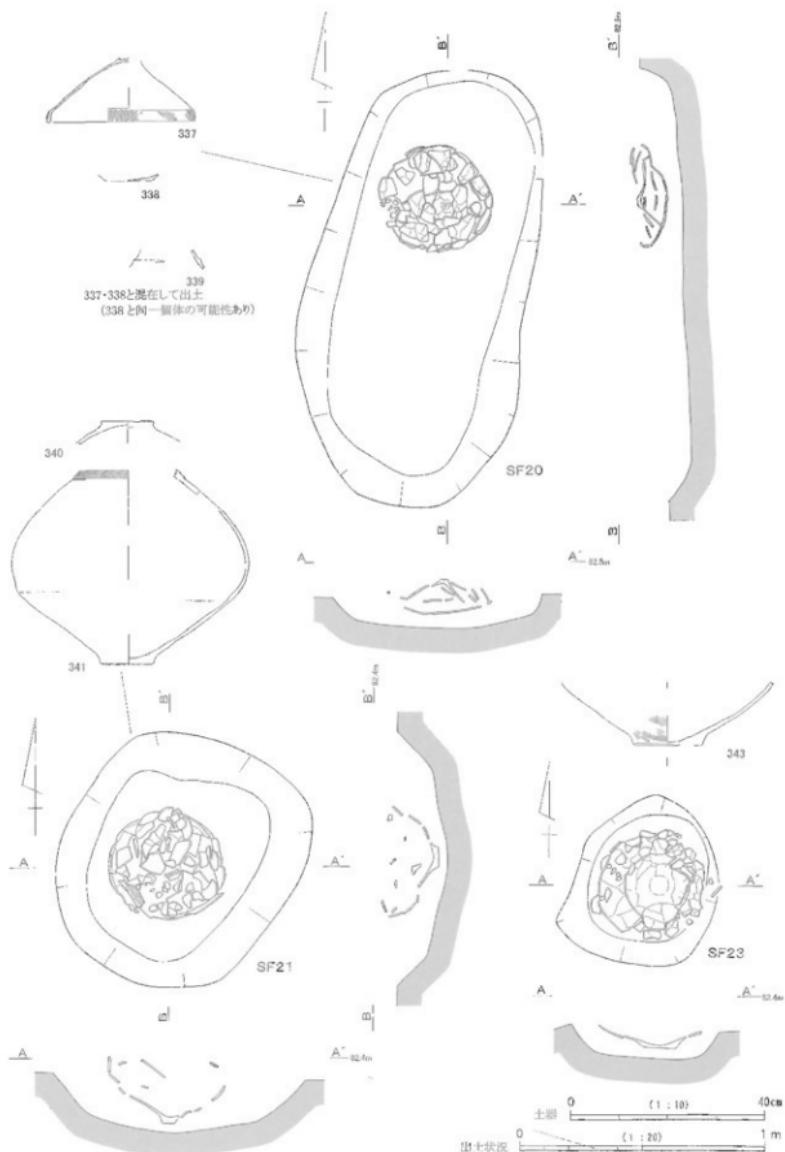
出土遺物はないが、弥生時代後期中葉（SF14）よりも前の落し穴であると判断することはできる。

SF16（第107図） G5グリッド北西部に位置する。尾根の西側緩斜面に立地しており、上部の一部がSD05に切られている。平面は径約2.4mの円形、深さは約1.8mである。底面は径0.5m強と狭く、南寄りに逆茂木による可能性が考慮できる小穴が検出されている。出土遺物はないが、SF13と同様の時期の落し穴である可能性が高いと把握できる。

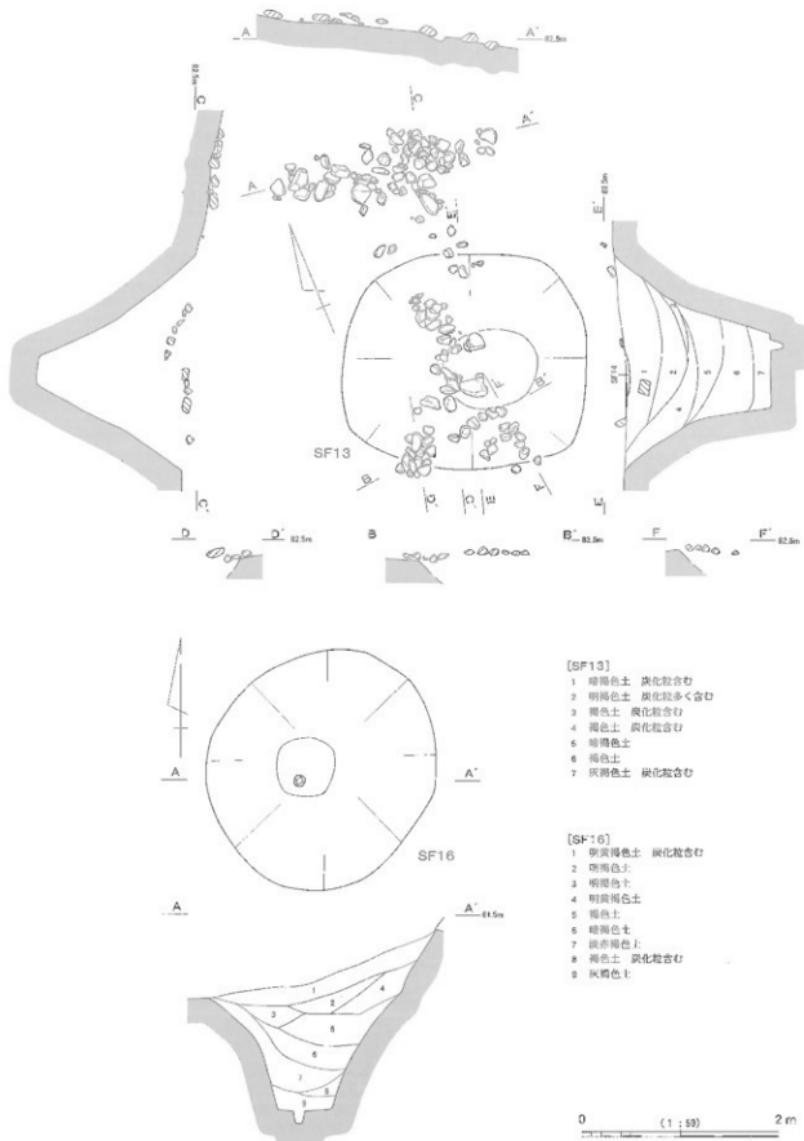
弥生時代の遺構と遺物2(中央部)



第105図 SF19、SF22、SF25



第106図 SF20、SF21、SF23



第107図 SF13、SF16

## 8. 出土遺物

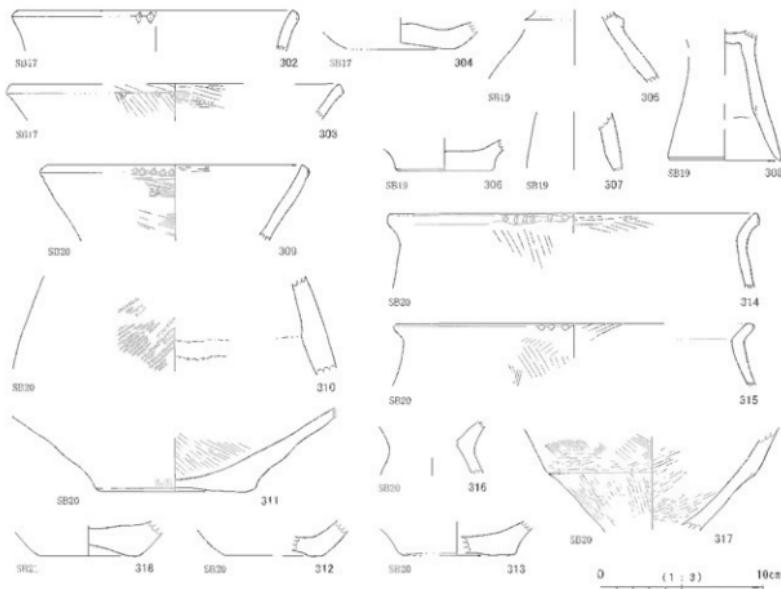
## (1) 弥生土器

SB17出土土器（第108図302～304） SB17出土土器は全て小破片である。302・303は、刻みがめぐる壺の口縁部である。302の刻みは密であるが、303の刻みは間隔が広く、雑である。304は壺の底部であり、上げ底状を呈する。小破片ばかりであるが、周辺の遺構が少ない場所にあることから、他からの混在は想定し難い。304などは、弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づける可能性が高い。

SB19出土土器（第108図305～308） SB19出土土器も小破片が多い。305は頸部下端に断面三角の突唇がめぐる壺の胴部片、306は壺の底部片である。307・308は脚台部であり、とくに308は高坏である可能性が高い。ただし、接合部の文様や脚裾部の屈曲などはない。小破片ばかりであるが、全体的には弥生時代後期前葉頃に位置づけることができる。

SB20・21出土土器（第108図309～318） SB20・21の出土土器も小破片が多い。309は直線的に開きながら立ち上がる壺の口縁部であり、単純口縁の端部に刻みがめぐる。310は縄文が施された壺の胴部片、311～313は壺の底部であり、わずかに上げ底状を成す。314・315は、壺の口縁～胴部上半の破片である。胴部は、球耐化せずに直立的に立ち上がる。口縁部は、胴部から屈曲して短く開き、端部には刻みがめぐる。316は台付壺の台部である。317は、高坏の坏部片である可能性が高い。318だけはSB21の出土である。上げ底状の壺の底部である。

小破片ばかりの出土ではあるが、弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づけることができる。

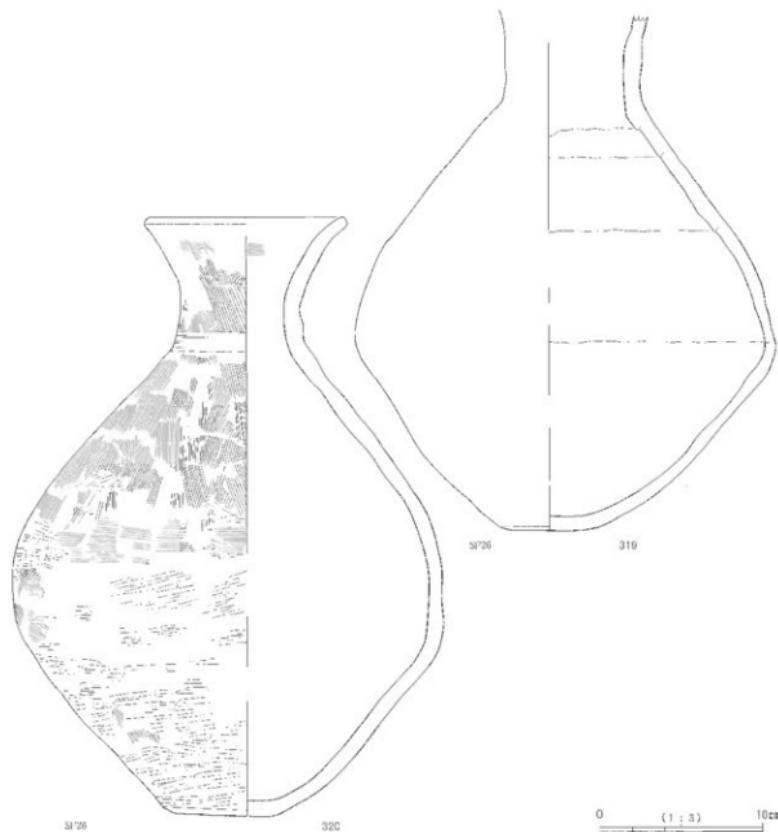


第108図 中央部出土弥生土器①

弥生時代の遺構と遺物2(中央部)

SF26出土土器(第109図319・320) SF21の北西縁部で検出されたSF26において、2つの壺(319・320)が並んで置かれていた。319は、口縁部を欠いており、器壁の摩耗のために調整などの観察ができなくなっている。安定性のない底部、縦長の算盤玉形を呈する胴部、細く直立する頸部を伴う。内面には輪積み痕を多く観察することができる。320は、概ね全体を把握することができる。器形の特徴は319に類似している。口縁部は単純口縁であり、外反しながら弱く開く。外面調整は、上半部に縦方向のハケ調整、下半部に横方向のミガキ調整を観察することができ、両者の境には横方向のハケ調整が施されている。また、頸部下端には横方向の強いナデがめぐっており、ハケ調整が帯状に消されている。

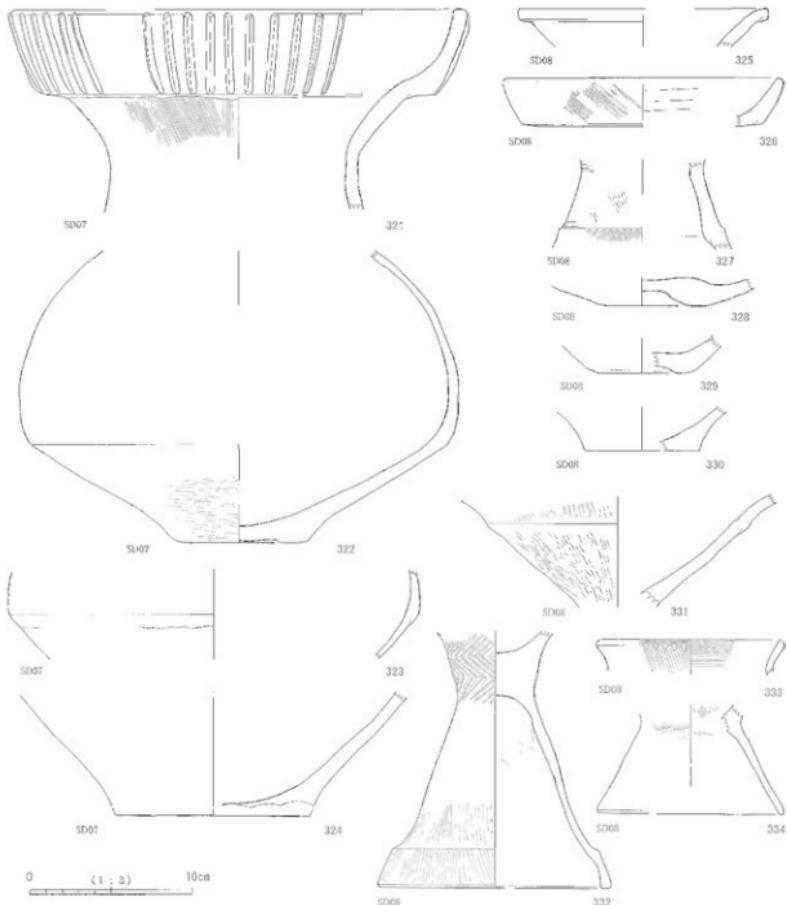
これら2つの壺は、概ね弥生時代中期後葉に位置づけることができる。SB21とSF26について、出土遺物の時期が切り合い関係と逆になる可能性もあるが、大きな時期差であるとまでは評価できない。両者は近い時期の遺構であると把握し、2つの壺については、当初はSB21などで用いられていた可能性も考慮しておきたい。



第109図 中央部出土弥生土器②

SD07出土土器（第110図321～324） 321～324は、SD07の覆土中位から出土した土器であり、SD07埋没途中にある段階で落ち込んだものと判断できる。

321は、比較的大型の壺の口縁部である。受口状を成す複合口縁であり、複合部の外面には、4方向9本単位の棒状浮文が配置されている。頸部は太く短い。322は壺の胴部である。底部は、裏面の中央が凹む。胴部は、中位下寄りに屈折稜を伴う。下部の開きが直線的である一方、上部の立ち上がりには丸味を伴う。器面の摩滅が著しいが、胴部下位の外面にミガキ調整を観察することができる。323・324も壺の胴部片である。



第110図 中央部出土弥生土器③

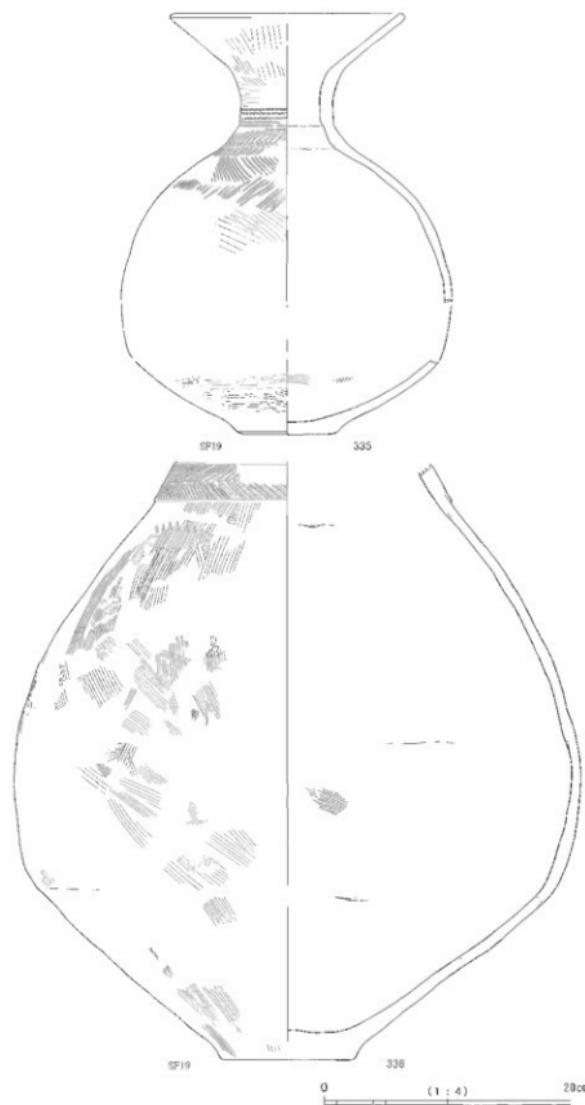
弥生時代の遺構と遺物2(中央部)

321は、当地域の弥生土器では決して多くない口縁形態であるが、菊川様式の後半に類例を認めることができる。全体的にみても、弥生時代後期中葉以降に認められる特徴を多く伴うと把握できる。

SD08出土土器(第110  
図325~334) 325~  
334はSD08の覆土中位  
から出土した土器であ  
り、SD08埋没途中のあ  
る段階で落ち込んだも  
のと判断できる。

325は折り返しを伴う  
壺の口縁部、326は受口  
状の壺の口縁部である。  
325は直線的に開く。  
326の外面には縄文が施  
されている。327は壺の  
頸部であり、その下端  
には櫛刺突が施された  
突帯があげぐる。328~  
330は壺の底部であり、  
上げ底状のものも認め  
られる。331・332は高  
壺であり、332の接合部  
には羽状の櫛刺突文が  
めぐらし、裾部には比較  
的明瞭な屈曲を伴う。  
333は刻みがあげぐる壺の  
口縁部、334は壺の台部  
である。

327や332のように弥  
生時代後期葉以降に  
位置づけできる土器も  
含まれているが、326・  
328・329などは、より  
古い時期に位置づけで



第111図 中央部出土弥生土器④

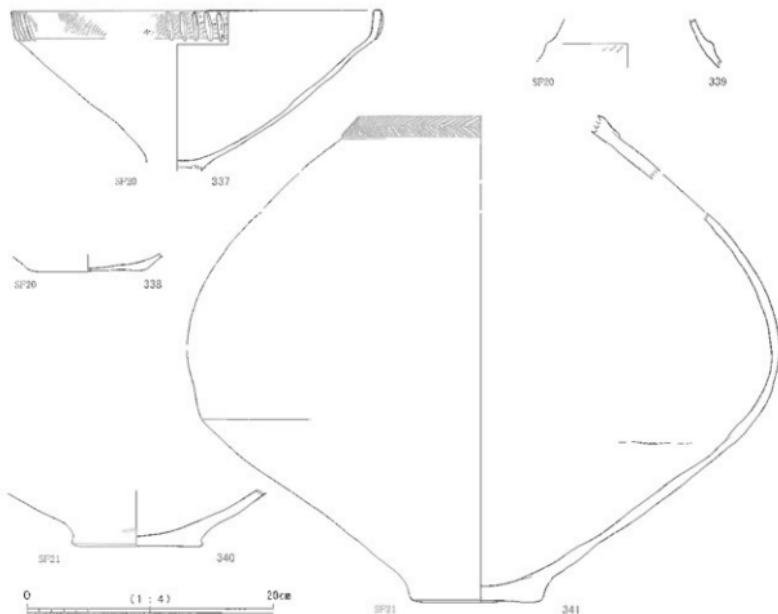
きる可能性が指摘できる。

SF19土器棺（第111図335・336） 335は、土器棺の蓋に用いられていた蓋である。ただし、口縁部～胴部上半について、蓋（胴部下半～底部）とは切り離されて別に置かれていた可能性がある。口縁部は直線的に開く単純口縁であり、頸部には明確な直立部を伴う。胴部は肩が張る球形に近い形状を呈する。底部は平底である。口縁部外面には縦方向のハケ調整、頸部上半には強い横ナデ調整、下半には横描きの波状文がめぐる。頸部下端～胴部上端には羽状の櫛刺突文、その下には縄文が羽状に施されている。胴部中位には斜方向のハケ調整、下位には横方向のミガキ調整が観察できる。内面においては、一部のハケ調整と輪積み痕が観察できる。

336は、土器棺の身に用いられていた大型壺であり、口縁～頸部が欠損している。底部は平底である。胴部は、直線的に開く下部と丸味をもって立ち上がる上部（中央～上部）に大別できるが、全体的に球形に近い形状であると把握できる。上下の境界に明確な接線ではなく、外面調整においても上下の違いや境界の意識は認められない。外面調整は縦～斜方向のハケ調整で占められている。胴部上端に幅広の粘土帯がめぐり、羽状の櫛刺突文が施されている。その下にも部分的に櫛刺突が観察できるが、粘土帯上の施文の際に工具が当たった可能性も考慮する必要がある。

以上のような各土器の特徴から、SF19の土器棺は概ね弥生時代後期後葉頃に位置づけできる。

SF20土器棺（第112図337～339） 337は、土器棺の蓋に用いられていた高壺の坏部である。鉢形の坏部であり、脚部との接合部分から直線的に開き、屈折を介して直立する口縁部に至る。口縁部外面には



第112図 中央部出土弥生土器⑤

弥生時代の遺構と遺物2(中央部)

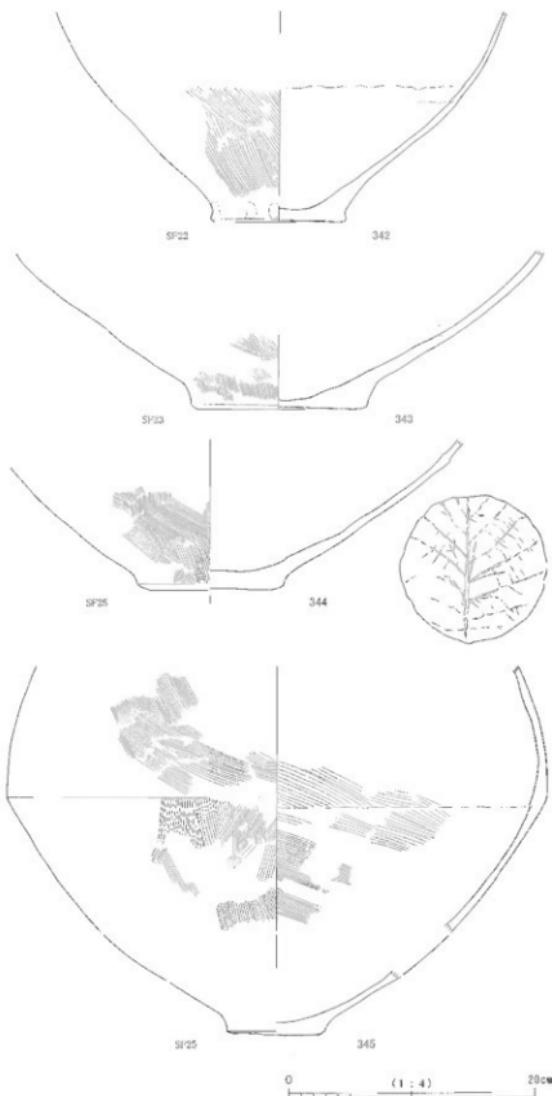
縄文が施され、その上に4方向5本単位の棒状浮文が貼り付けられている。器壁は薄く、摩滅のために調整は観察できない。

338は、土器棺の身に用いられていた壺の底部である。平底の底部であることがわかるが、摩滅が著しい。また、検出状況においては胴部下半までの残存が把握できるが、劣化・摩滅が著しくために接合・復元はできなかった。なお、崩れた土器片の中に339が混在して出土しており、胎土・色調などの特徴から、338と同一個体である可能性も考慮することができる。壺の頭部～胴部上端の破片であり、横刺突が施された三角突帯がめぐる。

以上のような各土器の特徴から、SF20の土器棺は概ね弥生時代後期前葉～中葉に位置づけできる。

SF21土器棺(第112図340・341) 340は、土器棺内に崩れた土器片の中に混在していた壺の底部である。出土状況から蓋として用いられた可能性が指摘できる。大型壺の平底の底部である。

341は、土器棺の身に用いられていた大型壺であり、口縁～頭部を欠いている。底部は平底である。横長の算盤玉形に近い形状に復元しているが、上部は図上で復元である。胴部下位は



第113図 中央部出土弥生土器⑤

直線的に開き、中央～上位は丸味をもって立ち上がる。両者の境には稜線を伴うが、必ずしも鮮明ではない。調整は摩滅のために不明である。胴部上端に幅広の粘土帯がめぐり、羽状の櫛刺突文が施されている。

以上のような各土器の特徴から、SF21の土器棺は弥生時代後期中葉～後葉の中に位置づけることができる。

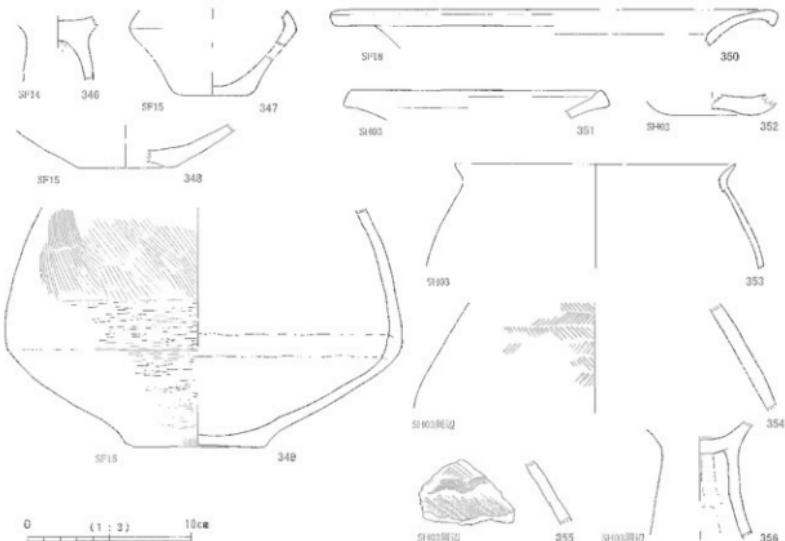
SF22土器棺（第113図342） 342は、土器棺の身に用いられていた大型壺であり、底部～胴部下位が残存している。底部は平底であり、胴部下位は立ち上がりが強い。また、胴部下位が341などに比べて丸味を強く帶びている。必ずしも良好な残存状況ではなく、弥生時代後期の中に位置づけできるが、それ以上の詳細は特定し難い。

SF23土器棺（第113図343） 343は、土器棺の身に用いられていた大型壺であり、底部～胴部下位が残存している。底部は平底であり、胴部下位は弱く内湾しながら大きく開く。底部の大きさ・形状から弥生時代後期中葉以降の可能性が指摘できるが、より詳細な時期を特定することは難しい。

SF25土器棺（第113図344・345） 344は、土器棺の蓋に用いられていた大型壺の底部～胴部下位である。底部は平底であり、木葉痕が認められる。胴部下位は弱く内湾しながら開く。

345は、土器棺の身に用いられていた大型壺であり、口縁～胴部上位を欠いている。底部は平底であるが、比較的小さい。胴部は、下位と中・上位の境（最大径部分）に明確な屈折稜を伴う。丸味を帶びた算盤玉形に図示したが、あくまで図上の復元によるものである。下位がより大きく開き、屈折後の上がより直立になる可能性もある。調整はハケ調整で占められる。

文様の特徴がわからず、復元を含んだ形態的特徴の把握によるものではあるが、弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づけできる可能性が考慮される。



第114図 中央部出土弥生土器⑦

**中央墓群出土土器** (第114図346～350) 346はSF14覆土から出土した脚台部片である。小型であり、文様はない。347～349はSF15覆土から出土した壺である。ただし、底部穿孔はない。347は胴部算盤玉形の小型壺、348は上げ底状の底部である。349は、出土状況から土坑墓上に供獻されていた可能性が指摘できる。平底の底部と下膨れ形の胴部を伴い、胴部上半にはハケ調整、下半には横ミガキ調整を観察することができる。350はSF18覆土中から出土した高坏の口縁部である。大きく外反しながら開き、端部には折り返しを伴う。体部との境には内面の屈折線を伴う。

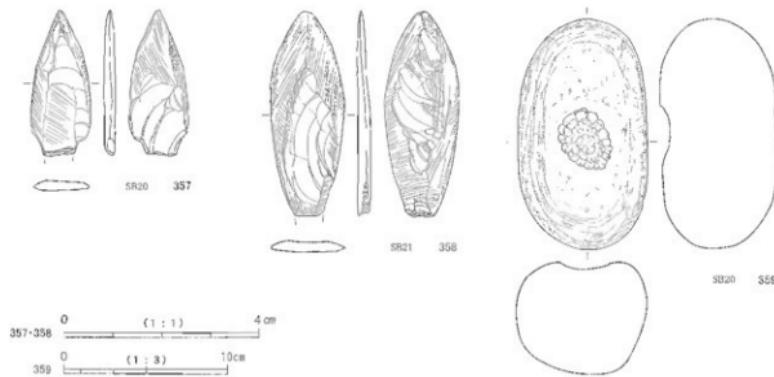
348のように弥生時代後期中葉以前の土器片もあるが、出土状況をみるとかぎり、全体を一つの時期に特定することはできない。349などは弥生時代後期中葉以降の可能性がある。

**SH03周辺出土土器** (第114図351～356) SH03の柱穴内およびSH03の周辺から出土した土器である。351は壺の口縁部、352は上げ底状の底部である。353は壺である。摩滅のために調整は不明であるが、もともと器壁は薄く、端部の刻みはないものと判断できる。354・355は壺の胴部片である。354には羽状の櫛刺突文が多段にめぐり、355には羽状櫛刺突文・波状櫛描文・繩文が施されている。356は高坏の脚部であるが、接合部の文様はない。比較的深い坏部を伴うものと復元できる。

出土遺物の時期については、弥生時代後期の中での新古が把握できる。比較的新しく位置づけできるものは、SH03の柱穴からの出土ではない傾向にある。

## (2) 石 器 (第115図357～359)

357は、SB20の覆土から出土した磨製石鎌である。屈曲する刃を伴う有茎の石鎌であり、鎌身は長三角形を呈する。研磨は全ての面に及ぶが、部分的に剥離面が残されている。358は、SB21の覆土から出土した磨製石鎌である。有茎の石鎌であるが、鎌身形態は357とは異なり、柳の葉に近い形状を呈する。また、刃の屈曲がない。研磨は各面に及ぶものの、部分的に剥離面が残されている。357は凝灰岩、358は粘板岩製である。359はSB20出土の凹石である。手持ちできる大きさの細長い円錐を用いている。



第115図 中央部出土石器

## 第4節 弥生時代の遺構と遺物3(南部)

### 1. 南部における弥生時代の遺構・遺物

**検出遺構 壺穴住居跡8軒 (SB22～SB29)**

方形周溝墓3基 2号周溝墓 (SD09～SD13) …土坑墓1基 (SF29)  
3号周溝墓 (SD14) …土器棺墓1基 (SF34)  
4号周溝墓 (SD15・SD16)

土坑6基 (SF27・SF28・SF30～SF33)

※古代以降の遺構（本章第5節）はない。

**出土遺物 揭載遺物**

壺穴住居跡…弥生土器各種、打製石鎌1、磨製石鎌1、磨製石斧1、円盤形石製品1  
方形周溝墓…弥生土器各種、土器棺  
土坑…弥生土器壺1

### 2. 壺穴住居跡

**SB22 (第116図) C2・3グリッドに位置する。丘陵上平坦面の北西部に位置しており、北部西寄りが流土によって失われている。さらに、2号周溝墓の周溝 (SD11・12) がSB22の中央を南北に縦断しており、大きく破壊している。東縁部はSB23によって切られている。**

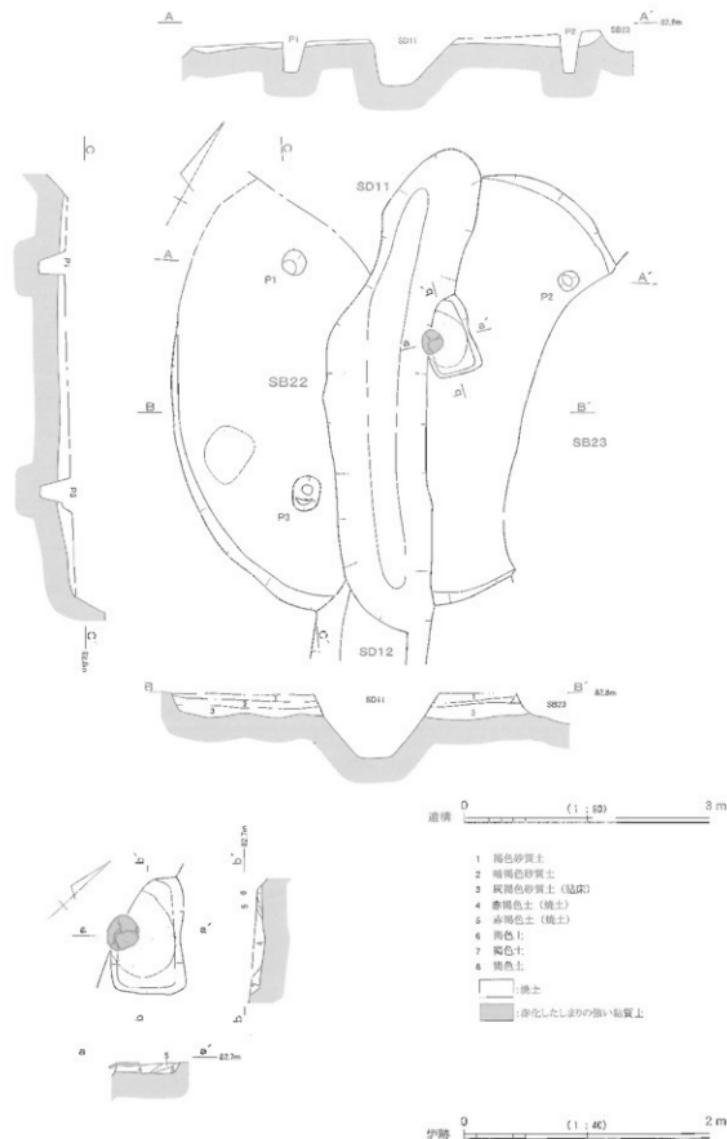
平面形は、南北にやや長い円形に復元することができる。掘方は底面の凹凸が著しく、床面は貼床（3層）によって平坦に設けられている。しかし、壁溝は設けられていなかった。柱穴は3基 (P1～3) が検出されており、4本柱が方形に配置されていた可能性を指摘することができる。炉跡は、中央北寄りに残されていた。平面長方形の掘り込みが床面において検出され、その中央部に焼土層が認められた。焼土層の上には、赤化した硬い粘質土が板状に検出されている（赤化粘質土板）。南西部の焼土は床面より上（下層）で検出されたものであり、掘り込みは伴わない。

出土遺物は決して多くはなく、残存状態の悪い土器片で占められている（第130図360・361）。遺構の切り合いおよび出土遺物から、SB22は弥生時代中期後葉～後期前葉の壺穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

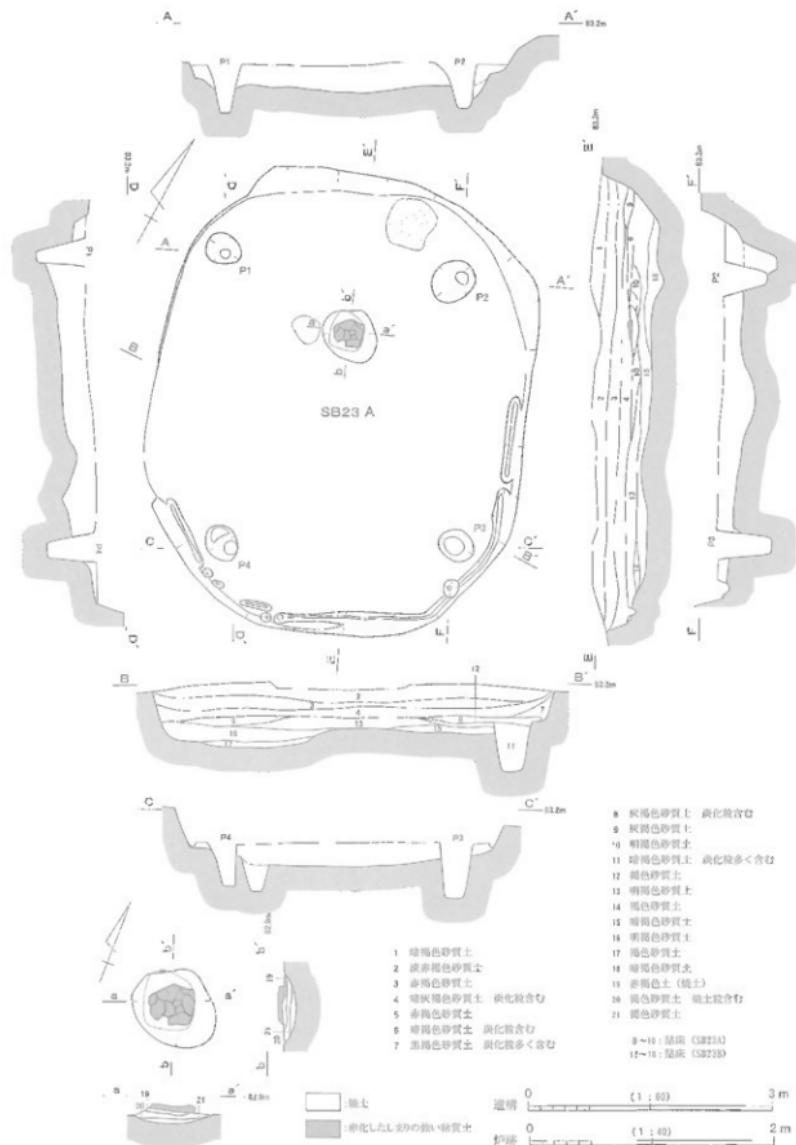
**SB23A・B (第117・118図) C3グリッド北部に位置する。丘陵上平坦面の北部に立地しており、北縁が2号周溝墓の周溝 (SD10) と接しているが、残存状態は比較的良好。なお、土礫などによってSB23はSB22の東部を壊していることが把握できている。なお、このSB23には床面の貼り直しと炉・柱穴のつくり替えが認められる。掘方を変更させずに、床面・柱・屋根・炉などを再設置して建て替えを行ったことがわかる。以下、建て替え後のSB23Aと建て替え前のSB23Bに分けて報告する。**

SB23Aは、南北に長い平面橢円形を呈する。炉の周囲や周縁部にできた古いSB23Bの床面の凹みを埋めるようにして、薄い貼り床が施されている（8～10層）。古い柱穴は埋め戻した可能性が高い（11層）。SB23Aの床面においては、南部の周縁に幅の狭い壁溝を検出することができた。さらに、四方の隅には柱穴 (P1～4) が検出されており、4本柱が長方形に配置されていた可能性が指摘できる。炉跡は、中央

弥生時代の遺構と遺物3(南部)

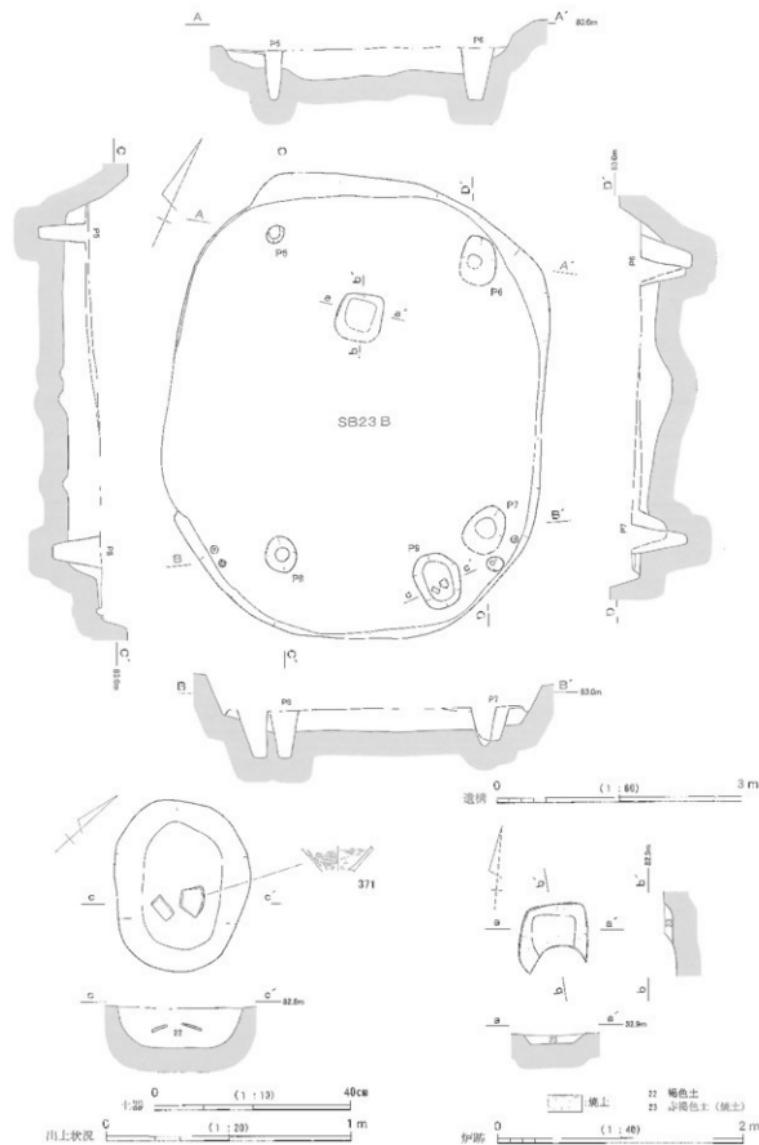


第116図 SB22



第117圖 SB23A

弥生時代の遺構と遺物3(南部)



第118図 SB23B

北寄りに残されていた。浅い梢円形の掘り込みが把握でき、その覆土上位に焼土層が認められた。焼土層の上には、赤化した硬い粘質土が板状に検出されている（赤化粘質土板）。焼土層上面の高さが概ね床面と一致している。

SB23Bは、凹凸が著しい掘方底面に厚く貼床土（12～18層）を施して床面を構築している。根拠は得られなかつたが、数度の床面再構築を経ている可能性もある。壁溝は、SB23Aと別に検出されることはなかつた。SB23Aの壁溝がSB23Bの段階から存在していた可能性はある。柱穴は4基（P5～8）を把握することができた。それぞれがSB23Aの柱穴（P1～4）に隣接・重複しており、SB23Aと同様に4本柱が配置されていた可能性が指摘できる。炉跡は中央北寄りに残されていたが、南部がSB23Aの炉跡によって壊されていた。方形の浅い掘り込み全体に焼土が認められている。南東隅において長軸約0.7mの土坑（P9）が把握されている。遺構の形状などから貯蔵穴である可能性が考慮される。なお、SB23Bの床面は断面によって把握された部分が大きく、柱穴（P5～8）と貯蔵穴（P9）については、SB23Aの貼床の下にあることやSB23Aの柱穴と重複する場合があることなどから、本来の掘り込み面から平面的に検出することができなかつた。多くは、貼床の解体時の断面や掘方底面において把握している。

SB23Aの覆土から多くの弥生土器が出土しているが、残存状態の良い個体はない（第130図362～370・372）。SB23Bに伴うものとしては、P9から出土した高环片（第130図371）がある。遺構の切り合いや出土遺物から、弥生時代後期前葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB24（第119図） C4グリッド北西部に位置する。丘陵上平坦面の北東部に立地しており、崩落によって北縁が失われている。また、全体に削平が著しく、床面より上の覆土は大半が失われていた。

平面は、南北に長い梢円形を呈する。掘方は南東部が深く掘りこまれているが、床面は貼床（2・3層）によって概ね平坦に設けられている。壁溝は認められない。柱穴は4基（P1～4）を検出することができ、4本柱が長方形に配置されていたものと判断できる。炉跡は北寄りに位置する。方形の掘り込み全体に焼土が認められた。焼土層の上には、赤化した硬い粘質土が板状に検出されている（赤化粘質土板）。ただし、削平の影響を受けており、北東隅の一部しか残存していないかつた。

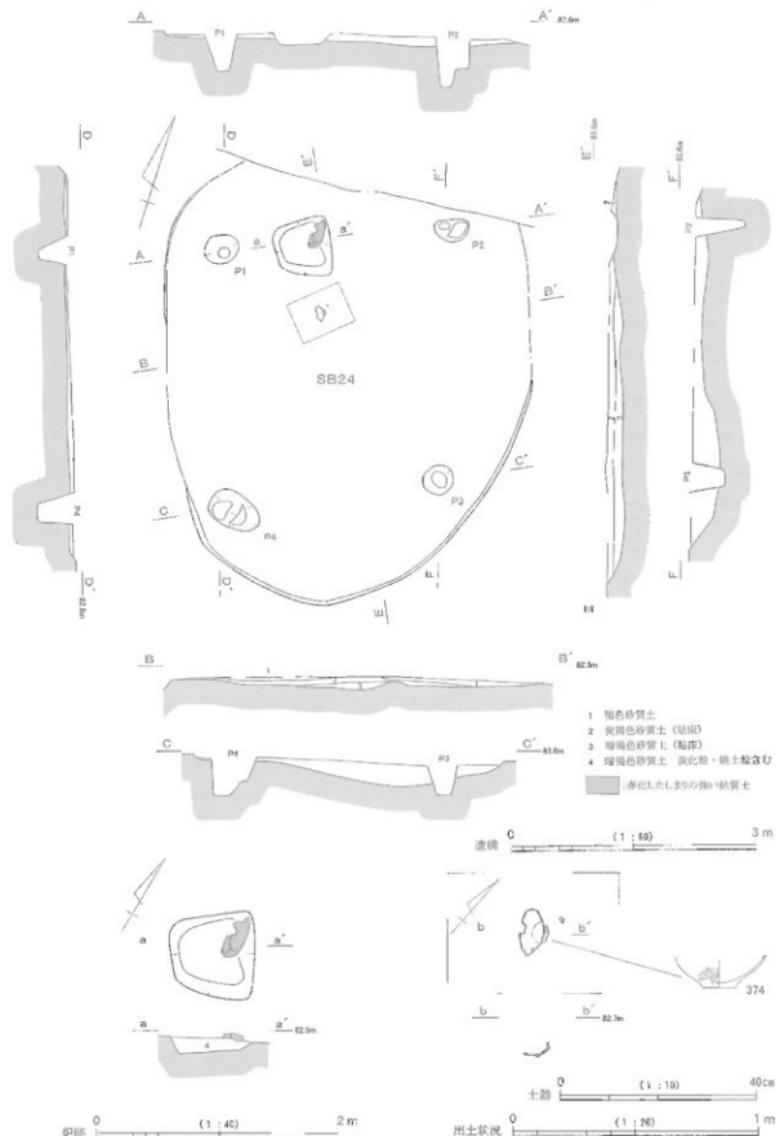
中央部の床面上において壺の底部（第130図374）が出土し、その他にも覆土中から弥生土器片（第130図373・375）が出土している。ただし、上部の削平に伴う2号周溝墓との遺物の混在も考慮する必要がある。なお、2号周溝墓はSB24の西に隣接しており、SB22・23と周溝墓との切り合い関係から、SB24も2号周溝墓よりも前に営まれていた可能性が評価できる。以上のような出土遺物や遺構間の先後関係の評価から、SB24は弥生時代後期前葉頃の竪穴住居跡である可能性が高いと判断できる。

SB25・26（第120図） B3グリッド南部に位置する。丘陵上平坦面に立地するが、東部は山道によつて破壊されている。さらに、3号周溝墓の周溝（SD14）が東西に横断しており、中央部を壊している。なお、ここでは2軒の竪穴住居跡が重複した状態で発見されており、検出状況と土層断面によって、SB25がSB26を切っていることが把握できている。

SB25は、円形に近い梢円形を呈している。掘方は、周縁部が低くなる底面と傾斜が比較的緩い壁体を伴う。床面は、貼床（8～11層）によって平坦に設けられている。壁溝は認められない。柱については、3基の柱穴（P1～3）によって4本柱が方形に配置されていた可能性が指摘できる。中央南寄りに検出されたP5は、柱穴よりも大きく深い掘り込みを伴う。配置や形状から炉跡である可能性が考慮できるが、焼土は認められなかつた。SB26は、SB25の南西において一部が残存している。掘方は平面梢円形に復元でき、貼床（18層）による床面などが把握できている。しかし、残存部において壁溝は認められず、柱穴・炉跡の検出もなかつた。

遺物には弥生土器片と石器がある。土器（第131図376～379）については、いずれの住居跡においても破片が散在的に出土するだけであり、床面上において良好な状態で土器が残されていたということはな

弥生時代の遺構と遺物3(南部)



第119図 SB24

かった。石器は、SB25から打製石鏃1点（第135図411）、SB26から磨製の柱状片刃石斧1点（第135図413）と円盤形石製品1点（第135図414）が出土しているが、いずれも覆土上層からの出土である。以上のように、出土遺物からは住居跡の時期を詳細に特定することは難しい。しかし、土層から3号周溝墓より古い遺構であることは明らかであり、概ね弥生時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡である可能性を考慮することができる。

**SB27（第121図） A2グリッド北東部に位置する。丘陵上平坦面の西際に立地しており、西部は斜面の崩落・流土によって失われていると判断できることから、調査区外とした。また、SB28や4号周溝墓の周溝（SD15）によって南部が壊されている。検出したのは北東部とSB28・SD15の下に残存していた柱穴（P2）だけである。**

平面は隅丸方形に近い梢円形に復元できる。掘方は底面に凹凸があり、貼床（1層）によって平坦な床面を構築している。東縁に幅の狭い壁溝、東部の南北に2基の柱穴（P1・2）を検出することができた。柱穴の位置から、4本柱を方形に配置していた可能性が指摘できる。

遺物は、覆土中から弥生土器片（第131図380～383）と磨製石鏃（第135図412）が出土している。他の遺構との混在も考慮されることから、出土遺物から住居跡の時期を詳細に特定することは難しい。しかし、土層から4号周溝墓より古い遺構であることは明らかであり、概ね弥生時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡である可能性を考慮することができる。

**SB28（第122図） A2グリッドに位置する。丘陵上平坦面の西際に立地しており、西部は斜面の崩落・流土によって失われていると判断できることから、調査区外とした。また、SB28はSB27の南部を大きく壊して設けられているが、4号周溝墓の周溝（SD15）にはSB28が壊されている。南半部は調査区外になっている。**

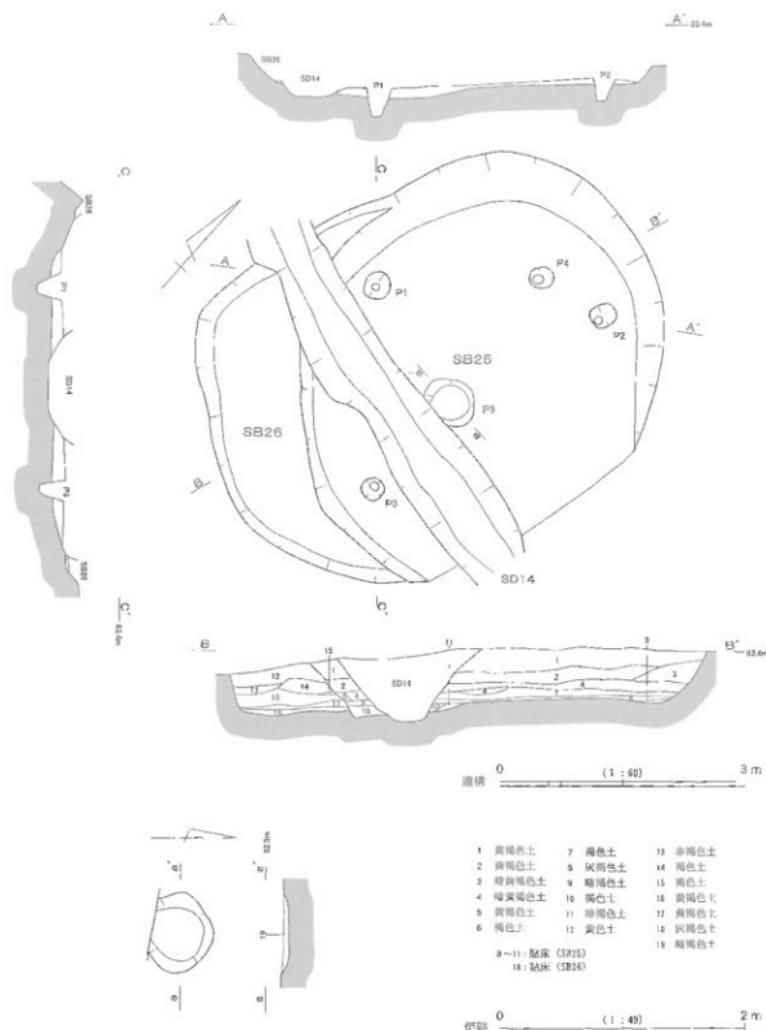
平面形は梢円形に復元できる。掘方は底面の凹凸が著しく、貼床（4～6層）によって平坦な床面を構築している。壁溝は認められない。柱穴は1基（P1）を検出したが、柱の配置などの復元は難しい。中央北寄りに炉跡が残されていた。東西に長い梢円形の掘り込みが検出され、その全体に焼土が認められた。ただし、中央の底面に暗褐色砂質土（8層）があり、東西に分けて把握することもできる。焼土層の上に赤化した硬い粘質土が板状に検出されている（赤化粘質土板）が、その範囲は東半部に限られている。赤化粘質土板の上には鹿の脛部片が散っていた。

覆土中や炉の周囲から弥生土器片が出土しているが、小破片で占められており、復元・図化して掲載できたものはない。遺構の切り合い関係や周辺の時期的傾向から、弥生時代後期前葉～中葉頃の竪穴住居跡である可能性を考慮することができる。

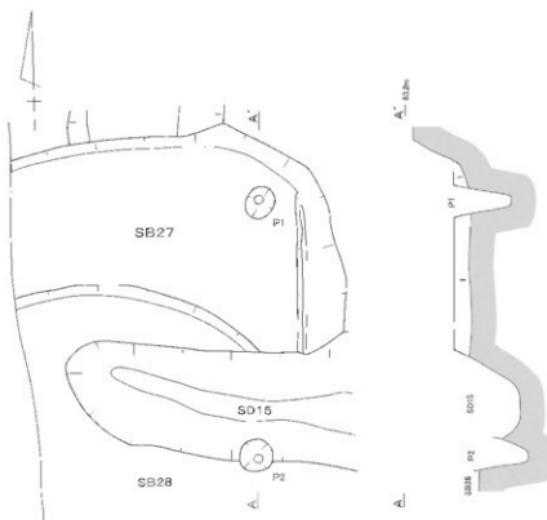
**SB29（第121図） A3グリッド西部に位置する。丘陵上平坦面の東際に立地しており、斜面の崩落・流土によって中央部以東が失われている。また、4号周溝墓の周溝（SD16）によって壊されている部分もある。南部は調査区外である。**

平面形は梢円形に復元できる。掘方の底面は比較的平坦であるが、薄い貼床（1層）によって床面を設けている。壁溝は認められない。柱穴は北西部の1基（P1）のみを検出したが、炉跡は残存範囲において確認することができなかった。

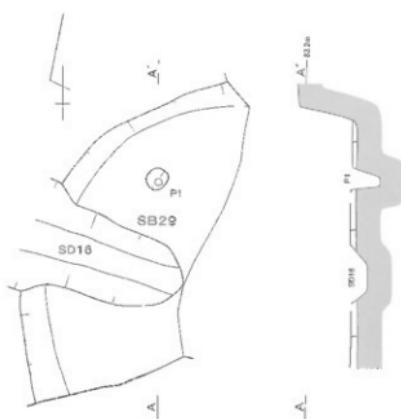
覆土中から弥生土器片が出土している（第131図384～386）。出土遺物から住居跡の時期を詳細に特定することは難しいが、土層から4号周溝墓より古い遺構であることは明らかであり、概ね弥生時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡である可能性を考慮することができる。



第120図 SB25・26



1. 棕褐色砂質土（底床）

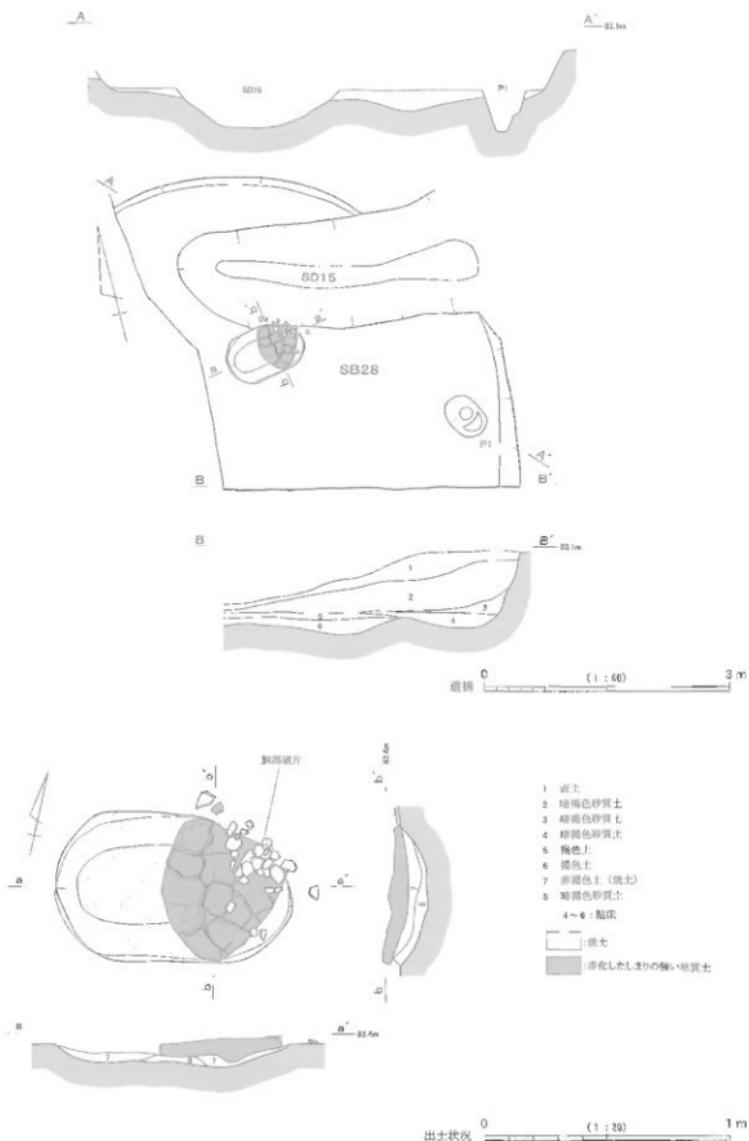


1. 黄褐色砂質土（底床）

0 (1 : 60) 3 m

第121図 SB27、SB29

弥生時代の遺構と遺物3(南部)



第122図 SB28

### 3. 方形周溝墓

#### (1) 2号周溝墓

**立地と環境**（第47・123図） C3グリッド北部を中心とした範囲に位置する。丘陵上平坦面の北部に立地しており、北東隅は斜面の崩落によって失われている。さらに、全体的に上部の削平・流土が把握されている。

なお、この場所には数軒の竪穴住居跡（SB22～24）が重なっており、土層などから住居跡の埋没後に2号周溝墓が設けられていることが判明している。一方、北西隅から東縁中央にかけては山道が横断しており、2号周溝墓の上部を壊している。SF28と2号周溝墓との先後関係は不明である。

**周溝SD09～13**（第123図） 周溝は方形にめぐっている。方形の方向は北方位より西にやや傾いており、調査区中央部から南部へのびる尾根に沿って設けられたと把握できる。したがって、同様に設けられたSD08（区画溝）やSB22～24の方向とは概ね平行している。なお、以下においては、北西の辺を北辺として記述する。

周溝外縁による方形の規模は東西約10.7m×南北約9.2mである。北西隅と北東隅は、斜面の崩落などによって周溝が途切れている。北西隅は途切れることなく周溝がめぐっていたと復元できるが、北東隅については判断できない。南東隅も周溝が途切れている。上部の削平については考慮する必要があるが、周溝墓がつくられた当初から途切れていた、もしくは極端に浅くなっていたと判断できる。この南東隅にはSF30が位置しているが、周溝墓とSF30とが関連するものであるのかは不明である。

周溝の深さは、場所によって異なる。北辺と南辺～西辺南半部では0.3m前後の深さであるが、南辺東半部の内寄りに深さ約0.5mの細長い土坑状部分を伴う。西辺北半部と東辺では、約0.9mの深さとなる。覆土等の観察において、故意に埋め戻したり掘り返したりした痕跡は認められなかった。

周溝内からある程度の数の弥生土器片が出土している（第132図387～393）。しかし、残存の良いものは覆土中位から出土した小型壺1点（第132図391）だけである。小型壺は、底部穿孔が認められない一方、口縁部および胴部の一部を欠いた状態で出土している。その他については、住居跡との混在があるものと把握できる。遺構の特徴・切り合いや出土遺物から、2号周溝墓は概ね弥生時代後期後葉～末葉の周溝墓であると判断できる。

**方台部**（第123図） 周溝（SD09～13）によって区画されている方台部について、周溝底面内側によつて測る規模は、東西約8.5m×南北約7.1mである。盛土は全く確認できなかつたが、流土などによる削平を受けていることから、本来の有無は不明である。なお、周溝墓に伴う遺物が方台部上に良好な状態で残存することはなかつた。

**土坑墓SF29**（第123図） 方台部の中央において土坑1基（SF29）を把握することができた。ただし、残存していた深さが非常に浅く、遺構内外の土層の識別が困難であったため、平面的に全体を検出することはできなかつた。SF29の把握は、住居跡検出のための土層断面によつて行われている。

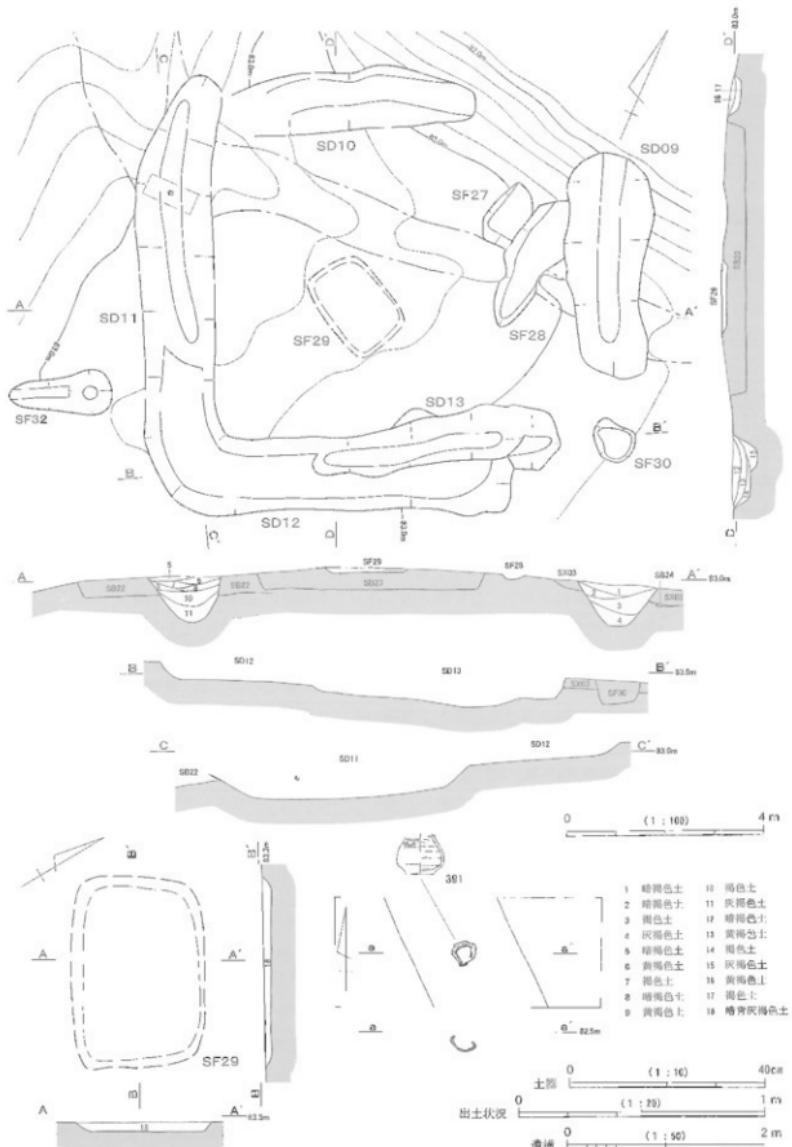
平面形は、約1.4m×2.0m弱の長方形である。残存していた深さは0.1m以下と浅い。覆土は暗青灰褐色土であり、埋葬主体（被葬者）や木棺の痕跡は確認できなかつた。また、副葬品や供獻土器などの出土もなかつた。

#### (2) 3号周溝墓

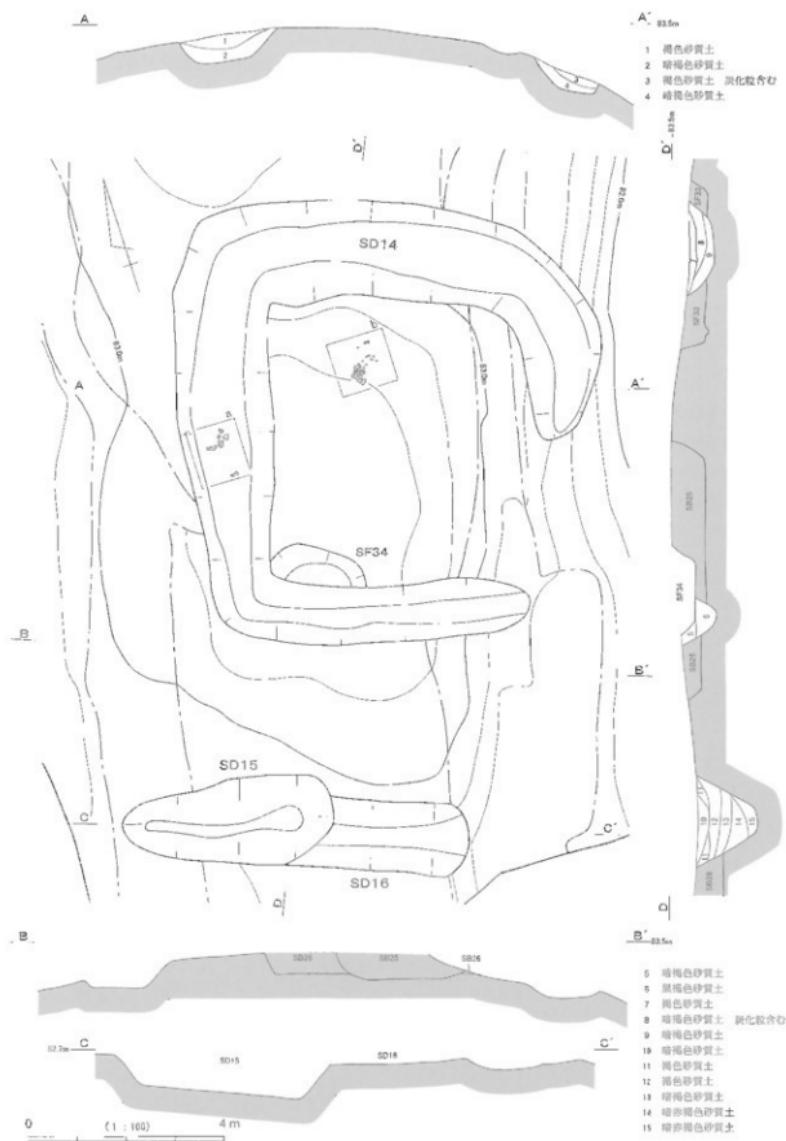
**立地と環境**（第47・124図） B3グリッドに位置する。丘陵上平坦面の東部に立地しており、東縁部南半は斜面の崩落によって失われている。また、上部全体に流土の影響が把握されている。

なお、この場所には竪穴住居跡（SB25・26）や土坑（SF33）が重なっており、土層などから住居跡・

弥生時代の遺構と遺物3(南部)



第123図 2号周溝墓



第124図 3号周溝墓①・4号周溝墓

土坑の埋没後に3号周溝墓が設けられていることが判明している。一方、東部において南北にのびる山道があり、3号周溝墓の上部を壊している。

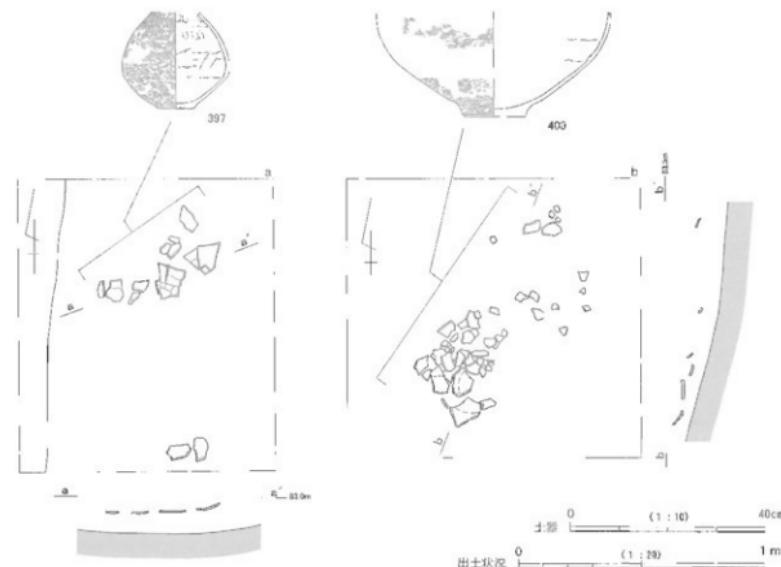
**周溝SD14(第124・125図)** 周溝は方形にめぐっている。方形の方向は北方位より少し東に傾いており、尾根の方向に沿って設けられたと把握できる。以下、北北東の辺を北辺として記述する。

周溝外縁による方形の規模は、東西約8.8m×南北約9.1mである。検出したのは南辺から西辺・北辺・東辺北半までであり、その間は途切れることなくめぐり、深さの変化や底面の凸凹もない。東辺南半は斜面の崩落によって失われた部分であり、つくられた当初から途切れていたかは不明である。周溝の深さは概ね0.7m前後である。覆土等の観察において、故意に埋め戻したり掘り返したりした痕跡は認められなかった。

周溝内からある程度の数の弥生土器片が出土している(第132図394~399)。しかし、残存の良いものは少なく、住居跡との混在もあると把握できる。西辺中央の底面において破片が多くまとめていた壺(第132図397)などは、3号周溝墓に伴う可能性が高いと評価できる。遺構の特徴・切り合いや出土遺物から、3号周溝墓は概ね弥生時代後期後葉前後の周溝墓であると判断できる。

**方台部(第124・125図)** 周溝(SD14)によって区画されている方台部について、周溝底面内側によつて測る規模は、東西約6.4m×南北約7.1mである。盛土は全く確認できなかつたが、流土などによる削平を受けていることから、本来の有無は不明である。

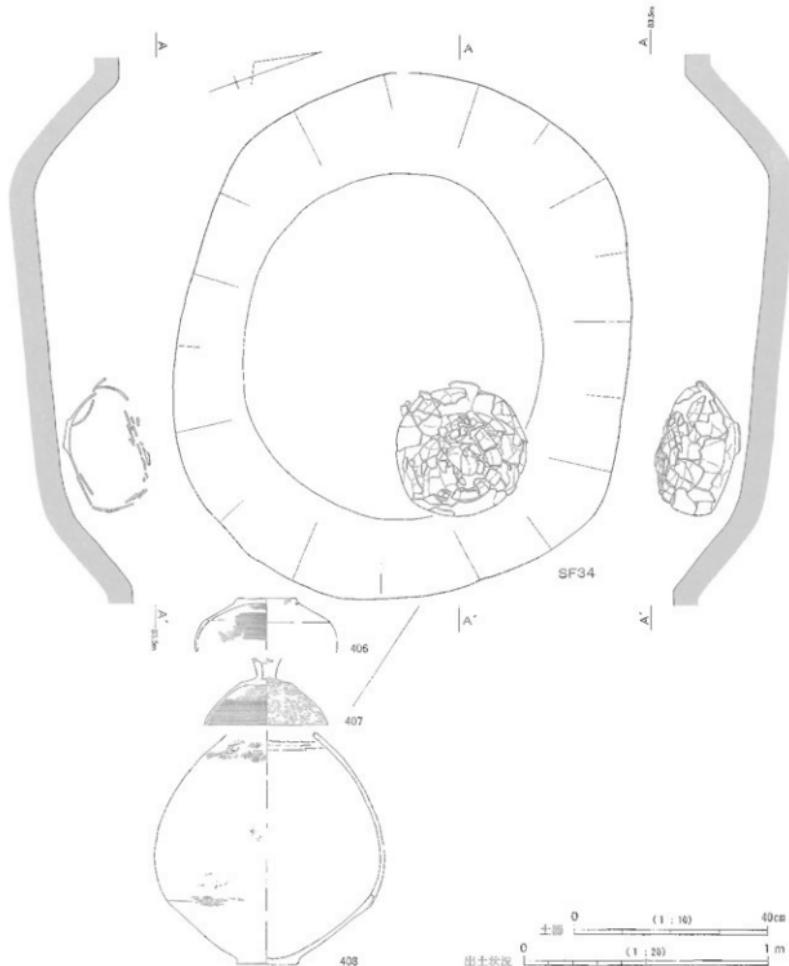
中央部北よりにおいて、大型壺(第132図400)の破片がまとめて出土している。胸部下半の破片で占められており、土器棺墓に用いていた可能性が考慮される。しかし、近辺に土器棺墓の痕跡は認められなかつた。方台部上において他の用途に用いられていた可能性も考慮する必要がある。



第125図 3号周溝墓②

土器棺墓SF34（第124・126図） 南縁西寄りにおいて土器棺墓（SF34）を検出した。周溝と重なる場所に位置しており、検出状況から周溝が埋没した後に設けられたことがわかる。土器棺の上面が流土によって乱れていたが、全体的に残存状態は良い。

土器棺の身は、頸部以上を欠いた大型壺（第133図408）を用いており、概ね正位に置かれていた。蓋は、高环（第133図407）を用い、身の穴を塞ぐように逆さにして載せられていた。さらに、高环の上に



第126図 3号周溝墓内の土器棺墓SF34

### 弥生時代の遺構と遺物3(南部)

壺の底部～胴部下位(第133図406)を逆位にして載せられていた。高坏については、脚部が完全に失われ、脚柱部は摩滅した破片が散在していた。基本的には、脚部を欠いた状態で用いた可能性が高いと判断できる。しかし、土器棺墓の上部が流土などの影響によって散乱しており、上を向いていた脚部が後世に失われたという可能性も否定はできない。なお、この高坏は遠江のものではなく、西濃地域などから搬入されたものと判断できる。

土器棺に伴う土坑は、土器棺を埋納するには大きすぎる。平面は約1.8m×2.1mの楕円形を呈しており、その北東隅に土器棺が置かれていた。覆土は褐色を基調とした砂質土層で占められており、特異な土砂の選択は認められない。土器棺を埋納する以外の痕跡も把握できなかった。土器棺内についても、流入土によって完全に埋もれており、埋葬人骨や副葬品などの発見はなかった。

遺構の切り合いや土器棺に用いた土器の特徴から、SF34は概ね弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の土器棺墓であると判断することができる。

#### (3) 4号周溝墓

立地と環境(第47・124図) A2・3グリッドに位置する。南北にのびる丘陵上平坦面に立地しているが、尾根の幅が狭いために、東西の側縁部が失われている。

検出したのは、東西にのびる一辺の周溝(SD15・16)のみである。南側の調査区外において、わずかな地形の高まりを観察することができる。この部分に周溝墓の中心があると把握でき、検出したSD15・16は北辺の周溝に該当すると判断できる。

なお、この場所には堅穴住居跡(SB27～29)が重なっており、土層などから住居跡・土坑の埋没後に4号周溝墓が設けられていることが判明している。一方、東西両端において南北にのびる山道があり、4号周溝墓の上部を壊している。

周溝SD15・16(第124図) 検出した北辺の周溝は、直線的に東西にのびる。検出した長さは約7.1mであるが、東方向へはさらにのびていた可能性が高い。東半部(SD16)の深さが約0.5mであるのに対して、西半部(SD15)は深さ約1.2mの土坑状を呈する。覆土等の観察において、故意に埋め戻したり掘り返したりした痕跡は認められなかった。

周溝内からある程度の数の弥生土器片が出土している(第132図402～405)。しかし、残存の良いものは少なく、住居跡との混在もあると把握できる。遺構の特徴・切り合いなどから、4号周溝墓は概ね弥生時代後期後葉～末葉の周溝墓である可能性が評価できる。

方台部(第124図) 検出した周溝が直線的であることから、方形に区画された方台部を伴うものと判断できる。検出範囲においては、盛土を確認することはできず、周溝墓に伴う遺物が方台部上に残存することもなかった。しかし、流土などの影響を考慮する必要もあり、本来の盛土の有無は不明である。さらに、調査区外においては比較的良好な残存状態を期待することができる。

## 4. 土坑など

SX03(第47図) C3グリッド北東部からC4グリッド北縁にかけた場所に位置する。平面不整形の浅い遺構であり、その範囲は広くSB24の東西におよんでいる。

SX03はSB24の上部全体を削平しており、覆土にはSB24の土器片や焼土が攪拌された状態で含まれていた。また、二枚貝や巻貝の化石(印象化石)が覆土中に多く含まれていたが、これについては自然科学的な分析・鑑定の結果、SB24に伴っていた貝殻の痕跡というわけではなく、地山(大日砂岩層)に含まれていた貝の印象化石が削平に伴って混在している可能性が指摘できる(分析の詳細は第6章にお

いて報告する)。

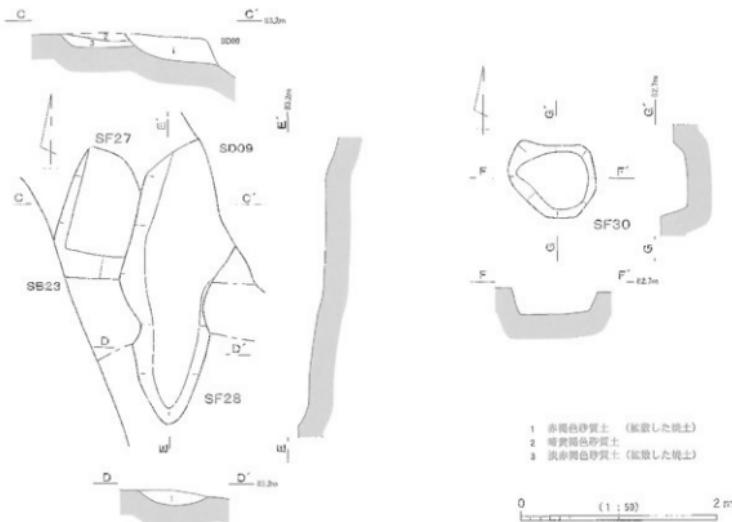
以上のように、SX03はSB24周辺域の上面を削平した痕跡であり、SB24などが埋没した後の比較的新しい時期の遺構である可能性が評価できる。

SF27・28(第127図) C3グリッド北東部に位置する。2号周溝墓の方台部上にあるが、一部が周溝墓の周溝と接している。遺構の特徴や配置関係から、2号周溝墓との関連性は評価できない。一方、堅穴住居跡とも隣接している。なお、周溝墓(周溝)や堅穴住居跡との切り合いについて、SF27・28の検出が浅く、遺構間の重なりがわずかであったことから、土層による先後関係の把握ができなかった。SF27とSF28との先後関係については、土層からSF28が後になることが把握できている。

西側のSB24はSX03によって上部全体が削平されており、周間に土器片や炉・覆土中の焼土が拡散している。その範囲はSF27・28にまで至っており、SF27・28の覆土には拡散した焼土が多く含まれていた。したがって、SF27・28はSX03と同様にSB24付近を削平した痕跡である可能性が指摘できる。なお、出土遺物はない。

SF30(第127図) C4グリッド西縁中央に位置する。2号周溝墓の南東隅にあり、SX03の底面において検出されている。平面は長軸約0.9mの不整椭円形であり、深さは約0.3mである。出土遺物はない。2号周溝墓に関連する根拠もないが、SX03に伴うとする根拠も得られていない。時期・性格ともに不明な遺構である。

SF31(第128図) C2グリッド中央北西寄りに位置する。尾根の西側斜面に立地しており、上部は流土の影響を強く受けている。遺構の切り合いはない。東西1.0m弱×南北1.5m弱の平面長椭円形、深さ



第127図 SF27・28、SF30

弥生時代の遺構と遺物 3 (南部)

0.2m弱の浅い土坑であるが、底面の北部に径0.4m弱の円形の穴を伴う。周囲の底面からの深さは0.1m強である。

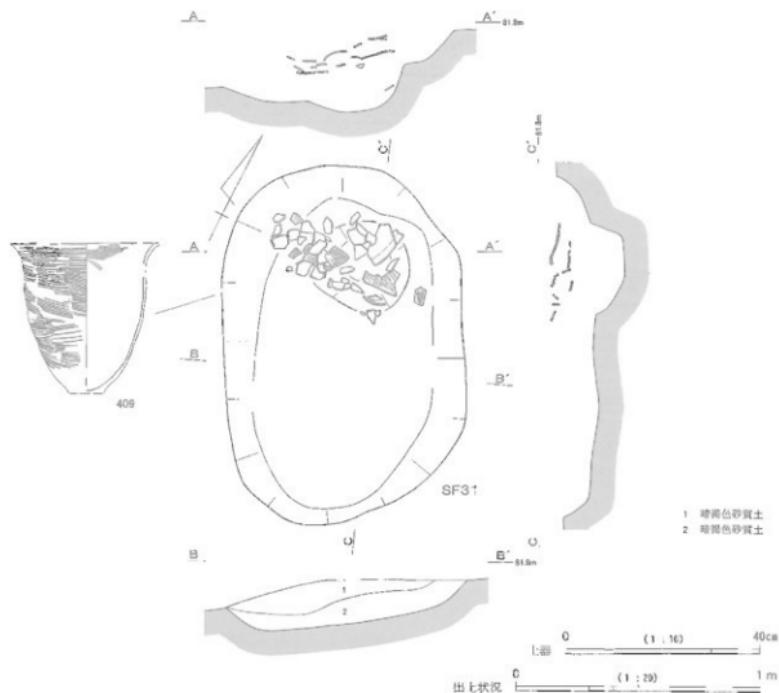
円形の穴がある北部の上層において、甕（第134図409）が出土している。多くの破片になって乱れた状態で出土しているが、口縁部が東にあることがわかり、横倒しの状態でつぶれた可能性が指摘できる。出土状況の乱れは流土の影響によるものと判断できる。また、この甕の出土によって、SF31は弥生時代前～中期の土坑である可能性が高いと判断できる。

SF32（第129図） C2グリッド南東部に位置する。径約0.9mの円形部分の西側に溝状部分が接続している。円形部分の深さは約0.6mである。溝状部分の検出長は約1.3m、深さは約0.3mである。西端は流土によって失われている。出土遺物はない。

2号周溝墓の西側にあり、溝状部分の方向も2号周溝墓の軸と一致している。しかし、それ以外に周溝墓に関連すると判断できる根拠はない。時期・性格ともに不明な遺構である。

SF33（第129図） B3グリッド北部に位置する。丘陵上平坦面の中央付近に立地しているが、3号周溝墓の周溝（SD14）によって中央が大きく破壊されている。

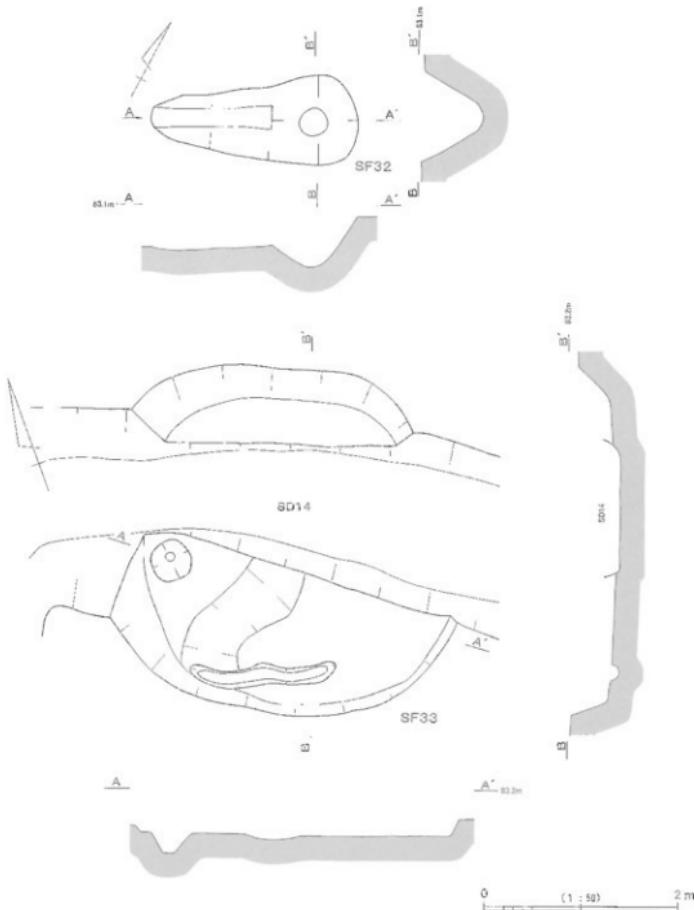
平面は径約3.6mの円形を呈しており、深さは概ね0.3～0.4mである。底面は概ね平坦であるが、多少



第128図 SF31

の凸凹や小穴・溝を伴っている。覆土は褐色を基調とする砂質土であるが、炭化粒を多く含んでいる。焼土粒の混在も部分的に認められた。

弥生土器の破片が出土しているが、図化・掲載できるものはない。覆土中の炭化粒を分析したところ、樹種はスダジイ（ブナ科シノキ属）とクマノミズキ類（ミズキ科ミズキ属）があり、年代はスダジイの分析によって $1710 \pm 40$ 年BP（BP=1950年）であるという結果が得られている（詳細は第6章で報告）。SF33は4号周溝墓より古い時期の遺構であると判断できるものの、竪穴住居跡が営まれた時期よりも周溝墓群形成期に近い時期の遺構である可能性が指摘できる。



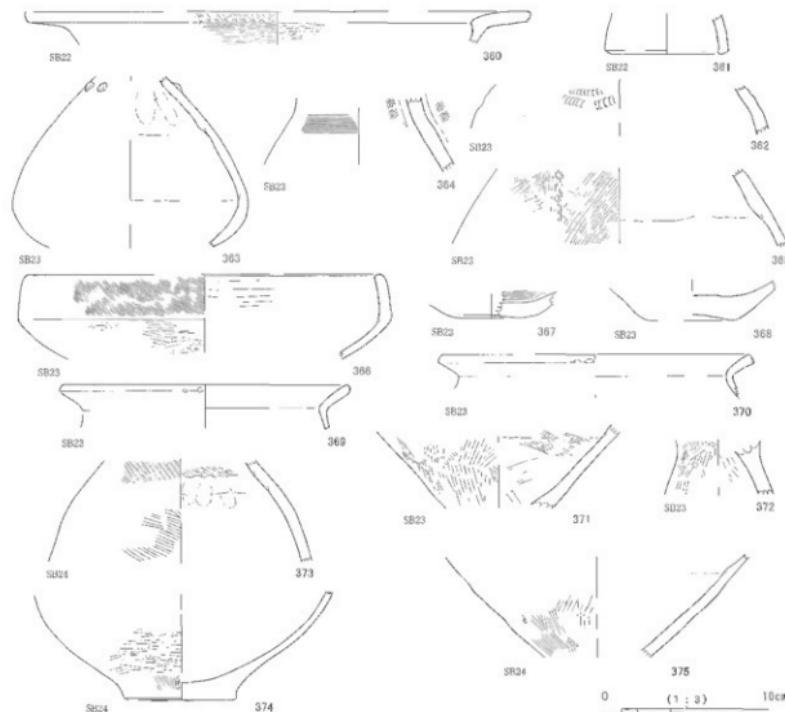
第129図 SF32、SF33

## 5. 出土遺物

### (1) 弥生土器

SB22出土弥生土器 (第130図360・361) SB22の出土土器は少なく、小破片で占められている。360は高壺の鉢状口縁部である。口縁端部に折り返しではなく、刻みがめぐる。口縁部と体部との屈折は明確であり、体部は比較的深い形状を呈する可能性が指摘できる。361は台付壺の台部片である。小破片ばかりであるが、360は弥生時代後期前葉頃の特徴を伴っている。

SB23出土弥生土器 (第130図362~372) SB23の出土土器はSB22より多いものの、破片で占められている点では違わない。362~365は、壺の胴部片である。362の胴部には強状の連続爪形文、363の胴部上端には貼付けによる浮文、364の胴部上端には櫛描横線文、365の胴部には櫛描の縦線と斜格子文が施されている。363の浮文は2個単位3方向に配置されている。367・368は、壺もしくは鉢の底部であり、ともに上げ底状を呈する。366は、鉢の上半部である。内湾しながら開く体部と内傾気味に直立する口縁部を伴っており、両者の境には明確な屈折稜を伴う。口縁部外面には繩文が施されている。369・370は壺の口縁部であり、胴部から屈折して大きく開く。ともに摩滅が著しく、口縁端部の刻みなどが観察し難い。



第130図 南部出土弥生土器①

くなっている。372は台部片である。371は、SB23のP9から出土した高坏片である。坏部下位の破片であり、形態的特徴から鰐付口縁の坏部である可能性が指摘できる。

覆土中から出土した破片ばかりであるが、全体的に弥生時代中期後葉～後期前葉の中に位置づけできる特徴が多く認められる。362などは他からの混在と考えたいが、その他の時期差はSB23の建て替えの中で生じた差である可能性も考慮する必要がある。

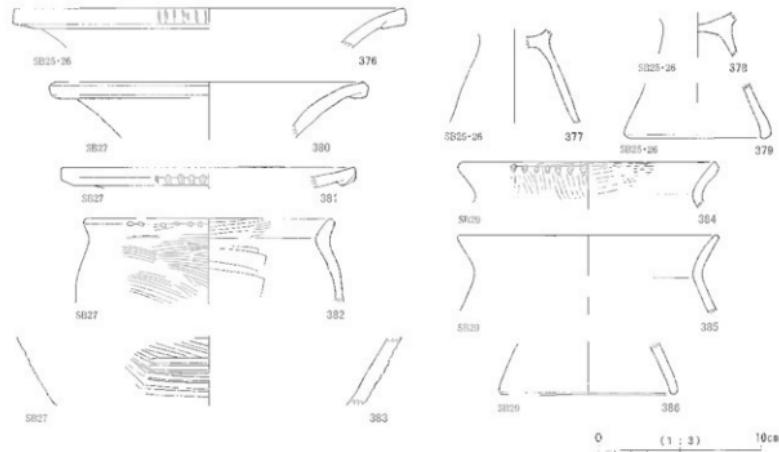
**SB24出土弥生土器（第130図373～375）** SB24の出土土器も小破片が多く、図化できたのは3点のみである。373は壺の胴部上半、374は壺の胴部下位である。両者は別個体であるが、ともに球腹化した胴部であることがわかる。373は、胴部上端に羽状の権突文がめぐる。374は、残存部上端が胴部上半との接合部になっている。底部は平底である。375は壺の胴部下位である。

これらは、弥生時代後期中葉以降に位置づけできる可能性が高い。ただし、SB24上部の削平に伴う2号周溝墓との混在も考慮する必要があり、SB24の時期を示しているとは限らない。

**SB25～29出土弥生土器（第131図376～386）** SB25～29のいずれにおいても、出土土器は小破片で占められている。

SB25・26の出土土器について、376は折り返しを伴う壺の口縁部、377～379は台付壺もしくは高坏の脚台部である。SB27の出土土器について、380・381は折り返しを伴う壺の口縁部、382は壺の上半部片である。380の口縁部が外反しながら開くのに対して、381の口縁部は直線的大きく開いている。381の口縁端部には刻みがめぐる。382の口縁部は短く開き、端部には刻みがめぐる。383は条痕文土器の破片であり、他からの混在が考慮される。SB29の出土土器について、384・385は壺の口縁部、386は台部である。385は摩滅が著しく、口縁端部の刻みの有無も把握できなくなっている。

小破片ばかりの出土ではあるが、383以外は概ね弥生時代後期前葉～中葉の中に位置づけできる可能性が高い。ただし、後述するように、3号周溝墓・4号周溝墓の出土土器にSB25～29との混在を把握することができ、その中に弥生時代中期後葉の特徴を伴うものがある。SB25～29の時期については、これらも含めて検討する必要がある。



第131図 南部出土弥生土器②

2号周溝墓出土弥生土器（第132図387～393） 387～393は、2号周溝墓の周溝から出土した土器であるが、出土状況から周溝墓に伴うと判断できるのは、小型壺1点（391）だけである。その他は残存状態の悪い破片であり、土器の特徴や出土状況からSB22・SB23との混在があるものと把握できる。

387・388は受口状の壺の口縁部である。387の口縁部外面には繩文、388の口縁部外面には斜方向の櫛描文が施されている。389は大型壺の直立する頸部であり、縦方向のミガキ調整が観察できる。390は細頸壺の胴部片である。胴部中位に櫛描波状文、その上半に櫛描横線文と縦方向の櫛描波状文が確認できる。頸部には縦方向のミガキ調整が観察できる。391は小型壺であり、口縁部および胴部の一部を欠いている。平底の底部、下膨れ形の胴部、太めの頸部を伴っており、胴部上位に結節繩文が施されている。392は平底の底部、393は端部に刻みを伴う壺の口縁部である。

2号周溝墓に伴う可能性が評価できる391については、概ね弥生時代後期末葉前後に位置づけることができる。しかし、その他はSB22・SB23が営まれた時期（弥生時代中期後葉～後期前葉）に位置づけできる土器片が多く、前述のとおり違構間の土器の混在を把握することができる。

3号周溝墓出土弥生土器（第132図394～401） 3号周溝墓の出土土器についても、出土状況から周溝墓に伴うと判断できるのは壺2点（397・400）だけである。その他は残存状態の悪い破片であり、土器の特徴や出土状況からSB25・26との混在があるものと把握できる。

394は受口状の壺の口縁部であり、口縁部外面に縦方向の沈線が施されている。395・396は、櫛描波状文が施された壺の胴部片である。397は周溝底面において出土した壺の胴部である。底部は、中央がわずかに凹んでいる。やや球形化した形状を呈しており、胴部上位には羽状の櫛刺突文がめぐる。胴部下半には横方向のミガキ調整、上半には斜方向のハケ調整が観察できる。398・399は上げ底状の底部である。400は大型壺の胴部下半である。底部は平底、胴部は丸味を帯びた形状を呈している。外面調整は斜方向のハケ調整が全体に観察できるが、胴部最大径のやや下の接合部にだけは、横方向のミガキ調整が施されている。401は無文の脚台部であるが、形状から高坏の可能性が指摘できる。

3号周溝墓に伴う可能性が評価できる397については、概ね弥生時代後期後葉～末葉に位置づけることができる。しかし、その他は弥生時代中期後葉～後期前葉に位置づけできる土器片が多く、前述のとおりSB25・26などの土器の混在を把握することができる。

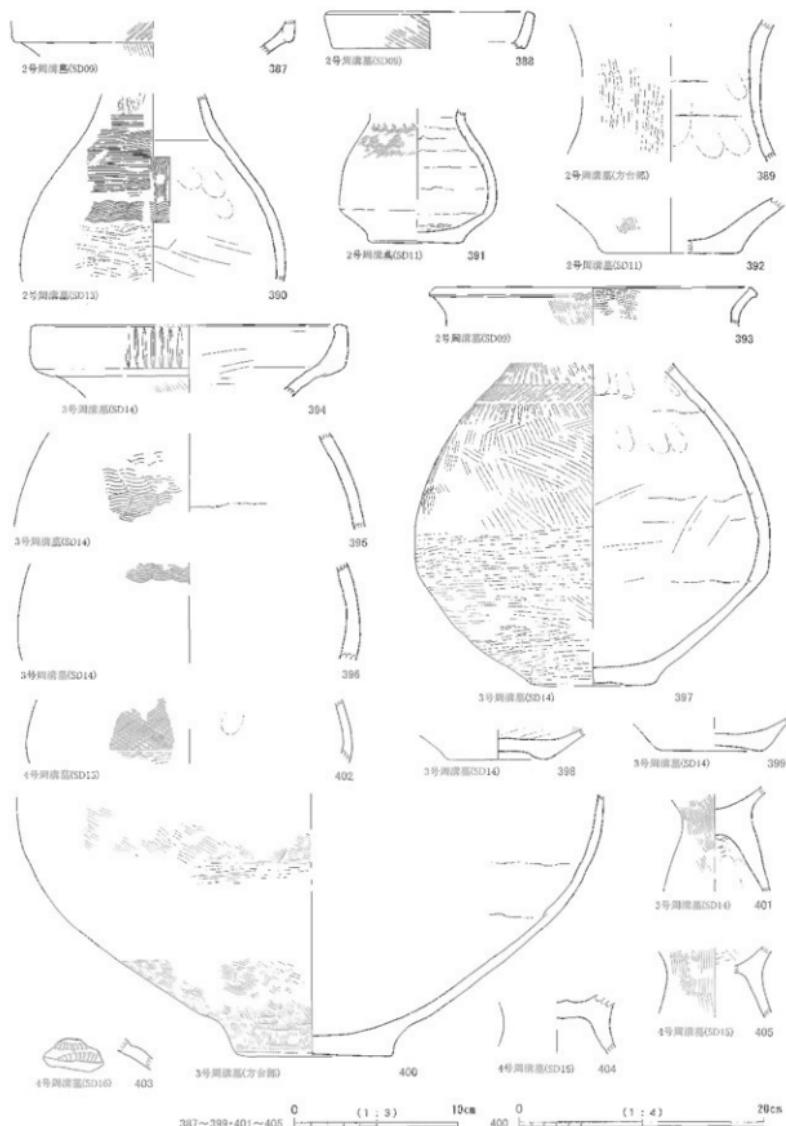
4号周溝墓出土弥生土器（第132図402～405） 4号周溝墓の出土土器は小破片に限られている。402は壺の胴部中位の破片であり、櫛描の斜格子文と横方向のミガキ調整を観察することができる。403も壺の胴部片であるが、波状の連続爪形文が施されている。404・405は壺の台部である。

土器の特徴および出土状況から、必ずしも4号周溝墓に伴うものであるとは限らず、SB27～29との混在があるものと把握できる。402・403は弥生時代中期の土器であると判断できる。

SF34土器棺（第133図406～408） 406は、土器棺の蓋に用いられていた壺の胴部下半である。土器棺の蓋は406と407によって二重になっており、406は407の上に載る。胴部下位は平底の底部から直線的に大きく開く。胴部中位は丸味を伴いながら立ち上がり、胴部下位との境（接合部）には屈折稜を伴う。ただし、全体的には球形に近い形状に把握することができる。外面調整は摩滅のために不明であるが、内面においてハケ調整を観察することができる。

407は、土器棺の蓋に用いられていた高坏である。二重蓋の下側に用いられていた。坏部は概ね全てが残存していたが、脚部は完全に失われていた。脚柱部は半分だけが残り、しかも摩滅した状態で散在していた。以上から、脚部を欠いた状態で蓋に用いたと復元することもできる。ただし、上を向いた脚部が流土などの影響によって失われたという可能性も否定できない。

坏部は、平坦な坏底部から屈折を介して開きながら立ち上がり、口縁端部に至る。体部は弱く内湾する。外面および内面下半にはミガキ調整が観察できる一方、内面上半には多条沈線文とハの字状の連続



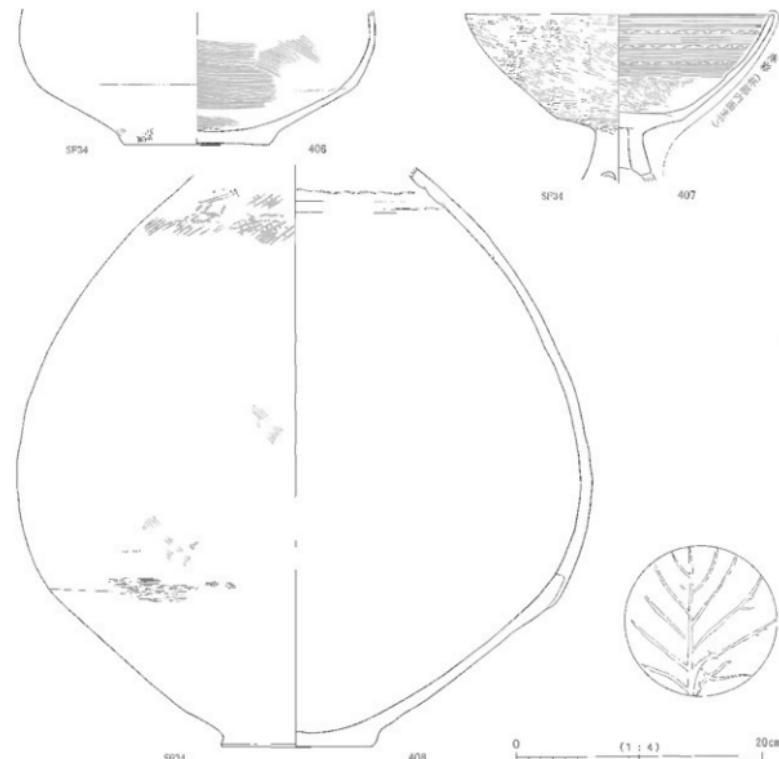
第132図 南部出土弥生土器③

弥生時代の遺構と遺物3(南部)

刺突がめぐっている。文様のある内面上半と文様のない内面下半との境に段差があり、下半の器壁が薄くなっている。脚部は、細い接合部から脚部へと徐々に聞く形状を呈しており、その中位に円形の透孔が穿たれている。坏部外面および脚部外面に赤彩が施されている。なお、以上の形態・文様については、濃尾平野低地北部の高坪(西濃型高坪)に認められる特徴を伴う。他の出土土器に比べて胎土に含まれる砂粒が目立たず、焼成のためか摩滅の程度も低い。遠江以外の地域から搬入してきた可能性が指摘でき、土器棺墓に埋葬された者との関連性が考慮される。

408は、土器棺の身に用いられていた大型壺である。口縁～頸部を欠いた状態で用いられていた。底部は平底であり、木葉痕が残されている。胴部は、大きく聞く下位と内湾しながら立ち上がる中・上位に大別できるが、全体的に球形に近い形状を呈している。胴部上位には結節繩文がめぐる。この施文には、繩文と(結節を伴う)無節繩文を燃ったものを用いているように観察できる。外面調整はハケ調整を主体としているが、下位と中位との境(接合部)付近だけは横方向のミガキ調整が観察できる。

以上のような各土器の特徴から、SF34の土器棺は概ね弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の中に位置づけることができる。



第133図 南部出土弥生土器④

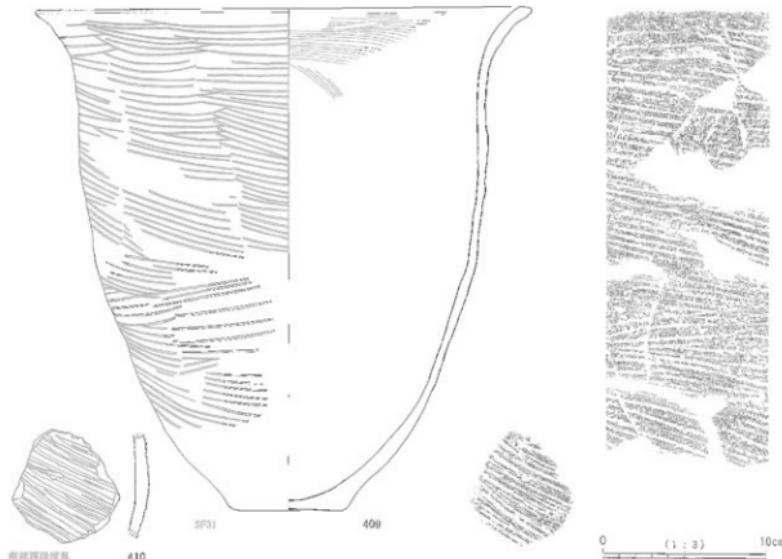
SF31等南部西縁出土弥生土器（第134図409・410） 409・410は条痕文の壺であり、409はSF31から出土、410はSF31周辺域（調査区南部西縁）の搅乱から出土している。

409は概ね完形に復元することができた。平底の底部から丸味を伴いながら立ち上がり、口縁部では弱く外反する。外面のほぼ全体に条痕、口縁部内面にはハケ調整、その下の内面調整は摩滅のために観察できない。条痕は2条単位の工具（竹管かは不明）によって、横方向や斜方向に施されている。口縁端部は、刻みなどの文様が施されてない。

弥生時代前～中期の壺に認められる形態であるが、文様などに前期に近い特徴を有している。

## ② 石 器（第135図411～414）

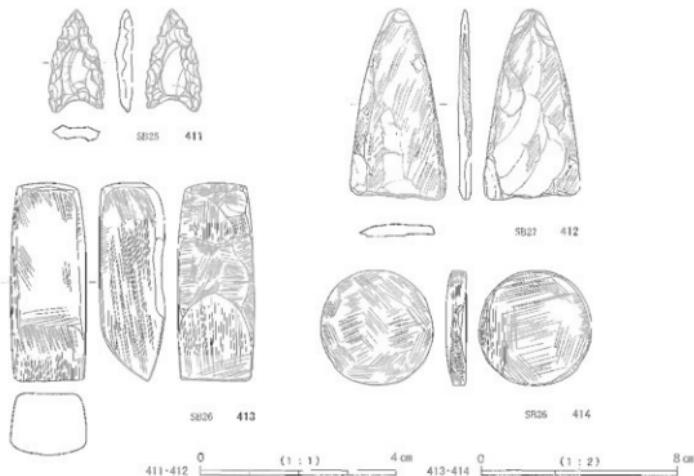
411は、SB25から出土した打製石鎌である。凹基無茎であり、側縁のふくらがやや張った二等辺三角形を呈している。横断面をみると、細かい調整剥離が連なる側縁に対して、剥片剥離の面が残る中央部は緩やかに凸んでいる。矢柄への取り付け（根拠み）には都合の良い形状として捉えることができる。412は、SB27から出土した磨製石鎌である。平基無茎であるが、小孔は伴っていない。研磨は概ね全体に認められるが、剥離面が残されている部分もあり、基部の側面においては全く研磨されていない。また、岡化した方の側縁については、研磨によって鋭い刃がつくり出されていない部分がある。以上のような不完全な部分があることから、製品ではない可能性も考慮されるが、決して使用できない状態というわけではない。



第134図 南部出土弥生土器⑤

413は、SB26から出土した多孔質玄武岩製の柱状片刃石斧である。刃部に線状痕が顕著に認められる。また、長さが非常に短いことから、長期の使用、数度の修復を経ている可能性が指摘できる。414は、SB26から出土した円盤形の石製品であり、全体に隙間無く研磨が施されている。平面正円形であり、図の右側に示した面は概ね平坦であるが、左側に示した面には膨らみを伴う。図の右側に示した平坦な面について、その左縁部に傾斜を付けた部分があり、必然的に側縁面の幅が狭まっている。

414については、石製鍤車の未製品(穿孔前)である可能性が指摘しやすい。弥生時代後期の石製鍤車と未製品の出土は、磐田市(旧豊岡村)新平山遺跡において確認することができる。ただし、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の出土例であり、本遺跡の集落跡とは時期差がある。また、出土した石製品について、414と同様の砂岩製を含む円盤形の石製品ではあるが、膨らみを伴う面や一方の縁だけに傾斜をつけるような造作は認め難い(豊岡村1993)。一方、414が円盤形の石製品として完成されたものである可能性も否定できない。壺の蓋などを想定することもできるが、当地域においては想像の域を出ない。壺の蓋については、土製のものに磐田市(旧豊岡町)加茂東原遺跡などの出土例があるが、摘みの付いた形状を呈している(豊田町1998)。



第135図 南部出土石器

## 第5節 古代以降の遺構と遺物

### 1. 古代以降の遺構・遺物

検出遺構 北部…掘立柱建物跡 2棟 (SH01・SH02)  
 土坑 7基 (SF01・SF04~09)  
 中央部…土坑 1基 (SF24)  
 溝 (堀切状遺構) 2条 (SD02・SD04)  
 南部…なし

### 出土遺物 掘載遺物

北部土坑…中世陶器の甕・鉢・小壺・蓋、鉄片 (釘など)、銅錢  
 北部遺構外…須恵器坏類、土師器甕、かわらけ、鉄鎌  
 中央部遺構外…山茶碗、近世陶器の碗  
 南部遺構外…灰釉陶器碗

### 2. 掘立柱建物跡

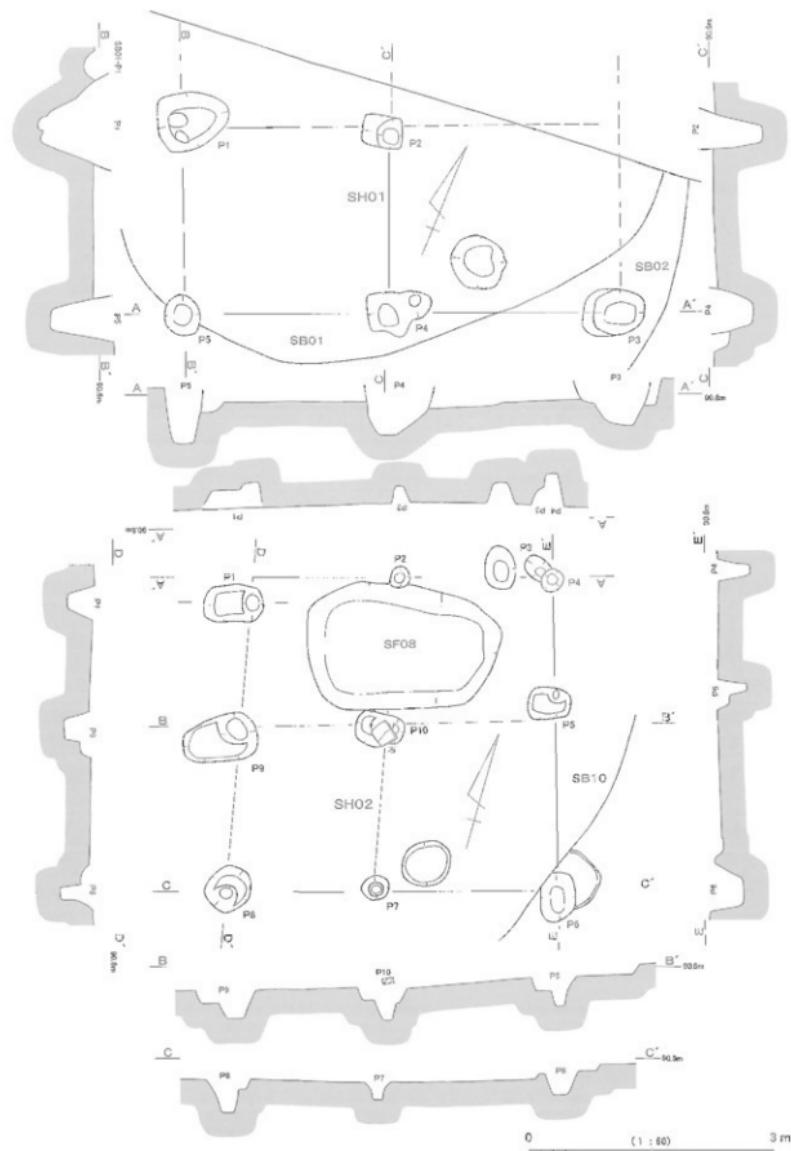
SH01 (第136図) 調査区北部の北緯、N7グリッドに位置する。丘陵上平坦面に立地しており、この場所にはSB01・02が重なる。検出過程における土層断面などの検討によって、SB01・02の埋没後にSH01が設けられたことが把握できている。

方形に配置された柱穴 5基 (P1~5) を検出している。規模は、東西 2間 (約5.4m) であることは明らかであるが、南北長は北側が調査区外となるために把握できない。検出した南北長は 1間 (約2.3m) 分であるが、柱間の距離などを考慮すると、南北 2間以上の縦柱の掘立柱建物跡である可能性が指摘できる。5基の柱穴 (P1~5) は、検出面からの深さが概ね0.6~0.9mの中にある。P1は他より上部が大きくなっていること、P2~4の東や西には浅い付属部が伴っている。これらは柱の設置もしくは抜取りによる可能性が考慮される。出土遺物はない。

遺構の特徴や切り合いから、弥生時代の集落に伴う建物跡であるとは判断できない。このSH01が立地する調査区北部の丘陵上平坦面は、片瀬城跡の縄張り調査では南ノ郭として位置づけられ、今回の調査では中世の土坑や鉄鎌の出土などがあった。詳細な時期の特定は難しいが、SH01も中世の掘立柱建物跡である可能性が考慮される。

SH02 (第136図) L8グリッド北西隅を中心とした範囲に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しており、SB10と大きく重なる。検出過程における土層断面などの検討によって、SB10の埋没後にSH02が設けられたことが把握できている。

方眼上の9ヶ所に配置された柱穴 10基 (P1~10) を検出している。規模は、東西 2間 (約4.0m) ×南北 2間 (約3.8m) である。9ヶ所の柱穴 (P1~10) は、概ね同じ程度の深さを伴っているが、平面形・規模については差異がある。柱が立てられていた部分については、概ね同じ規模の円形を呈しているが、浅い付属部分を伴うものがあり、とくにP1・9の西側に伴う付属部は大きい。これらは柱の設置もしくは抜取りによる可能性が考慮される。中央に位置するP10の上部では、砂岩の板石が穴を塞ぐようにして置



第136図 古代以降の建物跡(SH01、SH02)

かれていた。出土遺物はない。

遺構の特徴や切り合いから、弥生時代の集落に伴う建物跡であるとは判断できない。詳細な時期の特定は難しいが、SH01と同様に中世の掘立柱建物跡である可能性が考慮される。なお、SH02の北半部にSF08（中世の土坑）が検出されている。SF08の縁がSH01の柱穴2基（P2・10）と接しているが、先後関係などの検討はできなかった。SF08がSH02内の施設である可能性も考慮する必要がある。

### 3. 土 坑

**SF01（第137図） M7グリッド北西隅に位置する。尾根西側の緩斜面に立地しており、SB04と重なる。検出過程における土層断面などの検討によって、SB04の埋没後にSF01が設けられたことが把握できている。周縁にある小穴はSB04に伴う遺構である可能性が高い。SF01の平面は、約2.1m×1.9mの方形を呈する。深さは検出面から約0.6mであり、SB04よりは深い。覆土は暗赤褐色土を主体としている。遺物は、陶器の壺（第143図417）の破片が出土している。**

出土した陶器は15世紀前半頃に生産されたものと判断できるが、長期の使用・伝世に耐えられるものもある。SF01の時期については、15世紀前半以降であると把握できる。

**SF04・05（第137図） M8グリッド西部に位置する。丘陵上平坦面の東縁部に立地しており、SF04の一部がSB05と重なっている。検出過程における土層断面などの検討によって、SB05の埋没後にSF04・05が設けられたことが把握できている。**

北西側のSF04は、1.3m弱×約2.0mの平面梢円形を呈し、検出面からの深さは0.4m弱である。覆土は暗赤褐色土を主体としており、陶器の壺や桶（第143図415・417）の破片が出土している。南東側のSF05は、長軸約1.8mの平面梢円形を呈し、検出面からの深さは0.3m強である。覆土の特徴はSF04に近いが、上層に暗褐色土の堆積が確認できる。出土遺物はない。

SF04出土陶器は15世紀前半頃の生産と判断できるが、長期の使用・伝世に耐えられる。SF04は15世紀前半以降の土坑であると把握できる。遺構の特徴から、SF05も同様の土坑である可能性が高い。

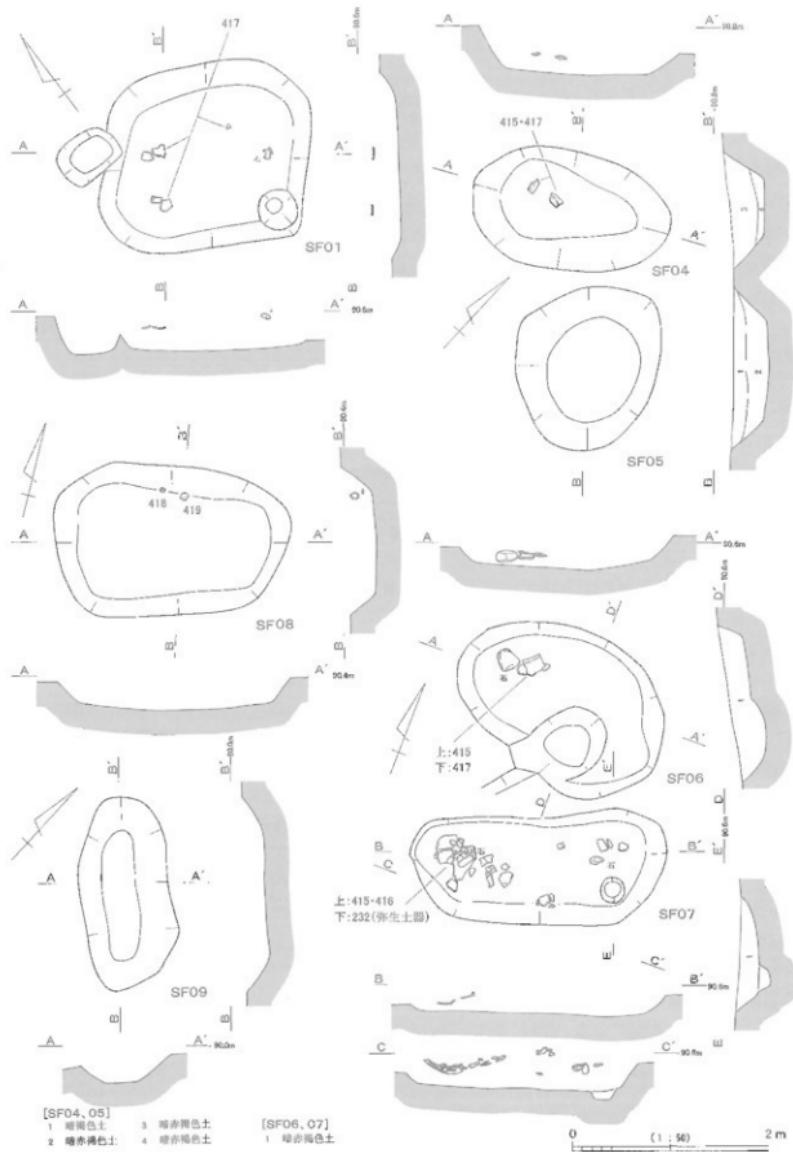
**SF06・07（第137図） M7グリッド東部に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しており、SB07・09・10と重なっている。検出過程における土層断面などの検討によって、SB07・09・10の埋没後にSF06・07が設けられたことが把握できている。**

北側に位置するSF06は、約1.6m×2.3mの平面梢円形を呈し、検出面からの深さは約0.3mである。底面の南部には、径約0.7mの平面円形で深さ0.2m弱の凹みを伴っている。覆土は、暗赤褐色土を主体とする。北西端部の底面に円礫が置かれており、その東隣から陶器片が出土している。陶器片については、桶（第143図417）の底部片の上に壺（第143図415）の口縁部片が重なっていた。

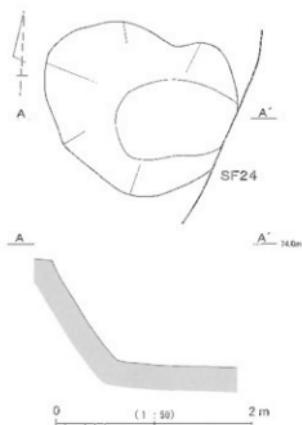
南側に位置するSF07は、約1.2m×2.7m弱の平面長梢円形を呈しており、検出面からの深さは約0.3mである。南東隅に小穴が検出されているが、SF07に伴うとは限らない。覆土は、暗赤褐色土を主とする。遺物は、西部を中心に多くの土器片が出土している。この土器片群の中には、弥生土器の大型壺（第86図232）と中世陶器の壺（第143図415・416）が含まれておらず、傾向として、弥生土器片の上に中世陶器片が重なっている状況にある。なお、弥生土器の大型壺については、調査区北部南縁部に位置するSF10から出土した土器片と接合している。

SF04などと同様に、SF06・07は15世紀前半以降の中世土坑であると判断できる。SF07から弥生大型壺の破片が多く出土したことについて、自然に流入したとするには破片の数が多く、中世陶器片が重なっている点も不自然に思われる。中世における造成等によって土器墓などが破壊され、その一部の土器片がSF07内に最埋納された可能性を考えたい。

古代以降の遺構と遺物



第137図 古代以降の土坑①(SF01, SF04・05, SF06・07, SF08, SF09)



第138図 古代以降の土坑②(SF24)

SF08（第137図） M8グリッド南西隅に位置する。丘陵上平坦面の中央に立地しており、SB10と重なっている。検出過程における土層断面などの検討によって、SB10の埋没後にSF08が設けられたことが把握できている。また、SF08はSH02の北半部に位置しており、建物跡内の施設として設けられた可能性も考慮する必要がある。

平面は約1.6m×2.4m強の長方形を呈しており、検出面からの深さは0.6m弱である。覆土は淡赤褐色土を主としており、北縁部中央の下層において陶器の蓋（第143図418）と小壺（第143図419）が出土している。西侧に蓋、東側に小壺が位置する。蓋は、逆位の状態で出土しており、摘みが欠損している。小壺は、土坑中央に口を向けて横倒しの状態で出土しており、口縁端部が欠損している。ただし、破断面の状況から、口縁端部を欠いた状態で使用していた可能性が指摘できる。また、小壺の中からは、釘などの多くの鉄片（第145図431～472）と銅銭1点（第145図473）が出土している。鉄片は複雑に曲げられ、入り乱れた状態で小壺に入っていた。銅銭は一部が

欠けており、小壺の底の方に入れられていた。

金属片が多く入った小壺は、お歯黒壺として使用されていた可能性が指摘できる。蓋は小壺に伴つて存在する可能性が指摘できるが、本来は別の蓋であったものを転用していると把握できる。これら陶器は15世紀中～後葉の生産によるものと判断できるが、使用的な状況は長期にわたっていることが予測される。以上から、SF08は15世紀中葉以降の中世土坑であるという判断が妥当と考える。

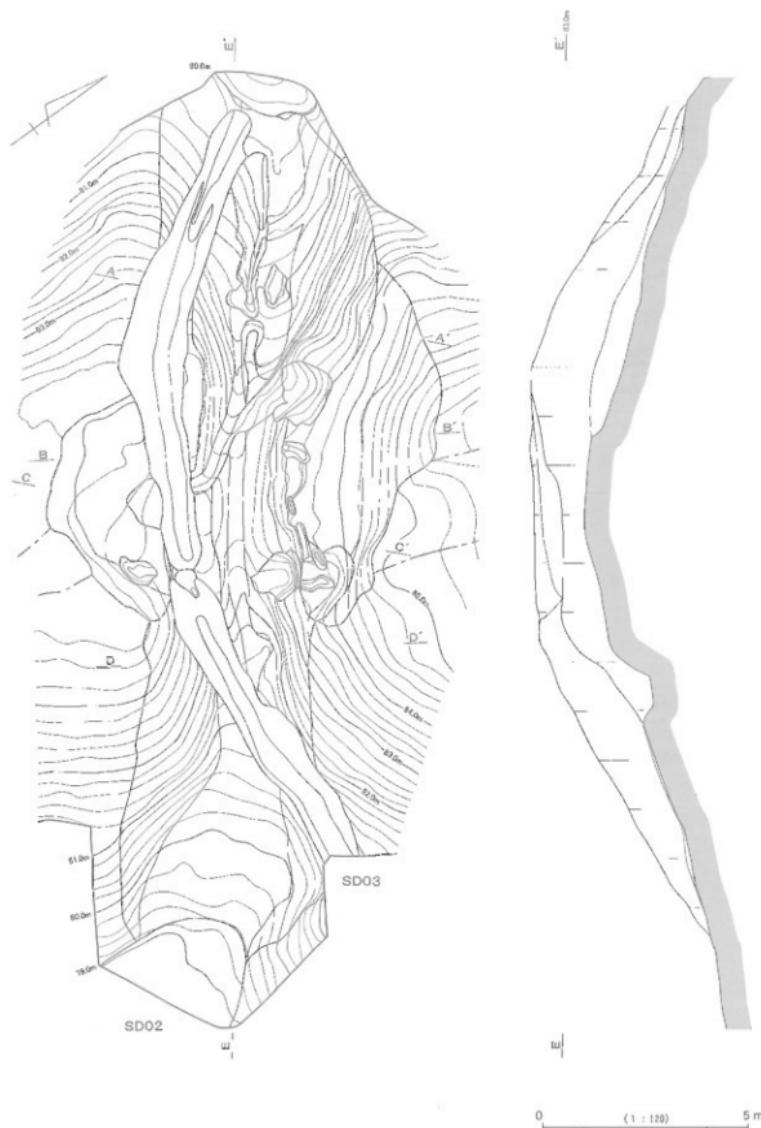
SF09（第137図） M6グリッド南東部に位置する。尾根の西側緩斜面に立地しており、SB08と重なっている。検出過程における土層断面などの検討によって、SB08の埋没後にSF09が設けられたことが把握できている。平面は約0.9m×2.0mの長辺円形を呈し、検出面からの深さは約0.5mである。出土遺物はない。詳細な時期の特定はできないが、遺構の形状や切り合いから、SF01などと同様の土坑である可能性が指摘できる。

SF24（第138図） D8グリッド東縁に位置する。東に派生する尾根に立地するが、東に下る斜面地になっている。平面は長軸約2.0mの不整辺円形であり、検出面からの深さは約1.1mである。発掘前から凹みが把握されており、覆土の大半は表土と崩落土であった。また、山道がSF24を避けるように設定されている。以上から、SF24は近世以降に設けられた穴である可能性が考慮される。

#### 4. 溝（堀切状遺構）

SD02（第139・140図） J6グリッドからI7グリッドにかけて、尾根を横断するように設けられた溝である。発掘前から溝状の凹みを観察することができ、片瀬城跡の縄張り調査においては、SD02とSD04を「堀切」、その間を「馬出し」として把握している。なお、SD02にはSD03が重なっているが、土層断面などの検討によって、SD03の埋没後にSD02が設けられたことがわかっている。

溝の幅は4.2m前後、深さは中央部で約1.8m、横断面は逆台形を呈する。底面は、丘陵の起伏に沿って中央部が高くなる。底面幅は中央部で約0.4m、南東端では約3.5mまで広くなる。覆土は、概ね褐色・

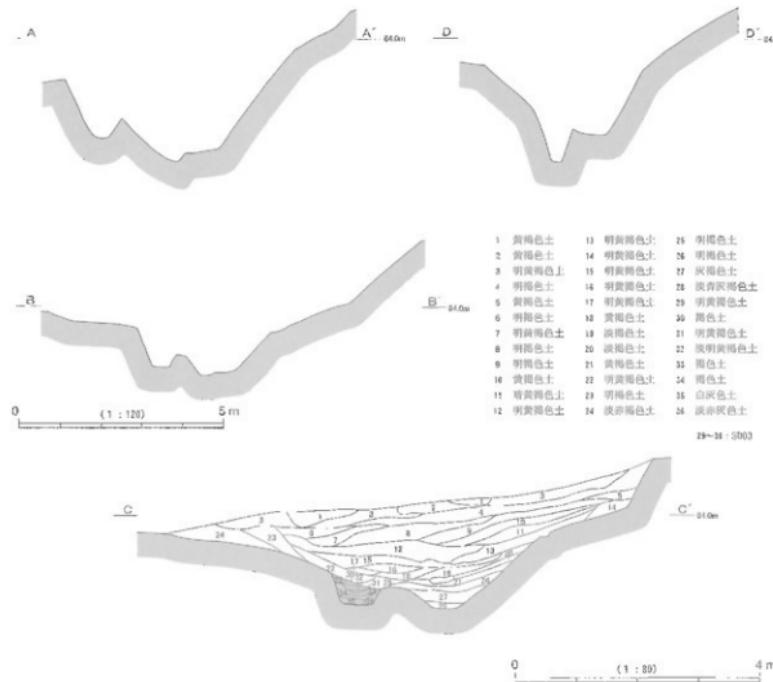


第139図 古代以降の溝SD02①

黄褐色などを基調とする土層の堆積で占められているが、北東半部では、北壁の崩落によって砂・シルト・泥岩層の塊が落ち込んでいた。崩落した壁面が凹んでいる。北東半の底面には、水の流れによって生じた溝状部分が確認できる。中央部の北東側には、テラス状の段が設けられている。また、溝を挟んだ南西側にも、テラス状の段が半円形に設けられている。溝を渡るための構造があつた可能性を指摘することもできる。

出土遺物は、中世以降のものと判断できる陶器片1点だけである。遺構の諸特徴と出土遺物から、中世以降の溝である可能性が高いと判断できる。しかし、中世に特定できるわけではなく、近世以降に設けられた可能性も否定できない。

SD04（第141・142図） 15グリッドからH7グリッドにかけて、尾根を横断するように設けられた溝である。SD02に平行する溝であり、形態的特徴に類似する点が多い。SD02において述べたように、片瀬城跡の縄張り調査においては、SD02とSD04を「堀切」として認識されている。



第140図 古代以降の溝SD02②

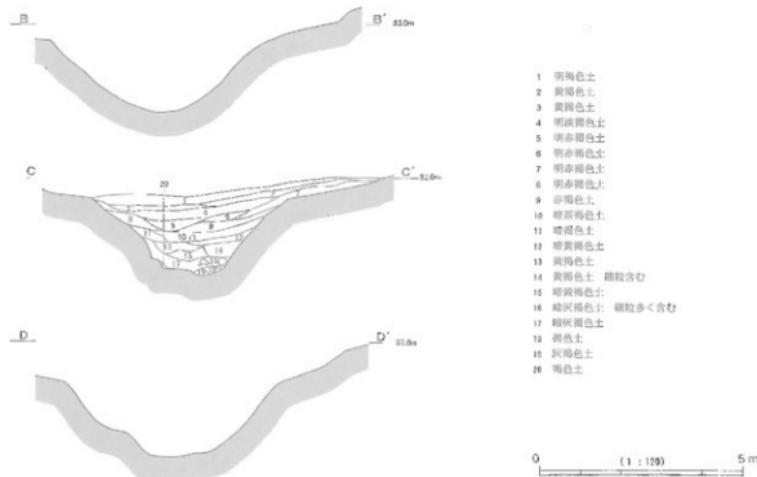
古代以降の溝構と遺物



第141図 古代以降の溝SD04①

溝の幅は5m前後、深さは中央部で約1.8m、横断面は碗形・逆台形を呈する。底面は、丘陵の起伏に沿って中央部が高くなる。底面幅は1.2m前後で概ね一定しており、SD02のような壁面の大きな崩落もない。覆土は、褐色・赤褐色などを基調とする土層の堆積で占められている。SD02との崩落・覆土の違いについては、SD02周囲の地山が砂・シルト・泥岩の互層であるのに対して、SD04周辺には礫を含む層や赤褐色の粘質土層が認められる点に起因する。中央部の北側には、テラス状の段が設けられている。また、中央部の溝の中においては、土橋状の構造が検出されている。土橋の存在は発掘前から把握されていたが、調査によって地山の掘り残しによってつくられたものではなく、堆積土などの整形・硬化によってつくられていることが判明している。土橋の南北には丘陵上にのびる山道が連続している。

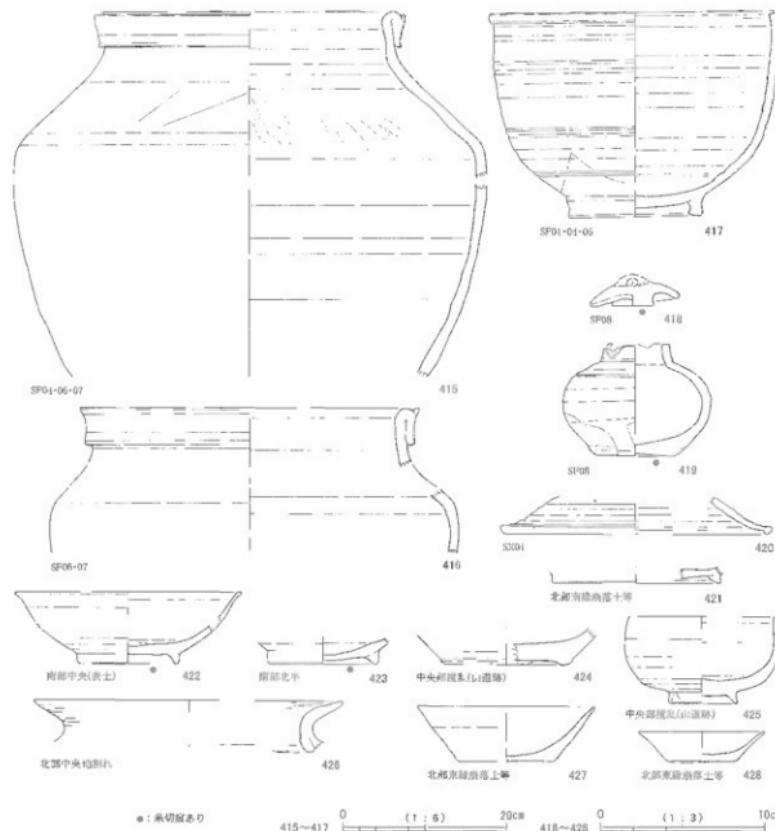
出土遺物はないが、遺構の諸特徴からSD02と同様に設けられた可能性が指摘できる。



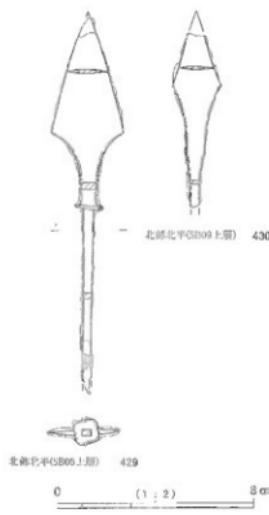
第142図 古代以降の溝SD04(2)

## 5. 出土遺物

SF01・04・06・07出土土器（第143図415～417） 415・416は、常滑の甕である。それぞれの破片がSF04・SF06・SF07からばらばらになって出土している。415は口縁部～胴部、416は口縁部～胴部上位の破片で占められており、底部～胴部下位の破片は出土していない。両者は、胎土や細部の特徴から別個体であると判断できるが、形態的特徴は類似している。口縁部は下方向への折り返しが長く、上方向への突出が小さい。417は、古瀬戸の桶（水鉢）である。出土状況は415・416と同様に、複数の土坑から破片がばらばらになって出土している。ただし、底部から口縁部の全体を復元することができた。底部には高台、口縁部には外側への屈折を伴う。胴部下半は丸味をもって立ち上がり、上半は直立に近くなる。



第143図 古代以降の土器



第144図 鉄 剣

剣部外面の上位・中位・下位の三ヶ所には、二条の沈線がめぐらしている。

415・416は概ね15世紀前半（赤羽・中野編年（中野1994）の9型式期）に位置づけでき、417は概ね15世紀中～後葉（古瀬戸後IV期新（藤澤1996など）前後）に位置づけできる（註1）。

SF08出土土器（第143図418・419）418は、瀬戸・美濃産の蓋である。摘みが欠損している。小壺の蓋であったものであり、上面には黒色の鉄軸が厚くかけられている。下面に施釉はなく、糸切痕が明確に観察できる。419は、志戸呂産の小壺である。壺の中には、多くの金属片（第145図431～473）が入れられていた。お齒黒壺として用いられていた可能性が高い。また、外面に鉄軸が薄く施されていることから、小壺がつくられた当初は418が蓋として組み合わさっていたわけではなく、使用方法（用途）が途中で変わった可能性が指摘できる。また、口縁端部が欠損しているが、その破断面に鉄鋸などが付着していたことから、口縁端部を欠いた状態で用いられていた可能性が指摘できる。

いずれも概ね15世紀中～後葉（古瀬戸後IV期新（藤澤1996など）前後）に位置づけることができる（註1）。

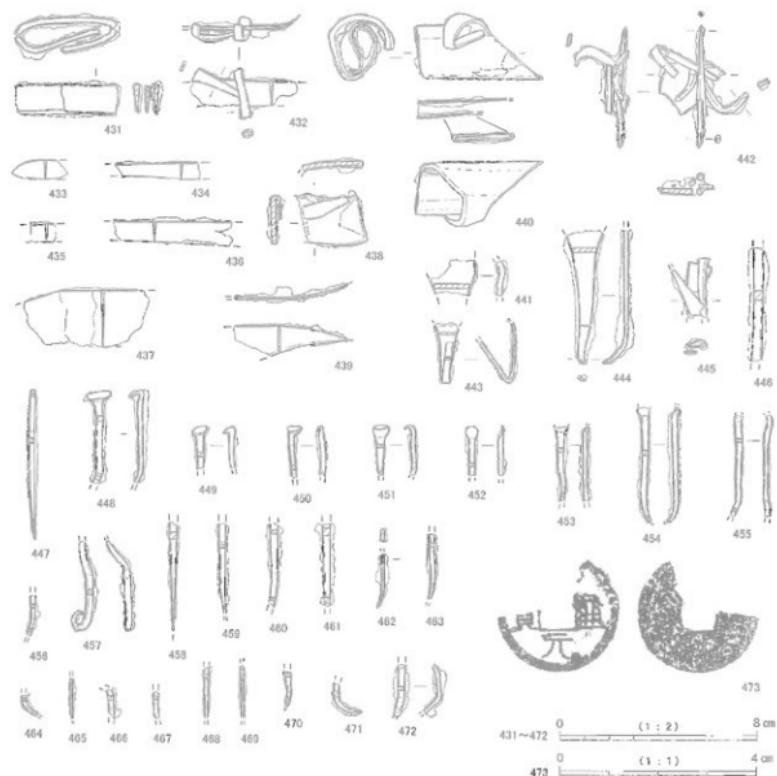
遺構外の出土土器（第143図420～428）調査区北部においては、南縁付近から須恵器坏蓋（420）、須恵器坏身（421）、中央部地割れ上層から土師器壺（426）、東縁付近からカワラケ2点（427・428）が出土している。カワラケは比較的良好な残存状態であり、427は北部出土の中世陶器（419など）と同様に15世紀後半もしくは16世紀前半のものとして位置づけできる。428も同時期のものであって問題ない。その他は古代の土器であり、いずれも小破片である。

調査区中央部においては、山道の跡から山茶碗（424）や陶器の碗（425）が出土している。それぞれの胎土や形態などの特徴から、424は渥美・湖西の生産による13世紀頃の山茶碗（湖西古窯跡群山茶碗編年（松井1993）Ⅲ期）、425は19世紀頃の志戸呂産陶器であると判断できる。調査区南部においては、灰釉陶器の碗（422・423）が出土している。破片での出土ではあるが、両者の諸特徴から浜北地域の生産による灰釉陶器の碗であると判断することができる（註1）。

金属器（第144・145図429～473）429・430は、調査区北部の住居跡覆土上層から出土した鉄鎌である。出土状況と形態的特徴から、住居跡があった弥生時代のものではなく、中世以降の鉄鎌である可能性が高いと判断できる。周囲には中世の土坑や掘立柱建物跡が分布している。429は、長三角形の平根の鎌身部、撫闇から徐々に幅狭になる茎部、細長い茎部が残存している。茎闇には花びら（四弁）形の板状部分が付いている。430は、429と同様に長三角形の鎌身部と撫闇から徐々に幅狭になる頭部を伴うが、429よりも鎌身部が小さく幅狭である。また、茎闇はわずかな角闇であり、板状部分は付いていない。

431～473は、SF08小壺内（第143図419）に入れられていた金属器片である。473以外は鉄製品の破片であり、刀子・釘の破片以外にも多用な形態の鉄器片が混在している。全体が良好に残存しているのは447（針）だけであり、多くは欠損したり曲げられたりしている。473だけは銅鏡であるが、約4分の1が欠損している。

いずれも調査区北部からの出土であり、遺物の特徴および周辺の遺構・遺物の状況から、概ね15世紀前半以降に營まれた中世建物跡・土坑と同時期のものであると判断できる（註1）。



第145図 SF08小壺内金属器片

### 註

1 中世の土器についての所見については、足立順司氏、河合修氏、溝口彰啓氏より御教示を得た。

### 参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1997 『西上免遺跡』
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 北島恵介 1995 「戦国まったくの連郭式山城——宮莊内片瀬城——」『静岡の現像をさぐる』 静岡県教育委員会・静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐藤由紀男 1996 「遠江・駿河（中期）」「YAY!」 弥生土器を語る会
- 佐藤由紀男・荻野谷正宏・鎌原和大 2002 「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『森町円丘丘陵の遺跡』
- 鈴木敏則 1996 「遠江・駿河（後期）」「YAY!」 弥生土器を語る会
- 豊岡村史編さん委員会 1993 『豊岡村史』資料編3 考古・民俗
- 豊田町誌編さん委員会 1998 『豊田町誌』資料集IV 原始・古代・中世編

- 中野晴久 1994 「赤羽・中野「生産地における編年について」『中世常滑焼をとて』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 藤澤良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世冬季の世界—その生産と流通—』瀬戸市埋蔵文化財センター  
2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『戦国・繩文期の陶器器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジア的視野から—』資料集 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松井一明 1989 「窪口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- 森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編 1

第4表 片瀬遺跡の遺物一覧表

土器一覧表

番号	規則番号	出土位置	種別	部 位	尚存率 (%)	高さ (cm)	直径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	台	脚	色 (内面)	備考
1	73	S901	弥生土器	壺	口縁部	30	—	(11.8)	—	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	—	
2	73	S901	弥生土器	壺	14縫合部	15	—	(12.0)	—	浅黄褐色(7.5YR6/4)	浅黄褐色(7.5YR6/4)	—	
3	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁部	60	—	(15.6)	—	浅黄褐色(7.5YR8/4)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	—	
4	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁部	5	—	(20.0)	—	浅黄褐色(7.5YR8/4)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	—	
5	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁部	5	—	(18.2)	—	浅黄褐色(7.5YR6/4)	浅黄褐色(7.5YR6/4)	—	
6	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁部	15	—	(13.1)	—	浅黄褐色(7.5YR8/4)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	—	
7	73 48	S901	弥生土器	壺	腹～脚部	25	—	—	—	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	赤彩	
8	73 48	S901	弥生土器	壺	胸～脚部	19	—	—	—	—	—	—	
9	73 48	S901	弥生土器	壺	胸～脚部	15	—	—	—	—	—	—	
10	73	S901	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	(5.2)	—	—	
11	73	S901	弥生土器	壺	底部	30	—	—	—	(9.8)	—	—	
12	73	S901	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	(8.3)	—	—	
13	73	S901	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	(6.2)	—	—	
14	73	S901	弥生土器	壺	底部	20	—	—	—	(7.5)	—	—	
15	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁～脚部	39	—	(16.9)	—	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	—	
16	73 48	S901	弥生土器	壺	腰合部	102	—	—	—	—	—	—	
17	73 48	S901	弥生土器	壺	腰合部	25	—	—	—	—	—	—	
18	73 48	S901	弥生土器	壺	合口	20	—	—	—	(7.0)	—	—	
19	73 48	S901	弥生土器	壺	口縁部	16	—	(16.6)	—	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	—	
20	73 48	S902	弥生土器	壺	底部	70	—	—	—	(7.0)	—	—	
21	73	S903	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	—	—	—	
22	73	S904	弥生土器	壺	底部	17	—	(6.0)	—	浅黄褐色(10YR8/4)	浅黄褐色(10YR8/4)	—	
23	73 48	S905	弥生土器	壺	口縁部	20	—	(15.0)	—	—	—	—	
24	73 48	S905	弥生土器	壺	口縁部	15	—	(10.1)	—	—	—	—	
25	73 48	S905	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	(5.8)	—	—	
26	73	S905	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	(6.2)	—	—	
27	73 48	S905	弥生土器	壺	底部	25	—	—	—	—	—	—	
28	73 48	S905	弥生土器	壺	底部	70	—	—	—	(5.4)	—	—	
29	73	S905	弥生土器	壺	合口	15	—	—	—	—	—	—	
30	73	S906	弥生土器	壺	底部	20	—	—	—	(7.0)	—	—	
31	73 48	S906	弥生土器	壺	腹～脚部	70	—	(18.3)	—	—	—	—	
32	73 48	S906	弥生土器	壺	脚部	60	—	(20.0)	—	—	—	—	
33	74 49	S907	弥生土器	壺	口縁部	15	—	—	—	(18.5)	—	—	
34	74 49	S907	弥生土器	壺	脚部	10	—	—	—	—	—	—	
35	74	S907	弥生土器	壺	脚部	20	—	(14.4)	—	—	—	—	
36	74	S907	弥生土器	壺	底部	90	—	—	—	6.9	—	—	
37	74 49	S907	弥生土器	壺	口縁～脚部	15	—	—	—	(16.0)	—	—	
38	74 49	S907	弥生土器	壺	口縁～脚部	19	—	—	—	(16.0)	—	—	
39	74 49	S907	弥生土器	壺	脚部	25	—	—	—	(6.4)	—	—	
40	74 49	S908	弥生土器	壺	脚部	5	—	—	—	—	—	—	
41	74 49	S908	弥生土器	壺	口縁部	10	—	—	—	(15.0)	—	—	
42	74	S908	弥生土器	壺	口縁部	10	—	—	—	(6.2)	—	—	
43	74	S908	弥生土器	壺	底部	16	—	—	—	(10.4)	—	—	
44	74 49	S908	弥生土器	壺	底部	5	—	—	—	(15.5)	—	—	
45	74 49	S908	弥生土器	壺	合口	95	—	—	—	7.9	—	—	
46	74 49	S908	弥生土器	壺	接合部	90	—	—	—	—	—	—	
47	74 49	S908	弥生土器	金合	—	50	21.6	(21.7)	(20.8)	(8.7)	—	—	
48	75 49	S909	弥生土器	壺	口縁～脚部	90	—	—	—	(6.8)	—	—	
49	75	S909	弥生土器	壺	腹～脚部	20	—	—	—	—	—	—	
50	75 49	S909	弥生土器	壺	腹～底部	50	—	—	—	2.9	—	—	
51	75 49	S909	弥生土器	壺	脚～底部	50	—	—	—	6.6	—	—	
52	75 49	S909	弥生土器	壺	脚～底部	25	—	—	—	(13.3)	—	—	
53	75 50	S909	弥生土器	壺	脚～底部	70	—	—	—	7.0	—	—	
54	75 50	S909	弥生土器	壺	脚～底部	20	—	—	—	(12.2)	—	—	
55	75 50	S909	弥生土器	壺	脚～底部	40	—	—	—	8.0	—	—	

## 遺物一覧表

番号	標識番号	部数	出土地點	種別	器種	部位	検査率 (%)	標高 (m)	跡幅 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 (外側)	調 (内側)	面		備考	
														横	縦		
56	75 50	SB09	弥生土器	鉢	全体		95	7.0	16.1	6.3		淡黄褐色(10YR8/4)		淡黄(2.5Y8/3)			
57	75 50	SB09	弥生土器	高杯	口縁～接合部		35	(20.9)	(20.9)			淡黄褐色(10YR8/4)		淡黄(2.5Y8/3)			
58	75 50	SB09	弥生土器	脚部				75				5.9		明黄褐色(10YR7/6)		淡黄(7.5Y8/6)	
59	75 50	SB09	弥生土器	茎	口縁～胴部		5	(25.6)	(24.4)			灰褐色(2.5Y7/2)		灰褐色(2.5Y7/2)			
60	75 50	SB09	弥生土器	茎	口縁		16					(22.1)		K-ふくらむ(7.5YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
61	75 50	SB09	弥生土器	茎	口縁～胴部		15					(20.0)		明黄褐色(10YR7/5)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
62	75 50	SB09	弥生土器	茎	接合部		45							淡黄褐色(10YR8/4)		淡黄褐色(10YR8/4)	
63	75 54	SB10	弥生土器	茎	全体		50	10.0	16.8	6.7	7.3	淡黄褐色(10YR8/6)		黄褐色(10YR8/6)			
64	75	SB10	弥生土器	茎	口縁部		15					(13.0)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
65	76	SB10	弥生土器	茎	口縁部		15					(14.1)		淡黄褐色(10YR8/4)		淡黄褐色(10YR8/4)	
66	75 51	SB10	弥生土器	茎	口縁～胴部		20					(24.4)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
67	76	SB10	弥生土器	茎	口縁部		5					(14.0)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
68	75	SB10	弥生土器	茎	口縁部		20					(22.6)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)	
69	75	SB10	弥生土器	茎	口縁部		5					(24.7)		淡黄褐色(10YR8/6)		黄褐色(10YR8/6)	
70	76	SB10	弥生土器	茎	側～胴部								淡(7.5YR7/6)		淡(7.5YR7/6)		
71	76	SB10	弥生土器	茎	胴部		15						灰白(5YR8/2)		K-ふくらむ(10YR7/2)		
72	75	SB10	弥生土器	茎	側筋		15						褐色(10YR4/1)		褐色(10YR4/1)		
73	75	SB10	弥生土器	茎	側筋～胴部		25						明黄褐色(10YR7/5)		淡黄褐色(10YR8/4)		
74	76 51	SB10	弥生土器	茎	胴部		15						灰褐色(2.5Y5/1)		K-ふくらむ(10YR7/3)		
75	75 51	SB10	弥生土器	茎	胴～底部		25						(10.4) K-ふくらむ(10YR7/4)		灰褐色(2.5Y7/2)		
76	76	SB10	弥生土器	茎	底部		70						5.9		灰褐色(2.5Y6/2)		灰褐色(2.5Y6/2)
77	76	SB10	弥生土器	茎	底部		30						(6.6)		灰褐色(2.5Y8/3)		灰褐色(2.5Y8/3)
78	76	SB10	弥生土器	茎	底部		15						(6.2)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
79	76	SB10	弥生土器	茎	底部		45						(6.3)		暗灰褐色(2.5Y5/2)		暗灰褐色(2.5Y5/2)
80	76	SB10	弥生土器	茎	底部		95						6.0		朝黃褐色(10YR7/6)		淡黃褐色(2.5Y7/6)
81	76	SB10	弥生土器	茎	底部		70						6.9		黃褐色(2.5Y6/1)		明黃褐色(10YR7/6)
82	76	SB10	弥生土器	茎	底部		25						(5.2)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
83	76	SB10	弥生土器	茎	側～底部		5	(25.5)					(8.0)		黃褐色(2.5Y5/1)		暗黃褐色(2.5Y7/2)
84	77 51	SB10	弥生土器	茎	側～底部		5	(34.2)	(34.2)				(5.2)		K-ふくらむ(10YR7/3)		K-ふくらむ(10YR7/3)
85	77 51	SB10	弥生土器	茎	側～底部		6						(12.2)		褐色(10YR5/1)		褐色(10YR5/1)
86	77 51	SB10	弥生土器	茎	側～底部		10						(13.8)		K-ふくらむ(10YR7/3)		K-ふくらむ(10YR7/3)
87	77 51	SB10	弥生土器	茎	側～底部		15						(12.2)		褐色(10YR5/1)		褐色(10YR5/1)
88	77 51	SB10	弥生土器	茎	口縁～胴部		20						(22.4)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
89	77	SB10	弥生土器	茎	口縁部		6						(22.2)		淡黃褐色(10YR8/6)		黃褐色(10YR8/6)
90	77 51	SB10	弥生土器	茎	口縁～胴部		7						(26.2)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR8/6)
91	77	SB10	弥生土器	茎	胴～脚部		5								K-ふくらむ(10YR7/3)		黃褐色(2.5Y5/1)
92	77 51	SB10	弥生土器	茎	胴～脚部		35								K-ふくらむ(10YR7/4)		黃褐色(2.5Y7/8)
93	77	SB10	弥生土器	茎	胴～脚部		20								K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
94	77 51	SB10	弥生土器	茎	台部		70						7.1		暗(7.5YR7/6)		暗(7.5YR7/6)
95	77	SB10	弥生土器	茎	台部		20						(9.1)		K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
96	77 51	SB10	弥生土器	茎	台部		30						(9.4)		明黃褐色(10YR7/4)		明黃褐色(10YR7/4)
97	78	SB11	弥生土器	鉢	全体		80	10.7	18.9	17.5	7.2				細(2.5Y6/6)		細(2.5Y7/9)
98	78 52	SH11	弥生土器	茎	口縁～胴部		25						(23.0)	(18.6)	K-ふくらむ(7.5Y7/4)		K-ふくらむ(7.5Y7/4)
99	78	SB12	弥生土器	茎	口縁部		5						(21.5)		淡黃褐色(10YR8/4)		淡黃褐色(10YR8/4)
100	78	SD12	弥生土器	茎	胴部		16								K-ふくらむ(10YR7/3)		K-ふくらむ(10YR7/3)
101	78	SB12(地割れ)	弥生土器	茎	口縁～胴部		25								淡黃褐色(10YR8/4)		淡黃褐色(10YR8/4)
102	78	SB12(地割れ)	弥生土器	茎	口縁～胴部		25								K-ふくらむ(10YR7/3)		K-ふくらむ(10YR7/3)
103	78	SB12(地割れ)	弥生土器	茎	口縁～胴部		30								K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
104	78	SB12(地割れ)	弥生土器	茎	脚部		60								黃褐色(10YR8/6)		細(5Y7/6)
105	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		15								淡黃褐色(10YR7/6)		明黃褐色(10YR7/6)
106	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		26								黃褐色(10YR8/6)		黃褐色(10YR8/6)
107	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		16								暗(7.5YR7/6)		暗(7.5YR7/6)
108	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		25								K-ふくらむ(10YR7/4)		K-ふくらむ(10YR7/4)
109	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		10								淡黃褐色(10YR8/4)		淡黃褐色(10YR8/4)
110	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	口縁部		16								黃褐色(2.5Y7/3)		黃褐色(2.5Y7/3)
111	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		25										
112	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		25										
113	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		26								淡黃褐色(7.5YR8/6)		淡黃褐色(7.5YR8/6)
114	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		25								明黃褐色(10YR6/6)		淡黃褐色(2.5Y7/4)
115	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		15								黃褐色(2.5Y7/3)		黃褐色(2.5Y7/2)
116	79	SB10～12周邊 (地割れ等)	弥生土器	茎	頭部		12								黃褐色(2.5Y7/2)		灰褐色(2.5Y7/1)

番号	御印 番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	縦径 (cm)	径深 (cm)	底径 (cm)	色 製 (外側)	色 製 (内側)	備考	
117	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	腹部	10					に赤い黄緑(10YR7/4)	に赤い緑(7SYR6/4)		
118	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	腹部	5					に赤い緑(7SYR7/4)	に赤い黄(10YR7/4)		
119	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	腹部	5					に赤い黄緑(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)		
120	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	腹部	20					に赤い黄緑(7SYR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)		
121	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	25					(7.9)	に赤い黄緑(10YR7/3)	淡黄(2.5YR7/4)	
122	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	30					(6.6)	に赤い黄緑(10YR7/3)	に赤い黄(10YR7/3)	
123	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	90					(5.6)	明黄褐(10YR7/5)	に赤い黄(2.5YR6/4)	
124	79	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	29					(8.2)	淡黄緑(10YR8/4)	灰白(2.5YR8/2)	
125	79 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	25					(7.4)	淡黄緑(10YR8/4)	淡黄褐(10YR8/4)	
126	78	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	35					(5.7)	に赤い黄(10YR7/4)	淡黄(2.5YR7/3)	
127	78	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	50					(8.8)	緑(7.5YR7/6)	灰灰(2.5YR6/1)	
128	79	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	底部	30					(7.2)	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(2.5YR7/6)	
129	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	高杯	口縁～体部	25	(26.2)	(26.2)				淡黄緑(10YR8/3)	淡黄(10YR8/4)	
130	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	高杯	結合部	80						褐色(10YR4/1)	に赤い黄(10YR7/4)	
131	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	高杯	脚部	7					(14.0)	緑(5YR6/6)	緑(5YR6/6)	
132	80	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	口縁～脚部	5	(17.0)	(17.5)				淡黄(10YR8/4)	淡黄(10YR8/4)	
133	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	口縁～脚部	20	(17.4)	(16.1)				淡黄(2.5YR7/3)	淡黄(2.5YR7/3)	
134	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	口縁～脚部	10					(19.4)	に赤い黄(10YR7/4)	に赤い黄(10YR7/4)	
135	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	口縁～脚部	16					(19.0)	淡黄(10YR8/4)	淡黄(2.5YR7/4)	
136	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	口縁部	12					(25.0)	K.に赤い黄(10YR7/4)	淡黄(10YR8/4)	
137	80	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	結合部	25					(5.8)	淡白(10YR8/2)	灰白(10YR8/2)	
138	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	結合部	30						に赤い緑(10YR7/4)	K.に赤い緑(10YR7/4)	
139	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	結合部	25						に赤い緑(7.5YR7/6)	K.に赤い緑(7.5YR7/4)	
140	80 53	SB10-12周邊 (地割れ等)	弥生土器	壺	結合部	70						に赤い黄(10YR7/0)	に赤い黄(10YR7/4)	
141	81 54	SB13	弥生土器	壺	口縁部	20					(7.4)	淡黄(2.5YR7/4)	赤黄褐(10YR6/2)	
142	81	SB13	弥生土器	壺	口縁部	10					(10.2)	淡黄(10YR8/4)	淡黄(10YR8/4)	
143	81 54	SB13	弥生土器	壺	口縁部	15					(32.9)	淡黄(2.5YR8/4)	に赤い緑(7.5YR7/4)	
144	81 54	SB13	弥生土器	壺	頭～脚部	20						淡黄(2.5YR8/3)	淡黄(2.5YR8/3)	
145	81 54	SB13	弥生土器	壺	頭～脚部	25						K.に赤い緑(10YR7/4)	K.に赤い緑(10YR7/4)	
146	81 54	SB13	弥生土器	壺	頭～脚部	10						K.に赤い緑(5YR7/4)	に赤い緑(5YR7/4)	
147	81 54	SB13	弥生土器	壺	脚部	19						灰灰(2.5YR4/1)	に赤い黄(10YR8/3)	
148	81 54	SB13	弥生土器	壺	脚部	5						灰灰(10YR5/2)	に赤い黄(10YR7/4)	
149	81 54	SB13	弥生土器	壺	脚部	5						に赤い黄(10YR6/3)	に赤い黄(10YR6/3)	
150	81 54	SB13	弥生土器	壺	脚部	30					(34.6)	6.2	黒(7.5YR7/6)	に赤い黄(10YR7/2)
151	81	SB13	弥生土器	壺	脚～脚部	16						K.に赤い緑(5YR7/6)	に赤い黄(10YR7/2)	
152	81	SB13	弥生土器	壺	底部	15					(5.0)	淡黄(2.5YR7/3)	淡黄(2.5YR7/3)	
153	81 54	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(4.0)	淡黄(10YR8/4)	淡黄(10YR8/4)	
154	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(5.2)	に赤い黄(10YR7/4)	に赤い黄(10YR7/4)	
155	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(5.1)	に赤い黄(10YR7/4)	に赤い黄(10YR7/4)	
156	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(7.2)	に赤い黄(10YR7/3)	淡黄(2.5YR7/3)	
157	81	SB13	弥生土器	壺	底部	15					(6.1)	淡黄(2.5YR7/4)	淡黄(2.5YR7/4)	
158	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(6.0)	淡黄(10YR8/3)	淡黄(10YR8/3)	
159	81 54	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(7.0)	淡黄(10YR8/4)	に赤い黄(10YR7/4)	
160	81	SB13	弥生土器	壺	底部	30					(6.0)	に赤い黄(10YR7/4)	に赤い黄(10YR7/4)	
161	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(6.2)	灰白(2.5YR7/2)	灰白(2.5YR7/2)	
162	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(9.0)	淡黄(10YR8/4)	淡黄(10YR8/4)	
163	81	SB13	弥生土器	壺	底部	25					(6.6)	淡黄(10YR8/4)	灰白(2.5YR7/2)	
164	81	SB13	弥生土器	壺	底部	35					(9.0)	淡黄(10YR8/4)	淡黄(10YR8/4)	
165	81	SB13	弥生土器	壺	底部	15					(9.4)	淡黄(2.5YR8/3)	灰白(2.5YR7/3)	
166	81 54	SB13	弥生土器	壺	12脚部	16							に赤い黄(7.5YR7/4)	に赤い黄(7.5YR7/4)
167	81 54	SB13	弥生土器	壺	12脚部	20							に赤い黄(10YR7/3)	に赤い黄(10YR7/3)
168	82	SB13	弥生土器	高杯	体部	5	(29.4)	(29.4)				淡黄(2.5YR7/3)	淡黄(2.5YR7/2)	
169	82	SB13	弥生土器	高杯	体部	5						淡黄(10YR8/4)	淡黄(7.5YR8/4)	

## 遺物一覧表

番号	属別	種別	部位	抜虫率 (%)	断面 (mm)	側径 (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)	魚 (外側)	網 (内側)	色 (内側)	備考	
170 82 54	SB13	強生土器	高环	脚部	25				挽黄褐(7.5YR8/4)	挽黄褐(10YR7/4)			
171 82	SB13	強生土器	高环		脚部	10			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
172 82	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	5	(20.0)		にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
173 82	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	10	(19.5)		にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(7.5YR7/4)			
174 82	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	10	(16.4)		にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
175 82 54	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	5			にふく黄褐(10YR7/3)	にふく黄褐(10YR7/3)			
176 82 54	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	25			灰黄(7.5YR5/2)	灰黄(7.5YR7/4)			
177 82	SB13	強生土器	高环		口縫～脚部	10			にふく黄褐(10YR7/3)	にふく黄褐(10YR7/3)			
178 82 54	SB13	強生土器	高环		口縫部	5			にふく黄褐(7.5YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
179 82	SB13	強生土器	高环		接合部	10			灰黄(7.5YR5/2)	灰黄(7.5YR7/4)			
180 82	SB13	強生土器	高环		接合部	25			挽黄褐(7.5YR8/4)	挽黄褐(7.5YR8/4)			
181 82	SB13	強生土器	高环		接合部	25			挽黄褐(7.5YR8/4)	挽黄褐(7.5YR8/4)			
182 82	SB13	強生土器	高环		接合部	65			灰黄(7.5YR7/3)	灰黄(7.5YR7/4)			
184 82 54	SB13	強生土器	高环		接合部	25			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
185 82 54	SB13	強生土器	高环		接合部	40			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
186 82 54	SB13	強生土器	高环		台部	20			(9.6)	にふく黄褐(5YR7/4)	にふく黄褐(5YR7/4)		
187 82 54	SB13	強生土器	高环		台部	15			(36.5)	橙7.5YR7/6	橙7.5YR6/4		
188 83	SB15	強生土器	高环		口縫部	10	(12.2)		挽黄褐(7.5YR8/6)	浅黄褐(7.5YR8/6)			
189 83 55	SB15	強生土器	脚部		口縫部	5	(24.2)		にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
190 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	10			西黄褐(10YR8/4)	灰黄(2.5YR5/1)			
191 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	10			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/3)			
192 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	10			灰黄褐(10YR8/2)	灰黄褐(10YR8/2)			
193 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	10			橙7.5YR7/6	橙7.5YR6/4			
194 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	20			(6.0)	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/0		
195 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	25			(4.0)	にふく黄褐(10YR7/3)	にふく黄褐(10YR7/3)		
196 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	5			黄褐(2.5YR5/4)	黄褐(2.5YR5/4)			
197 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	20			西黄褐(10YR8/4)	西黄褐(7.5YR8/4)			
198 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	30			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(7.5YR7/4)			
199 83 55	SB15	強生土器	脚部		脚部	60			にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)			
200 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	30			橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6			
201 83	SB15	強生土器	脚部		脚部	10			(6.0)	にふく黄褐(10YR7/4)	橙7.5YR7/6		
202 83 55	SB16	強生土器	脚部		脚部	10			橙7.5YR7/3	灰黄(2.5YR7/2)			
203 83 55	SB16	強生土器	脚部		全体	95	8.1	13.4	12.7	5.8	にふく黄褐(7.5YR7/4)	にふく黄褐(7.5YR7/4)	
204 83 55	SB16	強生土器	脚部		底部	25			25	(5.5)	にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
205 83 55	SB16	強生土器	脚部		底部	20			20	(5.0)	にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
206 83 55	SB15	強生土器	脚部		口縫部	30			口縫～脚部	(14.3)	(17.6)	(16.0)	橙7.5YR7/6
207 83 55	SB15	強生土器	脚部		口縫部	50	(20.0)	(14.2)	(13.3)	7.9	にふく黄褐(7.5YR6/4)	明黄褐(7.5YR6/4)	
208 83 55	SB16	強生土器	脚部		接合部	90					にふく黄褐(10YR7/4)	橙7.5YR7/6	
209 84 56	1号周溝器(SD02)	強生土器	脚部		口縫～脚部	89					にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
210 84 56	1号周溝器(SD02)	強生土器	脚部		脚部	80					にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(7.5YR7/4)	
211 84 56	1号周溝器(SD02)	強生土器	脚部		脚部	60					にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
212 84 56	1号周溝器(SD02)	強生土器	脚部		口縫部	35					橙7.5YR6/6	にふく黄褐(10YR7/4)	
213 84	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫部	29					明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	
214 84 56	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫部	25					明黄褐(7.5YR7/6)	明黄褐(2.5YR7/2)	
215 84	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫部	5					明黄褐(2.5YR5/8)	明黄褐(2.5YR5/8)	
216 84 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫～脚部	20					明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	灰V
217 84 57	1号周溝器 (SD01)	強生土器	脚部		口縫部	19					灰V(2.5Y4/1)	黄褐(2.5Y4/1)	
218 84 56	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		全体	79	14.7	(13.0)	(11.3)	(6.3)	にふく黄(7.5YR7/3)	にふく黄(7.5YR7/3)	赤影
219 84 56	1号周溝器 (SD01)	強生土器	脚部		全体	79	15.7	14.7	(9.8)	7.2	黄褐(10YR8/4)	黄褐(10YR8/4)	
220 85 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		脚部	35					橙7.5YR7/6	にふく黄褐(10YR7/4)	赤影
221 85 57	1号周溝器(SD01)	強生土器	脚部		脚部	25					浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	
222 85 57	1号周溝器(SD04)	強生土器	脚部		脚部	70					黄褐(10YR8/6)	淡黄(2.5Y7/4)	
223 85	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		脚部	60					橙7.5YR7/6	にふく黄褐(10YR7/4)	
224 85	1号周溝器 (SD01)	強生土器	脚部		脚部	79					灰(V4/1)	淡黄(2.5Y7/4)	
225 85 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		接合部	79					橙7.5YR7/6	にふく黄褐(10YR7/4)	
226 85 57	1号周溝器(SD04)	強生土器	脚部		脚部	20					明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	
227 85 57	1号周溝器(SD01)	強生土器	脚部		脚部	15					明黄褐(10YR8/4)	明黄褐(10YR8/4)	
228 85 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫～脚部	5					にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
229 85 57	1号周溝器 (SD01)	強生土器	脚部		脚部	70					にふく黄褐(10YR7/4)	にふく黄褐(10YR7/4)	
230 85 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		接合部	70					橙7.5YR7/6	明黄褐(10YR7/6)	
231 85 57	1号周溝器 (方台部地割付)	強生土器	脚部		口縫、脚部、合部	39	(31.5)	(23.7)	(26.6)	(10.1)	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	

番号	標記	銘版 番号	出土位置	種別	部位	保存率 (%)	器高 (cm)	器幅 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	蓋徑 (cm)	色 (外面)	色 (内面)	備考
322	86	58	SP07・19	弥生土器	甌	胸～底部	30	(48.8)	(14.0)	10.0	10.0	灰白(10YR7/4)	灰白(10YR7/4)	土器種か?
323	85	58	SP11	弥生土器	甌	胸～底部	40	(30.3)	(13.0)	9.2	10.0	灰白(7.5YR7/4)	灰白(10YR8/4)	骨壺
324	85	58	SP11	弥生土器	甌	胸～底部	50	(43.5)	(13.0)	10.0	10.0	灰白(10YR7/3)	灰白(10YR7/3)	骨壺
325	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	胸～底部	50	(24.0)	(8.3)	8.3	8.3	灰(5YR7/5)	灰(7.5YR7/5)	
326	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	胸部	5					灰白(2.5YR8/2)	淡黃褐(10YR8/3)	
237	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	胸部	5					灰白(2.5YR4/1)	明黃褐(10YR6/5)	
238	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	胸部	5					灰白(10YR7/4)	灰白(10YR7/4)	
239	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	胸～台部	50					灰(5YR7/6)	灰(7.5YR7/6)	
240	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	台部	25					灰白(7.5YR7/6)	灰白(7.5YR7/6)	
241	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	口縫部	10					灰(5YR7/6)	灰(7.5YR7/6)	
242	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	口縫部	10					淡黃(2.5YR7/3)	灰白(2.5YR6/2)	
243	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	口縫部	10					明黃(10YR7/6)	灰白(2.5YR6/1)	
244	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	口縫部	5					灰灰(10YR8/1)	灰(5YR6/1)	
245	87	58	北部南跡落土	弥生土器	甌	底部	20					灰(2.5YR6/6)	灰(2.5YR6/5)	
247	87	59	北部南跡落土	弥生土器	甌	底部	20					淡黃(2.5YR8/3)	淡黃(2.5YR8/2)	
248	87	59	北部南跡落土	弥生土器	甌	底部	20					灰白(10YR8/4)	淡黃(10YR8/4)	
249	87	59	北部南跡落土	弥生土器	甌	底部	20					明黃(10YR6/5)	明黃(10YR6/4)	
250	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	口縫部	10	(22.0)	(22.0)			灰灰(10YR7/6)	灰白(2.5YR6/6)	
251	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	口縫部	10					灰白(2.5YR6/2)	明黃(10YR7/6)	
252	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	接合部	50					灰白(2.5YR6/1)	明黃(10YR7/6)	
253	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	接合部	50					灰(7.5YR7/6)	灰(5YR7/6)	
254	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	接合部	50					明黃(10YR7/6)	明黃(10YR7/6)	
255	87	59	北部南跡落土	弥生土器	高环	口縫部	5					灰(5YR6/6)	灰(5YR6/6)	
256~301 (例表: 石器)														
302	108		SB17	弥生土器	甌	口縫部	5		(17.0)			淡黃(7.5YR8/4)	淡黃(7.5YR8/4)	
303	108		SB17	弥生土器	甌	口縫部	10		(20.0)			灰白(10YR7/4)	灰白(10YR7/4)	
304	108		SB17	弥生土器	甌	底部	30					灰白(2.5YR6/2)	淡黃(2.5YR7/4)	
305	108	75	SB19	弥生土器	甌	胸～胸部	25					灰白(10YR7/4)	淡黃(10YR8/3)	
306	108		SB19	弥生土器	甌	底部	50					淡黃(10YR8/4)	淡黃(10YR8/4)	
307	108		SB19	弥生土器	高环	脚柱部	40					灰(7.5YR7/6)	灰(7.5YR7/6)	
308	108	75	SB19	弥生土器	高环	脚部	90					6.9	6.9	6.9
309	108	75	SB20	弥生土器	高环	口縫部	5		(16.4)			灰灰(10YR5/1)	鵝灰(10YR5/1)	
310	108	75	SB20	弥生土器	高环	脚部	5					灰白(10YR7/4)	灰白(10YR7/4)	
311	108		SB20	弥生土器	高环	底部	30					灰白(10YR7/4)	淡黃(7.5YR6/1)	
312	108		SB20	弥生土器	高环	底部	15					灰白(10YR7/4)	灰白(10YR6/3)	
313	108		SB20	弥生土器	高环	底部	25					灰白(10YR7/4)	灰白(10YR7/4)	
314	108	75	SB20	弥生土器	高环	口縫～脚部	5		(22.8)			淡黃(7.5YR6/4)	淡黃(7.5YR6/4)	
315	108	75	SB20	弥生土器	高环	口縫～胸部	5		(22.0)			灰白(10YR7/4)	灰白(7.5YR7/4)	
316	108		SB25	弥生土器	高环	接合部	25					6.9	6.9	6.9
317	108		SB29	弥生土器	高环	伴件	30					灰(7.5YR7/6)	灰(7.5YR7/6)	
318	103		SB31	弥生土器	甌	底部	25					6.0	6.0	6.0
319	109	75	SB26(SB32119)	弥生土器	甌	胸～底部	50		25.7			6.6	6.6	6.6
320	109	75	SB26(SB32119)	弥生土器	甌	全体	50	36.7	26.3	(12.3)	7.3	明黃(10YR7/6)	明黃(10YR7/6)	明黃(5YR3/8)
321	110	76	SD07	弥生土器	甌	口縫～脚部	25		30.0			6.9	6.9	6.9
322	110	76	SD07	弥生土器	甌	口縫～脚部	60		(25.8)			6.9	6.9	6.9
323	110		SD07	弥生土器	甌	脚柱部	10		(25.0)			6.9	6.9	6.9
324	110	76	SD07	弥生土器	甌	脚柱部	10					6.9	6.9	6.9
325	110		SD08	弥生土器	甌	口縫部	13					6.9	6.9	6.9
326	110	76	SD08	弥生土器	甌	口縫部	12					6.9	6.9	6.9
327	110	76	SD08	弥生土器	甌	脚部	40					6.9	6.9	6.9
328	110	76	SD08	弥生土器	甌	脚部	50					6.9	6.9	6.9
329	110		SD08	弥生土器	甌	脚部	25					6.9	6.9	6.9
330	110		SD08	弥生土器	甌	底部	30					6.9	6.9	6.9
331	110	76	SD08	弥生土器	甌	底部	30					6.9	6.9	6.9
332	110	75	SD08	弥生土器	甌	脚部	60					6.9	6.9	6.9
333	110	77	SD08	弥生土器	甌	脚部	19					6.9	6.9	6.9
334	110	77	SD08	弥生土器	甌	脚部	20					6.9	6.9	6.9
335	111	77	SP19	弥生土器	甌	底部	40	(34.5)	(27.1)	(19.2)	(8.3)	6.9	6.9	6.9
336	111	77	SP19	弥生土器	甌	脚～底部	50		46.2			6.9	6.9	6.9
337	112	78	SP20	弥生土器	甌	脚部	50		(30.5)	(30.1)		6.9	6.9	6.9
338	112	75	SP20	弥生土器	甌	底部	60					6.9	6.9	6.9
339	112	78	SP20	弥生土器	甌	脚部	15					6.9	6.9	6.9
340	112	78	SP21	弥生土器	甌	底部	60					6.9	6.9	6.9
341	112	78	SP21	弥生土器	甌	脚～底部	80		(48.9)			6.9	6.9	6.9
342	113	79	SP22	弥生土器	甌	脚～底部	70					6.9	6.9	6.9
343	113	79	SP23	弥生土器	甌	脚～底部	60					6.9	6.9	6.9
344	113	78	SP25	弥生土器	甌	脚～底部	60					6.9	6.9	6.9
345	113	78	SP25	弥生土器	甌	脚～底部	50		(44.0)			6.9	6.9	6.9

## 遺物一覧表

番号	頭削 造形	頭削 番号	出土位置	種別	器種	部 位	残存率 (%)	頭高 (cm)	額径 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調 (外面)	色 調 (内面)	備 考	
346	J14	SF14	弥生上部 高环	複合部	60							緑(7.5YR7/6)	緑(7.5YR6/5)		
347	J14	SF15	弥生上部 裏	頭~底部	50	(10.1)		(5.2)				淡黄褐(10YR8/4)	淡黄(2.5YR7/3)		
348	J14	SF15	弥生上部 裏	底部	30		1	(6.6)				淡黄(2.5YR7/4)			
349	J14	SF15	弥生上部 裏	頭~底部	75		24.2		8.6			淡黄褐(10YR8/4)	灰白(10YR7/1)		
350	J14	SF15	弥生上部 高环	口縫部	59	(27.4)						灰白(2.5YR6/4)	黄褐(10YR7/8)		
351	J14	SF15	弥生上部 裏	口縫部	10		(16.6)					淡黄(2.5Y7/4)	淡黄(2.5Y7/4)		
352	J14	SF15	弥生上部 裏	底部	89			(6.1)				淡黄褐(10YR8/4)	淡黄(2.5Y7/3)		
353	J14	SF15	弥生上部 裏	頭~底部	15			(17.2)				淡黄褐(7.5YR8/6)	淡黄褐(7.5YR8/6)		
354	J14	SF15	弥生上部 裏	脚部	28							緑(7.5YR7/6)	明黄(12.5YR7/6)		
355	J14	SF15	弥生上部 裏	脚部	35							淡黄褐(10YR8/4)	緑(7.5YR7/6)		
356	J14	SF15	弥生上部 高环	脚柱部	95							明黄褐(10YR7/6)	灰白(10YR7/4)		
357~359	(削: 石器)														
360	J10	SB22	弥生上部 高环	口縫部	10		(31.0)					にぶい緑(7.5YR7/3)	にぶい緑(10YR7/3)		
361	J10	SB22	弥生上部 裏	台部	10			(7.6)				にぶい黄褐(10YR7/3)	にぶい黄褐(10YR7/3)		
362	J10	SB23	弥生上部 裏	頭部	5							緑(7.5YR7/6)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
363	J10	SB23	弥生上部 裏	頭部	40		(14.4)					淡黄(2.5Y7/3)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
364	J10	SB23	弥生上部 裏	頭部	10							黄褐(7.5YR6/9)	にぶい黄褐(10YR7/4)	赤芯	
365	J10	SB23	弥生上部 裏	脚部	10							にぶい黄褐(10YR7/4)	西黄(2.5Y7/3)		
366	J10	SB23	弥生上部 裏	口縫~脚部	20		(22.1)	(21.7)				西黄褐(10YR8/6)	淡黄褐(10YR8/6)		
367	J10	SB23	弥生上部 裏	底部	30			(4.5)				黄褐(2.5Y5/1)	淡黄(10YR5/1)		
368	J10	SB23	弥生上部 裏	底部	95			(6.6)				淡黄(2.5Y7/3)	淡黄(2.5Y7/3)		
369	J10	SB23	弥生上部 裏	口縫~脚部	5		(16.6)					緑(7.5YR6/6)	淡黄(2.5Y7/3)		
370	J10	SB23	弥生上部 裏	口縫~底部	5		(18.2)					にぶい緑(7.5YR7/4)	にぶい緑(7.5YR7/4)		
371	J10	SB23	弥生上部 高环	脚部	15							にぶい黄褐(7.5YR7/4)	にぶい黄褐(7.5YR7/4)		
372	J10	SB23	弥生上部 裏	台部	29							にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
373	J10	SB23	弥生上部 裏	脚部	10							にぶい緑(7.5YR7/4)	にぶい緑(10YR7/3)		
374	J10	SB23	弥生上部 裏	脚部	15							淡黄褐(7.5YR8/4)	淡黄褐(7.5YR8/4)		
375	J10	SB23	弥生上部 裏	脚部	20							緑(7.5YR7/6)	帶(7.5YR7/6)		
376	J10	SB25~26	弥生上部 裏	口縫部	10		(24.6)					淡黄褐(10YR8/4)	淡黄褐(10YR8/4)		
377	J10	SB25~26	弥生上部 裏	台部	20							淡黄褐(10YR8/4)	淡黄褐(7.5YR8/6)		
378	J10	SB25~26	弥生上部 裏	複合部	40							淡黄褐(7.5YR8/4)	淡黄褐(7.5YR8/4)		
379	J10	SB25~26	弥生上部 裏	口縫部	15			(9.0)				緑(7.5YR6/6)	明赤褐(2.5Y5/6)		
380	J10	SB27	弥生上部 裏	台部	8		(19.5)					淡黄(2.5Y5/3)	淡黄(2.5Y5/3)		
381	J10	SB27	弥生上部 裏	口縫部	5		(18.0)					淡黄褐(10YR8/3)	淡黄褐(10YR8/3)		
382	J10	SB27	弥生上部 裏	口縫~脚部	10		(15.4)					にぶい黄褐(10YR7/3)	にぶい黄褐(10YR7/3)		
383	J10	SB27	弥生上部 裏	脚部	5							にぶい黄褐(10YR7/3)	にぶい黄褐(10YR7/3)		
384	J10	SB29	弥生上部 裏	口縫~底部	10		(16.0)					西黄褐(10YR8/4)	淡黄褐(10YR8/4)		
385	J10	SB29	弥生上部 裏	脚部	10		(16.0)					にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
386	J10	SB29	弥生上部 裏	台部	15							にぶい黄褐(7.5YR6/4)	西黄(2.5YR5/6)		
387	J10	SB29	弥生上部 裏	脚部	7							黄灰(2.5Y4/4)	明黄褐(10YR6/6)		
388	J10	SB29	弥生上部 裏	口縫部	5			(12.8)				黄褐(10YR8/6)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
389	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	40							にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
390	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	20		(15.2)					制青褐(2.5YR5/8)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
391	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	60		(9.7)					6.9	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)	
392	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	15			(8.6)				にぶい黄褐(7.5YR6/4)	明黄褐(10YR7/6)		
393	J10	SB29	弥生上部 裏	脚部	5							緑(7.5YR6/6)	緑(7.5YR6/6)		
394	J10	SB29	弥生上部 裏	脚部	7							西黄(2.5Y4/4)	明黄褐(10YR6/6)		
395	J10	SB29	弥生上部 裏	口縫部	5							黄褐(10YR8/6)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
396	J10	SB29	弥生上部 裏	脚部	7							西黄(2.5YR7/6)	西黄(2.5YR7/6)		
397	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	10			(20.6)				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
398	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	50			(21.6)				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
399	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	95			(7.6)				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
400	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	95			6.6				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
401	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	95			5.5				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
402	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	30			(50.0)				西黄(7.5YR7/6)	西黄(7.5YR7/6)		
403	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	70			12.9				西黄(7.5YR8/4)	西黄(7.5YR8/4)		
404	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	5							西黄(7.5YR6/6)	西黄(7.5YR6/6)		
405	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	55							西黄(7.5YR6/6)	西黄(7.5YR6/6)		
406	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	35							にぶい黄褐(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)		
407	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	40			(29.2)				にぶい黄褐(10YR7/4)	緑(5YR6/6)		
408	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	80			25.1				にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)		
409	J10	SB29	弥生上部 裏	頭部	40			(47.1)				12.6	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	
410	J10	SB29	弥生上部 裏	全体	55			(30.0)	(30.0)			緑(5YR7/6)	緑(5YR7/6)		
411~414	(削: 石器)		弥生上部 裏	脚部								灰黄(2.5Y5/2)	緑(5YR7/5)		
415	J10	SB29~30	弥生上部 高环	脚部	20			(57.8)	(37.4)			明赤褐(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR6/4)	赤	
416	J10	SB29~30	弥生上部 高环	脚部	10			(16.3)	(49.8)			黒褐(2.5Y3/2)	黄褐(2.5Y4/1)	常赤	
417	J10	SB29~30	弥生上部 高环	脚部	20			(40.0)	(35.7)			暗褐色(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	吉野瀬	
418	J10	SB29	脚部	90					5.5			淡黄(2.5Y8/2)	淡黄(2.5Y8/2)	糸井瀬・类漢	
419	J10	SB29	脚部	90					4.8			にぶい緑(7.5YR7/4)	にぶい緑(7.5YR7/4)	志戸山・类漢	
420	J10	SB29	脚部	10					(16.0)			灰(6N6/0)	灰(6N6/0)	御瀬原	

番号	埋蔵 形態 番号	出土地點	種別	昭和	部位	発見率 (%)	縦高 (cm)	横幅 (cm)	口幅 (cm)	奥行き (cm)	色・面		備考
											外面	内面	
421	143	95	北部南斜崩落土	無底器	杯身	10				(10.6)	灰(N6/0)	灰(N6/0)	
422	143	95	南部中央(表土)	灰陶胸器	前	39	(4.4)	(13.8)	(13.8)	(6.2)	淡黄(2.5YR/4)	灰(2.5YR/4)	に赤い痕跡(10YR7/0) 有
423	143		南部東半	灰陶胸器	前	50				(6.8)	灰白(2.5YR/1)	淡黄(2.5YR/3)	系切痕
424	143		中央部複品	山形鏡	前	50				(8.1)	灰白(2.5YR/1)	灰白(2.5YR/1)	等々痕
425	143	95	中央部複品	山形鏡	前	50	5.3	(9.4)	(8.8)	4.2	淡黄(2.5YR/3)	淡黄(2.5YR/3)	志野紋
426	143	95	北部中央(地割れ)	土師器	夢	25				(18.6)	淡黄(10YR8/6)	淡黄(10YR8/4)	赤痕
427	143	95	北部南斜崩落土	かわらけ	全体	35	3.4	(10.9)	(10.9)	(5.8)	に赤い痕跡(10YR7/4)	に赤い痕跡(10YR7/4)	
428	143	95	北部南斜崩落土	かわらけ	全体	70	1.9	(7.7)	(7.7)	4.2	に赤い痕跡(10YR6/4)	に赤い痕跡(10YR6/4)	
429~473			(銅鏡: 金属製品)										

( )は残存値

## 石器一覧表

番号	埋蔵 形態 番号	出土地點	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損	備考	
										表面風化	石器未製品か
256	88 59	SB10~12層邊	磨製石器	暗赤紫色灰斑質板岩	3.1	1.5	0.3	1.2	なし		
257	88 59	SB13	磨製石器	黑色粘板岩	4.2	2.4	0.3	4.8	あり		
258	88 59	SB16	剥片	暗赤紫色角閃岩	5.8	2.5	0.7	13.4	なし		
259	88 60	SB13	石器未製品	淡赤紫色灰斑質板岩	2.4	1.8	0.4	2.1	あり	研磨あり	
260	88 60	SB09	石器未製品	淡褐色灰斑質板岩	6.5	2.9	0.7	14.3	あり	研磨あり	
261	88 60	北部南斜崩落土	G形未製品	暗赤紫色灰斑質板岩	6.2	2.9	0.6	11.1	なし	研磨あり	
262	88 60	北部南斜崩落土	石器未製品	墨色千枚岩質板岩	7.9	3.5	0.9	21.4	なし		
263	88 60	SB09	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.1	2.8	0.8	14.2	なし		
264	88 60	北部南斜崩落土	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.4	3.4	1.0	23.2	あり		
265	88 60	SB16	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	3.2	2.3	0.4	3.6	あり		
266	88 60	SB16	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.3	2.2	0.8	7.9	なし		
267	88 59	北部南斜崩落土	剥片	灰綠色角閃岩	3.5	1.9	0.3	2.6	なし		
268	88 59	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	2.9	1.9	0.6	2.8	なし		
269	88 59	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	2.3	1.7	0.3	1.0	あり		
270	88 59	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	3.8	2.0	0.5	3.4	なし		
271	89 60	SB12	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	4.5	2.8	0.5	8.8	あり		
272	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.9	3.3	0.5	13.1	あり		
273	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.8	3.2	0.5	10.9	なし		
274	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.4	3.0	0.7	12.9	なし		
275	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.3	3.4	0.4	6.6	なし		
276	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.4	3.2	0.6	19.8	なし		
277	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.6	3.1	0.7	10.9	なし		
278	89 60	SB13	石器未製品	灰褐色千枚岩質板岩	5.5	2.8	0.5	9.1	なし		
279	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.6	2.9	0.4	7.9	なし		
280	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.3	2.7	0.5	3.6	なし		
281	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.9	2.7	0.7	13.4	なし		
282	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.6	2.7	0.6	11.2	なし		
283	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.7	3.4	0.5	16.3	なし		
284	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.6	3.5	0.8	11.0	なし		
285	89 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.9	3.4	0.5	14.5	あり		
286	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	7.5	3.3	0.8	22.2	あり		
287	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	7.5	3.5	0.7	19.5	なし		
288	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.5	3.2	0.5	12.5	なし		
289	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	8.5	3.5	0.8	23.8	なし		
290	90 60	SB13	石器未製品	灰褐色千枚岩質板岩	7.7	3.5	0.7	21.3	あり		
291	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	5.6	3.8	0.9	26.1	なし		
292	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	7.9	2.7	0.9	29.4	あり		
293	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	7.0	3.2	0.8	16.1	なし		
294	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.5	3.2	0.7	14.0	なし		
295	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.8	2.7	0.7	15.3	なし		
296	90 60	SB13	石器未製品	暗褐色千枚岩質板岩	6.8	3.7	0.7	17.7	あり		

遺物一覧表

番号	種類	回版番号	出土位置	種類	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	欠損	備 考
297	90	60	SB13	石織未製品	暗褐色平切質粘板岩	6.7	2.8	0.8	13.5	あり	
298	90	60	SB13	石織未製品	暗褐色手取質粘板岩	6.7	3.2	0.7	17.6	なし	
299	91	59	北部南縫崩落土	石織	淡褐色粗粒砂岩	4.8	1.3	1.2	37.9	なし	
300	91	59	SB10	砾石か	褐褐色片麻岩	11.7	4.4	2.6	201.9	なし	磨削面のある砾
301	91	59	SB13	骨石	淡褐色中粒砂岩	32.1	19.1	12.6	1660.0	なし	磨削面あり
357	115	79	SD20	磨削石織	淡褐色細粒灰岩	3.0	1.2	0.5	1.2	あり	
358	115	79	SB21	磨削石織	淡褐色細粒灰岩	4.2	1.5	0.3	2.4	あり	
359	115	79	SB20	閃石	黄褐色花崗岩	14.1	8.0	7.0	105.4	なし	
411	135	90	SB25	打製石織	黑色珠状粘板岩	2.1	1.1	0.4	6.7	なし	
412	135	90	SB27	磨削石織	淡褐色細粒灰岩	3.5	2.6	0.3	2.9	なし	
413	135	90	SB26	磨削石斧	褐褐色多孔質灰岩	3.1	3.1	2.7	149.9	なし	柱状片刃石斧、刃部に縦状痕
414	135	90	SB26	円盤形石製品	褐褐色細粒粘板岩砂岩	4.7	4.6	0.9	22.4	なし	

鉄織一覧表

番号	種類	回版番号	出土位置	種類	全長 (cm)	最身長 (cm)	最大幅 (cm)	基部長 (cm)	基部幅 (cm)	重量 (g)	備 考
429	144	96	北部北半(SB05上層)	鉄織	(15.4)	(7.7)	3.0	(7.7)	0.4	28.07	
430	144	96	東部北半(SD09上層)	鉄織	(7.1)	(5.0)	1.9	(7.1)	(0.4)	5.65	

SF08出土鉄製品一覧表

番号	種類番号	回版番号	出土位置	種類	全長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	番号	種類番号	回版番号	出土位置	種類	全長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)
431	145	96	SF08	刃部状	4.1	1.2	13.35	452	145	96	SF08	刃	(2.0)	0.3	0.50
432	145	96	SP08	刃部状、鋸歯など	(4.4)	1.1	4.32	453	145	96	SP08	刃	(3.0)	0.3	0.34
433	145	96	SP08	刃部状	(2.3)	0.6	0.57	454	145	96	SP08	刃	(4.7)	0.2	2.42
434	145	96	SP08	刃部状	(3.5)	0.7	0.81	455	145	96	SP08	刃	(4.1)	0.2	0.68
435	145	96	SP08	刃部状	(1.0)	0.8	2.34	456	145	96	SP08	刃	(1.5)	0.2	0.28
436	145	96	SP08	刃部状	(4.9)	1.3	2.07	457	145	96	SP08	刃	(3.7)	0.3	1.93
437	145	96	SP08	刃部状	(5.1)	2.3	5.99	458	145	96	SP08	刃	(4.5)	0.3	1.40
438	145	96	SP08	不明金具	(4.7)	2.0	6.72	459	145	96	SP08	刃	(3.7)	0.3	1.10
439	145	96	SP08	不明金具	(4.6)	1.2	1.92	460	145	96	SP08	刃	(3.0)	0.3	1.01
440	145	96	SP08	不明金具	(5.2)	2.7	10.91	461	145	96	SP08	刃	(3.4)	0.4	2.76
441	145	96	SP08	不明金具	(1.5)	(1.0)	9.18	462	145	96	SP08	刃	(2.2)	0.1	0.81
442	145	96	SP08	鉗状、不明金具など	(1.5)	(1.0)	3.16	463	145	96	SP08	刃	(2.7)	0.2	0.82
443	145	96	SP08	不明金具	(5.1)	(0.5)	1.07	464	145	96	SP08	刃	(0.8)	0.2	0.14
444	145	96	SP08	不明金具	(5.4)	0.5	4.37	465	145	96	SP08	刃	(1.0)	0.1	0.14
445	145	96	SP08	不明金具	(2.5)	(1.0)	1.85	466	145	96	SP08	刃	(1.2)	0.2	0.22
446	145	96	SP08	鉗状	(4.6)	(0.4)	7.04	467	145	96	SP08	刃	(1.1)	0.2	0.13
447	145	96	SP08	鋸い針	6.2	0.2	1.91	468	145	96	SP08	刃	(2.1)	0.2	0.34
448	145	96	SP08	刃	(3.8)	0.3	2.56	469	145	96	SP08	刃	(2.1)	0.1	0.36
449	145	96	SP08	刃	(1.8)	0.3	0.67	470	145	96	SP08	刃	(1.5)	0.3	0.20
450	145	96	SP08	刃	(2.1)	0.2	0.61	471	145	96	SP08	刃	(1.2)	0.2	0.58
451	145	96	SP08	刃	(2.1)	0.3	0.36	472	145	96	SP08	刃	(2.0)	0.3	0.35

( ) は既存種

SF08出土鋼鏡

番号	種類番号	回版番号	出土位置	種類	鏡名	国名	初鋳年	銘記 (cm)	内径 (mm)	外径 (mm)	重量 (g)	備考
473	145	96	SP08	鋼鏡	口元通寶	日本	不明	2.48	2.05	0.58	1.98	4分の10が欠損 ( ) は残存種

# 第6章 自然科学分析

## 第1節 片瀬遺跡出土炭化材の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

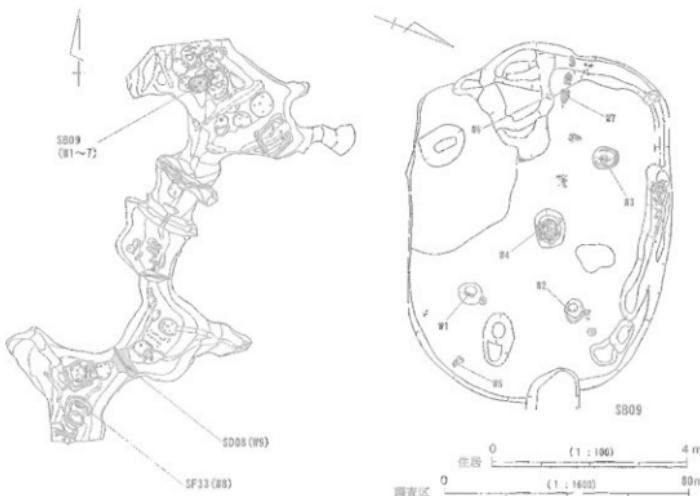
### 1. はじめに

片瀬遺跡（静岡県森町一宮所在）は、東西を太田川支流の徳田川と小川の谷に囲まれた丘陵先端部に位置する。発掘調査の結果、弥生時代中期後葉から後期前葉の集落、弥生時代後期後葉の墓域、中世の堀切状遺構や掘立柱建物跡等が検出されている。

今回の自然科学分析では、住居跡、方形周溝墓、溝等から検出された炭化材の種類を調べ、当時の植物利用等に関して検討する。また、炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、各遺構の年代についての情報を得る。

### 2. 試 料

試料は、住居跡、方形周溝墓、溝等から検出された炭化材9点である。試料の詳細は樹種同定結果と併せて表に示す。放射性炭素年代測定は各遺構から1点ずつ選択し、計3点について行った。SB09に関しては複数点であることから、状態のよいW5を選択した。



第146図 分析試料の概要

### 3. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で行った。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。また、北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え、計算させる。

#### (2) 樹種同定

木口(横断面)・粧目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 4. 結 果

#### (1) 放射性炭素年代測定

結果を第5・6表に示す。SB09は $2000 \pm 40$ 、SF33は $1710 \pm 40$ 、SD08は $990 \pm 40$ である。暦年校正の結果をみると、SB09はBC41～AD52、SF33はAD259～387、SD08はAD998～1152となる。発掘所見によれば、SB09は弥生時代中期～後期の住居跡、SF33とSD08は遺物が少なく時期不明とされている。今回の年代測定結果から考えると、SB09は発掘所見と整合する年代が得られている。また、SF33は周辺が墓域となった弥生時代末～古墳時代に相当する。SD06はこれらに比べると年代が新しく、古代(平安時代末)の年代を示す。

第5表 放射性炭素年代測定結果

試 料	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)								相対比	Code No.
		cal BC	41	-	cal BC	8	cal BP	1,991	-	1,958	
W5 SB09床面直上	$1998 \pm 36$	cal BC	3	-	cal AD	30	cal BP	1,953	-	1,920	0.415   IAAA-40216
		cal AD	39	-	cal AD	52	cal BP	1,911	-	1,898	
										0.146	
W8 SF33腹内	$1712 \pm 36$	cal AD	259	-	cal AD	281	cal BP	1,691	-	1,669	0.241   IAAA-40217
		cal AD	290	-	cal AD	298	cal BP	1,660	-	1,652	
		cal AD	322	-	cal AD	387	cal BP	1,628	-	1,563	
W9 SD08南東端部	$992 \pm 37$	cal AD	998	-	cal AD	1,041	cal BP	952	-	909	0.652   IAAA-40218
		cal AD	1,095	-	cal AD	1,117	cal BP	855	-	833	
		cal AD	1,141	-	cal AD	1,152	cal BP	809	-	6	

※計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用  
計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代間に換算した値。

## (2)樹種同定

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亞属）、広葉樹3種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・クマノミズキ類）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) マツ科  
軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部には垂直樹脂道が認められる。晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顯著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。
- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科  
環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科  
環孔材で、孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。
- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属  
環孔性放射孔材で、孔圈部は接線方向に疎な2～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。
- ・クマノミズキ類 (*Cornus macrophylla* Wallich) ミズキ科ミズキ属  
散孔材で、道管は単独または2個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

第6表 歳年較正結果

試料番号	種類	補正年代*BP	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$	測定年代*BP	Code. No.
W5 SB09   床面直上	スダジイ	2000±40	-31.96±1.02	2110±30	IAAA-40216
W8 SF33   覆土内	スダジイ	1710±40	-32.05±0.96	1830±30	IAAA-40217
W9 SD08   南東端部	マツ属複維管束亞属	990±40	-31.47±1.15	1110±30	IAAA-40218

\*歳年代値の算出には、Libbyの半減期5680年を使用。

BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

付記した誤差は、測定誤差。 $(\text{測定値}\pm 60\%)$ が入る範囲を年代値に換算した値。

第7表 樹種同定結果

調査区	試料番号	遺構	部位	樹種
北部	W1	SB09	床面直上	コナラ属コナラ亜属コナラ節
北部	W2	SB09	床面直上	コナラ属コナラ亜属コナラ節
北部	W3	SB09	床面直上	コナラ属コナラ亜属コナラ節
北部	W4	SB09	床面直上	コナラ属アカガシ亜属
北部	W5	SB09	床面直上	スダジイ
北部	W6	SB09	床面直上	スダジイ
北部	W7	SB09	床面直上	スダジイ
南部	W8	SF33	覆土層	スダジイ
中央部	W9	SD08	南東端部	クマノミズキ類 マツ属複維管束亞属 コナラ属コナラ亜属クヌギ節

## 5. 考 察

樹種同定を行った炭化材は、SB09、SD08、SF33から出土している。SB09は弥生時代中期後葉～後期前葉の竪穴住居跡であり、東西に長い梢円形を呈する。炭化材は、住居中央部の炉跡（W4）、住居東側の柱穴（W1・2）、住居西側の柱穴（W3）、住居東壁付近（W5）、住居西壁付近（W6・7）からそれぞれ出土している。このうち、W7は、住居東壁から住居中央部に向かって軸方向が伸びており、垂木などに由来する可能性がある。一方、W7を除く6点は小片であり、形状等の詳細は不明であるが、出土状況から同じく住居構築材の一部に由来する可能性がある。SB09から出土した炭化材には、コナラ節、アカガシ重属、スダジイの3種類が認められた。いずれも重硬で強度の高い材質を有する種類である。この結果から、住居構築材として強度の高い木材を選択していたことが推定される。

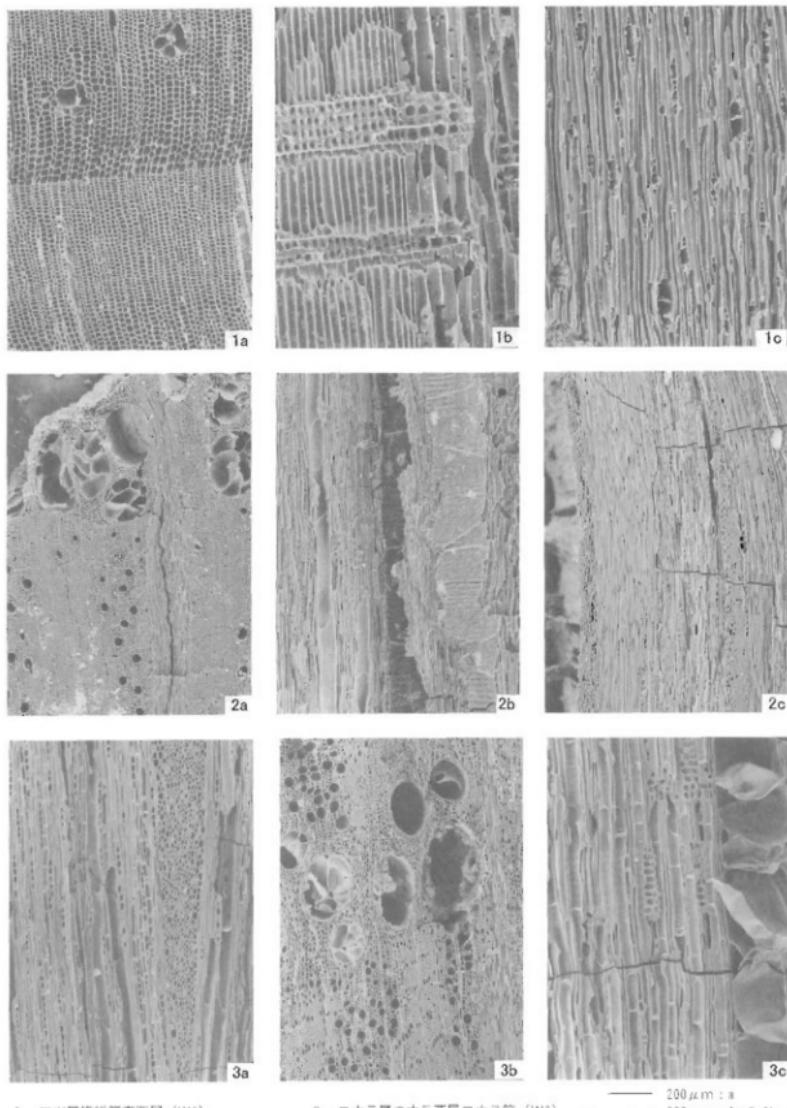
W9が出土したSD08は、住居跡に伴う濠の一部の可能性があるが、弥生時代後期中葉以降の土器も出土しており、弥生時代後期後葉の段階でも溝状に残っていた可能性が指摘されている。ただし、今回の年代測定結果では、古代の年代を示している。炭化材はSD08南東端の円形部分からまとめて出土しており、SD08に古代の円形遺構が重複している可能性も考慮される。炭化材にはスダジイとクマノミズキ類が認められ、少なくとも2種類が混じっていることがうかがえる。スダジイとクマノミズキ類は共に重硬で強度の高い材質を有し、遺跡において強度を有する部材に利用されていた可能性がある。

SF33は、遺物が少なく時期の詳細が不明であるが、弥生時代後期後葉～末葉の方形周溝墓に掘り込まれており、新しくとも弥生時代後期後葉～末葉よりも古い段階に構築されたことが推定されている。炭化材は複雑管束亜属とクヌギ節であった。複雍管束亜属は、針葉樹材としては重硬な部類に入るが、広葉樹材に比較すれば中庸からやや軽い部類に入る。クヌギ節は、コナラ節に似た材質を有し、重硬で強度が高い。いずれも住居跡や溝跡の炭化材には認められていない。これらの炭化材については、時期や用途の詳細が不明である。したがって、今後調査事例を蓄積し検討することが望まれる。

掛川市の上ノ平遺跡では、弥生時代後期の住居構築材について樹種同定を行っており、クリが多い結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社2008）。一方、本遺跡ではクリは1点も確認されていない。袋井市にある川田・藤藏測遺跡の花粉分析結果をみると、シイ・カシ類など常緑広葉樹を主とする組成を示しており（パリノ・サーヴェイ株式会社1996）、花粉分析で多くみられる種類が用材としても多用されている。おそらく、これらは周辺の山野から採取し、利用したものと考えられる。上ノ平遺跡と片瀬遺跡の樹種構成の違いは、周辺の局地的な植生の違い等を反映している可能性もある。しかし、周辺地域での木材利用や古植生に関する調査事例が少ないと等から、今後の資料蓄積を行い検討することが望まれる。

### 参考文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社 1996 「川田・藤藏測遺跡の自然科学分析」『川田・藤藏測遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2008 「炭化材の樹種同定およびC14年代測定・種子の同定」『上ノ平遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

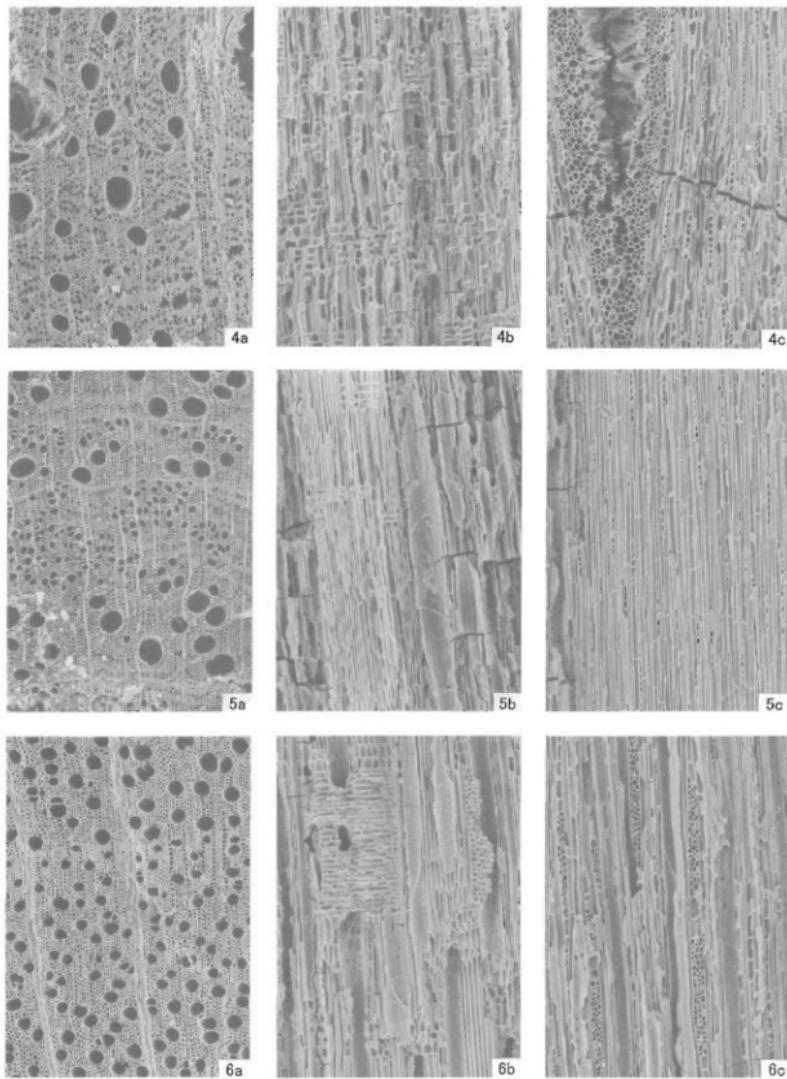


1. マツ蒸発維管束属 (W9)  
2. コナラ属コナラ蒸発クヌギ節 (W3)

3. コナラ属コナラ蒸発コナラ節 (W3)  
a : 小口 b : 痕目 c : 板目

— 200 μm : a  
— 200 μm : 1c, 2-3b, c  
— 200 μm : 1b

第147図 片瀬遺跡の炭化材①



4. コナラ属アカガシ亜属 (W4)  
5. スダジイ (W6)

6. クマノミズキ類 (W8)  
a : 小口 b : 痕目 c : 板目

— 200 μm : a  
— 200 μm : b, c

第148図 片瀬遺跡の炭化材(2)

## 第2節 片瀬遺跡出土貝印象化石の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1.はじめに

森町に所在する片瀬遺跡は、天竜川下流左岸に広がる丘陵を構成する細尾根上に位置する。丘陵は、新第三紀の堆積岩類からなる掛川層群により構成されている（土1986）。また、丘陵の南方には、更新世後期に形成された磐田原台地（日本の地質「中部地方I」編集委員会1988）が広がっている。

発掘調査では、主に弥生時代の集落跡が検出されている。出土土器などから弥生時代中期後葉～後期前葉とされる竪穴住居跡が検出され、東になった有孔磨製石鑿の未製品なども出土している。そして、住居跡を削平するSX03の覆土中から、貝殻の痕跡が認められる土塊が多量に出土している。

本報告では、この多量に出土した貝殻の痕跡のある土塊について、薄片作製観察とX線回折により、その岩石学的な特性を把握し、また、土塊の形成環境に関わる情報となる珪藻化石の産状を調べ、さらに、痕跡となっている貝の種類を同定することにより、これらの分析結果から、その由来を推定する。

### 2. 試 料

試料は、調査区南部のSX03から出土した貝類化石で、一括して取り上げられたものである。SX03は、弥生時代後期中葉頃とされる住居跡SB24の上部を削平している。試料は、いずれも貝殻が残存しておらず、印象化石となっている。色調は暗褐色～暗赤褐色を呈し、表面の粒子の状況と質感などから、風化して脆くなった砂岩のように見える。

貝類の同定は、全てについて行うが、薄片作製観察、X線回折、珪藻分析の各分析には、同定によって一枚貝綱および腹足綱とされた土壤からそれぞれ1点ずつ選択した2点を試料とする。

### 3. 分析方法

#### (1) 薄片作製観察

ダイヤモンドカッターにより試料を切断して薄片用のチップとする。そのチップをスライドガラスに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。スライドガラス上で薄くなかった薄片の上にカバーガラスを貼り付け完成とする。

薄片は、偏光顕微鏡を用いて観察を行った。試料中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類を記載し、薄片下におけるその量比を多量は◎、少量は△などの記号で示す。また、基質は、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などの方向性の確認や、基質を構成する粘土が焼成の結果、どの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているか、酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載する。

## (2) X線回折分析

ダイヤモンドカッターで切断した試料の一部をメノウ乳鉢で微粉碎した後、アルミニウムホルダーに充填し、X線回折分析試料を作成する。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit : 1°
Target : Cu (K $\alpha$ )	Scattering Slit : 1°
Monochrometer : Graphite	湾曲 Receiving Slit : 0.3mm
Voltage : 40KV	Scanning Speed : 2° / min
Current : 40Ma	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 2~45°

## (3) 珪藻分析

試料を鉄乳鉢で粉碎し、7 g前後秤量する。過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレバラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。なお、本分析では、前述の薄片についても珪藻化石の有無を確認した。

## (4) 貝同定

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類の同定を行う。なお、同定および解析には金子浩昌先生の協力を得た。

# 4. 結 果

## (1) 薄片作製観察

観察結果を第8表に示す。2点の試料は、ほぼ同様の特徴を示す。すなわち、試料は、円磨度の低い中粒砂径の碎屑片により構成される砂岩であり、基質の大部分は褐鉄鉱となっている。砂粒を構成する鉱物片、岩石片では、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母の各鉱物片が比較的多く、他に微量の白雲母、角閃石、ジルコンなどの鉱物片やチャート、真岩、凝灰岩、花崗岩類、ホルンフェルスの各岩石片が確認された。

なお、いずれの試料にも、基質の褐鉄鉱には、焼成を受けた場合に生じる赤鉄鉱化は認められない。

## (2) X線回折分析

結果を第149・150図に示す。両試料ともに、石英(quartz)、曹長石(albite)、正長石(orthoclase)が検出された他、微量の雲母鉱物(イライトillite)の存在が確認された。また、二枚貝網の試料には不明瞭ではあるが針鉄鉱(goethite)の存在を示す回折線が、腹足網の試料には赤鉄鉱(hematite)の存在

を示す回折線が確認された。

### (3) 珪藻分析

両試料ともに無化石であった。また、薄片下でも全く認めることができなかつた。

### (4) 貝同定

検出された種類は、腹足綱8種類、二枚貝綱8種類の合計16種類である（第9・10表）。検出されている化石は、全て印象化石である。殻本体が残っていないため、大半の標本は種の同定まで至らない。1cm未満の小さい化石は原形を保っていることもある。しかし、多くの標本は破損が著しく、一部を残すのみの状態である。これは、詳細不明であるが、化石が人為的に運ばれてきたために破損したのかもしれない。

腹足綱（巻貝類）ではタマガイ科、エゾバイ科が多く、大小の個体が含まれていたようである。コロモガイ科もやや多い。マクラガイ類の高さ6.0mm前後の標本は、化石集合体中に埋存していた個体が遊離したものと思われる。二枚貝綱も破損がひどく、全体をうかがえる標本がなかったが、殻長10~15cmになる個体もあった。全体に寒系、外洋に棲息する貝類とみられる。

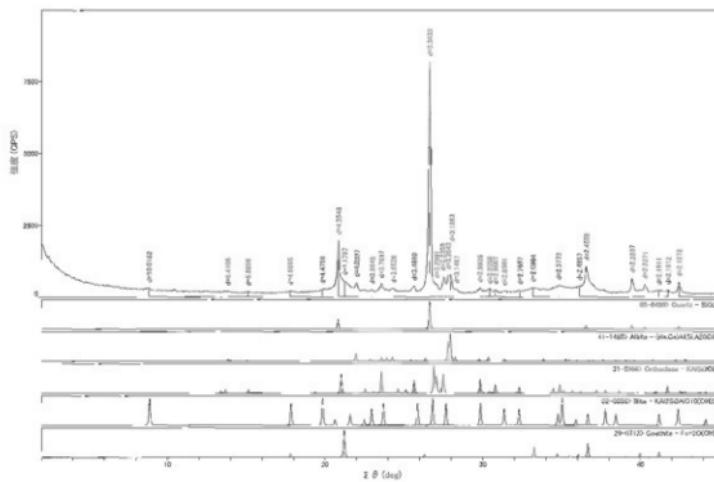
第8表 薄片観察結果

No.	試料名	砂粒		砂粒の種類構成										孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	備考		
		全体量	淘汰度	鉱物片					岩石片											
				最大径	石英	カリ長石	斜長石	白雲母	黒雲母	角閃石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	花崗岩類	ホルンフェルズ			
1	SX03出土 貝印象化石 (二枚貝綱)	◎	△ 1.7 ○	△	△	△	△	+	△	+	+	+	+	+	+	+	+	×	×	+ △
2	SX03出土 貝印象化石 (腹足綱)	◎	○ 0.8 ○	△	△	△	+	△	+	+	+	+	+	+	+	+	+	×	×	+ △

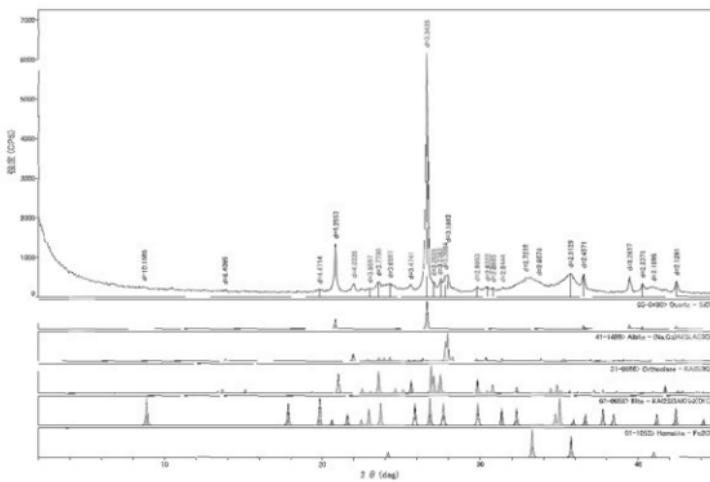
量比 ◎:多量 ○:中量 △:少量 +:微量  
程度 ◎:強い ○:中程度 △:弱い ×:なし

円周度の低い、中粒砂サイズの鉱屑片が卓越する。基質の大部分は褐鉄鉱からなり、褐色を呈する。これら褐鉄鉱の焼成による赤鉄鉱化は認められない。

円周度の低い、中粒砂サイズの鉱屑片が卓越する。基質の大部分は褐鉄鉱からなり、褐色を呈する。これら褐鉄鉱の焼成による赤鉄鉱化は認められない。



第149図 SX03出土貝印象化石(二枚貝綱)のX線回析図



第150図 SX03出土貝印象化石(腹足綱)のX線回析図

第9表 検出された貝の分類群一覧

軟体動物門 Phylum Mollusca  
 旗足綱 Class Gastropoda  
 前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia  
 古腹足目 Order Vetigastropoda  
 ニシキウズガイ科 Family Trochidae  
 鰓足目 Order Discopoda  
 タマガイ科 Family Naticidae  
 新腹足目 Order Neogastropoda  
 エゾバイ科 Family Buccinidae  
 マクラガイ科 Family Olividae  
 ホタルガイ類の一種 *Amalda* sp.  
 コロモガイ科 Family Cancellariidae  
 トカシオリイレ *Cancellaria (Habesolatia) nodulifera*  
 異旋目 Order Heterostropha  
 クルマガイ科? Family Architectonicidae?  
 二枚貝綱 Class Bivalvia  
 翼形亜綱 Subclass Pteriomophia  
 フネガイ目 Order Arcida  
 フネガイ科 Family Arcidae  
 ミノガイ目 Order Limoidae  
 ミノガイ科 Family Limidae  
 吳歎垂綱 Order Heterodontia  
 マルスダレガイ目 Order Veneroida  
 エゾシラオガイ科 Family Astartidae  
 アラスカシラオガイ *Tridonta alasensis*  
 マルスダレガイ目 Order Veneroida  
 シオザナミ科 Family Psammobiidae  
 マルスダレガイ科 Family Veneridae  
 マルスダレガイ/ビノスガイモドキ  
*Venus (Ventricularia) toremata/foveolata*  
 ヒナガイ *Dosimorpha bilunulatus*  
 オオノガイ目 Order Myoida  
 クチベニガイ科 Family Corbulidae  
 キスマトイガイ科 Family Hiatellidae

第10表 貝印象化石同定結果

		種	類	数量	備考
腹足綱	前鰓亜綱	古腹足目	ニシキウズガイ科	2	
		盤足目	タマガイ科(大)	4	
			タマガイ科(小)	3	内1点殻頂部付近
		新腹足目	エゾバイ科(大)	8	
			エゾバイ科(小)	2	
			ホタルガイ類の一種	1	
			マクラガイ科	4	
			トカシオリイレ	1	
			コロモガイ科	7	
		異旋目	クルマガイ科?	1	
	二枚貝綱	不明	その他破片	163.7 g	内1点分析試料
		翼形亜綱	フネガイ目	3	
			ミノガイ目	5	
		異齒亜綱	マルスダレガイ目	3	
			アラスカシラオガイ	3	
			シオザナミ科	3	
			マルスダレガイ/ビノスガイモドキ	1	
			ヒナガイ	3	
		(オオノガイ目)	クチベニガイ科	1	
			キスマトイガイ科	1	
		不明	その他破片	407.4 g	内1点分析試料
不明			塊	292.1 g	

## 5. 考 察

薄片観察から、貝印象化石を構成する塊は、風化した砂岩であると考えられる。片瀬遺跡の位置する丘陵を構成している掛川層群の中には、大日砂岩層と呼ばれる軟体動物化石を多く含む地質の分布が知られている（日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会1988）。その記載によれば、風化すると黄褐色になる粒度のそろった中粒砂岩からなるとあり、今回の試料の特徴とよく一致する。

一方、同定された化石種は、大日砂岩層中の化石集積中の貝種（間嶋・本目1993）と比較すると、共通する種類が多い。ただし、共通しない種類（ミノガイ科、アラスカシラオガイ、シオサザナミ科、マルスダレガイ／ビノスガイモドキ）も存在する。しかし、同著に記載された種数を上回る種数が實際にはあることを著者らは述べており、今回検出された貝化石についても、印象のみであり、かつ保存が良好でないことから、種構成が充分把握できたとはいえない。したがって、現時点では貝化石の種構成からみても、試料が大日砂岩層に由来する可能性がある。

試料から珪藻化石が全く検出されなかつたことについては、間嶋・本目（1993）が述べているように、大日砂岩層の貝化石層がストーム時に発生した強い流れによって堆積したという成因によると考えることもできる。すなわち、そのような流れの中では、珪藻化石のような微細な碎屑物は留まることができなかつたと考えられるのである。

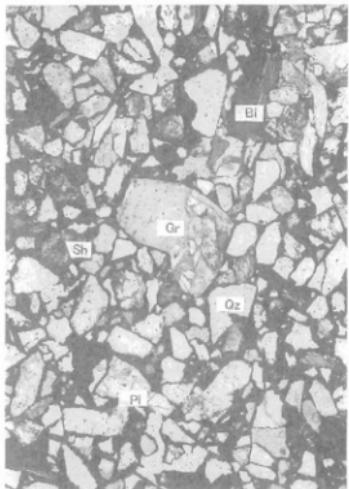
以上のことから、片瀬遺跡の竪穴住居跡から出土した貝印象化石は、遺跡周辺に分布する大日砂岩層に由来する可能性がある。今後は、遺跡周辺における大日砂岩層の分布地や岩相の調査などの検証が必要と考えられる。

なお、竪穴住居内において貝印象化石が焼成を受けた可能性については、薄片観察からは、その可能性は低いと判断される。一方、X線回折では、腹足綱の試料に赤鉄鉱が認められている。針鉄鉱は被熱を受けた場合、マグヘマイトを経て、赤鉄鉱へと変化し、その変化する温度は、270～325°Cとされている（吉木1959）ことから、その程度の熱を受けた可能性はある。

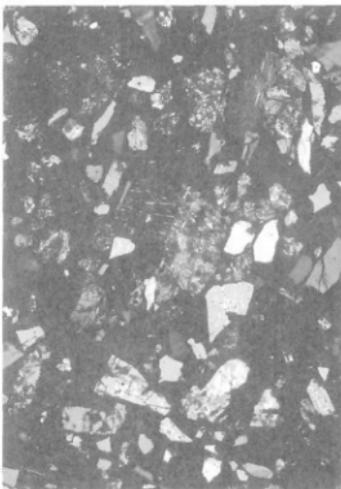
今回の分析により、貝印象化石の由来は周辺に分布する地質である可能性があるということができたが、被熱の有無については明瞭な結果は得られず、そして竪穴住居跡の覆土に多量に含まれていたこと自体についても、その経緯は不明である。今後、周辺域で類例が検出されることがあれば、今回と同様に様々な分析を行い、資料を蓄積することで、上述の課題も解明していくことが期待される。

## 参考文献

- 間嶋隆一・本目貴史 1993 「掛川層群大日層の貝殻集積層—その内部構造と起源—」『地質学雑誌』99  
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会 1988 『日本の地質4』中部地方Ⅰ 共立出版  
土 隆一 1986 『静岡県地質図(20万分の1)改訂版』 静岡県  
吉木文平 1959 『鉱物工学』 技報堂



1. SX03 出土貝印象化石（二枚貝網）



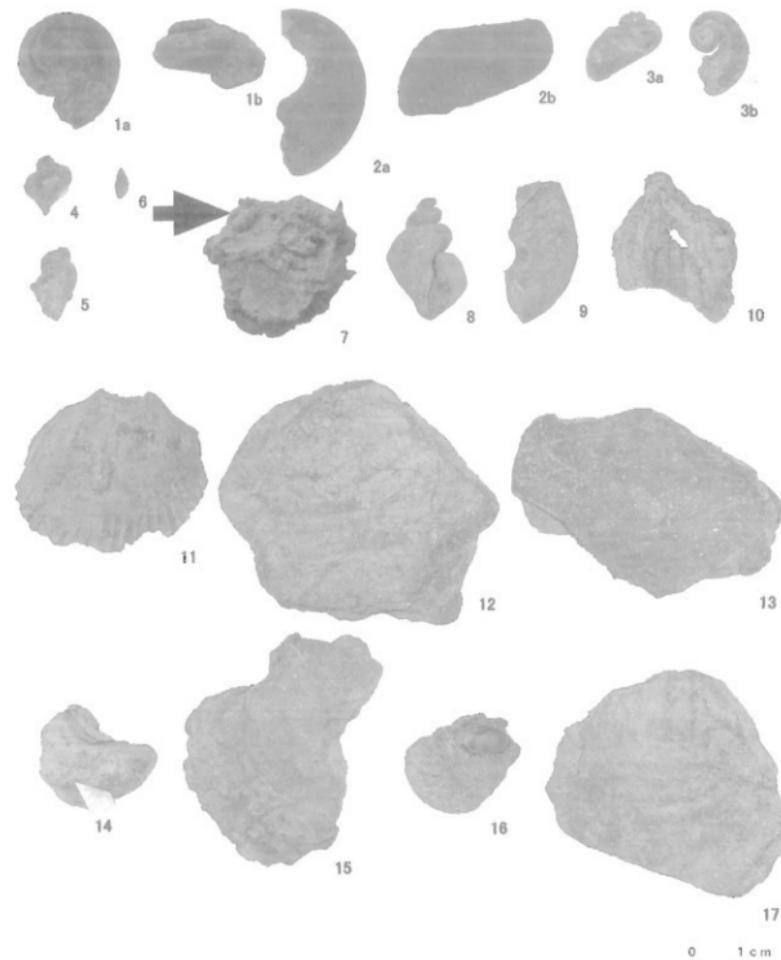
2. SX03 出土貝印象化石（腹足網）



0.5mm

Qz:石英 Pl:斜長石 Bi:黒雲母 Ho:角閃石 Lm:褐鐵鉻 Gr:花崗岩 Hf:ホルンフェルス Tf:凝灰岩 Sh:頁岩  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

第151図 SX03出土貝印象化石(薄片)の顕微鏡写真



- |             |                      |               |
|-------------|----------------------|---------------|
| 1. ニシキウズガイ科 | 2. タマガイ科（大）          | 3. タマガイ科（小）   |
| 4. エゾバイ科    | 5. ホタルガイ類の一種         | 6. マクラガイ科     |
| 7. トカシオリイレ  | 8. コロモガイ科            | 9. クルマガイ科？    |
| 10. フネガイ科   | 11. ミノガイ科            | 12. アラスカシラオガイ |
| 13. シオザザナミ科 | 14. マルスダレガイ／ビノスガイモドキ | 15. ヒナガイ      |
| 16. クチベニガイ科 | 17. キヌマトイガイ          |               |

第152図 SX03出土貝印象化石の種類

## 第7章　まとめ

### 1. はじめに

静岡県周智郡森町の網掛山古墳群と片瀬遺跡は、太田川の上流である一宮川の北側丘陵地帯に位置している。それぞれ別の丘陵に立地する遺跡であるが、双方の丘陵は谷平野をはさんだ東西に位置しており、南にのびるやせ尾根を中心筋としている点で共通する。ただし、網掛山古墳群の丘陵が中心筋と東西に長く派生する尾根によって構成されているのに対して、片瀬遺跡が立地する丘陵は東西に派生する尾根が短く、全体的に細長い。

本書で報告した第二東名高速道路の建設に伴う発掘調査では、縄文時代から中世以降までの様々な遺構・遺物が発見されている。やせ尾根で構成された丘陵上にありながら、その時々によって生活域・墓域、その他の役割をもった場所として使われていたことがわかる。ここでは、発見された遺構・遺物から両遺跡の形成過程と特徴について検討し、本書のまとめとしたい。なお、調査区内の区域・部分の呼称は第153図のとおりとする。また、遺構名について、本章では両遺跡間の混乱をさけるために網掛山古墳群はT、片瀬遺跡はKを頭に付けることとする。



第153図 網掛山古墳群・片瀬遺跡の地形と調査区

## 2. 綱掛山古墳群・片瀬遺跡の遺跡形成

### (1) 弥生集落形成前

綱掛山古墳群の縄文集落 発見された遺構・遺物の中で最も古いのは、綱掛山古墳群4区で発見された縄文時代の住居跡と土器である。ここでは密集する竪穴住居跡群が検出されているが、出土遺物と遺構の特徴から、その中の4軒 (TSB06・TSB10・TSB12・TSB23) が縄文時代のものであると判断できる。

縄文時代の遺構と判断した4軒の竪穴住居跡は、破壊のために不明になっている部分もあるが、概ね長軸5m以上の平面長楕円形もしくは不整形を呈し、石を用いた炉を伴う点で共通する。これらの特徴は、平面方形で地床炉を伴う弥生時代の竪穴住居跡とは全く異なっている。そして、遺構の切り合い関係と少數ながら出土した縄文土器によって、これらを縄文時代中期前半の竪穴住居跡である可能性が高いと判断する。

第2章で述べたように、この遺跡の周辺地域は縄文時代の遺跡が多いわけではない。文殊堂古墳群や弥勒平遺跡・寺山古墳群など、綱掛山古墳群と同様の丘陵上において、若干の土器の出土や落し穴が発見される場合がある程度である(静岡県埋蔵文化財調査研究所2004・2006)。綱掛山古墳群においても、竪穴住居跡が存在するものの、出土する土器・石器の量は少なく、大きな集落活動を営めるような立地ではない。検出した竪穴住居跡についても、壁溝や柱穴がなく、比較的簡易な構造であった可能性を考慮される。以上から、狩猟・採集を伴う移動生活中で営まれた小規模な集落跡である可能性を考えておきたい。

片瀬遺跡の遺跡形成初期 片瀬遺跡においては、縄文土器の出土はない。調査区中央部では、埋葬遺構よりも前に設けられていた落し穴2基 (KSF13・KSF16) が発見されており、この時期が縄文時代にさかのぼる可能性はある。また、出土石器の一部について、縄文時代のものである可能性を考慮することもできる。しかし、いずれも明確な根拠はなく、縄文時代の遺跡形成を積極的に評価することはできない。検出状況においては、後述する弥生時代前～中期もしくは弥生時代中～後期の集落に伴うものであっても問題はない。



第154図 弥生集落形成前の遺跡形成

片瀬遺跡の出土土器の中で最も古いものは、調査区南部に位置するKSF31から出土した甌であり、弥生時代前期～中期に位置づけできる。しかし、この時期の生活や埋葬の痕跡は明確でなく、単発的に持ち込まれた土器として評価するしかない。なお、太田川上流域・一宮川流域において、この時期の状況を明確に示している遺跡は認められていない。文殊堂古墳群では、丘陵上から弥生時代前半～中期前半の石器が単発的に出土している(静岡県埋蔵文化財調査研究所2006)。明確な當みを示す遺跡がない一方、単発的な出土の把握が当時の状況を物語ることになる可能性も考慮しておきたい。

## (2) 弥生時代の集落

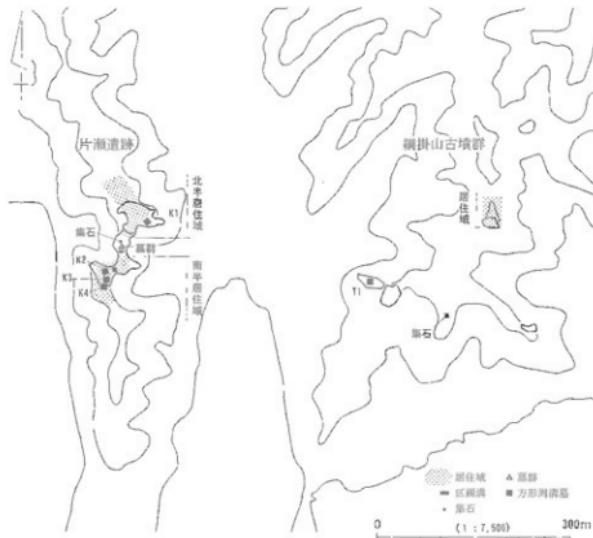
住居跡の分布 網掛山・片瀬の両遺跡において、弥生時代の堅穴住居跡が多く発見されている。

網掛山古墳群4区の密集する堅穴住居跡群について、その多くは弥生時代のもとのと判断できる。この居住域は、調査範囲の中で最も高所となる場所に位置しており、その範囲は尾根筋にそって北側に広がる可能性がある。地形をみると、途中の鞍部を挟んで南北150mの範囲に広がっている可能性も考慮できる。

片瀬遺跡では、調査区のほぼ全域に弥生時代の堅穴住居跡が分布している。さらに、その範囲は尾根筋にそって南北に広がることが明らかであり、少なくとも南北200m、最大で南北500m程度にまで広がっている可能性が考慮される。なお、森町教育委員会による片瀬遺跡の第1次調査においても、弥生土器が出土している。今回の調査よりも北側について、居住域か墓域かなどは不明であるが、弥生時代の遺跡が第1次調査の範囲（現ゴルフ場）にまで広がっていた可能性が指摘できる。なお、地形などによって堅穴住居跡の分布を調査区北部、中央部北端、中央部南寄り、南部に細分することもできるが、調査区中央部に堅穴住居跡のない部分があり、そのブランクを境として「北半居住域」と「南半居住域」に大別することができる。

**堅穴住居跡の時期** 主な堅穴住居跡の出土土器（第156図）をみると、弥生時代中期後葉に位置づけできる白岩式（佐藤1996、佐藤ほか2002など、註1）、もしくは弥生時代後期前葉に位置づけできる菊川式古段階（鈴木1996、佐藤ほか2002など、註1）の特徴を伴うものが多いことがわかる。したがって、弥生時代中期後葉～後期前葉の期間に居住域としての営みがあったと判断することができる。ただし、片瀬遺跡のKSB01・KSB12といった一部については、より新しい時期（弥生時代後期中葉）の要素を伴う土器も出土している。他の遺構からの混在の可能性も考慮する必要があるが、後期中葉まで居住域としての機能が残存していた可能性は否定できない。一方、片瀬遺跡のKSB27などでは、中期後葉よりも古い時期の土器が出土している。しかし、小破片が流土や覆土上層から数点出土しているだけであり、住居跡の時期に対応した遺物としては評価できない状況にある。

以上のように、網掛山古墳群と片瀬遺跡の両丘陵は、弥生時代中期後葉から後期前葉もしくは中葉まで居住域になっていたことがわかる。しかし、出土遺物が少ない住居跡もあり、とくに網掛山古墳群に



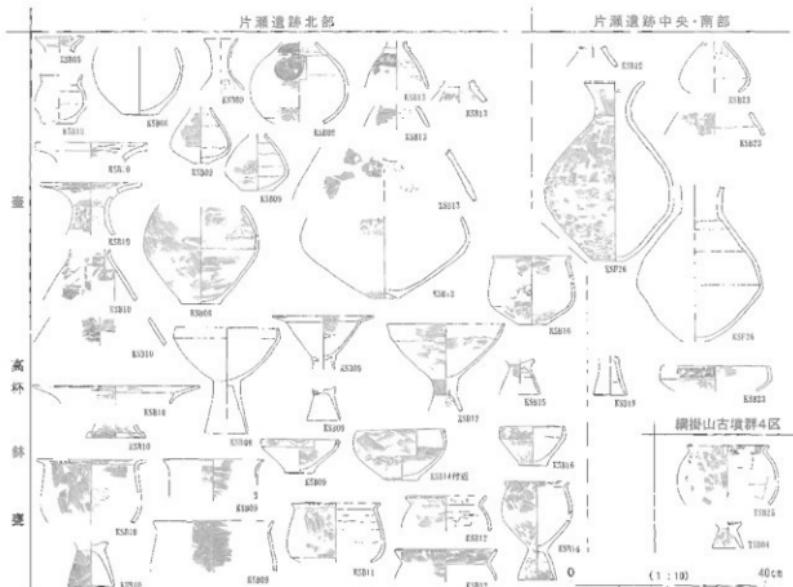
第155図 弥生集落に伴う遺構分布

における居住域の存続期間は明確にできない。また、片瀬遺跡の調査区北部では、中世山城などに伴う削平や地割れによる遺物の混在が推測され、個々の住居跡の時期を出土土器から判断するには限界がある。焼失住居である片瀬遺跡のKSB09だけは、残存の良い土器が良好な状態で出土しているため、弥生時代後期初頭頃に位置づけることができる。その他の多くについては、出土土器とともに切り合い関係などを考慮して判断する必要があると考える。

**竪穴住居跡の形態と変遷** 片瀬遺跡の竪穴住居跡には、様々な形態のものがある。平面形は、円形や楕円形、さらに方形・長方形に近いものもある。主柱穴は4基を基本としているが、壁溝や貯蔵室の有無などには差異がある。壁溝は、設けられることが少なく、全局する状態で検出された住居跡はない。炉は、地床炉で占められているが、炉の上に赤化した粘質土板が被さっているものがあり、さらにKSB09では赤化粘質土板の脇に石が置かれていた。KSB13の炉には、赤化粘質土板ではなく板石が被せられていた。

先述のように、厳密に各住居の時期を特定することは難しい。しかし、出土土器と切り合い関係を比較することによって、竪穴住居跡の形態変遷の傾向を検討することは可能である。片瀬遺跡の竪穴住居跡については、概ねK1～K4類に分けて説明することができる（第157図）。

K1類は、方形に近い平面形を呈するものである。ただし、厳密に規格的な方形を呈するものはなく、やや不整形で部分的に丸味を伴うものが多い。主柱穴4基、炉1基を伴うが、壁溝は基本的にない。かくは必ずしも中央に配置されるわけではない。これらは出土遺物などから弥生時代中期後葉に位置づけができる可能性が高く、片瀬遺跡においては出現初期の住居跡形態であると評価できる。丘陵尾根の縁辺に



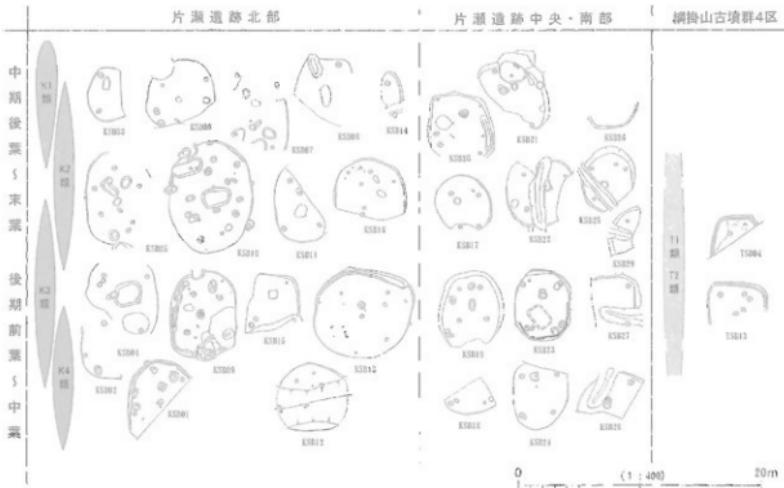
第156図 竪穴住居跡の主要出土土器

立地するものが目立っているが、最も古い段階にあるが故に、比較的浅く設けられ、削平や切り合いを受けることによって多くが消失している可能性も考慮する必要がある。尾根の中央に立地するKSB07は他より浅く、残存状態が非常に悪い。

K2類は、弥生時代中期後葉に位置づけできるものの、K1類に比べると後出的なものとして評価できる堅穴住居跡である。平面円形のものと平面楕円形のものがあり、後者の方が大きい。平面形の違いに対応する規模の区分を指摘することもできる。また、大きな平面楕円形の堅穴住居跡は調査区北部、小さめの平面円形の堅穴住居跡は調査区中央部～南部に分布する傾向にあることから、居住域による形態・規模の差異を指摘することもできる。一部に壁溝や貯蔵窓が伴うものが現れる。

K3類は、弥生時代後期前葉を中心に位置づけできる堅穴住居跡であり、平面形は部分的に方形化した楕円形が多い。住居跡内の構造については、基本的にK2類と大きく違わない。ただし、炉は主軸上への配置が徹底されるようになる。なお、KSB13だけは大型の平面円形を呈し、炉の上に板石が被さっているなどの特異的な特徴を伴う。K4類は、弥生時代後期前葉でもK3類より後出的、後期中葉にまでくだる可能性がある堅穴住居跡である。平面形は、側縁が直線的な楕円形（小判形）を呈するものが多い。その他の特徴はK3類に近い。

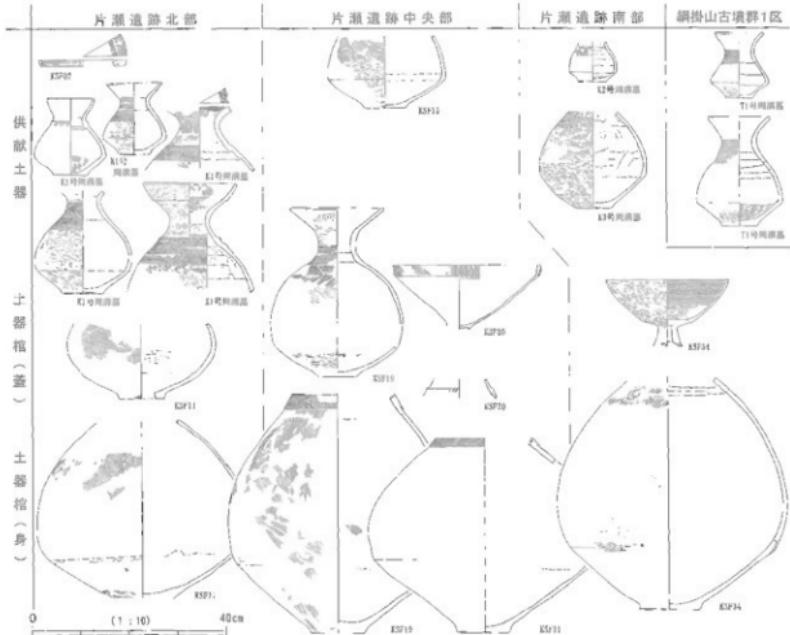
網掛山古墳群の堅穴住居跡について、SB04は長方形化を伴う平面楕円形（T1類）であるが、その他は平面方形（T2類）で統一されている。主柱穴4基と炉1基を伴う点は片瀬遺跡の堅穴住居跡と同様であるが、柱穴は浅く、炉は赤化粘質土板が被さることはない。また、壁溝が多い点も片瀬遺跡とは異なる。このように、網掛山古墳群と片瀬遺跡とでは堅穴住居跡の形態・構造に違いが多い。地域的な傾向としては、方形（中期中葉）→楕円形か隅丸方形（中期後葉）→隅丸方形（後期後半）という変遷が指摘されている（井村2002）。しかし、出土遺物などをみるかぎり、両遺跡間の時期差は見出しづらい。両遺跡の堅穴住居跡の形態・構造の違いについて、時期差による違いではなく、立地する丘陵（集落）の違いと関連している可能性も考えておきたい。



第157図 網掛山古墳群・片瀬遺跡における堅穴住居跡の変遷

**埋葬遺構の分布と時期** 弥生時代の遺構としては、住居跡などのほかに埋葬に関連する遺構も発見されている。網掛山古墳群では、居住域から離れた西に派生する尾根において、方形周溝墓1基（T1号周溝墓）を検出している。片瀬遺跡では、調査区北部南縁に方形周溝墓1基（K1号周溝墓）、南部に方形周溝墓3基（K2~K4号周溝墓）を検出し、中央部の住居跡がない場所に土坑墓（KSF14・KSF15・KSF17）と土器棺墓（KSF19~KSF23）による埋葬遺構群（中央墓群）を検出している。調査区北部の中央においては、住居跡を壊して設けられた土坑敷基（KSF02・KSF03）を発見、さらに、中世の土坑（KSF07）からは土器棺墓に使用できる大きさの弥生大型壺が出土している。中世以降の削平が著しい北部においても、土坑墓や土器棺墓による埋葬施設群が展開していた可能性がある。土器棺墓については、中央墓群以外に方形周溝墓に伴うもの（KSF11・KSF34）と単独立地のもの（KSF25）がある。

方形周溝墓の周溝は、四隅全てが途切れるではなく、全周もしくは1~2ヶ所の隅が途切れる程度でめぐらされている。また、周溝墓に伴う供獻土器や土器棺は、菊川式新段階（鈴木1996など）以降のもので占められている（第158図）。以上から、いずれの方形周溝墓も弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の中で造営されたものと判断できる。それに対して、片瀬遺跡中央部にある埋葬遺構群（中央墓群）の出土土器については、古墳時代までくだと積極的に判断できるものがない一方、弥生時代後期前葉～中葉に位置づけできる可能性を伴うもの（KSF20など）を含んでいる。以上から、居住域としての営みが終末をむかえる前に片瀬遺跡中央墓群が形成されはじめ、その後に方形周溝墓が各所に設けられたと把握することができる。



第158図 埋葬遺構の主要出土土器

**区画溝の存在** 片瀬遺跡においては、弥生時代の遺構として、掘立柱建物跡と集落を区画するような深い溝状遺構（区画溝）も発見されている。検出した掘立柱建物跡は調査区中央部の1棟（KSD03）のみである。削平や流土による消失も考慮する必要があるが、竪穴住居に対して掘立柱建物の数が少ない集落であったと把握できる。

区画溝は、KSD03・KSD07・KSD08の3条を検出することができた。いずれも横断面がV字形に近い形状を呈し、深さは1.5m以上となる。KSD03は、調査区北部から中央部へと比高約5mを下った場所に設けられている。北部と中央部を区画するように尾根を横断しており、とくに北部を囲うことを意識するように弧状を成している。その他のKSD07とKSD08は、中央部へ南部において尾根の鞍部となる場所に設けられている。これらも尾根を横断する溝であるが、KSD03とは異なって直線的であり、溝を境にした比高差もない。

区画溝の出土遺物には、弥生時代後期後半の土器（第159図）が目立つ。ただし、これらは中位層からの出土で占められており、溝が設けられた時から一定期間が経過した後、埋没していく段階で廃棄もしくは流入したものと推測される。区画溝の断面形状が環濠集落の濠に類似していることなどから、弥生時代後期後半より前の居住域に伴って設けられた可能性を評価したい。

なお、KSD03が北半居住域を囲う環濠の可能性があるのに対しても、KSD07とKSD08はやせ尾根を分断するものであり、むしろ区画のための条濠と称する方が適切であると考える。これらが同時に設けられたものであるのか、順に増えていったものであるのかは不明であるが、故意に埋め戻したとする積極的根拠はなく、ある時期に併存していた可能性は充分に考慮される。また、これらが地形的な変換点や鞍部に位置することから、溝を設ける意図の背景として、集落形成当初（溝を設ける以前）より区画・区分が意識されていた場所であったことが予測される。

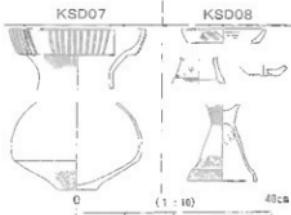
**集落の変遷過程** これまで述べてきた各種遺構の時期などの検討から、集落のある程度の変遷過程を把握することができる。

まず、弥生時代中期後葉において、片瀬遺跡の北部・中央部などといった各所で竪穴住居を設けた営みが開始される。この営みは後期中葉頃まで継続されるが、その頃には片瀬遺跡に区画溝が設けられ、集落の区分けが明確化されるようになる。また、片瀬遺跡中央部の一画に土坑墓と土器棺墓による墓群（埋葬遺構群）が形成されはじめる。後期後葉には居住域としての機能が完全に失われ、丘陵上の各所に方形周溝墓がつくられるようになる。それ以降、網掛山古墳群・片瀬遺跡の両丘陵は、古墳出現期まで墓域として位置づけられることになる。

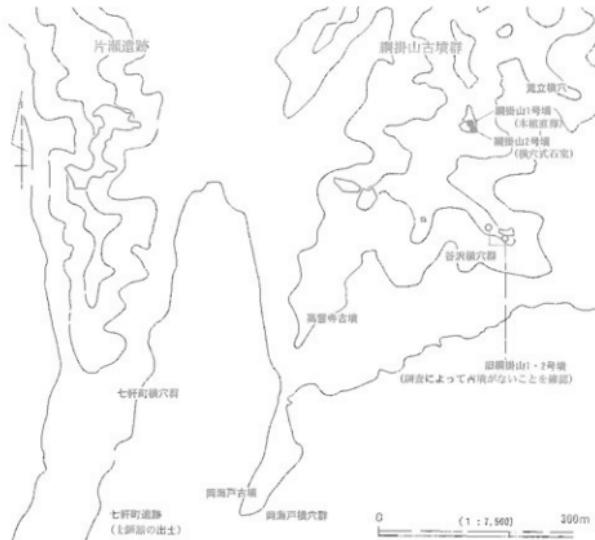
以上が変遷の概要であるが、不明確な点もある。片瀬遺跡中央部の落し穴について、中央墓群より古い遺構であることは明らかであるものの、居住域と並行するか先行するかは判断できない。また、区画溝が設けられた時期や網掛山古墳群の居住域の存続期間などについても、詳細な判断は難しい。

### （3）弥生集落後の遺跡形成

**古墳群の形成** 網掛山古墳群では、1号墳・2号墳とした2基の古墳を調査した。いずれも小型の円墳であるが、双方の埋葬施設は異なる構造のものであり、築造時期も大きく異なることがわかる。一方の片瀬遺跡では、古墳の分布が認められず、今回の調査でも古墳の発見はなかった。なお、片瀬遺跡の南（丘陵先端部）には七軒町横穴群があり、さらに南の低位段丘上に立地する七軒町遺跡においては、



第159図 区画溝の主要出土土器



第160図 古墳時代の遺跡形成

墳群が多く分布する（第2章第2節参照、静岡県埋蔵文化財調査研究所2004・2008a、森町教育委員会2005など）。綱掛山1号墳の埋葬施設や供獻器については、決して残存状態の良い資料であるとは言えない。しかし、文殊堂・宇摩蓮台・林古墳群・坊ノ谷口古墳群・寺山古墳群などのように、5世紀中葉～6世紀初頭に盛行する初期群集墳が形成されている可能性は指摘できる。

**横穴式石室墳の築造** 綱掛山2号墳は、1号墳の一部を壊して築造された横穴式石室墳である。埋葬施設の特徴から、1号墳とは大きな時期差を伴う後・終末期古墳であることは明らかである。

石室内からは、土器片数点と多くの鉄釘が出土している。鉄釘は、全てが同様に細く、頭がL字状を呈している。頭の形状については、東海地方の後期古墳出土鉄釘として一般的な形状である（大谷2004）。太さについては、7世紀前半以降に小型化して細くなることが指摘されており（田中1978）、本例は7世紀前半以降のものとして位置づけができる可能性が高い。出土須恵器は7世紀末～8世紀代に位置づけるものであり、出土した鉄釘と同じ埋葬に伴うものである可能性が指摘できる。ただし、これらが初葬のものであるのか、追葬のものであるのかについては断定し難い。

検出した横穴式石室は、構造的に差道の区分が認められず、無袖式に分類することができる（静岡県考古学会2003）。ただし、玄門には立柱石を伴っている。玄門立柱を伴う無袖式石室は、6世紀後葉（浜松市瓦屋西C6号墳など）には認めることができるが、7世紀代に擬似両袖式石室の小型化によって後出的に出現したものもあることが指摘されている（大谷2004、田村2008）。綱掛山2号墳に採用された玄門立柱を伴う無袖式石室について、出土遺物の時期も考慮するならば、擬似両袖式からの後出的な出現として評価できる可能性がある。

綱掛山古墳群の周辺には、荒立横穴群、谷沢横穴群などの横穴群が分布しており、6世紀末葉には古墳群の形成と横穴群の形成が並行していたことがわかっている。さらに、6世紀後葉～7世紀前半にお

5世紀前半に位置づけられる土器片が出土している（第2章第2節、第4図参照）。立地地形の特徴をみる限り、古墳の築造とは異なる地域開発の様相を示している可能性が考慮される。

綱掛山1号墳は、出土遺物などから5世紀末葉の木棺直葬墳であると判断できる。遠江の中でも森町の地域では、古墳時代前期の古墳が皆無に等しく、5世紀中葉以降になって古墳の築造が認められるようになる。しかも、目立った大型古墳はなく、小型円墳による古

いては、この地域に群集墳の展開が認められず、金銅装馬具や装飾付大刀を副葬する古墳が数基単位の群を形成している場合が多いことなどから、古墳の被葬者が比較的優位な階層にある可能性が指摘されている（田村ほか2001など）。網掛山2号墳については、鉄釘の出土が一つの特徴である。鉄釘の出土は7世紀代に増加するものの、決して出土することが多い一般化した遺物ではない。持ち運びが可能となる釘付木棺の採用について、それまでとは異なる葬送上の意味を持つと評価されており（岡林1994）、比較的優位な階層に位置づけできる古墳からの出土が目立つことから、有力者が新しい葬送儀礼を執り行った可能性が高いという指摘がなされている（大谷2004）。網掛山2号墳の被葬者像について、墳丘直径約10mの小型円墳であり、小型化した横穴式石室を埋葬施設としてはいるが、決して劣位な階層にあるとはいえない。横穴群を含めて検討する必要があるが、鉄釘の出土が重要な要素になる可能性が評価できる。

古代～中世前半の遺物の出土 網掛山古墳群・片瀬遺跡の双方において、須恵器・灰釉陶器・山茶碗といった古代～中世前半の土器が出土している。しかし、その出土は点的であり、大半は少数の出土に限られている。網掛山1号墳の周溝上層からは比較的多くの灰釉陶器が出土しているが、その大半は小碗である。古墳の高まりを再利用した儀礼的行為の痕跡である可能性が考慮される。以上から、この時期の丘陵上においては、居住生活とは異なる一時的な行為が点々と行われたと推測される。ただし、明確な遺構を伴わないことから、埋葬があったとする根拠もない。

片瀬城跡について 第2章第2節で述べたように、片瀬遺跡の丘陵は中世の山城として利用されたことが明らかになっており、今回の調査区には南ノ郭と二重堀切とされた部分を含んでいる（北島1995）。なお、經駆と評価されることのあった部分については、調査の過程で崩落の跡であると判断した。また、段郭と評価されることのあった部分については、岩盤層の上の砂層が崩落することによって生じた段状地形であることが判明した。こうした地形を利用していた可能性は否定できないが、これらに人為的な造作を把握することはできなかった。

二重堀切については、調査区中央部北寄りのKSD02とKSD04が該当する。出土遺物が陶器片1点だけであり、時期の詳細は判断できない。堀切としては深さが浅く（断面規模が小さく）、常に強固な防御を必要としたものとは判断し難い。主郭に伴うものではないことも考慮する必要があるが、片瀬城そのものの評価とも関連する可能性がある。

南ノ郭に該当する調査区北部では、中世の鐵鎌や15世紀中葉～後



第161図 古代・中世の遺跡形成

葉の土器が出土しており、中世後半のものと判断できる土坑や掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物跡は、規模の小さな総柱建物である。出土土器には土坑から出土した陶器が多いが、覆土中位から壊れたり倒れたりした状態で出土している。埋納されたものというよりは、上部から落ち込んだものが残されている可能性がある。なお、片瀬城は16世紀中葉以降に設けられた山城であると考えられているが、出土土器の編年的位置は100年ほど古い時期にあり、片瀬城となる以前から建物などがあったという可能性も指摘できる。ただし、多くの陶器は長期の使用や伝世に耐えられるものであり、長期の使用・伝世を経た陶器が片瀬城に持ち込まれ、廃棄されたという判断も可能である。

以上のように調査区北部では、南ノ郭として機能していた可能性を示す遺構・遺物が発見されている。その一方で、調査区中央部～南部においては、この時期の遺構・遺物が全く発見されなかった。南ノ郭との機能差が明確に反映していると把握でき、主郭から南ノ郭までが一つの範囲として位置づけられていたことが指摘できる。

**近世以降の丘陵利用** 調査前の丘陵上には簡易な山道が多く設けられていた。現代まで利用されていたと考えられるが、片瀬遺跡の調査では、山道の近くから19世紀に位置づけできる陶器が出土している。また、片瀬遺跡の調査区よりも北側では、山道に隣接して炭焼窯が残されていた。調査対象外であったが、近世以降における丘陵利用の痕跡として評価できる。

### 3. 片瀬遺跡の弥生居住域について

#### (1) 立地の特徴

**中遠江における弥生時代の居住域** 片瀬遺跡が位置する中遠江の地域では、太田川や原野谷川などが流れる平野の周間に弥生時代の遺跡が多く分布している。その中で、居住域のある遺跡の分布（第162図）をみると、高位（丘陵上など）にある遺跡と低位（自然堤防上など）にある遺跡に分けて把握することができる。

居住域が営まれた時期については、いずれも弥生時代中期中葉～古墳時代前期の中にあるが、遺跡ごとの違いもある。中期中葉～後期前葉を主体とする場合と後期後葉～古墳時代初頭を主体とする場合がある一方、双方にかけて形成された長期にわたるものもある。

弥生時代中期中葉～後期前葉の居住域は、磐田市御殿二之宮遺跡、袋井市鶴松遺跡、袋井市鶴田Ⅱ遺跡、袋井市春岡遺跡、袋井市掛之上遺跡、袋井市十二所遺跡、掛川市石畠遺跡など、低位に立地する遺跡に多く認めるができる。それが後期後葉になると、低位の居住域の中に衰退するものが目立つようになり、磐田市加茂東原遺跡、森町西平子遺跡、掛川市溝ノ口遺跡、掛川市原新田遺跡などといった丘陵上に形成される居住域が多くなる。このように、弥生時代における居住域の形成については、後期後葉を画期とした低位→高位という変遷傾向を把握することができる。もちろん、これはあくまでも傾向である。原野谷川上流の上ノ平遺跡では、丘陵上に立地しながらも後期後葉から古墳時代初頭に至る居住域の形成が把握できている。ただし、この遺跡においても後期後葉に住居構造の変化などがあり、弥生時代後期後葉に居住域に関わる地域的な画期があった可能性を指摘することはできる（静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）。

**片瀬遺跡の立地** 片瀬遺跡での居住は、中遠江の弥生時代集落としては比較的古い段階（中期後葉）にはじまり、後期中葉頃には居住域としての機能が認められなくなる。しかし、この遺跡は周囲との比較約50mの丘陵上に立地している。後期後葉以降に丘陵上の居住が多く認められるようになるという地域的傾向とは合致していない。

片瀬遺跡が位置する一宮川流域は、太田川へと流れる南西方向を除いて丘陵地帯に囲まれており、南



第162図 中遠江における弥生時代の居住域の分布

(太田川流域) の広い平野に対して、山寄りの奥まったエリアとして認識することができる。弥生時代中期後葉段階において、太田川流域では自然堤防上に居住城（鶴島 I・II 遺跡、鶴松遺跡など）が営まれるのに対して、一宮川流域では丘陵上に居住域が設けられている。両者の立地が大きく異なる背景として、位置や地理的環境の違いも関連している可能性が推測できる。

ただし、この一宮川流域について、自然堤防の発達は認め難いものの、丘陵の先端部に形成された比較的低位の段丘であれば存在している。したがって、片瀬遺跡における居住については、平野に近い段丘上をあえて選ばず、尾根の幅が最大20mと狭く、東西に急斜面や崖が連続しているような隔絶性の高い丘陵上を意図的に選択したものと評価できる。しかも、その背景には、地域的な変遷傾向とは別の特別な意図が伴っていた可能性が評価できるのである。

## (2) 高地性集落の可能性

**高地性集落の研究** 列島各地の弥生時代集落について、稲作生業に対応しやすい低地の集落が多く認められる一方、本遺跡のような高所での居住も把握されている。その中には、流通上の機能や戦闘・防衛上の機能における低地集落との差異（非日常的な特殊性）が注目されるものがあり、そうした集落を「高地性集落」と呼称して、弥生時代の社会構造や古墳時代に至る国家形成過程の中での位置づけがなされてきている（森本1933、小野1953、田辺・佐原1966、石野1973、都出1974など）。

近年では、高地に立地する居住域の多様性・地域性が指摘されており、単に高地に立地するというだけでは（狭義の）高地性集落であるとは評価できず、地域社会における特殊性、戦闘・防衛機能上や流通・通信機能上の要素について検討する必要が論じられてきている。その要素としては、立地における

隔絶性、防衛的施設とも理解できる濠などの有無、烽火の可能性がある焼土坑の有無、石槍・石鎌・投弾などにかたよる石器組成がある。また、高地性集落における営みの把握として、低地の集落と高地の集落との移動関係（季節移動）などの視点も指摘されており、歴史的意義を伴う高地性集落を正確に把握する方向性・方法論が考察されるようになってきている（森岡2002、寺澤2003、柴田2004など）。

**遠江の高地性集落** 先述したように、中遠江にも丘陵上に立地する集落が多く分布している。しかし、中遠江の丘陵上の集落として取り上げられることの多い袋井市愛野向山遺跡や掛川市上ノ平遺跡などは、後期前葉頃前後から後期末葉前後の長期に営まれており、狭義の高地性集落であると評価できるような要素は少ない。むしろ、100軒以上の住居跡が密集していることから、各地の拠点として継続的に営まれた集落であったと評価できる（寺澤2003、柴田2004）。

その他の一部には、やせ尾根に形成された小集落もあり、焼土坑の存在などから狭義の高地性集落としての指摘もなされている（松井1990）。しかし、東海地方全体の特徴として、狭義の高地性集落がほとんど認められていない状況にある。また、検討される丘陵上の遺跡が後期後葉以降を主体とするものばかりであり、中期後葉～後期前葉を主体とする高地性集落の存在については指摘できない状況にある（荒木2002、寺澤2003、柴田2004）。

**片瀬遺跡における諸要素** このような中遠江の中で特異的にやせ尾根に立地する片瀬遺跡の弥生居住域について、高地性集落の立地、濠、焼土坑、石器組成の各要素を取り上げながら、その特徴を把握していきたい。

立地について、片瀬遺跡は周囲との比高約50mの丘陵上にある。尾根の幅は最大20mと狭く、その東西には急斜面や崖が連続している。比高は寺澤2003のBタイプに分類されるが、このタイプは典型的な高地性集落とは言い難いものを包括している。確かに、けもの道のような山道があれば、周囲の水田面から徒歩20分程度で行き着くことができ、西日本に多い比高100m以上の高地性集落とは同等の評価ができる。ただし、中世山城としても利用されている場所であり、隔絶性の比較的高い場所としての認識は否定されない。西日本とは異なる地域的な評価を必要とする可能性も考慮される。

環濠・土塁・柵などは、高地性集落に特徴的な防御機能を示す要素として評価されている。片瀬遺跡においても3条の区画溝が検出されており、その断面形などは濠に類似している。ただし、この3条は居住域内を区画するものであり、今回の調査範囲において、集落全体に対する防御施設の有無は判断できない。また、区画溝の時期について、集落形成開始とともに設けられたかは不明であり、居住域形成の後半段階に設けられた可能性も否定できない。集落が営まれる中で区画・濠を設ける意識が生じたとするならば、必ずしも高所に居住することに付随する要素ではないことになる。高地性集落の防御機能としての濠を否定するものではないが、片瀬遺跡については、多様な可能性を含めて区画溝の経緯・背景を評価しなければならないと考える。

焼土坑は、烽火の跡として評価できるものがあるとして、とくに高地性集落においては眺望の利点とともに、交易の掌握や通信的な機能を示すものとして評価されている（都出1974など）。片瀬遺跡では、焼土と炭化粒を覆土に多く含んだ土坑（KSF33）が発見されている。しかし、C14年代測定の結果では弥生時代後期末葉以降の可能性が指摘でき、墓域における火の使用ということになる。

石器組成について、低地集落とは異なる高地性集落の特徴が指摘されており、とくに槍先・鎌といった武器類について注目されることが多い。実際には、高地性集落の中でも時期・地域などに関連して組成が異なるようである（福宜田2002）が、低地集落では武器類・収穫具・工具などが平均的にあるのに対しても、高地性集落では石槍・石鎌などの武器類が多い場合や磨石・敲石などの食物加工工具が多い場合など、偏在する傾向にあると指摘されている（寺澤2003、柴田2004）。片瀬遺跡の場合、今回の調査では石鎌の出土が目立っており、高地性集落の特徴を伴うものと評価できる（第163図）。ただし、全体的に

石器の出土量が少なく、石礫が多いというよりも、他の石器が少ないという評価が正しいのかもしれない。また、遺跡の全体を調査しているわけではない点も考慮しておく必要がある。

投弾の出土についても、高地性集落の特徴として評価されている（森岡2002、樋宜田2002、寺澤2003、柴田2004）。戦闘用に用意されたと推測される投弾は、土製と石製があるが、石製の場合は拳大程度の円礫が用いられていることが多い。片瀬遺跡では、このような投弾が出土することはなかったが、調査区中央部の住居跡がない区域に集石が発見されている。拳大から人頭大までの様々な自然礫が集められたものであるが、投弾と似た意図を伴っていた可能性も考慮できる。また、網掛山古墳群の3区にも同様の集石が検出されている。しかし、いずれも出土土器や切り合い関係などといった時期的な根拠に欠ける。

### ③ 集落の構造

**北半居住域と南半居住域** 片瀬遺跡の弥生居住域には3つの区画溝を伴う。既に述べているように、集落形成の初期から区画溝が存在していたとは限らないが、それらが地形の変換点にあることから、溝の有無を問わずに区画が意図された場所であったと評価できる。さらに、北半居住域と南半居住域との境界については、区画溝（KSD03）に加えて立地の比高差、住居跡の空白域といった諸要素が伴っており、明瞭なものとして評価することができる。

北半居住域が立地する場所は、標高約90mであり、東西幅15m以上の平坦面を有している。それに対して、南半居住域は北半より10mほど低い場所にあり、丘陵上平坦面の東西幅は10mを超えることがほとんどない。北半居住域と南半居住域は、両者の境界が明瞭であるだけでなく、立地条件における明確な差異も伴う。さらに、両者の差異は住居形態や石礫の出土傾向において認めることができる。

**住居の形態差** 積穴住居跡については、まず、片瀬遺跡と網掛山古墳群とで全く異なる平面形のものが分布しており、網掛山古墳群に限って壁溝が全周する場合が多いこと、片瀬遺跡に限って赤化粘質土板が被さる炉跡が認められることなど、平面形以外の特徴においても大きな違いが把握できる。弥生時代中期後葉～後期前葉の中遠江においては、同じ積穴構造の住居であっても、厳密な規格が地域全体に統一されているわけではなく、各集団（遺跡）それぞれの背景（出自・交流など）に基づいた特徴を伴っていた可能性が考慮される。

積穴住居跡の平面形の違いについては、片瀬遺跡の中においても指摘することができる。全体的に規格的な統一感がない中にありながら、集落形成の中段階（K2類・K3類）になると、北半と南半との間で形態・規模差が把握できるようになる（第157図）。住居形態の規格性・統一性が少ないと、北半居住域・南半居住域のそれぞれが伴う性質に応じた差異が生じるようになったと推測することもできる。

**石礫の出土傾向** 片瀬遺跡では、出土石器の中で磨製石礫の比率が高く、とくに凹基の有孔磨製石礫とその未製品の出土が目立っている（第163図）。ただし、この有孔磨製石礫関連遺物の出土は、北半居住域に限られており、南半居住域では認められない。その一方で、穿孔のない凸基・平基の磨製石礫（以下、無孔の磨製石礫）が南半居住域に限って出土している。出土点数が少ないと、把握ではあるが、北半居住域と南半居住域とで異なる形態の磨製石礫が用いられている可能性が指摘できる。

北半居住域では、KSB13に研磨前の未製品29点が束の状態で集積されていた。全て同様の石材によるものであるが、片瀬遺跡内に原石・残核・碎片は認められていない。ほかの場所で原石採取から研磨前までの加工をしていた可能性が高く、片瀬遺跡の北半居住域には、そこでつくられた研磨前の未製品を束にして運び込まれたと推測できる。また、未製品の束を保管していたと推測されるKSB13について、北半居住域の最南端に位置しており、平面円形の住居としては特異的に規模が大きいという特徴をもつ。さらに、炉跡の焼土は薄く、砂岩質の板石が被さっていたという他にはない特徴があり、北半居住域の



第163図 片瀬遺跡における居住域の区分けと石器

は、未製品の出土がなく、個々に形態の異なる完成品が散在的に出土しているだけである。南半居住域には、北半居住域のような組織的な石器生産の役割が備わっていたわけではなく、単発的に完成品が運び込まれるだけであった可能性が指摘できる。このように、北半居住域と南半居住域との間には、扱われた石器の形態が異なるだけではなく、その生産体制における機能差も伴っていた可能性が評価できる。

なお、網掛山古墳群の居住跡からも磨製石器の未製品が出土しており、さらに、天竜川流域（低地）の大規模集落跡である浜松市将監名遺跡においても、磨製石器の未製品が数点重なった状態で出土している（註2）。丘陵地・河川上流域にある採石場から各集落への広域を対象とした石器石材の流通システムが備わっていた可能性が予測されるが、片瀬遺跡における顕著な集積状況は、それが拠点的な大集落とは言えない高所に立地することと関連して、重要な課題を提供するものと考える。

2つの集団 片瀬遺跡の東約1.5kmの太田川西岸・森町田内の丘陵に立地する文殊堂・宇藤蓮台・フケ・林遺跡では、弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけて形成された墓域が調査されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所2006）。その報告書で筆者は、墓域内の十数ヶ所に分布する墓群を分析し、墓域形成の前半段階（弥生時代中期後葉～後期前葉）においては、方形周溝墓がつくられる北半と円形・不整形の周溝墓がつくられる南半に大別できると指摘した。そして、東海地方では方形周溝墓が多く認められる一方、円形周溝墓は非常に少なく、むしろ長野県・群馬県や北陸地域に認められる傾向にあることから、出自や交流などの背景を異にする2つの集団の併存（二分構造）が見出せる可能性を指摘した（田村2006）。

片瀬遺跡の弥生集落についても、既に述べたように北半居住域と南半居住域に大別できる。両者は單に分割された居住域というだけではなく、住居の形態や出土石器の種類、石器生産上の機能などにおい

中でのKSB13の特殊性を指摘することができる。

KSB13の周辺にあるKSB09・KSB16からは、未製品の東と類似した石材による未製品が出土している。散在的な出土であり、その中に部分的に研磨が施された未製品もある。以上から、集落外から未製品を運び込んで一括的に保管し、その保管場所から各住居に分配して完成品を製作するという、組織的な生産過程が復元できる。

このような状況は、南半居住域には認められない。無孔の磨製石器を扱う南半居住域で

て差異を伴うことが確認できる。したがって、森町内田丘陵の墓域と同様に、特質を異にする2つの集団が住み分かれながら、同一丘陵上に集落を形成している可能性が指摘できる。さらに、北半居住域に伴う有孔磨製石鏃が静岡県・長野県・群馬県に多いのに対して、南半居住域に伴う無孔の磨製石鏃は、近畿地方などの西日本に認められる形態であることが知られている（関1965、寺前1999）。両者の特質が異なる背景として、石鏃に反映されるような出自や交流の違いが関連していると推測できる。

#### 4. 結語

今回の網掛山古墳群と片瀬遺跡の調査は、一部の範囲に限られたものであったが、発掘調査されることが多くない一宮川北岸の丘陵地帯において、縄文時代から中世に至る様々な営みについて把握することができた。その中には、古墳群（網掛山古墳群）や中世山城（片瀬城跡）といった調査前から周知されていた内容についての成果もあるが、むしろ、新たに明らかにされた弥生集落についての成果が大きいものとして評価できる。

片瀬遺跡の弥生集落跡は、弥生時代中期後葉～後期前葉の居住域形成と後期中葉～古墳時代前期の墓域形成に大別できるが、その前半段階について、中遠江では弥生時代後期前葉以前を主体とするやせ尾根丘陵上の居住域がほとんどなく、特異的な存在として評価できる。そして、本稿では漆に似た区画溝や石鏃、集石などの存在をとりあげながら、防御機能に特化したものと評価されることの多い高地性集落との比較検討が可能であることを確認した。ただし、水田城との比高差などにおいて、瀬戸内・近畿地方に展開するような典型的な（狭義の）高地性集落であるとは言えない要素もある。

その一方で、片瀬遺跡では居住域が南北に分かれており、立地・住居・石鏃などの差異を伴うことを指摘した。そして、特質の異なる2つの集団が住み分けながら集落を形成しているといった、集落内の二分構造が把握できるとし、その背景には出自・交流などの違いがあると考えた。漆にも似た区画溝については、防御的機能の有無に関わらず、二分構造への意識もしくは二分された各集団の結束の象徴（角南2002）であったとも把握できる。そして、後期中葉頃の墓域への転換については、集団構造が次の段階へと移行するような社会的变化を背景としている可能性が考慮される。

現地調査および本報告の作成にあたっては、以下の方々・機関に有益な御指導・御助言をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木 修 伊藤美鈴 井村広巳 岩本 貴 大谷宏治 加藤理文 北島恵介 久野正博 小泉祐紀  
佐藤由紀男 篠原和大 柴田 稔 白澤 崇 鈴木一有 鈴木敏則 滝沢 誠 竹内直文 寺前直人  
遠竹陽一郎 福宜田佳男 長谷川睦 馬場伸一郎 平野吾郎 廣川達麻 松井一明 向坂鋼二  
渡邊武文 森町教育委員会

#### 註

- 1 弥生時代の時期と弥生土器の型式について、本書では諸研究の成果を適用し、白土式は中期後葉、菊川式古段階は後期前葉、同じ中段階は後期中葉、同じ新段階は後期後半、同じ最新段階は後期末以降に概ね該当するものとして判断している。
- 2 浜松市将監名遺跡は、平成20年度にかけて静岡県埋蔵文化財調査研究所によって発掘調査が行われ、弥生時代中～後期の大規模集落跡が把握されている。磨製石鏃の未製品数点が盛った状態で出土していることについて、静岡県埋蔵文化財調査研究所および調査担当の大野謙美氏より御教示を得た。なお、石鏃未製品などの集積は長野県松本市あがた遺跡においても発見されている（松本市教育委員会1981）。一方、近畿地方では石包丁の集積が認められている（寺前2001）。石製の種類および完成品・未製品の違いはあるが、使用のための収納方法という点では共通する可能性が評価できる。

## 参考文献

- 荒木幸治 2002 「『高地性集落』研究論』『古代文化』54  
石野博信 1973 「『3世紀の高城と水城』『古代学研究』68  
井村広巳 2002 「西部地域（大井川以西）」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会  
岩本 貴 1995 「駿河式土器における編年上の問題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念論文集』  
大谷宏治 2004 「大屋敷C古墳群の評価」『大屋敷C古墳群・大屋敷1号墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
岡林孝作 1994 「木棺系討論一訂を用いた木棺の復元的検討と位置づけー』『櫛原考古学研究所論集』第十一 吉川弘文館  
小野忠應 1953 『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告』 山口大学  
1979 『高地性集落の研究 資料編』 南山社  
加納介久・石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社  
北島恵介 1995 「戰国末までに見た中の連郭式山城——宮莊内片瀬城——『静岡の現像をさぐる』 静岡県教育委員会・静岡県埋蔵文化財調査研究所  
小林行謙・佐原 真 1964 『紫雲出』 静岡町文化財保護委員会  
佐藤山紀男 1996 「遠江・駿河（中頃）『YAY!』 弥生土器を語る会  
佐藤由紀男・荻野谷正宏・篠原和大 2002 「遠江・駿河地域『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社  
佐原 真 1975 「かつて戦争があった—石藏の変遷ー』『古代学研究』78  
静岡県考古学会 2002 『静岡県における弥生時代集落の変遷』  
2003 『静岡県の横穴式石室』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『寺井古墳群』  
2006 『森町円丘陵の遺跡』  
2008a 『森町円丘陵の古墳群』  
2008b 『土ノ平遺跡』  
柴田昌晃 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古学大綱』第10巻 小学館  
鈴木敏則 1996 「遠江・駿河（後期）『YAY!』 弥生土器を語る会  
角南聖一郎 2002 「高地という『場』をめぐらして—農耕社会との関係からみた高地性集落異論ー』『古代文化』54  
圓 俊彦 1965 「東日本弥生後代石器の基礎的研究(II)ー有孔磨製石器についてー』『立正大学文学部論叢』21  
高木芳史 1999 「畿内地方の石包丁の产生と流通」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論文集  
田中彰太 1978 「古墳時代木棺に用いられた縫合金具」『考古学研究』25-2  
沢辯昭三・佐原 真 1966 「弥生文化の発展と地域性—近畿ー』『日本の考古学III 弥生時代』 河出書房  
田村隆太郎 2006 「まとめ」『森町円丘陵の遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
2008 「遠江における無袖式石室の展開」『東園に伝う横穴式石室』 静岡県考古学会  
田村隆太郎・鈴木 有・大谷宗治・井口智博 2001 「遠江長福寺1号墳の研究」『静岡県考古学研究』33  
都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団關係」『考古学研究』20-4  
寺澤 薫 2000 『日本歴史02 王権誕生』 講談社  
2003 「弥生時代後期低丘陵性集落の位置付けと高地性集落論」『三井岡塚遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所  
寺薗直人 1999 「近畿地方の磨削石器にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論文集  
2001 「流通論／磨削石包丁の交易」『洞跡から描く弥生社会』予稿集 一宮市博物館  
中崎郁夫 1988 「いわゆる『菊川式』と『飯田式』の再検討」『伝統』2  
襷宜田佳男 2002 「遺物組成からみた高地性集落の諸類型」『古代文化』54  
萩野谷正宏 2000 「『白岩式土器』の再検討」『伝統』7  
長谷川 賢 1997 「駒村遺跡」『小笠山総合運動公園内遺跡群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
袋井市教育委員会 2004 「愛野向山II遺跡」  
松井一明 1990 「總括、『若作遺跡 若作古墳群』 袋井市教育委員会  
松木武彦 1989 「石製武器の発達と地域性—とくに打製石器についてー」『考古学研究』35-4  
松本市教育委員会 1981 「あがた遺跡」  
森岡秀人 1985 「山・丘の弥生ムラと屋外火焚き場」『考古学論集』I 考古学を学ぶ会  
1996 「弥生時代抗争の東方波友—高地性集落の動態を中心にしてー」『考古学研究』43-3  
2002 「高地性集落研究の現状と今後の展望」『古代文化』54  
森浩一・辰巳和弘編 1999 『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』 同志社大学歴史資料館  
森町史編さん委員会 1998 『森町史』資料編  
森町教育委員会 2005 『坊ノ谷口遺跡・坊ノ谷口古墳群』  
森本六爾 1933 「低地性集落と農業」『日本原始農業』 東京考古学会

# 写 真 図 版

図版 1



網掛山古墳群・片瀬遺跡を南西から望む

図版2 綱掛山古墳群



1. 表土除去前の調査範囲（北西から）



2. 調査中の遠景（西から）

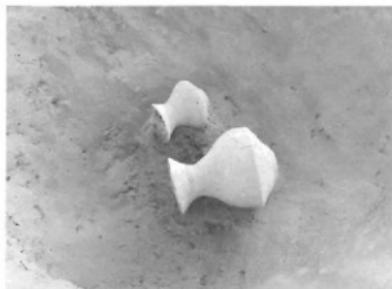


1. 1区の全景（西から）

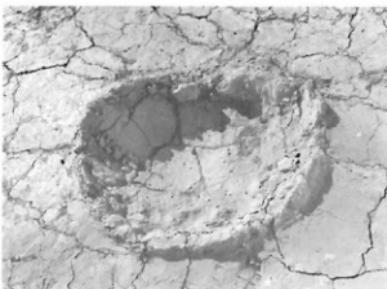


2. 1号周溝墓（南東から）

図版4 緋掛山古墳群



1. 1号周溝墓 北西部周溝土器出土状況（北から）



2. 1号周溝墓 東部周溝土器出土状況（北から）



3. SF02（北西から）



1

3



1

2



2

4. 1区出土遺物



1. 2区の遠景（東から）



2. 3区集石（北から）

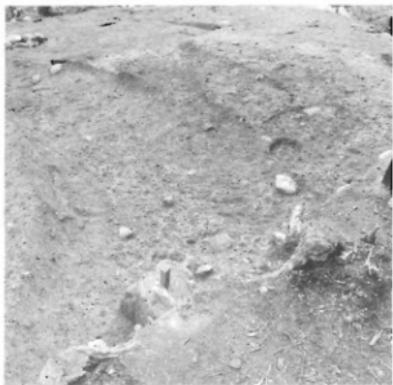
図版6 綱掛山古墳群



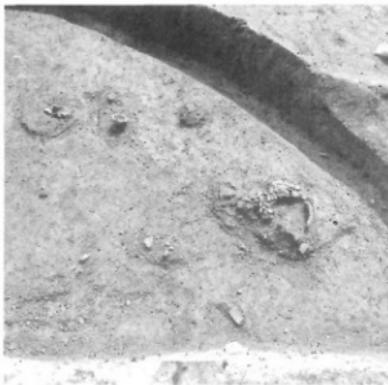
1. 4区の遠景（西から）



2. 4区住居跡群（南から）



1. SB01・02の完掘状態（北から）



2. SB04南西部土器出土状況（北から）



3. SB04（西から）

図版8 綱掛山古墳群



1. SB05（東から）



2. SB06炉（北から）



1. SB08 (北西から)



2. SB09 (北西から)

図版10 綱掛山古墳群



1. SB10 (北東から)



2. SB10炉 (北から)



1. SB13 (南西から)



2. SB11 (南東から)

図版12 網掛山古墳群



1. SB12 (西から)



2. SB12戸 (北西から)



1. SB14の完掘状態（南から）



2. SB15の完掘状態（南西から）

図版14 網掛山古墳群



1. SB16・17（南西から）



2. SB18の完掘状態（南東から）



1. SB19の完掘状態（西から）



2. SB20（南東から）

図版16 綱掛山古墳群



1. SB20北縁土器出土状況（南東から）



2. SB21の完掘状態（東から）



3. SB22（南西から）



1. SB23 (西から)



2. SB23炉 (南から)

図版18 緋掛山古墳群



1. SB24の完掘状態（南東から）



2. SB25の完掘状態（南から）



3. SB25西縁土器出土状況（南から）



4. SB25西部土器出土状況（南から）



1. 4区の表土除去後の遠景（南西から）



2. 1号墳 盛土除去後の墳丘（南から）

図版20 網掛山古墳群



1. 1号墳 墓丘（西から）



2. 1号墳 鉄劍出土状況（北西から）



3. 1号墳 鉄劍出土状況（北から）



1. 2号墳 石室の発見状況（北から）



2. 2号墳 石室の上部検出状況（南から）

図版22 綱掛山古墳群



1. 2号墳 石室の上部検出状況（北から）



2. 2号墳 石室の検出状況（北から）



1. 2号墳 石室の様出状況（南から）



2. 2号墳 石室の奥壁（南から）

図版24 綱掛山古墳群



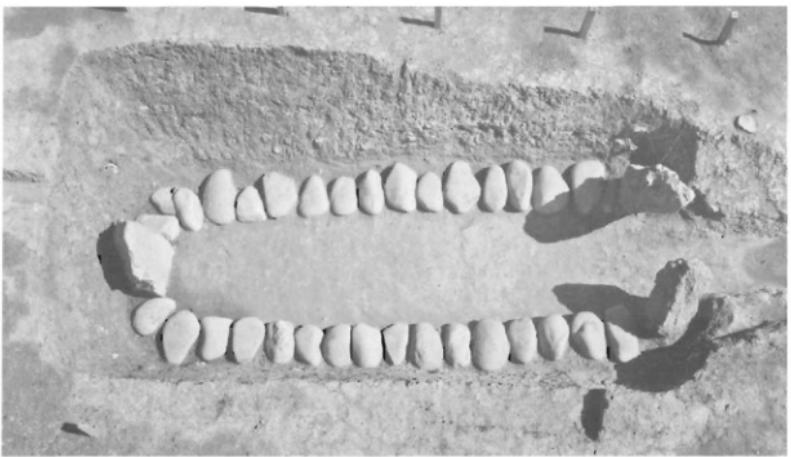
1. 2号墳 石室の東側壁（南西から）



2. 2号墳 石室の西側壁（南東から）



3. 2号墳 石室の検出状況（西から）

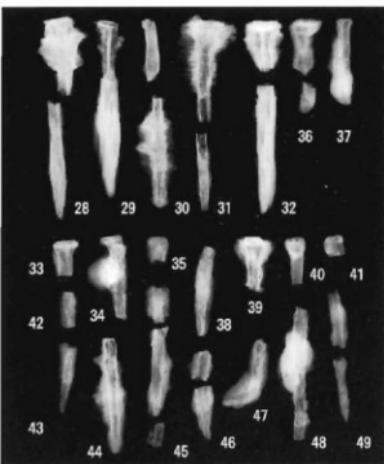
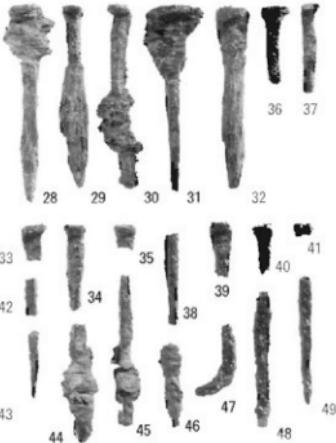
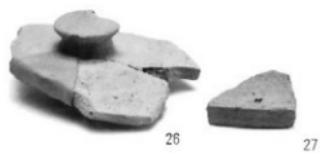


4. 2号墳 石室の基底石（西から）



4区出土遺物① 集落跡出土遺物、1号墳出土遺物

図版26 網掛山古墳群



4区出土遺物② 2号墳出土遺物、1号墳周辺出土の古代以降の遺物



1. 5区の遠景（西から）



2. 5区の全景（南西から）

図版28 繩掛山古墳群



1. SD03 (南東から)



2. SD04 (南東から)



3. SD05 (南東から)



4. SD06 (北東から)



5. 近現代の山道跡 (南東から)



6. 近現代の山道跡の断面 (北から)



1. 北東からの遠景

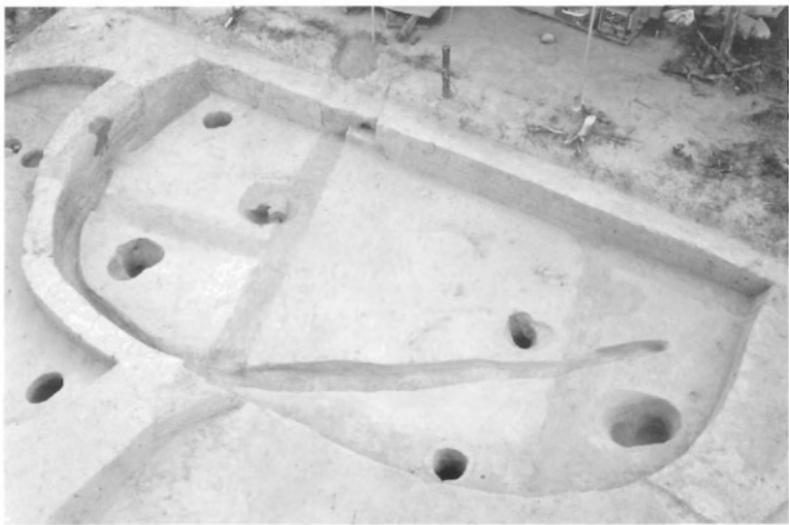


2. 北東から調査区を望む

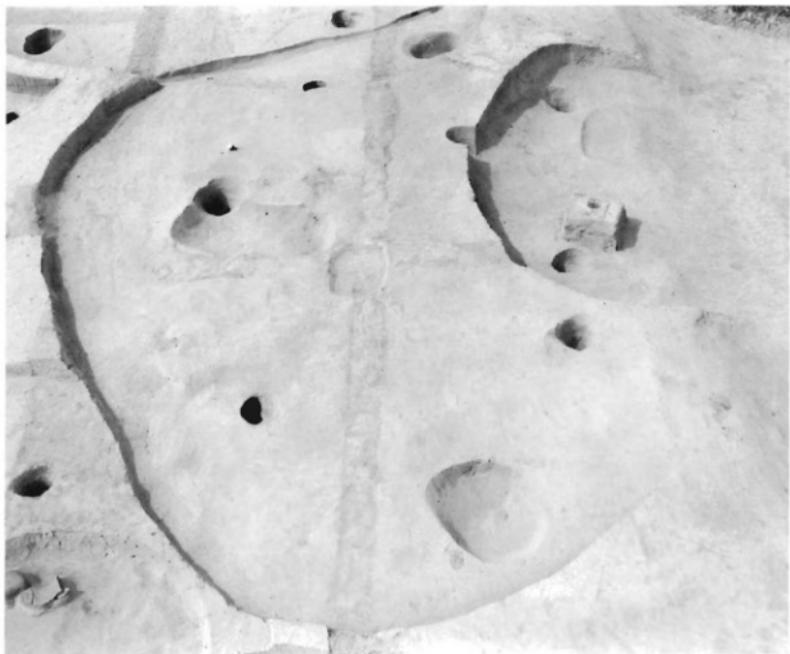
図版30 片瀬遺跡



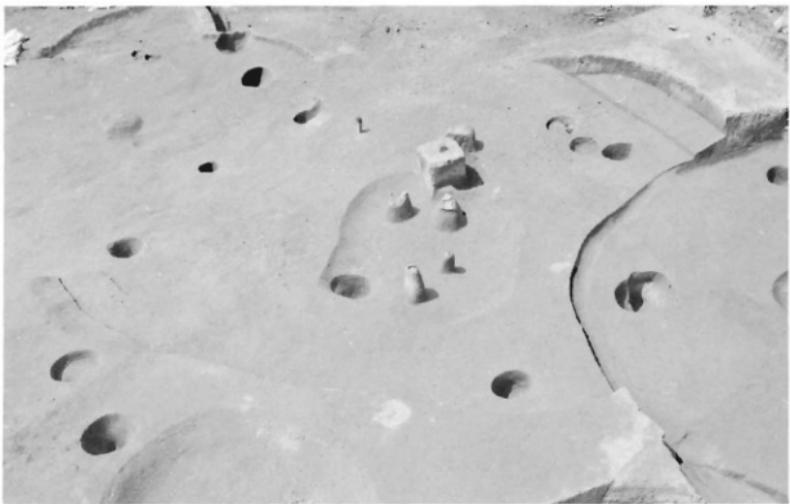
1. 北部の遺構群（南西から）



2. SB01・02（南東から）



1. SB03・05（南から）

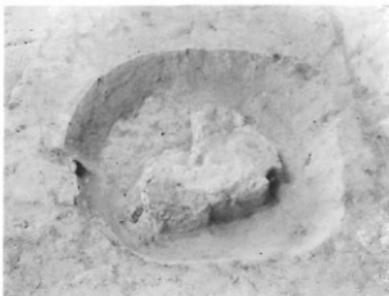


2. SB04（南東から） 中央の土坑はSF01

図版32 片瀬遺跡



1. SB06（東から）



2. SB01炉（北東から）



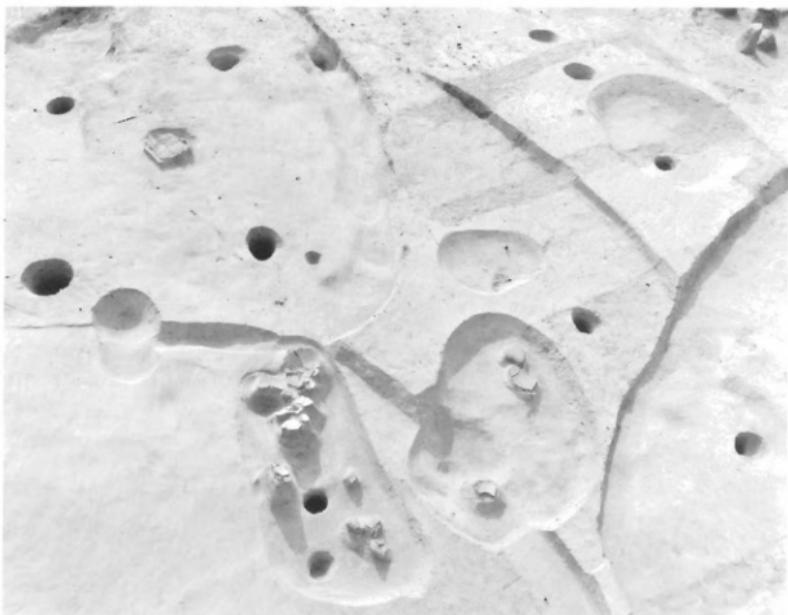
3. SB03炉（北から）



4. SB04炉（南西から）



5. SB06西部土器出土状況（北東から）



1. SB07 (北東から) 手前の土坑はSF06・07



2. SB08 (東から)

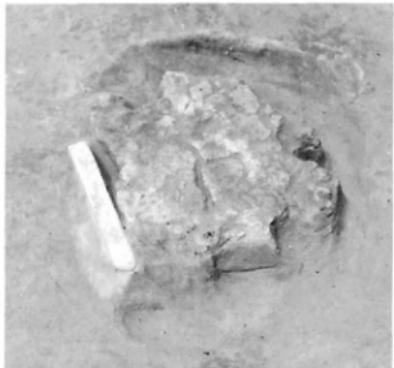
図版34 片瀬遺跡



1. SB09の炭化材と遺物出土状況（東から）



2. SB09(床面検出状況)（東から）



1. SB09炉の検出状況（東から）



2. SB09-P2の炭化材検出状況（東から）



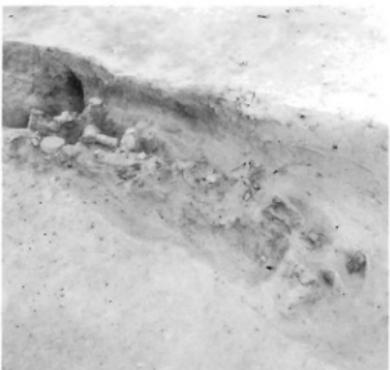
3. SB09-P3の炭化材と土器出土状況（東から）



4. SB09-P4の炭化材と土器出土状況（東から）



5. SB09南東隅の炭化材と土器出土状況（北西から）



6. SB09北縁土器出土状況（南東から）

図版36 片瀬遺跡



1. SB09炉の発見状況（東から）



2. SB09炉の断面（南西から）



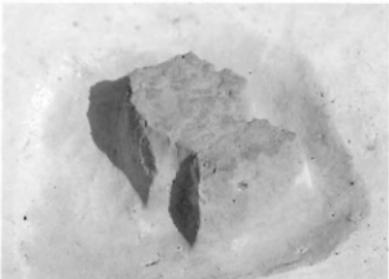
3. SB09炉の下部焼土把握状況（右が北）



4. SB09の掘方（南東から）



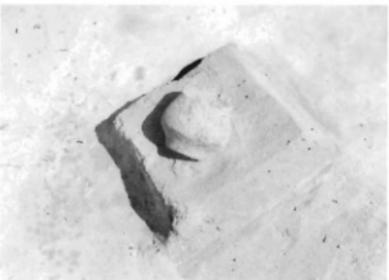
1. SB10（東から）



2. SB10炉（南から）



3. SB10北縁石検出状況（南北から）



4. SB10北東部土器出土状況（南から）

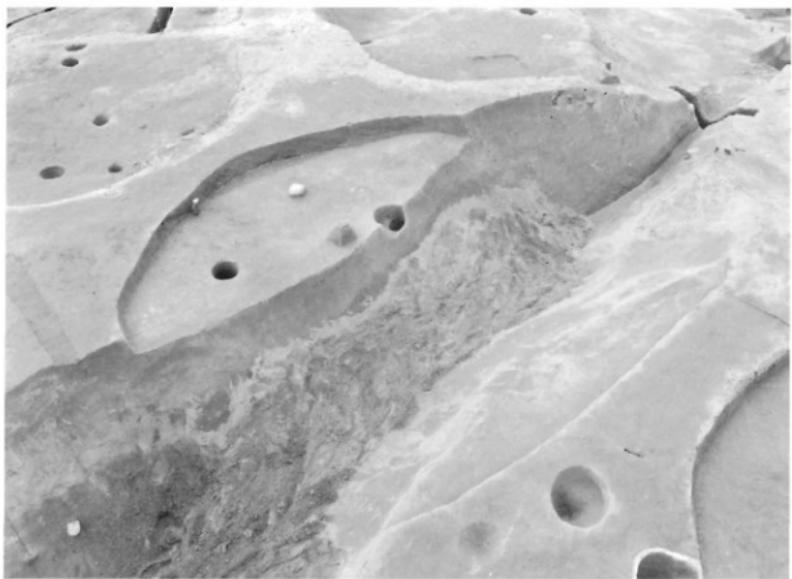


5. SB10南西部土器出土状況（南から）

図版38 片瀬遺跡



1. SB11（南西から）



2. SB12（北から）



1. SB12 (北部中央地割れの中央部)  
遺物等検出状況 (南西から)



2. SB14 (北部中央地割れの南西部)  
土器出土状況 (東から)



3. 北部中央地割れ (北東から)



4. 北部中央地割れ (南西から)



5. 北部中央地割れの南西部 (南西から)

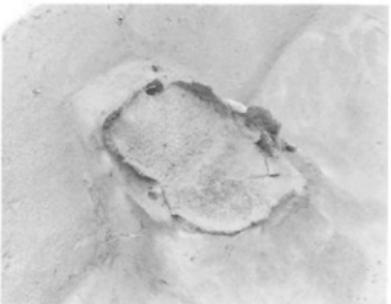
図版40 片瀬遺跡



1. SB13 (南から)



2. SB13炉 (南から)



3. SB13南西縁土器出土状況 (南東から)



4. SB13石礫未製品群出土状況 (右上が北)



5. SB13石礫未製品群出土状況 (西から)



1. SB13の掘方（西から）



2. SB15 · SX02（南東から）

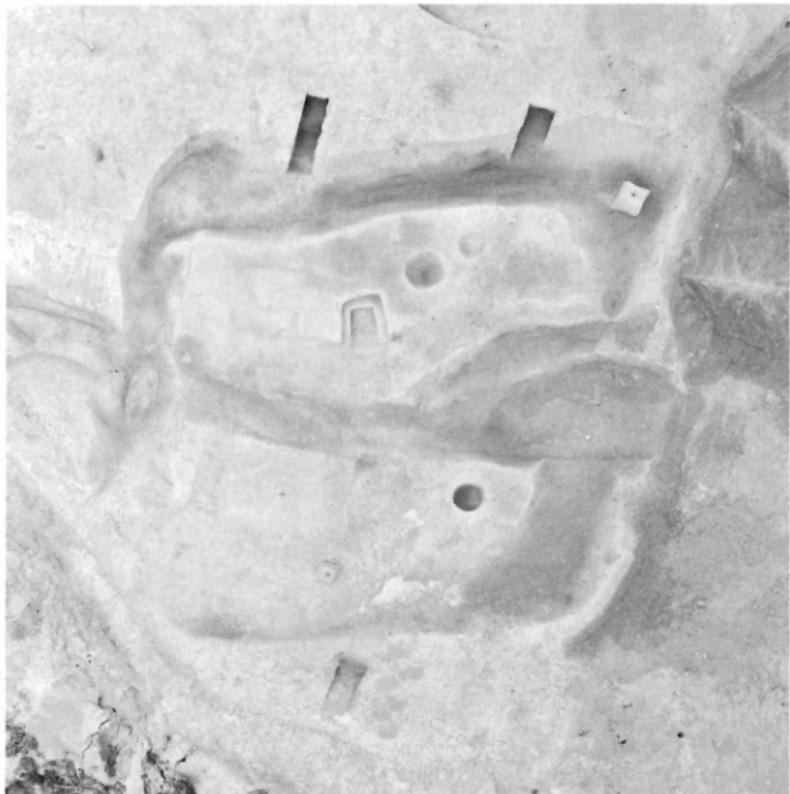
図版42 片瀬遺跡



1. SB16（東から）



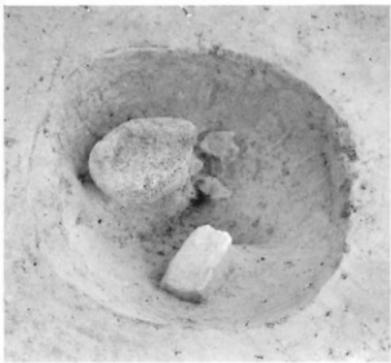
2. SB16北部土器出土状況（南西から）



1. 1号周溝墓（右上が北）



2. SF12（北東から）



3. SF10（南西から）

図版44 片瀬遺跡



1. 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（西から）



2. 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（南西から）



3. 1号周溝墓 西部周溝土器出土状況（東から）



1. 1号周溝墓 方台部（北部南東縁地割れ） 土器出土状況（北から）



2. SF11土器棺墓（東から）

図版46 片瀬遺跡



1. 北部南東縁地割れ（南西から）



2. 北部南東縁地割れ（北東から）

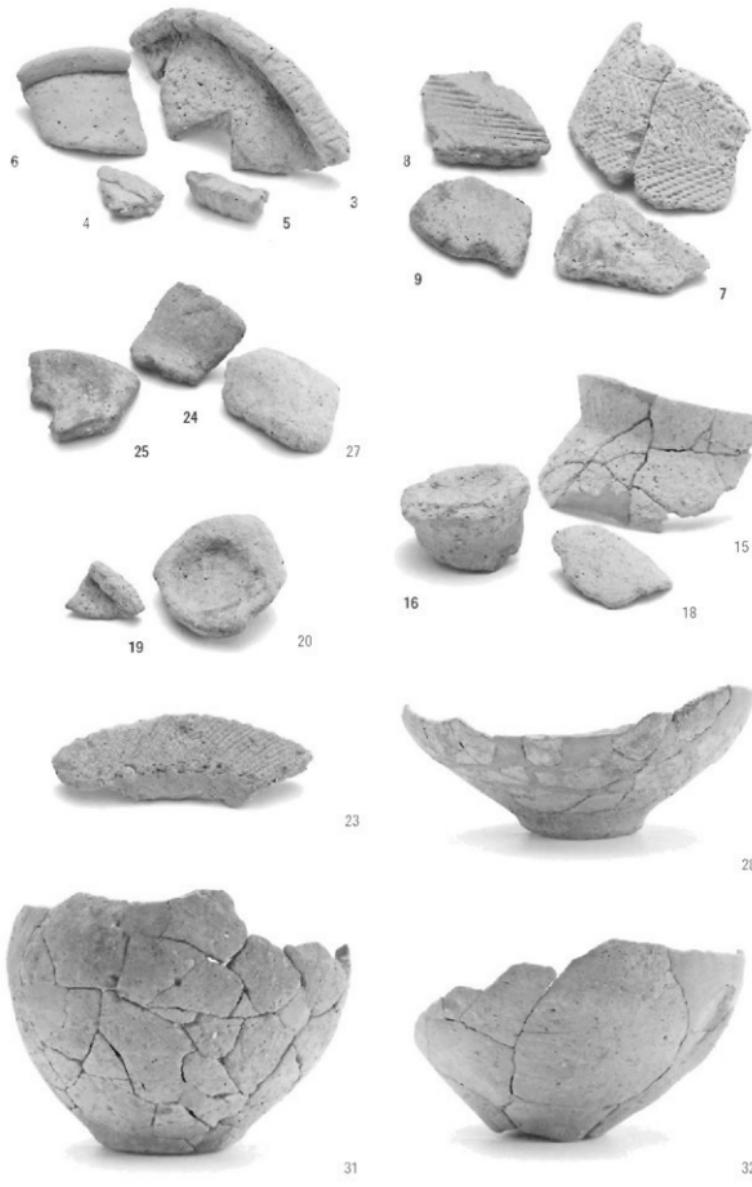


1. 北部南西縁地割れ（北東から）



2. 北部西縁地滑り痕（北東から）

図版48 片瀬遺跡



北部出土土器①



北部出土土器②

図版50 片瀬遺跡



53



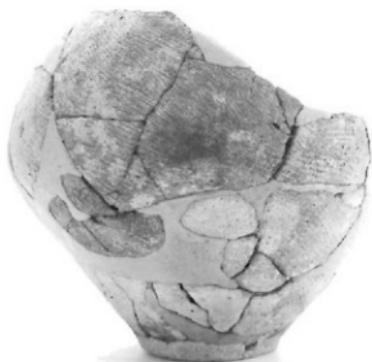
52



56



58



55



59

60



57



61



62



63



66

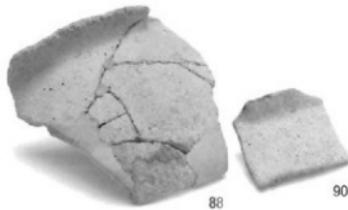


75



73

74



88

90



84



92



85

86

87

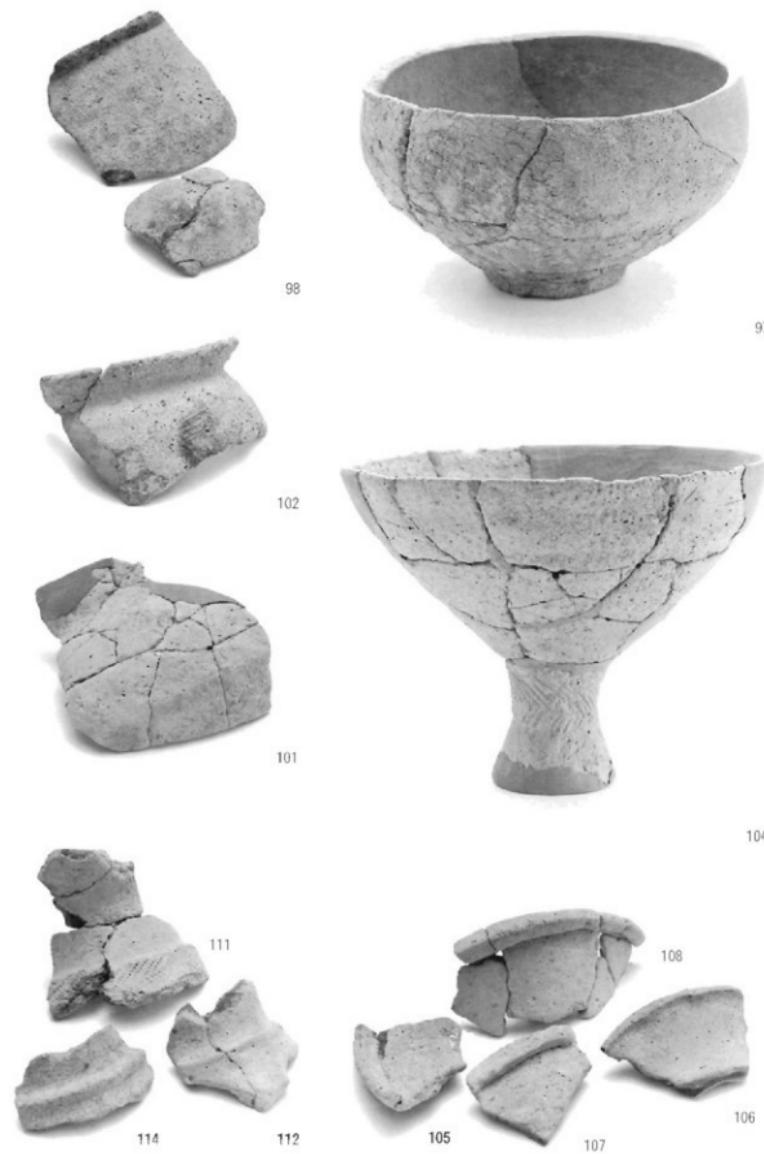


94

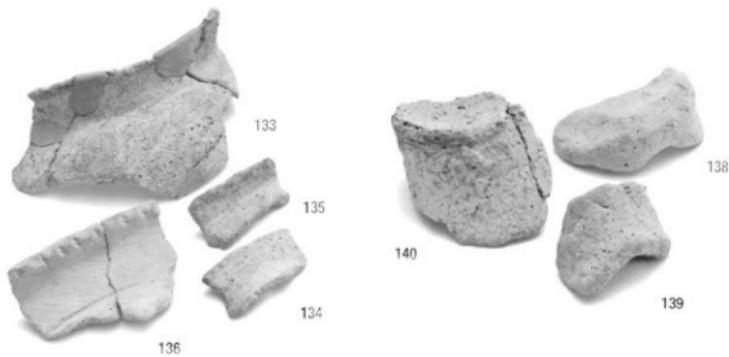
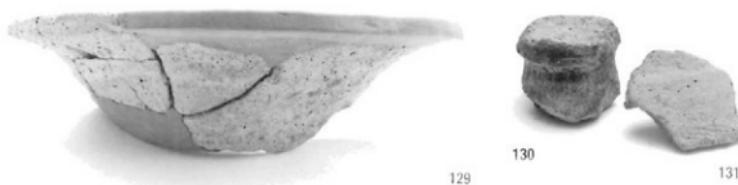


96

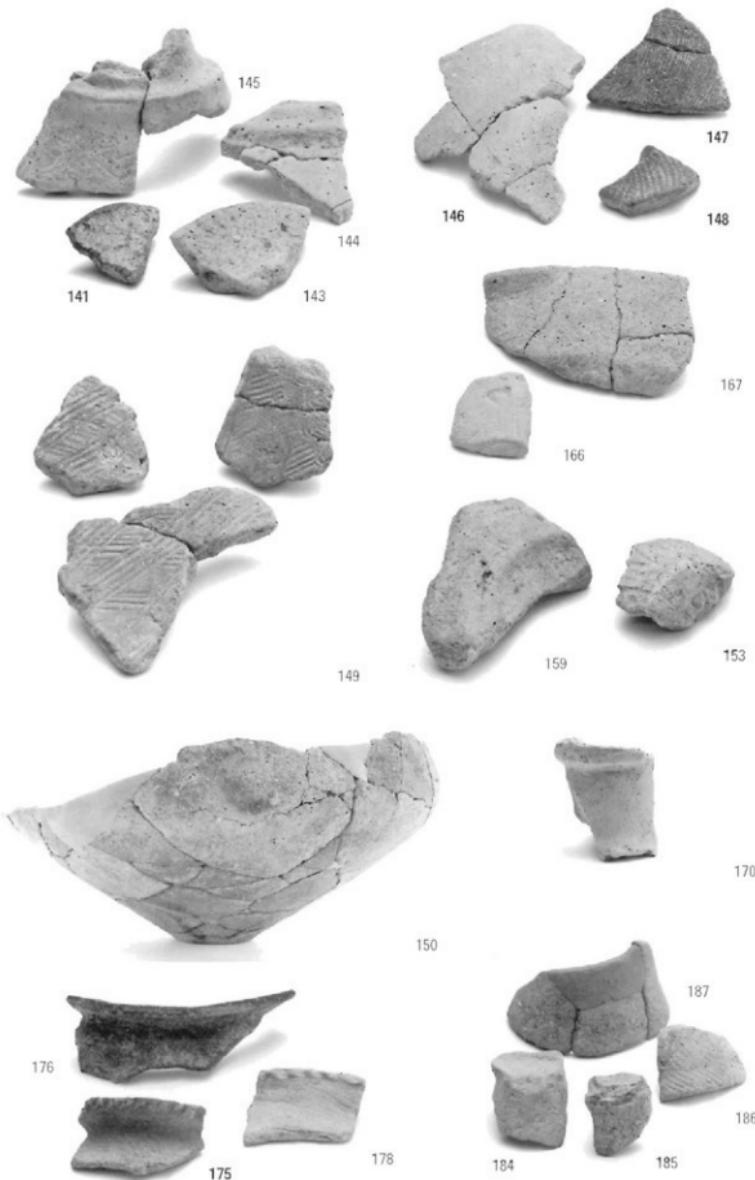
図版52 片瀬遺跡



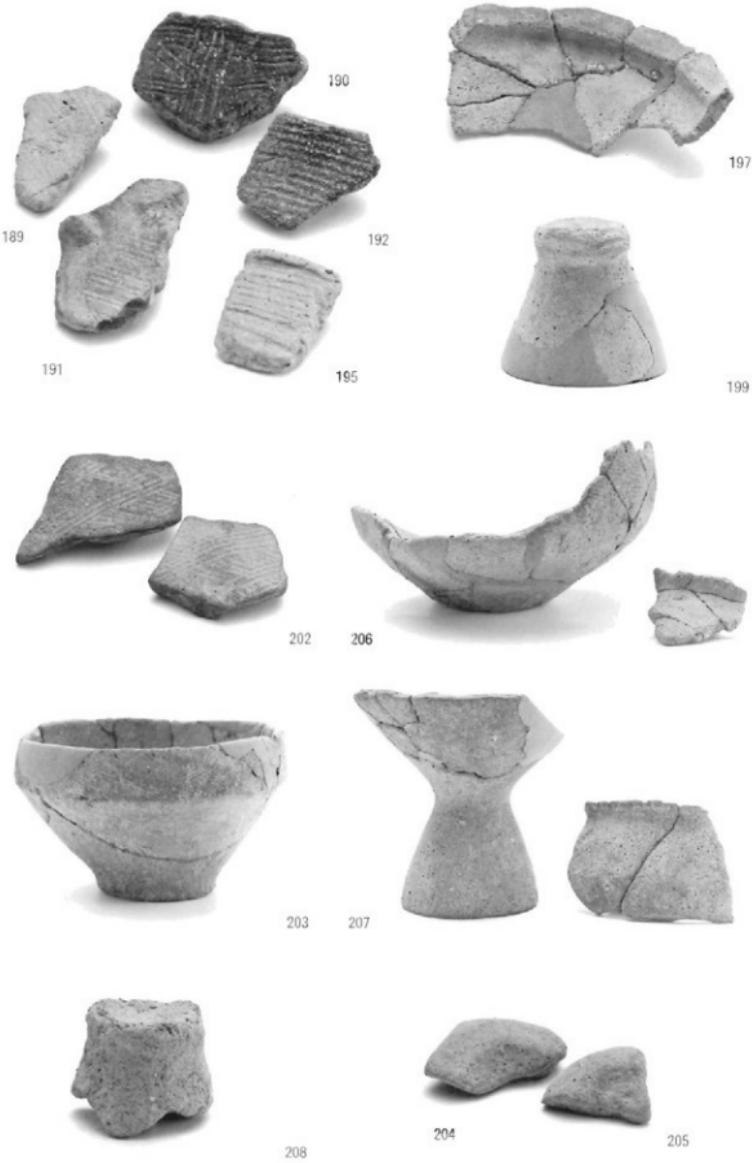
北部出土土器⑤



図版54 片瀬遺跡



北部出土土器⑦



北部出土土器⑧

図版56 片瀬遺跡



209



211



218



210



219



212



214

北部出土土器⑨



217



216



220



222



221



225



227



226



229



228



230



231

図版58 片瀬遺跡



233



238



234



243



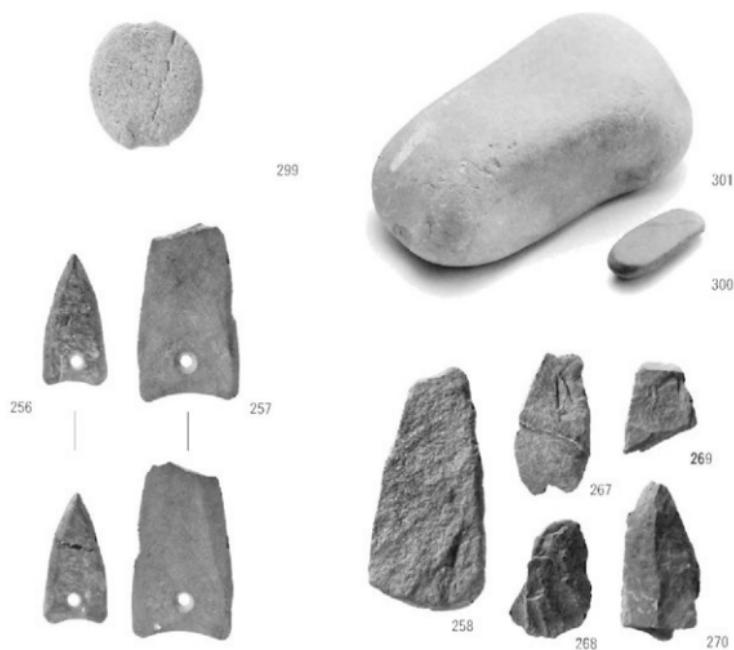
244



255

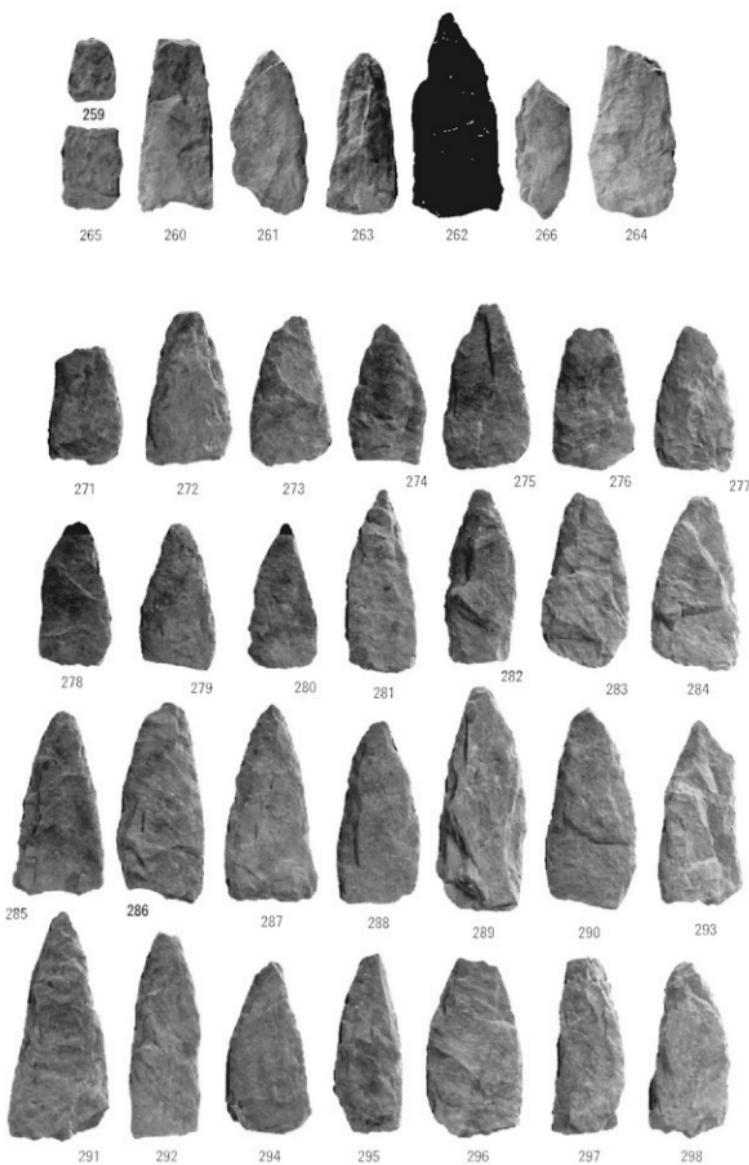


1. 北部出土土器⑫

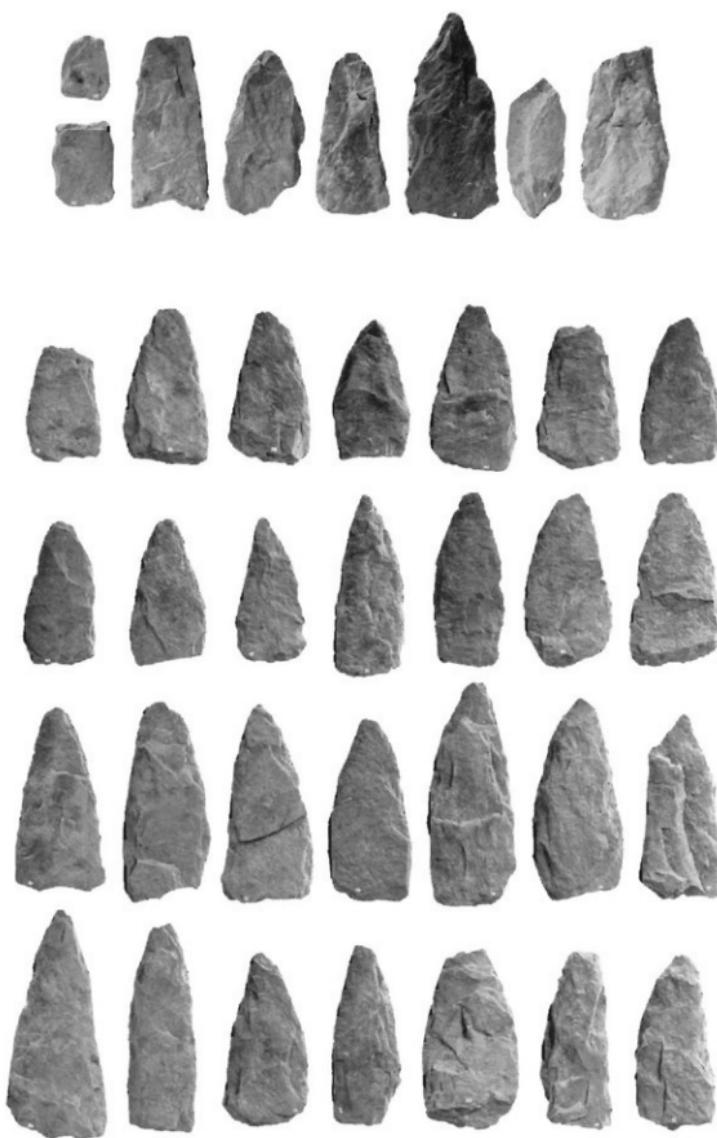


2. 北部出土石器⑪

図版60 片瀬遺跡



北部出土石器② 石器未製品(表面、出土状況上面)



北部出土石器③ 石鏃未製品(表面、出土状況下面)

図版62 片瀬遺跡



1. 中央部～南部の全景（北から）



2. 中央部中央の遺構群（南東から）



1. 中央部南寄りの遺構群（南東から）



2. SB17（北東から）

図版64 片瀬遺跡



1. SB18 (東から)



2. SB19 (南から)

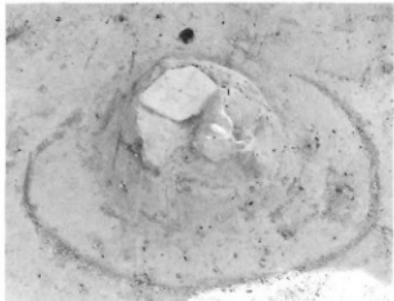


1. SB20 (東から)



2. SB21・SF26 (北から)

図版66 片瀬遺跡



1. SB19-P8 (貯蔵穴)土器出土状況（北から）



2. SB20-炉（南から）



3. SB21東部土器出土状況（南東から）



4. SF26 (SB21北西縁)土器出土状況（南東から）



5. SH03（西から）



1. 中央墓群（埋葬構造群）（南から）



2. SF19土器棺墓（南東から）



3. SF20土器棺墓（南から）

図版68 片瀬遺跡



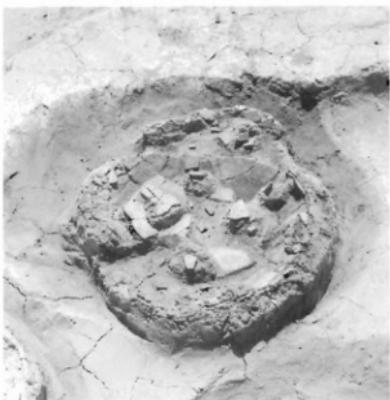
1. SF20土器棺墓（南東から）



2. SF21土器棺墓（東から）



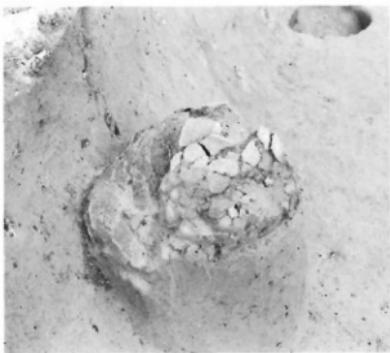
3. SF22土器棺墓（南から）



4. SF23土器棺墓（南西から）



5. SF18（北東から）



6. SF25土器棺墓（北西から）



1. SF15（西から）



2. SF17（北東から）

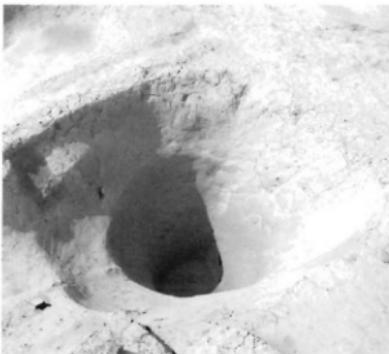


3. SF15土器出土状況（北西から）

図版70 片瀬遺跡



1. SF13上部～北側の集石（北東から）



2. SF13（北東から）



3. SF16（北東から）



1. SD03中央部（東から） 手前の古代以降の坑（SD02）とともに検出



2. SD03東部の断面（南東から） 左側の深い坑がSD03、右側の浅い坑がSD02

図版72 片瀬遺跡



1. SD07 (北西から)



2. SD07の断面 (東から)



3. SD07土器出土状況 (南西から)



1. SD08 (西から)



2. SD08の断面 (北西から)

図版74 片瀬遺跡



1. SD08の炭化物集中と土器出土状況（南東から）



2. SD08土器出土状況（南から）



3. SD08の断面（南東から）



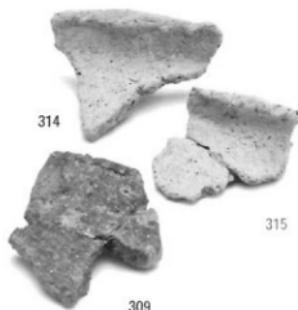
305



319



308



314

315

309



310



320

中央部出土土器①

図版76 片瀬遺跡



321



326



322



327



328



324



331



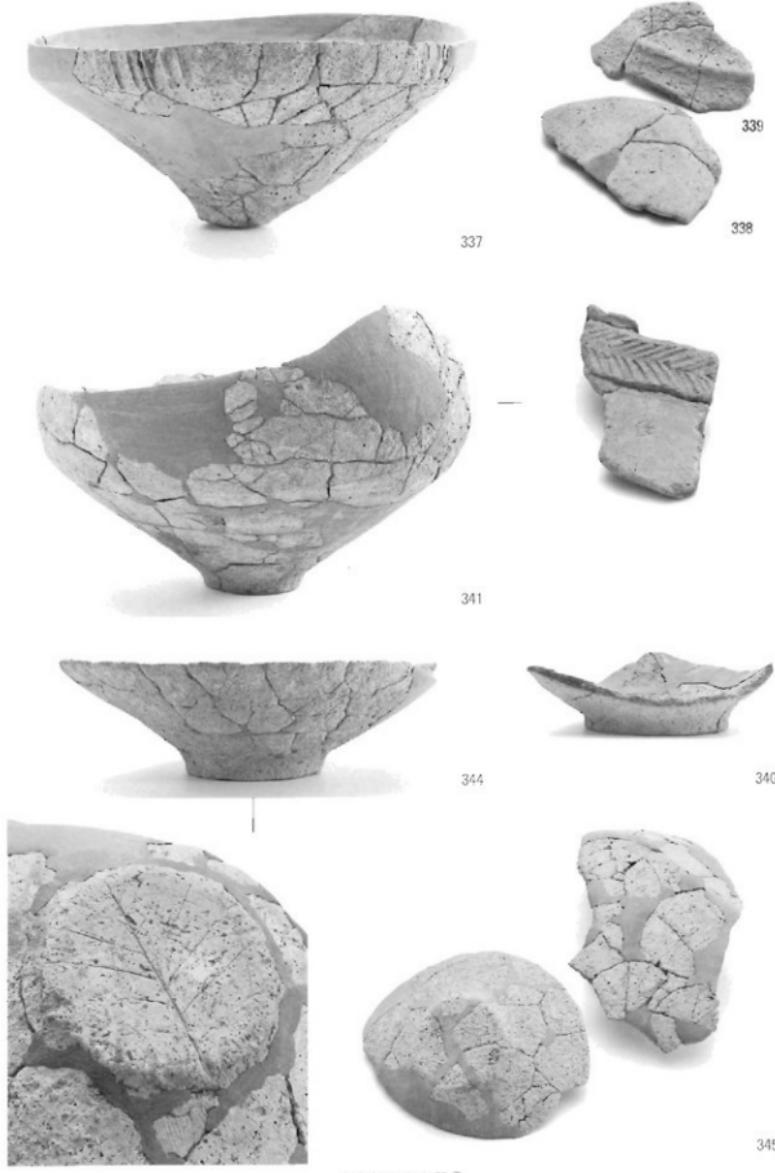
332

中央部出土土器②



中央部出土土器③

図版78 片瀬遺跡



中央部出土土器④



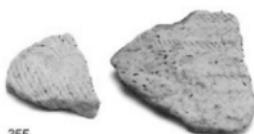
342



343



349



355

354

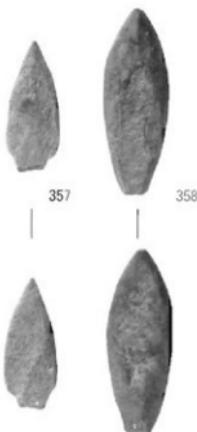


356

1. 中央部出土土器⑤



359



357

358

2. 中央部出土石器

図版80 片瀬遺跡



1. 南部の全景（北から）



2. SB22A・23（南東から）



1. SB23Bの掘方（東から）



2. SB22炉（南東から）



3. SB23炉（南東から）



4. SB24炉（南から）



5. SB23B-P9（南西から）

図版82 片瀬遺跡



1. SB24 (南西から)



2. SB24の掘方 (南西から)



1. SB25・26 (南から)



2. SB27 (南から)



3. SB29 (南西から)



4. SB28 (南から)



5. SB28戸 (南東から)

図版84 片瀬遺跡



1. 2~4号周溝墓（右が北）



2. 2号周溝墓（北東から）



1. 2号周溝墓 西部周溝（南東から）



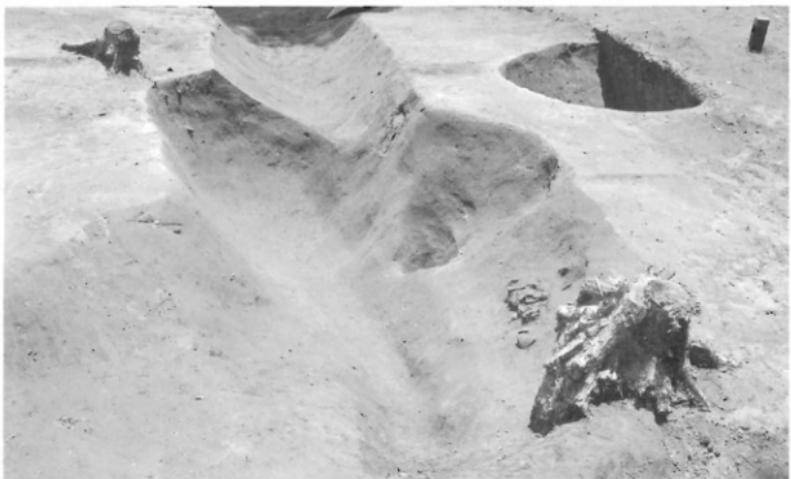
2. 2号周溝墓 西部周溝土器出土状況（北東から）



3. 3号周溝墓 西部周溝土器出土状況（北から）



4. 3号周溝墓 方台部土器出土状況（南東から）



5. 4号周溝墓 北部周溝（西から）

図版86 片瀬遺跡



1. SF34土器棺墓（北西から）



2. SF34土器棺墓（北から）



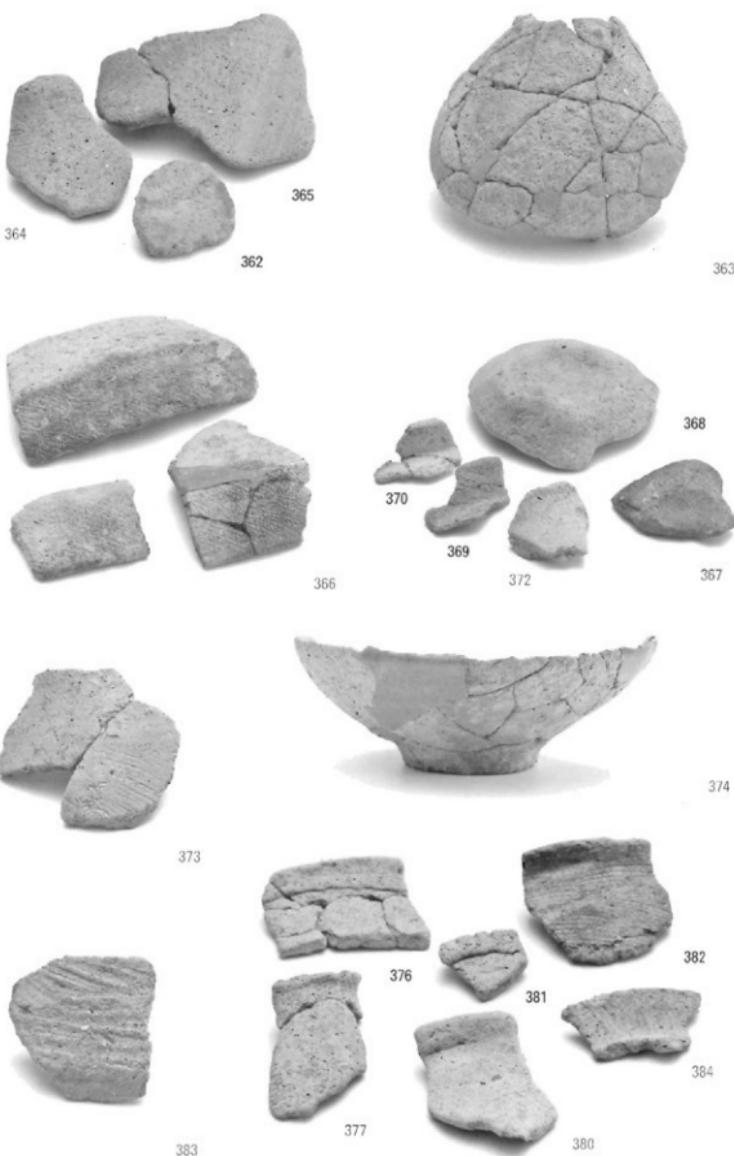
3. SF31土器出土状況（南西から）



4. SF27・28（南東から）

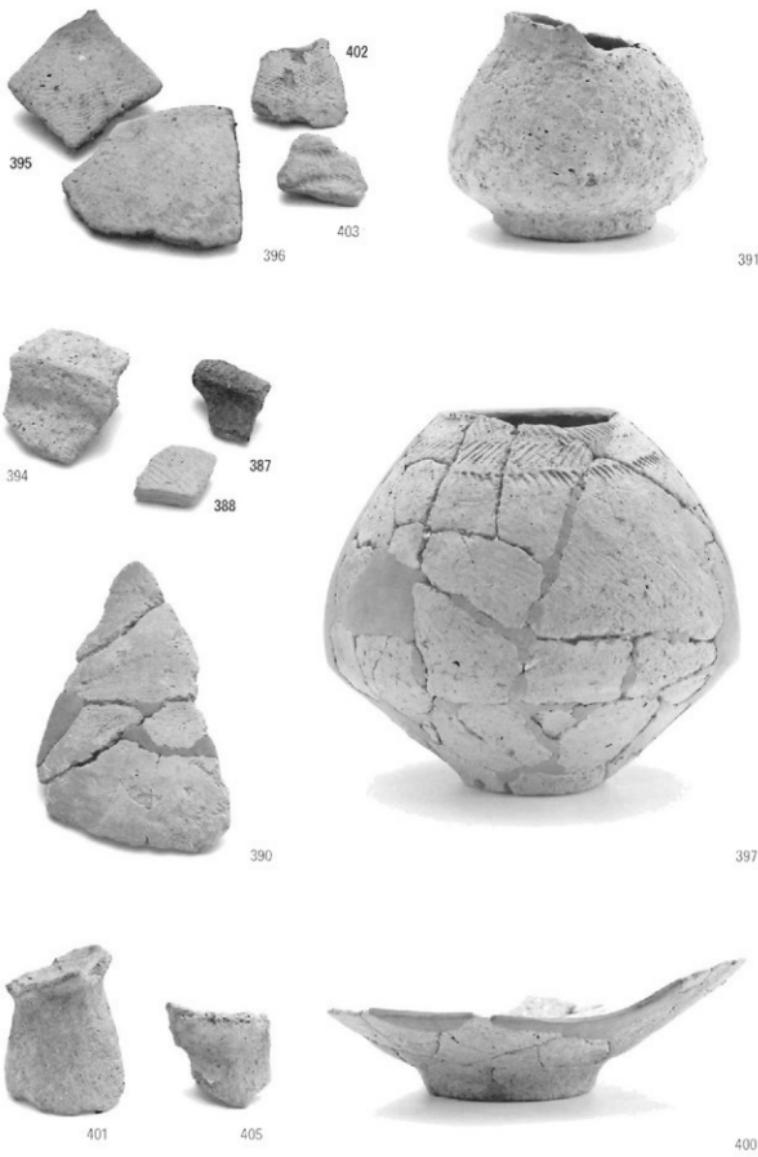


5. SF33（北東から）



南部出土土器①

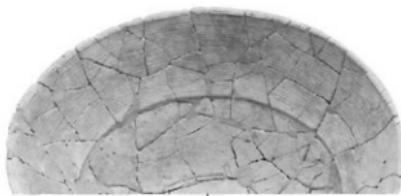
図版88 片瀬遺跡



南部出土土器②



406



407



408

南部出土土器③

図版90 片瀬遺跡



409

1. 南部出土土器④



2. 南部出土石器



1. SH01 (東から)



2. SH02 (東から)

図版92 片瀬遺跡



1. SF01（南東から）



2. SF04・05（南東から）



3. SF06・07（東から）



4. SF07土器出土状況（南東から）



5. SF08（東から）



6. SF08土器出土状況（東から）

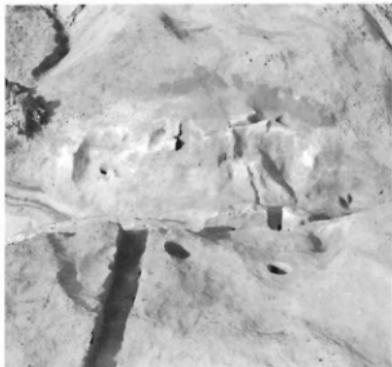


1. SD02・04 (南東から)



2. SD02・04 (東から)

図版94 片瀬遺跡



1. SD02中央付近（南西から）



2. SD02の断面（北西から）



3. SD04の断面（南東から）



4. SD04中央付近（南から）



5. SF24（東から）



6. 北部東側の突出地形（北西から）



418



419



425



421

426



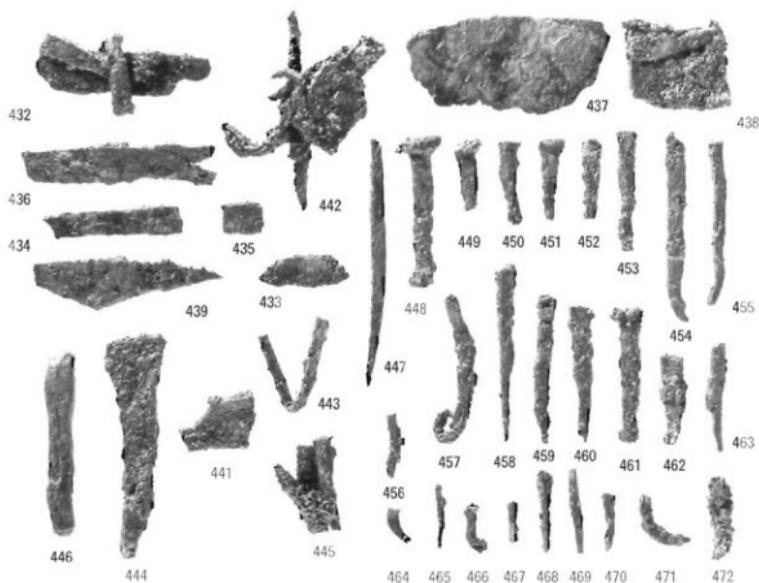
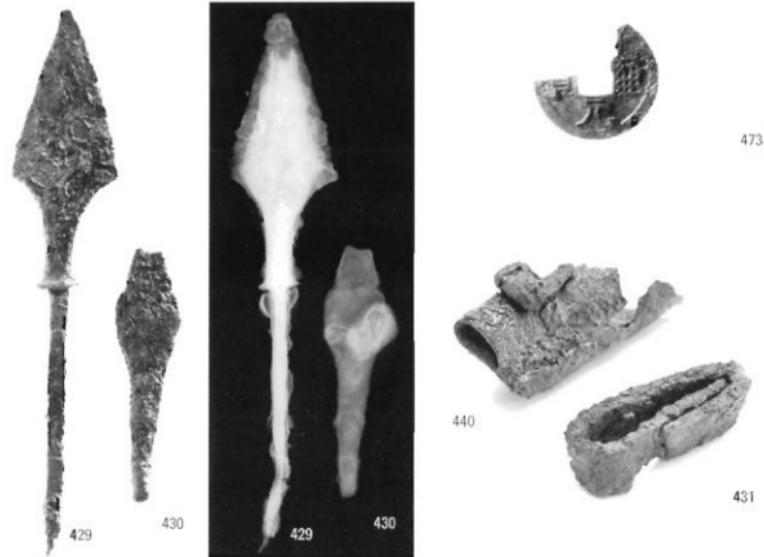
427

422



428

図版96 片瀬遺跡



古代以降の遺物②

# 報告書抄録

ふりがな	つなかけやまこふんぐん・かたせいせき							
書名	銅掛山古墳群・片瀬遺跡							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	森町一4							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第195集							
編著者名	田村隆太郎(編集)、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度 (世界測地系)		調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
つなかけやまこふんぐん 銅掛山古墳群	しづかねけいさんぐんちくらん 静岡県周智郡 もとまちくのむら 森町一宮	22461	99	34° 49' 43"	137° 53' 35"	199810~199903 199906~199907	2,140m <sup>2</sup>	道路建設 (第二東名建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査)
片瀬遺跡	かたせいせき もりやまのなかみ 森町一宮	22461	106	34° 49' 41"	137° 53' 15"	199902~199911	3,890m <sup>2</sup>	埋蔵文化財 発掘調査)
所取遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
銅掛山古墳群	縄文中期	弥生中期	竪穴住居跡4		土器			
	集落	弥生中期 ～後期	竪穴住居跡21、方形 周溝墓1		弥生土器、打製石斧2、磨製石 斧1、磨製石鏃未製品1		密集する住居跡群	
	古墳	古墳中期 ～終末期		古墳2		須恵器、土師器、鉄劍1、吊金 具1、鉄鏃2、鎌1、鉄釘22	銅掛山1号墳と2号 墳	
	散布地	平安～鎌倉	自然流路			灰釉陶器、山茶碗		
	散布地	繩文～ 弥生前期	落し穴2		弥生土器			
片瀬遺跡	集落	弥生中期～ 後期	竪穴住居跡29、掘立 柱1、区画溝3		弥生土器、打製石鏃1、磨製石 鏃5、磨製石鏃未製品41、石鍔 1、円盤状石製品1、磨製石斧 1、凹石1、台石1		やせ尾根丘陵上の集 落、区画溝による集落 内の区分、磨製石鏃未 製品の束の検出	
	墓	弥生後期～ 古墳前期	方形周溝墓4(木棺 墓、土坑墓2、土器 棺墓2)、埋葬施設群 (土坑墓3、土器棺墓 5)、土器棺墓1		弥生土器		居住域形成から墓域 形成	
	散布地	奈良～鎌倉			須恵器、灰釉陶器、山茶碗			
	城跡	戦国	溝(埋切状遺構)2、 掘立柱建物跡2、土 坑7		陶器、土師質壺1、かわらけ 2、鐵鏃2、鉄釘等製品片多 数、鉄鏡1		南ノ郭の一部につい て把握	
	散布地	江戸	土坑1		陶器			

銅掛山古墳群と片瀬遺跡は、太田川の支流である一宮川の北側丘陵地帯に位置しており、東西に並んだ丘陵のやせ尾根に立地している。

銅掛山古墳群では、縄文時代中期の住居跡と弥生時代中～後期の住居跡が丘陵上に密集するよう検出されたほか、2基の小型円墳を調査した。銅掛山1号墳は古墳時代中期の木棺直葬墳、銅掛山2号墳は古墳時代終末期の横穴式石室墳である。

片瀬遺跡でも、弥生時代中～後期の住居跡が多く検出された。居住域は南北にびびる尾根の広い範囲に展開しているが、区画溝や住居分布によって南北に大別でき、立地・住居形態・出土石器における差異を見出すこともできる。居住域としての機能が停止すると、古墳時代初頭まで墓域形成が展開される。中世になると、この丘陵が山城(片瀬城)として利用されたことがわかつており、今回の調査では南ノ郭の一部を調査し、城域の南端部についての状況を把握することができた。

要約

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第195集

## 網掛山古墳群・片瀬遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町-4

平成21年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20  
TEL (054)262-4261㈹  
FAX (054)262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社  
〒410-0056 静岡県沼津市沼北町2-16-19  
TEL (055)921-1839㈹

